
読者参加型小説『東方幻想夢』

犬兔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

読者参加型小説『東方幻想夢』

【Nコード】

N79920

【作者名】

犬兎

【あらすじ】

私のブログで始めました読者参加型『幻想入りシリーズ』シナリオ集です。

ブログのほうで参加希望をしてくれた人が幻想入りするという内容です。

社会人ゆえ仕事が忙しくなると遅筆化するので、気長に待てる人だけ読んでください。

< 3 / 20 現在 >

単発エピソード専用の読者参加型小説「東方夢一夜」を新規投稿しました！ R - 18 小説として投稿していますが、タイトルに警告の無いものは全年齢対象小説ですので、こちらもよろしくお願いします。

URL : <http://novel18.syosetu.com/n7608r/>

単発エピソード募集！（前書き）

「東方幻想夢」の性質上、「小説家になろう」さんでの本格的な募集は非常にめんどくさいので、リク受付後に質問をしない「単発エピソード」という形式で募集を再開します。
本文は活動報告の抜粋です。

単発エピソード募集！

「東方」+「読者参加型」でググったら、ウチの小説が一番に出たのが嬉しい犬兎です。

そんなわけで、記念に「小説家になろう」さんでの参加募集を再開しようと思う。

ただし以前と同様、ブログでの参加希望に比べると優先度は低いのでご了承ください。

あくまでブログメインの企画ですので、本格的に参加したい方はブログのほうへどうぞ。

また、連載キャラの募集ではなく単発キャラの募集になります。エピソードは短編一回で完結しますので、それはご了承ください。

そして、今回の募集については「全員のリクに答える」ものではありません。こちらが書いてみたいと思ったキャラのみ書きます。そのかわり、何回でも募集を受け付けますので、何回でも挑戦してください。

感想欄に参加希望を書かれるとまた面倒なことになるので、今回からはメッセージボックスにて受付します。メッセージに以下の内容を送信してください。

<東方幻想夢・参加募集テンプレ>

まずは挨拶。マナーの悪い人は嫌いです。

1：幻想入りしたいキャラの名前ふりがな

- 2：性別と種族
- 3：エピソードのメインキャラ（東方キャラ・複数不可）
- 4：何をしたいか？
- 5：能力とその詳細（能力なしでもOKです。チート能力は自重してください）
- 6：他にリクがあれば（他の東方キャラを出してほしい場合はここに）

後は自由にお書きください。

<テンプレ・ここまで>

注意事項

- ・テンプレにしたがって書いてください。ルール無視、または以前のフォームでリクエストしても無視します。
- ・ 部分は自由に書いてください。
- ・ また、すべて必須項目になりますので、記入漏れがあった場合は参加できません。
- ・ 5の能力詳細に関しては何が出来る能力なのかを例に挙げて書いてください。

小説化が決定した人にはメッセージを返信します。返信がない場合は選ばれなかったのだと考えて、再びリクを試してみてください。根気強い人は個人的に高感度高いです。

また、募集システムの変更に伴い、感想欄への書き込みを復活させることにしました。

ただし、今回も例によって感想欄に参加希望コメントをした場合、有無を問わずに削除しますのでよろしくです。

あくまで感想のみを書いてくださいね。(参加してみたいです、程度の書き込みはOK。自分のキャラの説明とかを書き込むのはNG)

<3/10:追記・R-18版のリクエスト募集について++>
単発エピソードの投稿に伴い、単発専用の幻想夢を新規投稿することになりました。その際、R-18指定にて投稿するつもりです。で、今後、単発限定でR-18エピソードを解禁します。こちらの募集はメッセージ限定ですので、ブログを見てくれている方も、こちらからリクエストをお願いします。
テンプレは上記のものをそのまま利用してください。その際、最初の挨拶にでも18禁エピソードのリクエストです、とでも付け加えておいてください。

<3/10:追記・ここまで>

では、今回も、いい参加者に巡り会えることを祈りつつ・・・。

単発エピソード募集！（後書き）

どうでもいいことだけど、「不思議生命体が幻想入り」は自分のために書いている小説です。ゆえに、私にしか分からない台詞集形式にて書いています。

リク主様に対して書く小説はそれ以降の小説スタイルにて書きますので、ご安心ください。

では、これからもよろしくです。

第一話：霊夢と犬兎（前書き）

どうも、犬兎です。

ストレス性の体調不良に陥った。

そこで「気分転換にショート&ショートな小説を書いてみたらどうか」と

くろりんからの提案があったので、やってみる。

お話の概要は

「誰かが幻想入りする」

です。現実逃避小説ですね。

メインはウチだけど、今後、ウチと適度に絡んだ子は幻想入りするようです。

『犬兎の部屋』に采访了子や、コメントに幻想入り希望と書いてくれた人を小説に登場させようと思う。
要するに、だ。

ウチの小説書き技術向上に付き合っ欲しい、ということ。

『募集モノ』に幻想入り希望者を募る場所を作成しますので、そこに書いてあるとおり、コメントしてください。

その人のブログや当ブログ内での絡みの内容から性格を推測し、幻想入りさせますので。

では、本編をどうぞ。

第一話：霊夢と犬兎

東方幻想夢々不思議生命体が幻想入り

第一話・霊夢と犬兎

れいむ「よし、これで今日の掃除もおしまいね」

れいむ「今日は暇だし、久しぶりに惰眠でもむさぼろうかしら」

ちゃりん

れいむ「はっ！ 賽銭の音!?!」

れいむ「誰が入れた!?!」

いぬ「どうも、犬兎です」

れいむ「・・・いぬ?」

いぬ「いぬです。うさぎでもあります」

れいむ「新手的妖怪かしら?」

いぬ「不思議生命体です。妖怪じゃないです」

れいむ「ああ、そう……。じゃあ、気をつけて帰りなさいね」

いぬ「乙」

+++不思議生命体移動中……+++

れいむ「いつたいたんだったのかしら」

れいむ「何か妙なことの始まりじゃなきゃいいけど……」

まりさ「おい！ 霊夢！ 大変だ！」

れいむ「なに？ また紅魔館に泥棒でも入ったのかしら？」

まりさ「違っつて！ なんか、幻想郷にたくさん人間がやってきたみたいなんだ！！」

れいむ「……？」

まりさ「とにかく、これは異変だぜ。私は調査に出る。お前はどっ
するっ？」

れいむ「いつてらっせい」

まりさ「……行ってくるぜ」

つづく・・・のか？

第一話：霊夢と犬兔（後書き）

こんな感じとノリで行こうと思う。
参加したい人＋エピソードのリクエストがあれば『募集モノ』のほうにぜひ。

では、今回はここまで。
どんとはね。

第二話…のんとかりすま(前書き)

いきなりのんから電話があった。

『面白そうなことしてるじゃん、ませせて〜』

だから、参加希望欄にコメントしてくれとっているじゃないか・・・。

そんなわけで、のんも参戦。

では、本編をどうぞ。

第二話…のんとかりすま

東方幻想夢

第二話…のんとかりすま

おぜう「今日もいい天気ね・・・」

おぜう「こづいつ日は博霊神社にでも遊びに行こうかしら・・・」

さくや「お嬢様」

おぜう「あら、何かしら？ 咲夜」

さくや「庭にこんなものが落ちていました」

おぜう「人間？ どうして庭に？ 門番はどうしたのかしら？」

さくや「それが、美鈴もこんなやつを入れた覚えはないとのことだ」

おぜう「居眠りでもしてたんじゃない？」

おぜう「それにしても、ずいぶん可愛い子ね」

さくや「外の世界の子供のようですね。私にはそんなに可愛くは見
えませんが・・・」

おぜう「そつ？ 食べちゃいたいくらい可愛いじゃないの」

さくや「まあ、そうですが・・・いいのですか？ 素性も知らない
こんな少女を」

おぜう「それはあなたも同じこと」

さくや「・・・」

おぜう「あなた、名前は？」

のん「あああじじじじじじ」

おぜう「名乗らないとホントに食べちゃつわよっ」

のん「の、のんです・・・」

おぜう「のん。そう、可愛い名前ね・・・じゃあ、これからはあなた、私のものよ」

のん「は、はいい・・・(計画通りだぜ、じじじじじじ・・・)」

じじじじじじじじ。

第二話：のんとかりすま（後書き）

以下、のんからのリクエスト

名前：のん

誰と絡むか：さつきゅん、おぜう

何をしたいか：紅魔館で働きたい

能力：おぜうだけに可愛いと思われる程度の能力

リク：おぜうを怖がってるふりをして潜入するシチュで

要求は満たした・・・はず。これからはのんもちらほら登場します
のでよろしく。

では、今回はここまで。

どんとはね。

第三話：不思議生命体とチンチラ（前書き）

はい、どうもです。

今週は『天才ヴァイオリニストが幻想入り』と『幻想郷放浪記』を
投稿しました。

そして、不思議生命体が幻想入りもついでに投稿します。

では、お楽しみください。

第三話：不思議生命体とチンチラ

のん「れみりあさまー……」

おぜう「あらあら、どうしたのかしら？ そんなに甘えた声を出して」

のん「いえ……あの、これは、さすがに……」

おぜう「あら、夜伽もメイドの仕事の一つよ？」

のん「でも……まだお昼ですし……心の準備ってモノが」

おぜう「あら、吸血鬼にとっては十分夜更かしよ？ それに、大丈夫よ。私に任せて……」

いぬ「どうも、犬兎です」

おぜう「きゃ！ なに、コイツ……？」

のん「あ、犬兎。どうしてここにいるの？」

いぬ「博霊神社で賽銭入れてきたからこっちにも来てみた」

のん「そ、そう……（いいところだったのに邪魔しやがって……）」

おぜう「……興が冷めちゃったわ。のん、お客様をもてなしてあ

げなさい。私は寝るわ」

のん「わ、分かりました・・・」

いぬ「乙」

+++不思議生命体+チンチラ移動中+++

のん「まったく、あんたはなんでいいところで邪魔するのよ!」

いぬ「いやあ、一応健全小説なので、エロいのは勘弁」

のん「知らないわよそんなの!・・・ああ、せつかくの私の処女喪失のチャンスだったのに・・・」

いぬ「もともと処女じゃな・・・」

のん「なんか言った?」

いぬ「いいえ。なんでもないぜ」

???「あら、屋敷にぬいぐるみとチンチラが入り込んでるわよ、

咲夜」

咲夜「あれはお嬢様専属のメイド・・・と、不思議生命体ですわね」

「????」へえ、お姉さまも妙なペットを欲しがるとね」

のん「ねえ、あれって……もしかして、妹様？」

いぬ「まちがいでなく、フランちゃん」

のん「か、かわいい……。おぜう様だけじゃなく、あの子も欲しい……」

いぬ「欲張ると粉々になると思うよん」

のん「????」まあ、いいわ。咲夜さん、こちら、お客様です」

咲夜「分かっていますわ。でも、どうやって進入したんですか？」

いぬ「スペカ使った。ウチの能力で」

咲夜「ふむ……。あのバカ門番。ホントに役立たずなんだから」

中国「……だして下さいよう……」

いぬ「で、現在お茶待ちだね」

フラン「お姉さまも物好きねえ、こんなチンチラのどこがいいのかしら」

のん「ち、チンチラ？　こんなにかわいいメイドさんをネズミ扱いするのかしら！？」

フラン「あら、自分でかわいいと言ってる時点でかわいさは皆無じゃないかしら？」

いぬ「ちよつとトイレ」

のん「なによ、ロリっ子＋ヤンデレで顔がいいからって調子に乗りすぎじゃないかしら？」

フラン「あなたこそなに？　その小動物チックな仕草と子供好きで同年代男子から評判集めてるけど、実際はただのぶりっこじゃない」

のん「はあ！？　誰がぶりっこよ！　私はね、ただの男になんか興味はないわ」

フラン「シヨタコン疑惑が立ってるけど、その辺どうなのかしら？」

のん「な、なによそれ・・・」

フラン「以前働いていた地元の幼稚園にて、プール遊びがあった時に決まって男の子の着替えにだけ付き添ってたって話を聞いたわよ」

のん「・・・」

フラン「女子高の身体測定密約疑惑みたいに、別の先生に、男の子の方は任せてください、と約束してたってウラもあるわよ」

のん「ノーコメントで・・・」

+++不思議生命体移動中+++

めーりん「・・・出して・・・」

いぬ「どうも、犬鬼です」

めーりん「ああっ！ さっきの！ 早くここから出なさい！..」

いぬ「おーらい。出してあげる」

めーりん「はあ、助かった・・・。でも、侵入者は侵入者！！
ここで成敗・・・」

いぬ「魔曲『シンデレラケージ』」

めーりん「ああっ！ またこれ!?!」

いぬ「やっぱり帰るときにする。じゃあ、乙」

いぬ「かーげーろつのおーきにーは・・・えいえーんの・・・」

咲夜「鼻歌交じりにつまみ食いなんて、ずいぶん度胸があるのですね」

いぬ「おお、さっきゅん。だって、昼飯時じゃない」

咲夜「もう少しお待ちください。そちらの支度も今してますので」

いぬ「もう我慢できないの。肉食系不思議生命体なので」

咲夜「我慢してください。さ、仕事の邪魔ですので戻ってください」

いぬ「魔曲『月時計』ルナダイヤル』」

+++不思議生命体移動中+++

フラン「まだまだ情報はあるわよ。近所の小学生をナンパしてたって話じゃない？」

のん「あー・・・若気の至り・・・。もうその過去には触れないで」

いぬ「ただいま」

フラン「あーっ、ぬいぐるみなのに何か食べてるー!」

いぬ「ぬいぐるみっぽいけどそうじゃないので食べることは出来ません」

フラン「台所からつまみ食い？ 咲夜いたのに」

いぬ「さつきゆんは動かなかったです」

フラン「????? なぁに、それ？」

さくや「……あの不思議生命体……まさか、私と同じ能力使用……?」

めーりん「……出してくださいよ……」

第三話：不思議生命体とチンチラ（後書き）

ウチの所有スペカは『東方関連曲』をモチーフにした魔曲というジャンルです。ゆえに、曲と同じ数だけスペカを持っています。まあ、戦わないので使いませんが。

第四話・こあこあのこあこあ！？（前書き）

リア友からのリクエスト+私の気分で書き進める『不思議生命体が幻想入り』の第四弾です。主役はこあ。

こあには先日の借りがあるので、優先して書いた。後悔はしていない。
と、いつつ、リンカーンを見ながら三十分で書いたものです。
手抜きで申し訳ない・・・。

第四話…「あ」「あ」「あ」「あ」！？

パチエ「んー…もう全部読み終えちゃったか…」

パチエ「やれやれ…。。じゃあ、別の本でも探しましょうか」

パチエ「こあー。本の片付けお願いねー」

「こあ」…。。」

パチエ「こあー？ いないのかしらー？」

「こあ」…。。」

パチエ「なによ、いるんじゃない」

パチエ「こあ、いるなら返事くらい…」

「？？？」…。。」

「ぱちえ」…。。」

「こあ」…。。」

「コマ」「ごじごじも、」コマチックマムです」

ぱちえ「・・・ひ、人違いだったわね・・・」

コア「まあまあ、パツチエさん。本物もこっちにいますから」

こあ「あ、パチユリー様。何か御用ですか？」

ぱちえ「なに、この不思議生命体は・・・？」

こあ「かわいいでしょー。もう、私にそっくりで」

ぱちえ「それは自分がかわいいと言っているのと同義よ!？ それに、髪型こそ同じだけど見た目ぜんっぜん違うからねっ！ 某癒し系くまのほうに似てるからその子！」

こあ「パチユリー様、今日は早口ですね」

コア「あたしのかわいさがパツチエさんを早口にさせてるのさ」

ぱちえ「違う。・・・それで、こあ。こんなところで拾ってきたの？」

こあ「その本に挟まってたんです」

ぱちえ「・・・『小悪魔 Ageha』に挟まった不思議生命体？

いよいよ気持ち悪いわね・・・」

こあ「きつと運命のめぐり合わせですよ。パチユリー様、この子、ここで預かってもいいですか？」

パチエ「ダメよ。図書館はペットを置く場所じゃないわ」

コア「じゃあ、ペットじゃなきゃいいわけだ」

パチエ「・・・？ そりゃ、そうだけど・・・？」

コア「豹変『小悪魔的メイク』！」

パチエ「なっ！？ スペルカード！？」

コア「・・・」

コア「・・・」

パチエ「うそ・・・こあが二人！？」

コア「こあー」

コア「じ、こあー？」

コア「こあこあ」

コア「こあこあ」

パチエ「わけの分らないコミュニケーションで楽しむなっ！！」

コア「いやー。ノリですよノリ」

コア「さすがこあ。心で通じ合えるね」

パチエ「せめて見分けを付けなさい！ 同じ格好で名前も同じなんだからどっちがどっちか分からないでしょう!？」

こあ「じゃあ、私はこあで」

こあ「あたしがこあでいい」

パチエ「本家が不思議生命体に名前を取られてどうするのよ・・・」

こあ「別にいいですよ。だって、私の名前自体オフィシャルなものじゃないですし」

パチエ「そんな理屈で名前あげちゃうの!？」

こあ「じゃあ、これからよろしく」

こあ「あ、元に戻ってる」

こあ「気分で元に戻ります」

パチエ「・・・うう。頭痛くなってきた・・・」

第四話・こあこあのこあこあ！？（後書き）

パチュリー様がツツコミ役に回るといふなんとまあバカらしいシチュエーション。

だってシチュエーションのリクなかったんだもん。

以下、こあのリク

こあこあしたい。

不思議生命体がいい。

スペカでこあになる。

小悪魔的な程度の能力

以上。うん、リク通り。

これで借りはチャラだぜ。

第五話：東方あひるの空！？（前書き）

どうも、ウチとウチのリア友が登場する「不思議生命体が幻想入り」の第五話です。今回は新たに幻想入りしたキャラを加え、「他の幻想入り住人との絡み」を第二期の解禁に先駆けてやってみました。今回の幻想入りキャラが誰なのかは、あとがきで。

第五話：東方あひるの空！？

佳奈「そんでさあ・・・ぬえちゃんってばまたどっかに逃げ出して
結局、私一人でお使いってワケ。ごめんね、蒼奈。荷物持ち
手伝ってもらっちゃって」

蒼奈「いえいえ。私も命蓮寺に用がありますので構いませんよ
ね、早苗？」

さなえ「ええ。それに、佳奈さん一人じゃこんな荷物持ちきれませ
んよ。困ったときはお互い様です」

佳奈「ああ、早苗さんありがとう・・・女神のようだ」

れいむ「私は？」

佳奈「もちろん霊夢も。感謝してるよー」

れいむ「あら？ 寺子屋のほうで何かやってるわね・・・なにかし
らっ？」

メグ「よっし、ラインはこれで完成！」

メグ「後は・・・香霖堂から買ってきたこいつを運んで おー
い、その人たち！ 手伝ってよ！」

メグ「いよっし！　これで完璧！！」

蒼奈「これって、バスケットゴール、ですよね？」

佳奈「間違いなくそうだね。　そこのお嬢さん、これってもしかして、ストバスのコートかい？」

メグ「そ。　あたしのお手製だよ！」

れいむ「ばすけっど？」

さなえ「外の世界のスポーツですよ。　そういえば、サッカーは幻想郷にあるのに、バスケットはありませんでしたね」

れいむ「このボールを使うのかしら？　よく弾むボールね」

さなえ「それを、あのゴールに入れるんです」

れいむ「簡単じゃない。　空飛んでいけば一発よ」

メグ「能力禁止だよ。能力の優劣で試合が左右されちゃ不公平じゃない　スポーツはフェアに行かないとね」

れいむ「ま、それもそうか」

メグ「さあ、誰か私と試合やらないか!？」

れいむ「面白そうね。私やるわよ」

さなえ「ちよつと霊夢さん！ 私たちは命蓮寺に行くんでしょう?」

佳奈「私もやる。スポーツは得意なんだ。 帰るのがちよつと

遅くなつたくらいで、聖さんは怒らないさ」

メグ「いいねいいね。 そつちの二人はどうする?」

さなえ「私は、ちよつと・・・バスケットは苦手です」

蒼奈「私も早苗と一緒に観戦してます」

メグ「ちえー。それじゃ試合になんないよ」

れいむ「ところで、あんた見ない顔ね。 幻想入りしてきたのかしら?」

メグ「ついこないだね。 この寺子屋で体育教師をすることになったのさ。恵って言うんだ。メグって呼んでくれ」

れいむ「めぐみ、ねえ・・・その割には一点しか恵まれてないようだけど」

メグ「うるさいな。 お、いい四人組発見。 おーい！
その人、バスケットやらないかい!？」

メグ「よっしゃ、じゃあ、チーム分けはくじで決めよう！」

+++ 少年少女チーム分け中 +++

水鬼、妹紅、足
れいむ「よっしゃ、やるからには勝つわよ。
引つ張るんじゃないわよ!？」

水鬼「ルールも知らない奴がえらそうに言うな」

もこ「 慧音と一緒にのチームがよかったなあ」

メグ「あらら。これ、試合になるのかな？」

慧音「ふむ・・・バスケのユニフォームとは、随分軽装なのだな」

佳奈「これがいいんだよね。動きやすくて好きだよ、こづいこの」

宗太「さて、ゆっくり観戦しましょうか」

さなえ「あら、昼間っからお酒ですか？」

宗太「萃香と一緒に飲もうと思ったんだけど、せっかくだし、ここ

「であげちゃいますか？」

さなえ「もう・・・そんなこと言われたら断れないじゃないですか」

蒼奈「コラ、早苗。まだお昼ですよ」

さなえ「えー、せっかくのお誘いなんですから、蒼奈さんも」

蒼奈「・・・分かりました。お付き合いしましょう」

さなえ「素直でよろしい」

+++少年少女試合中+++

水鬼「バスケットするのは、背の高いほうが有利なんだよ。悪いけど、早速先取点をもらおうか！　　って、ええ!？」

メグ「甘いね。背の高いほうが有利なんて、産革前の常識だよ?」

メグ「人はあたしをこう呼んだっ!!!」

メグ「あたしはっ!!　空の王者だ!!」

水鬼「なっ!?!　あの身長でダンクシュート!?!」

けいね「なんて跳躍力だ・・・さすが、私の見込んだだけのことはある・・・」

水鬼「おいおい！ 能力禁止じゃなかったのか！？」

メグ「能力なんか使ってないよーだ。 あたしはもともとダunksの名手なんだ。 外の世界でも同じようにやってたよ？」

れいむ「・・・ふむ、あの子、案外運動神経いいのね」

れいむ「でも、私はたやすく抜けられないわよ って、あら？」

メグ「素人にあたしの動きは見切れないよ？ 　ほい、佳奈さん」

佳奈「任された。 　スリーポイント、決めちゃうよ！！」

水鬼「なっ!?!？」

佳奈「よっしゃーっ！ 　射撃の腕は鈍ってないねえ」

メグ「ナイスシュート！ やるじゃん！」

佳奈「狙った獲物は逃がさない主義なのさ」

もこ「なんだ・・・あいつら、人間の動きじゃないだろ」

水鬼「妹紅！　ボーっとしてんなよ！　速攻で取り返すぞ！」

もこ「言われなくても！」

メグ「水鬼、まだまだ甘いねっ！」

水鬼「うわっ、と・・・あー。くそ・・・」

もこ「取り返すっ！！！」

メグ「よっと、甘い甘い！！！」

メグ「ほい、追加点！」

さなえ「圧倒的ですねえ・・・」

蒼奈「あのメグって女の子、相当な腕の持ち主ね」

宗太「・・・」

水鬼「いよっし！　ようやく点取った！」

もこ「この調子で一気に盛り返すぞ！」

れいむ「ふふ、ようやくコツがつかめてきたわ」

佳奈「ふむ・・・連中も少しはマシになってきたみたいだね？」

メグ「ま、気楽にいきましょうよ」

けいね「はー・・・はー・・・」

佳奈「慧音さん、息あがりすぎ・・・」

水鬼「いくぜ!!！」

メグ「甘い！　あたしはディフェンスでも王者だ!!！」

水鬼「・・・っ!?!？」

メグ「もらった！　佳奈さん!!！」

佳奈「待ってたよ！　いったんだけ　っ、あれ？」

れいむ「いつまでもそのペースで決められてたまるかっての。

佳奈にもできるんなら、私にだってできるわよ!!！」

れいむ「スリーポイント　　って、あらら」

佳奈「ふっふっふ・・・甘いね、ディフェンスの真似事はできても、スリーポイントシュートなんて、そうそう決まるものじゃないよ」

佳奈「慧音さん、そろそろ活躍してよね」

けいね「言われなくても・・・分かってる!!」

けいね「し、しかし・・・この、どりぶるとか言っものが・・・」

けいね「あっ、足に当たった!!」

佳奈「あー、やっちゃったよ・・・もう、相手にボール渡したよう
なもんだよ、慧音さん」

けいね「す、すまない・・・」

水鬼「・・・」

もこ「何やってる！　一気に決める!!」

メグ「ボールはもらったあ!!」

水鬼「させるか　　っ!!」

水鬼「・・・っ!？」

メグ「よっしや、いただきー!!」

もこ「みずき。お前何やってるんだ、急に動きが悪くなってるぞ」

水鬼「す、すまない・・・」

さなえ「どうかしたんでしょうか、水鬼さん」

蒼奈「まあ、あんな状況ですからね。仕方ないのかもしれないね」

さなえ「蒼奈さん、何か分かってるんですか？」

蒼奈「まあ、見ていれば分かるわ」

宗太「・・・仕方ありませんねえ」

宗太「水鬼さん、交代しようか？」

水鬼「宗太さん　頼めますか？」

宗太「まあ、気持ちは分かるからねえ」

れいむ「???? 宗太、いきなりどうしたのよ」

宗太「ま、思うところがあつて、かな？」

メグ「メンバーが代わったからって、そうそう代わりはしない
って、あら？」

宗太「いい動きですが、まだまだ甘いですよ」

佳奈「おっと、この先は通さないよ!」

宗太「なら、ここからうたせてもらいます」

佳奈「なっ!？」

メグ「まさか、超ロングシュート!？」

宗太「・・・昔から、こういうのは得意なんだよね」

れいむ「な、何よあんた! すごいんじゃないの!？」

もこ「みずきより頼りになるじゃないか」

佳奈「・・・うーん。まさかの超人の登場だね」

佳奈「メグちゃん、どしたの？」

メグ「……し、師匠と呼ばせてください!」

宗太「はい？」

メグ「こんなに上手い人とバスケしたのは初めてです!! これからは師匠と呼ばせてください!」

宗太「うーわ、目が輝いてますねえ……」

れいむ「 やれやれ。メグがこんなんで、慧音ももうバテバテみたいだし、今日のところはここまでにしましょうか」

佳奈「ま、決着は次に持越して事で」

慧音「はあ……はあ……はあ……はあ……」

もこ「慧音、お前どれだけ疲れてるんだよ」

慧音「まさか、こんなに走るスポーツだとは思わなかったぞ」

もこ「修行不足だな。 こんなんでよく子供の相手ができるものだ」

水鬼「だから、体育教師を雇ったんだよ」

もこ「みずき、そういえば、お前、どうして後半から急に動きがぎこちなくなっただよ？」

水鬼「あ、あー・・・それは・・・」

蒼奈「無理もないですよね。 メグさんの胸、大きいし、試合中にあんなに揺れてたら、男の人なら自然と目がいつちやいますよね」

水鬼「そ、蒼奈さん!？」

慧音「ほう・・・そういうことか・・・」

水鬼「慧音、ち、違うんだ・・・話を聞いてくれ!」

慧音「ミズキ、今日は夕飯いらないんだな。 よかったよかった、今日から妹紅の家に泊まるつもりだったから」

水鬼「ちよ! 慧音! 違うんだってば! 話を聞いてくれ!」

さなえ「・・・口は災いの元」

蒼奈「ですね」

さなえ「分かってるなら、言わないほうがよかったのでは?」

蒼奈「私が言わなくても、宗太さんが言っていましたよ、どうせ」

宗太「見抜かれてましたか。さすがは半人半神」

蒼奈「困った性格ですね、あなた」

宗太「ま、これで気兼ねなく水鬼さんを今日の宴会に誘えるってワケですよ。水鬼さん、よかつたら今日は博麗神社に来ませんかーっ？」

メグ「師匠！！ あたしもご一緒していいですかーっ!？」

蒼奈「私たちも混ぜてもらいましょうか？」

さなえ「いいですか？ 霊夢さん？」

霊夢「あーもう、二人でも三人でも変わんないわよ。勝手になさい」

慧音「妹紅、今日は何食べたい？ 何でも好きなもの作ってやるぞ」

もこ「おお、そりゃ楽しみだ」

水鬼「慧音 っ！ 戻ってきてくれーっ!！」

++++

佳奈「やれやれ・・・命蓮寺に行く話は何処へやら・・・」

佳奈「ぬえちゃん・・・サボってないで荷物運ぶの手伝いに来てよーっ!」

+
+
+

ぬえ「今日もいい天気だ・・・」

じゅく・・・?

第五話：東方あひるの空！？（後書き）

第一期における、ウチの個人的お気に入りキャラの佳奈さん、水鬼さん、宗太さんに加え、次回の東方幻想夢での投稿に先駆けて、水本蒼奈さんを登場させてみました。

なんか、当初の予定よりも水鬼さんがカッコ悪くなってしまった・・・試合でもっと活躍する予定だったんだけど、長くなってしまったのでそのへんはカットしました。申し訳ない。

そして、宗太さんはやるときはやる人です。あまり目立たないですけど、ウチはこういうキャラのほうが好きですね。

佳奈さんは、もう言うまでもなくお気に入りです。あいかわらずキヤラが安定しないけど、もういっそそういうキャラで書いていこうかな・・・。

蒼奈さんは、今回が初書きという事で、正直どう書こうか悩みましたけど、とりあえずおしとやかな大人の女性風に書いてみました。でも、ちょっとお茶目なお姉さん風味もプラスしています。

そして、今作より幻想入りした新キャラのメグ。

その正体は・・・続きはブログで。

天才ヴァイオリニストが幻想入り・序章（前書き）

依頼主様からOKをもらいましたので、このままで行きます。
それでは、いささか暴走しがちですが、お楽しみください。

天才ヴァイオリニストが幻想入り・序章

気がつくと、もう森の中だった。

クレイ「ここは、どこだ？」

怪しい雰囲気のある、妙な森だ。獣道の一つもない。どうしてこんなところにいるのだろうかと考えるが、どうにも頭がぼうつとして思い出すこともできない。

クレイ「とにかく、進むしかないか」

とにかく道が悪い。草を掻き分け、少しずつだが確実に進んでいく。しかし、それでも未だに道が開けない。まるでどこかの原始林にでも迷い込んだかのようだ。

これは夢なのだろうか、と思う。そうであれば、この頭のぼんやりした感覚にも納得がいく。夢ならば早く覚めて欲しいものだが、どうやらこの夢は、まだ終わらないらしい。

クレイ「そろそろ日が暮れるか……。まいったな」

さつきまでまだお日様が真上だったと思っていたのに、気がつけばもう日は傾き、黄昏時。さて、どうしたものかと思ひ悩む。こんな場所で野宿でもして、野生の獣にでも襲われたらひとたまりもない。

クレイ「とにかく急ごう。人のいる場所に行かないとな」

俺は独り言をつぶやいて、急いで森を抜けようと歩き出す。気が

つけば、草で手が切れて、血が滲んでいた。毒でも入ってなければいいんだが……。

少年移動中……。

すっかり日も落ちた。あたりは暗闇。このまま闇雲に突き進んでもろくなことにならないだろう。腹をくり、俺はその場で野宿することを決意した。どうせ襲われれば逃げられないんだ。いつそ開き直ってここで爆睡してやる。そうすれば、こんなわけの分からぬい夢から目覚めるかもしれない。そう思って俺は横になった。

その時である。

???「あなたは、食べてもいい人類？」

少女の声に目を開ける。目の前には金髪の女の子。だが、こんな森の奥深くでひとり寝ている俺にやさしく声をかけてくれた、と言うわけではなさそうだ。

???「食べちゃっても、いいかしら？」

クレイ「ちっ、獣ならまだしも、こんな女の子に食われてたまるかよー！」

その辺に落ちてた木の枝を持って振り回す。

しかし、少女はそれを受け止めると、先ほどまでのあどけない表情を一変させた。

クレイ「……………」

恐怖。まさに蛇に睨まれた蛙とでも言おうか。金と黒の螺旋状の瞳が妖しく見開いて、じつと俺を見ている。動けない。恐怖で足がすくむなんて、こんなこと初めてだ。

???「いただきますーす」

もうダメだ。そう、諦めた時、音が聞こえたんだ。

クレイ「これは……………」

???「……………」

腕に食らいつこうとしていた少女がぴたりと動きを止める。そして、俺から手を離すと、どこかに飛んでいってしまったのだ。

ヴァイオリンの音色だ。遠くから風に乗って聞こえてきたそれは、いやに俺の心に響いてくる。この音を鳴らしているのは誰なのか。気になった俺は、一直線に音のするほうへ向かった。

月もない、真っ暗な夜。雲ひとつない、本当の暗闇の中、森を抜けた小高い丘の上、少女は一人、ヴァイオリンを奏でていた。なぜこんな場所に一人でいるのだろう。そう思い、ゆっくりと彼女に向かって歩を進める。しかし、その一步一步が今はあまりにも重い。なにせ一日中、森の中を歩いていたんだ。こうなるのも当然である。そのまま崩れ落ちるように意識を失い、気づけばもう朝だった。

あの少女はいったい何者だったのだろう。朝一番、目覚めるなり
そう思う。あの音色の正体は何なのか いや、ヴァイオリンで
あることは明らかだ。そこだけは間違いようがない。でも、それだ
けじゃない。あの少女が奏でた旋律は、どこか、こっぴどい。

「???」目が覚めましたか？」

声がして、目を開けると、目の前には昨晚の少女。じゃあ、まさ
かこの頭の下にある柔らかい感触は……。

「???」いきなり倒れるからびっくりしたんですよ？」

クレイ「わ、わわわっ!!」

ひざまくら。こんなことされたのは初めてだ。驚いていきなり顔
を上げると、そのままその少女の額にぶつかってしまった。ごん、と
低い音がした。

「???」っ……!!」

クレイ「ご、ごめん。大丈夫か？」

「???」だ、大丈夫です。それよりあなたは平気ですか？」

クレイ「俺は大丈夫。 ありがとう、俺のこと、見てくれた
んだろ？」

「???」……どういたしまして」

少女は赤くなってる額を押さえつつ、無表情で答える。

クレイ「俺、クレイ。 キミの名前は？」

????「私、ですか？」

キミ以外に誰がいるっての。少女を見てうなずく。彼女は言いたくないのか、恥ずかしいのか、そっぽを向いた。

????「そんなことより、帰らなくていいんですか？」

クレイ「え？ ああ、まあ、そうだな、帰りたいんだけど」

????「道に迷っている」

クレイ「仰るとおり」

????「では、行きましょう。人間の里の近くまで案内します」

クレイ「ところで、名前は？」

????「あそここの森から出てきたのよね。大変だったでしょう？あそこは悪い妖精が悪戯するから」

クレイ「名前」

????「それに、昨日は新月だもの。人食い妖怪も出たんじゃないかしら」

クレイ「ああ、あの子か……。キミのヴァイオリンを聴いたら帰

って行ったよ。おかげで助かった。ありがとう」

????「どういたしました」

クレイ「で、名前は？」

ルナサ「ルナサ・プリズムリバー」

クレイ「ふうん……。で、名前は？」

ルナサ「ルナサです」

クレイ「ああ、それが名前。どうせ答ええないと思ってたから、聞き流してたよ」

ルナサ「私の名前を聞くと、敬遠する人がいるので、あまり名乗りたくはないんですけど。あまりにもしつこく聞くから答えました」

クレイ「何で？ ルナサ、いい名前じゃないか」

ルナサ「名前そのものじゃありません……。まあ、いいです。そのうち分かるかと思います」

+++少年少女移動中……+++

クレイ「へえ、姉妹で楽団を」

ルナサ「ええ。今はちょっと事情があってソロ活動をしているんで

すけどね
「

クレイ「事情って?」

ルナサ「理由は聞かないほうがいいです。クレイのためになりませ
んから」

クレイ「いわゆる、音楽性の違いってやつ?」

ルナサ「・・・」

クレイ「それとも、姉妹ケンカ?」

るなさ「・・・」

クレイ「あるいはその両方」

るなさ「・・・聞かないでください」

クレイ「了解です」

ルナサ「ほら、向こうに見えるのが人間の里です」

クレイ「・・・ルナサ、一つ聞いていい?」

ルナサ「なに?」

クレイ「あれは、時代劇のセットか何か?」

ルナサ「じだいげき? 難しい言葉を使うのね、クレイ」

クレイ「・・・違うんだね？」

ルナサ「人間の里の人じゃなかったのかしら？」

クレイ「俺が住んでいたのはもっと高いビルがあった」

ルナサ「びる？」

クレイ「ほら、高速道路とか、駅とか、地下鉄が走ってて・・・」

るなさ「こうそく、どうろ・・・えき、ちか、てつ？」

+++少女思考中・・・+++

るなさ「クレイの住んでいたところは道路が液状の鉄で、地下を高速で走っていたのね」

クレイ「言葉の意味が分かっていない事だけはよく分かった」

ルナサ「とにかく、ここじゃないってことね」

クレイ「そこだけ分かってくれればいいよ、もう」

ルナサ「うーん、幻想郷に液状の鉄が流れてる場所なんてあったかしら・・・」

クレイ「きつとないから。そう言うのじゃなくて、もっと立派な建

物がある場所」

ルナサ「それなら分かるわ。紅魔館や白玉楼、それに、永遠亭とか」

クレイ「名前を聞いた時点でいやな予感しかしない……っていうか、幻想郷？」

ルナサ「???? おかしなことを聞くのね？ ここは間違いなく幻想郷よ」

クレイ「もしかして、東方なんちゃらってやつ？」

ルナサ「よく分からないわ。そういうの」

クレイ「いや、確かそうだった……幻想郷って東方なんちゃらだ」

クレイ「俺は、アニメの世界に足を踏み入れているっていうのか！？」

ルナサ「絵に描いたような落ち込みっぷりね……」

クレイ「夢でもあんまりだ……アニメの夢とか、オタクじゃないんだから……」

ルナサ「夢じゃないわ、クレイ。これは現実よ」

クレイ「……？ はい？」

ルナサ「噂で聞いた事があるわ。ごくまれに、外の世界の境界を超えて幻想郷に迷い込んでしまう人がいるっていうこと」

クレイ「・・・」

ルナサ「人呼んで『幻想入り』」

そう、俺は迷い込んでしまったのだ。
この幻想郷という、別世界に。

天才ヴァイオリニストが幻想入り・序章（後書き）

ルナサのキャラがよく分かんない。無口+真面目っていうイメージだけど、

ほかに登場するキャラもないので無口にしてしまつと話にならな
いし。。。。

真面目に書くことすればするほどおかしな方向に進んでしまつ不思議。

精進します。

天才ヴァイオリニストが幻想入り・第一回（1）

クレイ「さて、これからどうしようかな・・・」

開き直りはいいほうだ。来てしまったものはしょうがない。せつかくこんな変わった世界に足を踏み入れてしまったのだし、思いつき楽しんでやるうじやないか。

ルナサ「じゃあ、私はこれで失礼します」

クレイ「ちょっと待ってよ。せつかくだし、里を案内してくれよ」

ルナサ「そういうわけには行かないわ。私は妖怪だから」

クレイ「へえ、妖怪・・・って、妖怪!？」

ルナサ「正確には幽霊。あら、気づいていなかったのかしら？」

クレイ「あれ、おかしいな・・・俺には靈感がなかったような気がする」

ルナサ「幻想郷に長く住んでいると、靈感がなくても見えるようになる場合はあるそうです・・・でも、まだ数日も経っていないというのにそれもおかしい話ですね」

クレイ「まあいいや。見えるものはしょうがないし。それに、幽霊っていつても、ルナサは怖くないから別にいいや」

ルナサ「幽霊としては、怖がられるに越したことはないんだけど・・・」

クレイ「ま、それはそっちに置いて、里に行こうぜ！」

ルナサ「わっ！ ちょっと、手・・・なんで握れるの!？」

クレイ「これも東方なんちゃらのご都合なんじゃないか!？ まず
は腹ごしらえと行こう！」

+++ 少年少女移動中、それを遠くから見ている一人の女性 +++

???「へえ、あれが・・・なかなかの美少年だね」

???「でも、ま。簡単な仕事になりそうだねえ」

クレイ「へえ、ホントに時代劇みたいだ」

ルナサ「こそこそ・・・」

クレイ「なにコソコソしてるんだよ。来ちゃったものはしょうがない！ 堂々としてればいいんだよ」

ルナサ「私にだって世間の目と言つものがあります」

クレイ「ああ？ 幽霊なのに、変なこと言つんだな」

ルナサ「だから、幻想郷に長く住んでいる人には、私の姿はちゃんと見えてるんです」

クレイ「怖がられるとか思ってるのか？」

ルナサ「人間にとって、妖怪は恐怖の象徴です。でも、だからといってむやみに怖がらせるようなことをしてはいけないと思います」

クレイ「真面目だなあ、ルナサは」

ルナサ「真面目で結構。私はずっとこうして生きてきましたから」

クレイ「つまんないか？　そういうの」

ルナサ「そういう問題じゃありません。・・・とにかく、人気のない場所に・・・」

クレイ「おっちゃん、コレなに？　いい匂いしてるけど」

おっちゃん「こいつは兎鍋だよ。なんだ、兄ちゃん、食ったことないのか？」

クレイ「兎の肉は食ったことないな」

おっちゃん「へえ、珍しいなアンタ。・・・ああ、もしかして外の世界から来たのかい？」

クレイ「そうらしいね。俺もまだよくわかんないんだけど。あそこにいるルナサに助けられて」

おっちゃん「ルナサ？　　おお、よく見りゃアンタ、プリズムリバーのヴァイオリン弾きじゃないか！　この間の博霊神社の祭で派手にケンカしてたな！　あれから妹さんたちとは仲良くやってるかい！？」

ルナサ「ちょ、ちょーっ！！　言ってるそばから目立たせないでください！！」

おっちゃん「よっしや、じゃあ今日は幻想郷来訪記念サービスだ。特別にタダで食わしてやる」

クレイ「お、ありがと！　兎鍋か・・・どんな味なんだろ」

おっちゃん「ほら、プリズムリバーの姉ちゃんも食っていくかい？」

ルナサ「・・・いただきます」

／／／食事中・・・／／／

おっちゃん「へえ、記憶がないのかい？」

クレイ「いや、一般常識とかは大丈夫。あとは生まれてから、最近くらいまでの記憶はあいまいだけど、まあ外の世界に住んでたってことだけは漠然と覚えてるんだ」

ルナサ「それは覚えてるとは言いません。　　記憶がないのなら
初めにそういつてくれればいいのに」

クレイ「いや、なんとなく覚えてないだけってなると、記憶喪失ってわけじゃないだろ？」

ルナサ「同じです。・・・幻想入りしたときのショックかしら」

おっちゃん「でも、ま。なんにせよ『博霊の巫女』のところに行くのがいいだろうなあ」

クレイ「はくれないのみこ？」

るなさ「げ……。私は行きませんよ」

クレイ「なんか問題あるの？」

るなさ「こないだのケンカが原因で鳥居を壊してしまって・・・謝りに行ってない」

クレイ「じゃあついでに謝りに行くつぜ。俺も一緒に謝ってやるからさ」

ルナサ「あなたは彼女の恐ろしさを知らないからそんなことが言えるのよ。彼女は人間でありながら妖怪とも対等に渡り合う異変解決のスペシャリスト。私たち妖怪の天敵です」

クレイ「そうなのか、おっちゃん」

おっちゃん「ま、妖怪から見ればそうかもな。・・・俺たち人間からすれば、妖怪が起こす異変を無報酬で解決してくれる便利屋って所だ。幻想入りした人間も助けてくれるって話だが、あまりいい噂

は聞かないな。博霊神社にたむろしている妖怪も多いし」

クレイ「それ、逆に危ないやつなんじゃないか!？」

おっちゃん「いや、そうでもないぞ。たまに里にも下りてくるが、普通の女の子って感じた。ただ、めちゃくちゃケチだな。向こうの店で、やたらとものを値切ったり、もっとサービスしろだの、おまけつけてくれただの、結構被害にあってる連中もいるな」

クレイ「やっぱ危ないやつだ」

るなさ「でしょ? だから、博霊神社には行かないでおきましょう」

クレイ「そうしますか。ま、最後の手段くらいに考えておこう」

クレイ「じゃあ、行きますか。おっちゃん、ありがとな。今度は客としてくるよ」

おっちゃん「おう、また来いよ!」

クレイ「里の人っていいやつだな」

ルナサ「まあ、そうかもしれないわね」

クレイ「やっぱルナサの気にしすぎじゃないか」

るなさ「.....」

クレイ「にしても、兎肉って案外うまいのな。おどろいた」

ルナサ「うん。あれは結構上物ね。里の人間にしては上出来」

クレイ「上から目線だな」

ルナサ「取れたての兎には敵わないわよ」

クレイ「・・・取ってるの？ 自分で？」

ルナサ「私じゃないわ。メルラン・・・妹が遊びで取ってきたのを食べてたの」

クレイ「へえ、じゃあ、ルナサも料理とかするんだ」

ルナサ「気まぐれにね。私自身は幽霊だから、食事とか、あまり意味はないんだけど。ただまあ、娯楽として料理も食事もするわ」

クレイ「へえ、意外」

ルナサ「そんなにお嬢様に見える？」

クレイ「いや、そういう意味じゃなくて。・・・なんか不器用そうに見えたから」

ルナサ「不器用な人にヴァイオリンが弾けると思う？」

クレイ「・・・失言でした」

ルナサ「よろしい。・・・で、これからどこに行きましょうか？」

クレイ「ひとまず、記憶があいまいなのは不安だな。記憶を直してくれそうなのところがいい」

ルナサ「だとすると、永遠亭の八意永琳か・・・。でも、ここからはちょっと遠いし、迷うわね。手近なのは、香霖堂さんかしら。もしかすると、魔法の森にいる魔法使いが立ち寄ってるかもしれないから、力になってくれそうね」

クレイ「香霖堂ってところに行くのか？」

ルナサ「ええ、あそこならそういうことに詳しい人を教えてくれるわ」

クレイ「じゃあ、出発」

ルナサ「ええ、行きましょう」

+++ 少年少女移動中 +++

クレイ「そういえば、幻想郷って、妖怪がいるんだよね」

ルナサ「何を今更。妖怪を目の当たりにしててそういうことを言いますか」

クレイ「妖怪ってどのくらいいるんだ？」

ルナサ「うーん・・・数えたことないから、分からない」

クレイ「そっか。まあ、そりゃそうだよな」

ルナサ「幻想郷縁起って本があるから、それを読めば妖怪のことが分かると思うわ」

クレイ「へえ、幻想郷に本があるんだ」

ルナサ「幻想郷を原始時代か何かだと思ってない？」

クレイ「思っけてない思っけてない」

ルナサ「まあ、そう思うのも仕方ないのかもしれないわね。噂には外の世界はものすごく文明が発達していると聞きますし」

クレイ「噂？　どんな噂が流れてるんだ？」

ルナサ「外の世界は、腋を出すのと、蛇と蛙の髪飾りがはやっていと聞いています」

クレイ「どこの局地的ブームだ・・・？　それ・・・」

ルナサ「違うんですか？」

クレイ「そりゃ多分その人だけ。他の人はそんなものしてない」

ルナサ「そうなんですか・・・」

クレイ「お、あそこに誰がいる」

ルナサ「あ、あの方は・・・」

クレイ「知ってる人？」

ルナサ「ちゃんと挨拶しなさいね」

クレイ「???? ああ」

????「あら、こんにちは」

ルナサ「こんにちは」

クレイ「こんにちは。いい天気ですね」

????「ええ、いい日和で、花たちも喜んでいますわ。・・・では」

クレイ「なんだ、あの人？」

ルナサ「しーっ!! 幻想郷広しといえども、あの人を敵に回しては生きてはいけませんよ!!」

クレイ「そうなの？」

ルナサ「風見幽香。幻想郷でも指折りの力を持つ妖怪です」

クレイ「そうは見えなかったけどなあ、なんか人の良さそうなお姉さんって感じで」

ルナサ「強い妖怪ほど、普段は紳士的なんです。怒らせてもした日には、一瞬で跡形もなく消えてなくなりますよ」

クレイ「・・・マジか」

ルナサ「気をつけてくださいね。見た目で実力が分かるほど、妖怪の世界は甘くありませんから」

クレイ「了解した」

ルナサ「さて、そうこうしているうちに香霖堂まで到着しましたね」

クレイ「ずいぶん立派な建物だな。・・・ここに一軒だけつてもおかしい話だ」

ルナサ「まあ、そこは気にしないでください。さ、入りますよ」

???「いらっしやい。　　おや、珍しいお客さんだ」

ルナサ「こんにちは。あの、実は相談したいことがあります」

???「その少年のことかな？」

ルナサ「分かりますか？」

???「分かるも何も。あまり店にやってこない三姉妹のお姉さんが、人間の少年を連れてここにやってきた。どう考えても、博霊の巫女向けの相談事だろう？」

ルナサ「さすがですね。霖之助さん。クレイ、この人はこのお店の店主、森近霖之助さん」

クレイ「こんにちは、クレイです」

こーりん「クレイ……。なるほど、キミが」

クレイ「???? 俺のこと、知ってるんですか？」

こーりん「さて、知らないな。だが、一つ言えることは早く博霊の巫女のところに行くことだ」

クレイ「また博霊の巫女か」

ルナサ「彼は記憶を失ってるんです。治す方法を知っているかと思っ
てきたんですけど……」

こーりん「薬は薬屋に聞いたほうがいい。専門外だ。……悪いけど、力にはなれそうもない。とにかく一刻も早く、博霊の巫女に会いに行くべきだと思うけどな」

ルナサ「仕方ありません。分かりました。ありがとうございます」

クレイ「お邪魔しました」

こーりん「ああ、クレイ。一ついいかい？」

クレイ「なんですか？」

こーりん「世の中には思い出さないほうがいいこともある」

クレイ「……それでも、思い出さなきゃいけないものもある」

コーリン「……」

クレイ「俺はそう思います。じゃあ、これで」

コーリン「やれやれ。さすがに面倒ごとを抱えるには、いささか力に欠けるからね。後は専門家に任せるとしよう」

天才ヴァイオリニストが幻想入り・第一回(2)

クレイ「さて、また振り出しに戻ったな」

ルナサ「・・・やっぱり永遠亭に行きましょう」

クレイ「いいのか？ さっきの人は博霊の巫女に会いに行けっ
つてたけど」

ルナサ「・・・」

クレイ「・・・」

るなさ「・・・」

くれい「・・・」

ルナサ「・・・いきたいの？」

クレイ「そんな泣くほどのことなのか？」

ルナサ「私にとっては死活問題よ」

クレイ「ほとぼりが冷めるまで待つつもりか？ それこそ無理だと
思うが」

るなさ「死ぬなら三人一緒よ。だって同罪だもの。私一人だなんて
不公平だわ」

クレイ「それ以前に幽霊は死なないんじゃない？」

しばし、二人歩く。その間も、始終会話は途切れることはなかった。最初、見たときとずいぶん印象が違うな、と思う。ちょっと人間から距離を置いていたようなあの恭しい雰囲気はすっかりなくなり、今じゃすっかり年相応の女の子だ。いや、正確にはこっちが本来の彼女だろう。姉妹たちと話すときは、きつとこんな感じなのだ。もつと正確に言うなら、俺の第一印象があまりにも、本来の彼女らしくなかったのだろう。あの時のヴァイオリンの音は、とても彼女が生み出した音とは思えないものだった。どこか寂しい旋律。心を鎮め、そのまま何もかもを沈めてしまいそうな、深い悲しみの音。どうして彼女にあんなにも悲しい演奏が出来たのだろうか、と思う。彼女の心の中に、そこまで根深い何かがあるのだろうか。気にはなっただけど、聞くのとはばかられたのでやめた。

クレイ「長々しい語りの後でなんだが・・・」

ルナサ「道に迷いましたね・・・完全に」

この場所は迷いの竹林と呼ばれる場所らしい。その名のとおり、とても迷いやすい場所とのことだ。さて、コレはどうしたものか・・・。

クレイ「ルナサ……?」

ルナサ「ごめんなさい……」

クレイ「……いや、そんなにしょげられたら怒るに怒れない……」

ルナサ「すっかり日も暮れてしまいましたし……今日はここで野宿ですか」

クレイ「ここは妖怪とか出ないよな?」

ルナサ「出てもせいぜい妖怪くらいです。そんなに危ないものじゃありませんし、出てきたらむしろ永遠亭までの道案内をしてくれますから助かるんですけど……」

クレイ「じゃあ、それが来るのを待つか……」

ルナサ「そうですね」

二人、野宿の準備をする。ルナサが用意してくれた謎の物体があたりを照らす。曰く、弾幕というものらしいが俺にはよく分からない。

クレイ「そうだ、退屈のぎにヴァイオリンでも弾いてよ」

ルナサ「・・・どうしてそうなるんですか」

クレイ「いや、初めて会ったときの演奏、すごく上手かったし、また聴きたいなって思って」

ルナサ「・・・少しだけですよ」

ヴァイオリンを取り出し、演奏を始める。また、あの時のように静かで、どこか寂しげな音色を奏でた。どうしてこんなにも悲しげな演奏が出来るのだろうか。そう思うが、それと同時に、ふと何かの映像がぼんやりと思い浮かぶ。

あれは、ルナサ？ いや、ヴァイオリンを持ってはいるが、あれは違う。誰だ？ 俺だ。あれは、かつての俺・・・。そうか、

ヴァイオリンの音色を聞いて、こんなにも心穏やかになれるのは、俺もかつてヴァイオリニストだったから・・・。

ルナサ「はい、おしまい」

クレイ「なんだよ、ケチ。もう少しいいじゃん」

ルナサ「ダメ。危ないから」

クレイ「危ないって、何が？」

ルナサ「私の演奏は鬱の力がこもっているの。聞くと心が落ち着くけど、聞きすぎると心が沈みこんでしまう」

クレイ「じゃあ、俺の気のせいだったってことか？」

ルナサ「何が？」

クレイ「なんでもない」

ルナサ「話してくれないの？」

クレイ「話すようなことでもない」

そう言っただけ俺は横になる。実は俺もヴァイオリンを弾いたことがあって、ルナサと一緒になんかうれしい、なんて口が裂けても言えるか。

+++少年睡眠中+++

動悸がする。体が熱い。妙な息苦しさを感じて目が覚めた。まだあたりは暗い。いったい何が起きているのだろう。寝返りをうつて、ルナサの姿を確認する。ルナサは一人、弾幕を見つめてたたずんでいた。声をかけようと思うのだが思うように声が出ない。うめ

くよつに、ようやく彼女の名を呼ぶ。ルナサは俺の異変に気づき、驚いていた。

ルナサ「どうしたんですか!? これは・・・まさか」

ルナサは俺の手を見る。紫色に変色したその手は腫れ上がり、傷口は見るに絶えないようなものになっているではないか。

ルナサ「どうして黙っていたんですか!? これ、毒が回ってますよ!」

クレイ「きづかなかったんだ・・・痛みもなかったし、大丈夫だと・・・」

ルナサ「なんてバカな・・・。幻想郷はあなたの知っているような科学の発展した場所じゃありません! 早くに解毒しないと手遅れになりますよ!」

クレイ「・・・マジか」

ルナサ「立てますか? 一刻も早く永遠亭に行きましょう」

クレイ「体に力が入らない・・・」

俺がそう言うと、彼女は俺の肩を抱えて立ち上がる。まさか、男一人抱えて歩こうというのか。こんな華奢な女の子が。

クレイ「ルナサ、無茶だよ」

ルナサ「無茶でも、やるしかないんでしょう？」

クレイ「……ごめんな、俺のせいで……」

ルナサ「謝るのは、命が助かってからにしてください」

ゆっくりと歩き出す。俺の手足には感覚がない。どうやら、寝ている間にすっかり毒が回ってしまったようだ。意識が混濁する。

ルナサ「もう少しです……がんばって、クレイ」

クレイ「……」

また、昔の記憶を思い出す。あれは、また俺だ。ヴァイオリンを弾く、その姿。ルナサにも負けない美しい旋律は、会場にいる皆を魅了する。だが、それを快く思わないやつもいた。

そう、俺は……あの日。。

ここで、記憶がとまる。俺は？ 俺はあの日、いったい何をしたんだ？ この先の記憶は？ くそ、思い出すまで死ねるかよ……。

小一時間位して、ルナサの足が止まる。とうとう体力の限界か。俺は、彼女に声をかける力もない。齒痒かった。彼女がこんなにも俺のためにがんばってくれているのに、俺は何も出来ないなんて。

どうにか残る力を振り絞って、ルナサにつぶやく。

クレイ「……るな、さ」

ルナサ「喋っちゃ駄目。体力を浪費するわ」

クレイ「もう、いい……」

ルナサ「……簡単に諦めるんですね」

クレイ「もう、たすから、ない……」

ルナサ「そうですか。……なら、ここまでですね」

ルナサは俺を振り落とすと、手に光る何かを宿す。

ルナサ「苦しまないよう、ここで息の根を止めてあげます」

クレイ「……」

ルナサ「……いいんですか？」

クレイ「……」

ルナサ「答えてください……」

クレイ「……」

ルナサ「私は、嫌です」

クレイ「……………」

ルナサ「せつかく親しくなれたのに、もうお別れなんて嫌です」

クレイ「……………」

ルナサ「生きることが諦めないで……………お願いだから、生きて、私のそばにいてよ、クレイ……………」

ルナサ「クレイ……………」

????「ん、あれは……………。おい、そこのお前、何やってる?」

天才ヴァイオリニストが幻想入り・第一回(3)

ルナサ「・・・く、ひっく・・・」

????「これは、ずいぶんひどい毒ね。解毒できるかしら」

ルナサ「お願いします・・・大切な、友達なんです・・・」

????「ええ、任せて頂戴。 ウドンゲ、すぐに治療を始める
わよ」

????「あなたも、姫に見つかる前にさっさと帰りなさい」

????「分かってるよ、うるさいな」

+++少年治療中+++

ルナサ「ありがとうございます・・・。妹紅さん」

もこ「いいって。困ったときはお互い様だ」

ルナサ「妹紅さんがいなかったら、きっと彼は助からなかった」

もこ「そつでもないと思うけどな」

ルナサ「???? どういう意味ですか？」

もこ「お前、まさか気づいてないのか？」

ルナサ「え……？」

????「あら、貧乏人の臭いがすると思って来てみれば、妹紅じゃないの」

もこ「げ……輝夜」

にーと「げ、とは何よ。妹紅のくせに」

もこ「何だと……こっちはな、病人担いできて疲れてるんだよ。ここは屋敷の主としてもてなしの一つでもしやがれ」

にーと「なんですって……」

もこ「ああ？　なんか文句でもあるのか？」

るなさ「……嫌な予感しかしない」

えーりん「コラ！　あなたたち！　今は治療中です！　騒ぐなら外でやりなさい！！」

もこ「……だとさ、姫？」

にーと「……今日は乗らない。それに、病人を前に殺し合いなんて不謹慎だわ」

もこ「それもそうだな。

悪いな、ルナサ……だっけ？　騒

がしくて」

ルナサ「あ、いえ……。いいんです」

もこ「……まあ、深入りはしないが。一ついうなら、あれだ」

ルナサ「????」

もこ「あいつが動けるようになったら、すぐに博霊神社まで行くべきだ。そうしないと、あいつの身が危うい」

ルナサ「それ、霖之助さんも言っていました。どういふことなんですか？」

もこ「たぶん、知らないのはお前くらいだよ、ルナサ」

ルナサ「彼には何かあるって言うんですか？」

もこ「さあな、私もそこまではよく知らん。だが、あいつの身は危機に晒されている。そして、悪いが私はあいつらに干渉しないと決めてるんだ。力にはなれない」

ルナサ「あいつら？ ……誰なんですか？」

もこ「それは……」

えーりん「治療が終わったわ。もう大丈夫よ」

もこ「……まあ、あれだな。自分の目で確かめることだ」

えーりん「??? 夜明けまでには動けるようになると思っから。
それまで、彼のことを看ててあげてね」

ルナサ「は、はい・・・」

病室。

ルナサ「・・・危機。あいつら・・・」

ルナサ「クレイ。あなたの記憶の中に、その答えはあるのかしら？」

頭がぼうつとする。不思議な感覚だ。コレはいつたい何なのだろうか。っていうか、俺は死んだんじゃないのか？ あるいは、これは死後の世界とかいうやつなのかもしれない。ゆっくりと目を開ける。そして、その瞬間、これは紛れもない現実なのだと思います。

クレイ「病院・・・？」

すぐそばで椅子に座ったままルナサがうたた寝をしている。どうやら、ここが永遠亭という場所らしい。助かったのかと思い、あたりを見渡す。すると、近くに奇妙な姿の女の子を発見した。

「????」「????」

クレイ「あ、お、おはよう・・・」

「????」「せんせーっ！患者さんが目を覚ましたよ！！」

別の部屋の方に呼びかける少女。そこからやってきたのは美しい女性だ。どうやらこの人が先生らしい。

えーりん「おはよう。気分はどうかしら？」

クレイ「大丈夫です。まだ少しふわふわするけど」

えーりん「後五分遅かったら私でも五体満足では助けられなかったわよ。毒性が弱いものとはいえ、馬鹿には出来ないんだから気をつけなさい」

クレイ「すみません。えっと」

永琳「八意永琳。永遠亭の薬師です。でも、お礼は結構よ。それは、この子に言ってあげなさい」

クレイ「分かりました。ありがとうございます」

永琳「それと、警告があるわ。一刻も早く、博霊神社に向かいなさい」

クレイ「・・・それ、他の連中にも言われた。でも、ルナサが行きたくないっていうからパスしてただけど、そんなに博霊神社に行かなきゃならないのか、俺？」

永琳「間違いないわね。少なくとも妖怪に頼れる事態じゃないわ。あなたの場合は」

クレイ「???」

永琳「あなたは命を狙われているのよ。それも、妖怪にとって一番苦手な連中に」

クレイ「・・・」

永琳「このままじゃ、この子も、あなたも危ないわ」

永琳「分かるでしょう?」

クレイ「・・・分かりました。行きます、博霊神社に」

それから数分後。

ルナサ「・・・うん・・・」

ルナサ「いけない、寝ちゃってた」

鈴仙「仕方ないですよ。あなたは厄介な人たちにつけ狙われているんですから。それがなくなったら、いつでも仲良くしてあげますよ」

クレイ「その時はよろしく」

鈴仙「ええ。・・・ホラ、この先が博霊神社への道です。私の案内はここまでですね。まっすぐ行けば、博霊神社のある山につきますから」

クレイ「了解。助かったよ」

鈴仙「では、私はこれで」

+++少年移動中+++

クレイ「しっかし、俺のことを狙ってる、なんて、物好きなのやつもいたものだ・・・」

クレイ「俺の記憶喪失と何か関係あるのかな？」

クレイ「・・・遠いな・・・山なんて、まだまだ先じゃないか」

クレイ「竹林はさっさと抜けられたとはいえ、今日中につく距離なんだろうな？」

しばし黙って進む。一人で見知らぬ土地を歩くのはこんなにも寂

しいものなのか。これまではルナサがいたから、何の心配もなかったけど、今はたまたまなく不安だった。

クレイ「置いてきちゃったけど・・・大丈夫かな、ルナサ」

クレイ「・・・気にしてたってしょうがないな。行こう」

+++少女移動中+++

ルナサ「まったくもう・・・クレイってば、何で何も言わずに行ってしまったのよ・・・」

ルナサ「永遠亭の人たちも、彼を追うなの一点張りだし。もうワケが分からないわ・・・」

ルナサ「クレイに、いったい何があるっていうのよ。普通の、男の子じゃない」

ルナサ「・・・っていつか、私、何で彼のことを追っているのかしら?」

ルナサ「もう、私の手を離れたんだ。もう、追う義理もないじゃない」

ルナサ「・・・そうよ、そう。ようやく開放されたんだわ」

ルナサ「あはは、よかった。人間の里までつれてこられて、しかもあんなに目立たせて。迷惑してたし」

ルナサ「せいせいするわ。・・・あんな子、いなくなって、寂しくなんか・・・ないんだから」

ルナサ「でも、大丈夫かしら。道に迷ってたりしないわよね」

ルナサ「ああもう、気にしたら気になっちゃうわね」

ルナサ「しょうがない。アフターケアでもつけましようか」

その頃、俺は博霊神社の階段を見上げていた。

クレイ「長っ!!--」

クレイ「でも、登るしかないか」

クレイ「めんどくさ・・・」

+++少年移動中+++

クレイ「はあ・・・はあ・・・現代っ子にはきつい、この階段は」

クレイ「ようやく、終わった〜!!」

ここが博霊神社、なのだろうか。神社と言ってくせに鳥居の一つもない、寂れた場所だ。ああ、鳥居はルナサたちが壊したんだっけ。

???「あら、珍しい。参拝客なんて」

クレイ「？もしかして、アンタが博麗霊夢？」

霊夢「ええ、そうだけど。私に何か用かしら？」

クレイ「なんか、皆があんたに会いに行けっというから来たんだけど」

霊夢「ふうん・・・。あなた、名前は？」

クレイ「クレイ」

霊夢「なるほど。確かに私が魔理沙くらいしか取り合わない話ね」

クレイ「名前だけで分かるのかよ」

霊夢「ちよつとした有名人よ、あなた」

クレイ「そうなのか？」

霊夢「もちろん、悪い意味で、だけど」

クレイ「なんか、命狙われてるって聞いたんだけど」

霊夢「まあ、確かに狙われてるわね。言葉の意味通りではないけれど」

クレイ「???? どういう意味だ？」

霊夢「あんた、もう死んでるのよ」

クレイ「え……?」

霊夢「あんたは魂だけでこの世界をさまよってる幽霊なの。外の世界で何があつたかは知らないけれど、あんたは自分の肉体と一緒にこの世界にやってきたわけじゃない」

霊夢「今のあんたの肉体はどうやら何かの手違いか、あるいは必然によって生まれたのか。なんにせよ、この世の道理に適うものじゃない」

霊夢「そういうやつをね。刈り取って正常に戻す生業があるのよ」

霊夢「そいつらは、総じて死神と呼ばれてる」

クレイ「死神・・・？」

霊夢「そうでしょうか？ 小野塚小町」

???「ばれてたか。」

あたいの尾行もまだまだだ」

小町「話を聞いたなら話が早いね。クレイ、分かるだろ？ あんたはもう外の世界で死んだんだ。本来なら、閻魔様からありがたい審判を受けるべき存在が、どういうわけか再び肉体を持ってこの幻想郷に現れた」

小町「奇跡、と人は呼ぶかもしれないね。でも、それはあってはならないことだ」

小町「どういう理屈で死を乗り越えたかは知らないが、道理を乱せる道理はない。その魂、連れて行くよ」

そう言っつて、手に持っていた鎌を振りかざす小町という女性。しかし、それを受け止めたのは博麗霊夢。

小町「邪魔をするのかい？ 博麗霊夢」

霊夢「どんな理由であれ、神の御前で人殺しなんて許せるわけがないでしょう？ これでも一応巫女なのよ。それにね、私を頼ってやってきた人間を妖怪に引き渡すなんて、それは私の信用に関

わる問題なのよ」

小町「閻魔様の命に逆らうつもりかい？」

霊夢「閻魔なんて関係ないわ。これは、私と、私の今後に関わる、大事な異変よ」

鎌を翻し、大きくバックステップする小町。霊夢はどこからかお札を取り出して、小町をずっと睨んでいる。

霊夢「クレイ、その辺に隠れていなさい」

クレイ「あ、ああ……」

小町「じゃあ、行くよ」

鎌を肩にかけて退屈そうに笑う小町。しかし、その刹那、小町と霊夢の距離は一瞬でなくなる。そして、振るわれる大鎌。黒い刃は霊夢の首寸前で止まる。霊夢がぎりぎりですり押さえたのだ。

小町「やるね」

霊夢「……夢想封印!!」

虹色の光が霊夢を包み込む。何だあれは、と思った瞬間、光は一齐に距離を開けていた小町のほうに突き進む。だが、それはいつまでたっても小町には届かない。

霊夢「距離を操る能力か・・・でも、どんなに距離を開けても、夢想封印は減衰したりしないわよ」

小町「甘いね。あたいの狙いはそこじゃあない」

霊夢「・・・そうか。しまったっ!!」

広く距離を開けて放たれていた霊夢の弾幕だったが、次第にその距離は狭まっていき、最後には共にぶつかり合い、相殺して消えていく。

小町「追尾性能が高すぎたね。あたいを追うがあまり、せっかくお互いに広く開けていた距離がゼロになっちまった」

小町は一気に霊夢に近寄る。霊夢もお札を投げつけて対抗しているが、その間をすり抜けるように瞬間移動した小町は霊夢に蹴りを入れる。

霊夢「っ・・・」

小町「悪いね、これで終局だ」

刹那に放たれた鈍い光。霊夢の体に纏わりついて彼女の動きを封じた。霊夢は身動き取れないのか、俺に逃げる、と叫ぶ。

小町「逃げるところなんてないよ。あたいの能力がある以上、どんなに逃げててもそれはゼロになる。こんな風にさ」

走って階段を駆け下りるが、もう遅い、目の前にはもう小町がい

る。

小町「これで仕事もお終いだ。もう少し引き伸ばしてサボっていた
かったけど、これ以上騒ぎになると、四季さまも気づくからね」

小町「じゃあね」

天才ヴァイオリニストが幻想入り・第一回（4）

その刃を押さえ込んだのは、ルナサの放った弾幕だった。

ルナサ「逃げて！ 私が時間を稼ぐから！」

クレイ「ルナサ！？ どうしてここに！？」

ルナサ「分からないわよ、そんなの！ でも、そうしたかったの！」

クレイ「ワケわかんねーよ、そんなの」

ルナサ「いいから逃げて、そんなに長く持たない！」

ルナサにお礼をいい、踵を返す。階段を駆け上がり、再び博霊神社へ。博麗霊夢のところまでいき、彼女に纏わりついている光を払う。

クレイ「どうすればいい？」

霊夢「何がよ？」

クレイ「どうすればみんな助かるんだよ！？」

霊夢「・・・簡単よ。幻想郷から出て行けばいい」

クレイ「そんなこと、出来るのかよ？」

霊夢「それが出来るのが博霊神社よ。ここは、外の世界に通じているから。小町の管轄はあくまで幻想郷の中だけだし、外の世界までは追ってこないわ」

霊夢「ただし、その代償は高くつくわよ」

クレイ「なんだよ、代償って」

霊夢「外の世界には、あなたの還る体はないわ。そうになると、あなたは外の世界で魂だけの存在のまま、永遠の時を過ごすことになる」

クレイ「……」

霊夢「今のあなたの肉体は、幻想郷の何らかの干渉によって与えられたもの。外の世界でそれがそのまま使えるはずないわ。間違いなく、幽霊とかと同じレベルで生き続けなければならなくなるでしょう」

クレイ「……」

霊夢「嫌でしょう？ だから、私が戦ってあげてるのよ」

クレイ「駄目だ。なんで、みんな、俺のために」

霊夢「さあね。私にもよくわかんないけれど、あれよ」

霊夢「生きることを放棄していないやつを見捨てられるような愚か

者は、幻想郷にはいないのよ、きっと」

どん、と爆発音のようなものが聞こえる。それと同時にルナサの体が吹き飛ばされて、境内に打ち付けられた。

クレイ「ルナサ!」

ルナサ「ごめん・・・クレイ・・・守れなかった」

クレイ「俺のほうこそごめん! 俺の事情なんか、ルナサを巻き込んで・・・こんな痛い思いをさせて・・・」

ルナサ「いいよ。別に。友達じゃない」

クレイ「・・・友達?」

ルナサ「・・・そう、ともだち」

クレイ「ルナサ?」

ルナサ「見てて。私の本当の力を見せてあげるから」

ヴァイオリンを構え、ルナサはゆっくりと階段を登ってきた小町を見る。そして、奏でるのは、あの時と同じ、悲しい旋律。

小町「この音は・・・？へえ、なるほど」

ルナサ「その荒ぶる魂、沈めてあげるわ」

小町「できるものなら、やってみな！」

小町が鎌を振り回す。ルナサはそれを紙一重でかわしていく。その間も演奏する手は休めない。小町と戦いながら、ルナサはヴァイオリンを弾きつづける。だが、次第にその能力に危機感を覚えたのか、小町はいきなりルナサの体を掴み、投げ飛ばした。

ルナサ「きゃあ！」

小町の足元に転がったヴァイオリン。ルナサはそれを見て、唇を噛む。

小町「危ないところだったねえ・・・さすがのあたかも牙を抜かれちゃ戦えない。少し、仕置きが必要かな？」

小町が再び鎌を振るう。だが、そこに割り込んだのは博麗霊夢。両手にお札を構え、一斉にそれを投げた。

霊夢「ホーミングアミュレット！！」

小町「は、学習しなかったのかい？　こんなもの、距離を開けてしまえば……」

霊夢「開けてしまえば、どうなるかしら？」

小町の周りを回転するお札。その周りには一分の隙間もない。ち、と小町は舌打ちする。

霊夢「相手が距離をとってかわすなら、こっちは距離を開けさせる前にその空間を封じてしまえばいい」

霊夢「敵だけをホーミングすると思ったら、大間違いよ。小野塚小町」

小町「は、参ったね……」

小町は口元を緩め、鎌を振る。お札を切り払うと、彼女は一気に霊夢に接近した。

小町「これじゃ、本気で相手をしなければならぬようだね！　こちとら死神だ。あんたらのルールに従う義理はない！　四季さまのお説教のほうか怖いんでね、本気で殺させてもらうよ！　博麗霊夢！」

霊夢「っ！！」

クレイ「お、おいおい・・・霊夢が押されてるぞ・・・」

ルナサ「当然よ・・・霊夢は、死神をこちらに向かわせるわけには行かない。だから、必然的にこちらを守るように戦わざるを得なくなる。でも向こうはいざとなればすぐこっちとの距離をゼロに出来てしまう。霊夢は一分でもあいつに暇を与えてはいけない状態よ。

消耗戦は必至。そして、人間と妖怪の体力じゃ、勝てるわけないわ」

ゆっくりと起き上がり、ヴァイオリンに手を伸ばすルナサ。そして再びヴァイオリンを奏でる。しかし、二人はそんな音などもう耳に入っていないのか、まったく効果はない。

ルナサ「聞こえてない・・・？」

クレイ「・・・貸してくれ。俺がやる」

ルナサ「クレイが？ 無理よ！ このヴァイオリンも幽霊なの。あなたに騒霊の楽器は扱えないわ！」

クレイ「できるよ。俺なら」

ルナサ「・・・？」

クレイ「だって、俺、天才ヴァイオリニストだし」

ルナサ「・・・へ？」

そして、奏でるのは、ルナサと同じ曲。でも、紡ぎ出す音は、ルナサのような、悲しみに満ちた旋律ではない。

ルナサ「これは・・・なんて柔らかくて、心地いい音色・・・」

ルナサ「私のヴァイオリンが、こんな音を出せるなんて・・・」

クレイ「音楽には奏でるものの魂に由来した力が宿る。そして、これが俺の力・・・受け取れ！」

ルナサ「私の音が、鬱の音色だとすれば、クレイの音は・・・そう、優の音」

ルナサ「これなら、きっと、届く・・・」

ルナサの言葉のとおり、旋律は二人の耳に届いた。霊夢の目前まで迫った刃がぴたりととまり、俺を見る。

クレイ「俺は幻想郷を出て行く。それでいいんだろ？」

小町「・・・しょうがないね。四季さまからは必ず連れて来いと言われてたんだが・・・管轄外まで逃げられちゃ、手の出しようがない」

今回は特別だよ、と小町は鎌をしまつとさっさと帰っていく。

霊夢「何よ・・・何が起こってるっていつの・・・?」

ルナサ「クレイの力です。博麗霊夢。私のヴァイオリンから、彼は騒霊を操ったのです」

霊夢「ルナサ?・・・あーっ!!　ここであつたが百年目!　鳥居の修繕費払いなさい!!」

ルナサ「く、クレイ〜!!」

クレイ「ほいきた」

+++少年演奏中+++

霊夢「あー、いいのいいの。鳥居の二つや二つくらいで文句を言うほどケチじゃないわ」

ルナサ「すごい効き目・・・」

クレイ「やっぱ才能あるな俺」

ルナサ「それにしても、いつ記憶が戻つたの?」

クレイ「ルナサにもだちって言われたら、みんな思い出した」

ルナサ「・・・それは、どういう意味？」

クレイ「ショック療法ってやつかもね」

ルナサ「私と友達になるの、そんなにいや？」

クレイ「いや、俺もなれたらいいなって思ってた」

ルナサ「・・・」

クレイ「・・・ありがとう、ルナサ。世話になったよ」

ルナサ「クレイ・・・？」

クレイ「さて、と・・・霊夢、俺、帰るよ」

霊夢「いいの？ 一生幽霊のまま暮らすことになるのよ？」

クレイ「いいよ。これ以上ルナサにも、霊夢にも迷惑かけられないし」

クレイ「それに、俺、思い出せたから。外の世界でも思い出せなかった、俺のやりたかったこと」

霊夢「・・・せっかくだし、聞かせてくれる？ あなたの夢」

クレイ「俺さ。外の世界じゃ、天才ヴァイオリニストなんて呼ばれてたんだ」

クレイ「俺の奏でる音は、すごい力があるって、たくさんの人にもてはやされて、俺もその力をもっと高めたいって思っ、ずっと練習してんだ。そして、その才能を生かしてずっとヴァイオリンを弾いていきたいと思っ、た」

クレイ「でも、それはダメだったんだ。俺の持つ力を妬む者が、俺からヴァイオリンを奪ったんだ」

霊夢「出る杭は打たれる。力がありすぎるものは、誰からも妬まれるのは当然ね」

クレイ「でも、それでもやつらは足りなかったんだ。　　ヴァイオリンだけじゃない。俺から、この腕まで取り上げようとした」

ルナサ「・・・」

クレイ「でも、そのときに俺が暴れたから、気づけば、あいつらが持っていたナイフは、俺の腹に刺さってて」

クレイ「そして気づけばここにいたんだ。たぶん、神様の悪戯かなんかだろうな」

クレイ「いい幻想だったよ。俺にもう一度、ヴァイオリンを弾かせてくれた。　　やっぱり俺、ヴァイオリンが好きなんだって、よく分かった。向こうに戻ったら、またヴァイオリンをやるうと思う。そして、いつか世界一のヴァイオリニストになるんだ」

霊夢「・・・いい夢ね。でも　　」

ルナサ「ちょ、ちょーつと待って。クレイ、あなた、間違ってるわ」
クレイ「え？」

ルナサ「言ったでしょう？ 幽霊が見えるのは、幻想郷の力なんだから。それに、幽霊であるこの私がこのヴァイオリンに触れられるのも、このヴァイオリン自体が幽霊だからなの。向こうに帰ったら、誰にも見えないし、ヴァイオリンにも触れないのよ？」

クレイ「????？」

霊夢「つまり、向こうに帰ったら夢は叶えられないのよ」

クレイ「ええーっ！！ じゃあちよつと待って、話変わってくる！」

ルナサ「呆れたわ・・・私の話を聞いてなかったの？」

クレイ「やっぱ帰らない！ ここに残る！」

霊夢「じゃあまた死神がやってくるわよ？」

クレイ「いや、大丈夫。今度は俺の演奏で止めるし」

ルナサ「ちょ、このヴァイオリンは私のですよ!？」

クレイ「いいじゃん、少し貸してよ」

ルナサ「嫌です！ 人の話を聞いてないような子には貸してあげません！」

霊夢「・・・呆れたわ・・・ホントに、疲れる」

クレイ「じゃあ、あれだ。しばらく一緒にいよう！ 小町がまた来たときだけヴァイオリン貸して！」

ルナサ「なっ・・・ちよつと、意味分かって言ってるんですか!？」

クレイ「意味って何だよ？」

ルナサ「それは・・・その・・・こ、こんなところで言えますかっ！」

霊夢「あーもう・・・勝手にやってなさい。私は寝る。今日は疲れた」

その頃、地獄の小野塚小町は・・・。

えーき「散々時間かけたくせにクレイを捕まえてない、ですか・・・」

小町「だって、逃げられちゃいましたし、ねえ・・・」

えーき「(騙されてるのにも気づかないとは、小町もまだまだ甘い
ですね)・・・仕方ありませんね。今回は多めに見ましよう。今後、
クレイのことにに関して、我々は認知しません」

小町「はい。了解です。で、四季さま？」

えーき「何ですか？」

小町「特命の報酬、約束の特別ボーナスのほうは・・・」

えーき「・・・」

小町「ないですよねえ・・・」

クレイには逃げられ、幻想郷で遊び歩いて使い果たした小遣い、
果てには約束のボーナスもなし。ふところが寒々な小町なのでした。

どんどはね。

幻想郷放浪記・序章（前書き）

依頼主様からおーけーをいただいたので、こんな感じで進めています。と思います。

では、お楽しみください。

幻想郷放浪記・序章

季節は冬。師走、なんていうけどまさにその通り。年越しのための大掃除やら正月を迎えるための準備で大忙しである。あくせくと働く人々が行きかう中を、私、南原宗太は走りぬけていく。

手には一人では抱えきれないほどの一升瓶。どこでそんな大宴会があるんだい、と通りがかった兎鍋屋のおっちゃんが言うが、実際のところ、宴会の予定なんてない。

宗太「これで三人分だよ」

おっちゃん「ははっ、いい冗談だ。ほら、サービスだ。持っていくな」

宗太「お、いいのかい？ ずいぶんいい兎肉みたいだけど」

おっちゃん「こちらら気前の良さで商売やってるんでな」

宗太「じゃあ、遠慮なくもらってくよ」

そして私はいつもの道をまっすぐ歩き、幻想郷の果て、博霊神社にやってきた。母屋のほうに向かい、彼女がいるであろう居間に向かう。案の定、彼女は炬燵に入ってるのんびりと酒を飲んでいた。

宗太「よ、萃香」

真っ赤な顔をしてすっかり出来上がっている少女。頭には大きな角、真冬だというのにノースリーブの服。そして、彼女のトレードマークとも言える、大きな瓢箪。彼女の名は伊吹萃香。幻想郷に住む鬼である。

すいか「ひくっ……あー、何だ。宗太か」

宗太「昼間っから酔っ払ってるなよ」

すいか「飲まなきゃやってられないよ。飲むことこそが人生だね」

宗太「あんたは人生に浸りすぎ。ホラ、土産」

すいか「んー……？ お、芋か、いいねえ……上物だ」

宗太「霧雨店でまとめて買ってきた。そして、コイツは萃香の飲みたがってたあの幻の日本酒だ」

すいか「おおっ！！ ホントに!？」

宗太「霧雨店の旦那も、年に一回仕入れられるかも分からない幻の一品だつて言ってたよ。ホントなら、紅魔館とか白玉楼にでも売りに行くところを、お得意様だからって特別に売ってくれたんだ」

すいか「おおー……さすが宗太」

宗太「もうすぐ昼飯だろ？ そのときに飲もう」

そうでも言っておかないとすぐにでも飲み始めてしまいそうな勢いだ。目を輝かせてどんな味なんだろう、と一升瓶を眺めている。

そこに博霊神社の巫女、博麗霊夢がやってくる。こちらを見るや否や、まるで同列なものでも見るかのような視線を私と萃香に送ってくる。賽銭も入れなくせに、また来たのか、と目で言っている。

れいむ「もう、あんた達は何でこつも昼飯時に現れるのかしら？」

宗太「いや、おとといは確か、夕食時だったと思うけど？」

すいか「その前は朝飯時だったよ」

れいむ「もういいわ。朝食の残りだけど、文句言わないでよ」

宗太「じゃあ、ついでにこれも追加で」

れいむ「兎？・・・しかも二羽も！あんた、やるじゃない！」

宗太「いやあ、それほどでもないよ」

れいむ「宗太、あんた毎日こついうもの持ってきてくれたらいつでも歓迎してあげるわよ」

宗太「地獄の沙汰も金次第」

れいむ「ん？何か言った？」

宗太「なんでもないですよ」

そして、昼食が出来るまでの間、しばし萃香と話をする。
こんな日々が、もう数ヶ月も続いている。
始まりは、そう、あの夏の日。

その日、私は鬼と出会ったのだ。

幻想郷放浪記・序章（後書き）

すいかとれいむはもう、ウチの小説シリーズの常連ですね。書きなれたものです。

ただ、宗太さんのキャラがいまいちつかめない。一人称が私だから、敬語でしゃべらせるべきか最後まで悩んだけど、結局、普通にしゃべらせてみた。

結果、なんかウチの普段のしゃべり方みたいになった。

依頼主様がこのままでいいと言っていましたので、口調はこのままで進めていこうと思います。

今後ともよろしくです。

幻想郷放浪記・第一回（1）

どこまでも続く山道。あちこちに飛び交うは、鴉の群れ。いったいここはどこなのだろう。考えても、どう考えてもここに自分の意思でやってきた記憶はない。ついさっきまで、私は電車に揺られて一人旅の真っ最中だったような気がしてる。なぜ、こんな奇妙な場所、ひとり、たたずんでいるのだろうか。

鴉の鳴き声はだんだんと大きくなる。すると、遠くから何か大きな鳥が飛んできた。いや、あれは鳥じゃない。女の子？ 女の子が空を飛んでいる？

????「そこに行く人、ちょっと待ちなさい」

宗太「・・・何か用ですか？」

????「この先は人間の来るべきところではない。用がないのなら引き返しなさい」

宗太「そういうあんたも、人間じゃあ、なさそうだ」

????「当然です。私は天狗です」

宗太「天狗・・・？ 私の知っている天狗とはまるで違うようだけど」

????「どうせどこかの妖怪図鑑で見たんでしょう？ そんなもの

と一緒にされては困ります」

もみじ「白狼天狗、犬走椀、侵入者を追い出します！」

宗太「・・・っ!!」

振るわれる大剣。食らえばひとたまりもないだろう。あんな得物を軽々と振り回すあの少女、本当に人間ではないようだ。さて、どうしたものか、と思う。あの鴉の群れもおそらくは天狗の仲間なのだろう。そして、この先には通さないといつたこの雰囲気、さすがにこの奥に逃げるのははばかられる。なら、引き返すか？ まあ、それが一番いい答えなのだろう。だが、既に鴉に取り囲まれている。目の前には椀を名乗る、剣を構えた妖怪が一人。逃げるには、もう遅すぎた。

もみじ「少し痛い目見てもらいますよ!!」

宗太「さすがに、それはいただけないな」

振り下ろされた刃を寸前でよけ、椀の腕に触れる。すると、とたんに椀の動きはぎこちなくなる。何が起こったのか、といった顔で椀はこちらを見ている。だが、今の私にはこの一分の隙にかけるしかない。周囲を囲む鴉の群れを見つめ、その中から抜け出せそうなスペースを見極めると、そこを指して一気に駆け抜ける。鴉の群れもそれを察知してか、一斉にこちらに向かってきた。だが、それはもう遅すぎる。

もみじ「なっ……早いつ!？」

宗太「帰ります! お騒がせしました!」

もみじ「……まあ、帰ってくれるならいいんですけど」

+++少年移動中+++

宗太「やれやれ……酷い目にあつた」

宗太「まあ、追手もこないし、もう大丈夫かな」

宗太「それにしても妖怪か……この世界はいったい何なんだ?」

そして、来た道をただ引き返す。こっちに向かったら向かったで、また妙な連中が襲ってきたらどうしよう。逃げるのは得意だけど、やっぱり戦うのは苦手なのである。

宗太「……ま、まだお昼だし。気楽に行こう。きっとまともな人間もいるだろうさ」

+++少年移動中+++

もうかなり歩いただろう。だが、未だに何も見当たらない。いたいここは何なのだろうか。田舎にもほどがある。まあ、妖怪なんて物が出てくるくらいだ。きつとかなりの秘境なのだろう。しかし、さすがに飲まず食わずで歩き続けるのにもいささか疲れた。ここは少し、ショートカットでもして進もうか。

宗太「・・・じゃ、ちよつと飛ばしていきますか」

念じると、私の体は風のようなスピードで走り出す。どうしても分からないが、何故かこんな芸当ができるようになっていた。歩きながらいろいろと試してみたが、どうやら、加速装置とでもいえばいいものが身につけてしまったのだ。また、それとは逆に遅くも出来るらしい。都合のいい能力が身についたものだ、と思いつながら、その恩恵をしっかりと受けてどんどん道を突き進む。

そして、ようやく開けた場所に出た。ここは、どうやら人がたくさんいる場所らしい。よかった、これでここがどこなのか聞ける。さっそく、その辺にいた女性に声をかける。

宗太「あの、すみません。つかぬこと聞きますが・・・」

「???」「はい、なんででしょう?」

宗太「ここって何処なんでしょう?」

「???」「おかしなことを聞きますね。人間の里ですよ?」

宗太「人間の里？ いや、そうなのかもしれないですけど、ここが何県のなんていう町なのか教えてくれませんか？」

「???」県？ 幻想郷にはないですよ。 もしかして、外の世界から来た方ですか？」

宗太「外の世界？ 幻想郷？」

「???」「やっぱり。あの、私も実は外の世界から幻想郷に来たんです」

宗太「そうなんですか？」

さなえ「ええ、私、東風谷早苗と申します。向こうに見える山の山頂にある神社で巫女をしています」

宗太「さっき、向こうのほうで妖怪に襲われましたよ」

さなえ「ああ、きっと哨戒天狗です。あの先は危険な妖怪もいますので、不用意に人間が近寄らないよう、あの子達が見張っているんです」

宗太「そうだったんですか」

さなえ「そうだ、幻想入りしてきたんでしたら、博霊神社に行ってみてはどうでしょう?」

宗太「博霊神社？」

さなえ「幻想郷に誤ってやってきてしまった人を送り返したり、生

活面での保障をしてくれたりと、幅広く幻想入りした人を受け入れてくれるんです」

宗太「へえ、いい人もいるんだね」

さなえ「まあ、仕事だから、と割り切っているという感じですが。巫女自体のほうは、まあ・・・あはは」

宗太「それで、その博霊神社っていうのは何処にあるんですか？」

さなえ「幻想郷の東の果てです。向こうのほうに向かってまっすぐ道になりに行けばすぐですよ」

宗太「わかった、じゃあちやちやっと言きますか」

さなえ「あ、すぐと言っても、小一時間ほど歩きますから。妖怪の山から来たのでしたら、少しここで休憩してからのほうが・・・」

宗太「大丈夫。私からすれば一瞬のことですよ」

+++少年移動中+++

さなえ「・・・え？ 消えた？」

さなえ「幻想入りしたばかりなのに、もう常識にとらわれていないなんて・・・すごい人もいたものですね」

宗太「はい、到着つと・・・」

宗太「ずいぶん寂れた神社だね」

????「寂れた、とは失礼だね」

宗太「!？」

????「ああ、気にしないで。私はここの巫女じゃないよ」

それは見れば分かる。頭に角の生えた巫女なんているわけない。いてたまるか。

すいか「私は伊吹萃香っていうんだ。アンタ、飲めるか？」

宗太「はい？」

すいか「酒だよ酒、飲めるのか？」

宗太「まあ、人並みには」

すいか「よっしゃ、じゃあ付き合え。今日は霊夢もいないし、退屈してたんだ」

そう言いながら主のいない神社の母屋に勝手に侵入する萃香という小鬼。図々しいにもほどがあるが、その上、水がめに入っている

鯉を一匹取り出して、それを器用に捌き始めたではないか。

すいか「やっぱ酒の肴は必要だよね」

宗太「いいのか？勝手に鯉を取って」

すいか「いいのいいの、私もこの神社に住んでるようなもんだし」

宗太「妖怪が神社に住んでもいいのか・・・？」

すいか「いいのいいの。どうせこんな人も来ないような小汚い神社、神様も裸足で逃げ出すよ」

宗太「酷い言われようだね」

すいか「そんなもんだよ、さ、食べよ」

幻想郷放浪記・第一回(2)

すいか「んー・・・上手に着に、目の前には自分の置かれている状況を理解しきれていない男が一人。今日はいいい酒が飲めそうだ」

宗太「分かるんですか？」

すいか「言ったでしょ？ ここには人は来ないんだって。それなのに来たって事は、異変を解決して欲しいか、あるいはわけも分からずに幻想郷に引き込まれてしまった犠牲者だ。あんたは後者に見えるね」

宗太「さすが。妖怪は観察力が違う」

すいか「なあに。博霊神社に出入りしてたらこれくらいすぐに分かるようになる。まあ、帰るにしても、巫女である霊夢がないとどうにもならないから、夜まで待ちな」

宗太「分かりました。じゃあ、しばらくここにいさせてもらいます」

すいか「堅苦しいなあ・・・その、変な言葉遣いやめたらどうだ？

あんたも喋りにくいだろ？」

宗太「まあ、一応妖怪相手だし、礼儀は必要かと思って」

すいか「あー。私にはそういうのいらん。見た目もこんなだし、この見た目の感じの人間と付き合うと思って気楽に話してくれ」

宗太「じゃあ、そうさせてもらおうよ」

すいか「よし。じゃあ、飲め」

そう言っつて、萃香は私の前に置かれたコップに酒を並々と注ぐ。それを一気に飲むと、萃香はやるじゃん、と上機嫌に笑っていた。

すいか「よし、もっと飲め」

宗太「・・・その瓢箪、どれだけ酒が入ってるんだ？」

すいか「ん？ ああ、私もさつきからかなり飲んでるのに、何でなくならないか、と思ったのか？」

宗太「だって、そんなに小さな瓢箪なのに」

すいか「ふっふっふ・・・じゃあ、私得意の宴会芸でも見せてやるか」

そう言っつと、萃香は台所から大きなタライを持ってきた。

すいか「じゃあ、この瓢箪の中に入ってる酒を全部ここに出すよ」

宗太「まさか、これがいっぱいになるとでも言っつんじやないだろうな」

すいか「まさか。そのまさかに決まってるじゃないか」

萃香は瓢箪の中身の酒をそこに注ぐ。だが、いつぱいになるところか、瓢箪の中身分くらしいしか出てこない。騙したな、と思うのだが、その刹那、萃香はにやりと得意げに笑う。

すいか「しばらく待つ。すると、ホラ」

宗太「酒が出てきた!？」

すいか「こいつの名は伊吹瓢。無限に酒が湧くという鬼の必須アイテムさ」

宗太「どういう原理なんだ？」

すいか「それは秘密さ。教えたら商売上がったりだ。タネを明かさなから手品なんだろ？」

宗太「すごいな・・・その手品」

すいか「ふっふ・・・もっと褒めてもいいよ」

宗太「いや、ホントにすごい」

すいか「ま、飲め飲め。そんなわけで、酒は尽きないから」

+++少年少女飲酒中+++

すいか「しっかし、こんなに飲める人間は初めてだ」

宗太「そうかい？ 私的にはまだ大丈夫だけど」

すいか「うーん。お前、妖怪じゃないだろうな？」

宗太「いえ、人間だと思うよ」

すいか「まあいいか。人間でも妖怪でも、楽しく飲めりゃそれでいい」

宗太「そうだな。まあ、今日はそういうことにしておこう」

こうして、私と萃香の酒盛りは夜まで続いた。二人して、いつまでも酒を飲み、くだらない話をして盛り上がった。そしてそのまま朝になる。私はいつの間にか寝てしまっていて、萃香も同じようにちやぶ台に突っ伏して眠っていた。

宗太「やれやれ・・・昨日はかなり飲んだしな・・・こりゃ当分起きないか」

萃香に毛布をかけてやり、外に出る。いい天気だ。そろそろ博麗霊夢とかいう人に会いに行こう、と思い、私は神社の周辺を探して

歩く。夜には帰ってくるという話だったのだが、どうやら帰ってき
ていないらしい。まあ、それまで暇だし、せつかくだから掃除でも
してやるうかと、箒を持って境内を掃除する。

???「お、いつからこの神社にバイトが入ったんだ？」

空から声。見上げると、箒にまたがった女の子が浮いている。ま
さしく魔女を絵に描いたような容姿だ。

宗太「あなたがこの巫女　ではなさそうだ」

???「そりゃそうだ。幻想郷にはこんなにかわいい巫女はいない
ぜ」

まりさ「私は魔理沙。魔法使いさ。・・・お前の口ぶりからすると、
霊夢は留守なのか？」

宗太「ええ。萃香が言うには紅魔館とかいう場所に行っているとか」
まりさ「そういえば昨日は紅魔館でパーティーがあるとか言ってた
な。メイドだけじゃ手が足りないから手伝いにでも行ったのか？」

宗太「夜には帰ってくるって話だったんだけど、まだ帰ってこない
みたいだよ」

まりさ「それで、お前はこんなところで暇をもてあまして掃除なん
てしてたのか」

宗太「まあ、そういふこと」

まりさ「やれやれ、ただでさえ少ない客をもてなすどころか、神社を空けて掃除までさせてるとは・・・とんでもない巫女だぜ」

???「誰がとんでもない巫女よ」

まりさ「お、霊夢。帰ってきたか」

れいむ「帰ってきたわよ。まったく、吸血鬼の生活ペースにつき合
わされちゃ、体壊すわね」

まりさ「客が来てるぞ」

れいむ「え？ あ、あら。ごめんなさい。ええっと、見かけない顔
ね」

宗太「南原宗太です。外の世界から来た者です」

れいむ「幻想入り被害者ね。最近ホントに多いわね」

まりさ「だから言ったろ？ 今月に入ってもう十人以上。妖怪たち
もかなりの数が幻想入りしているみたいだし。いったい何が起こっ
てるんだか」

れいむ「じゃあ、どうします？ 外の世界に帰りますか？」

宗太「ああ、いえ。しばらくやめておきます」

れいむ「??? しばらくって？」

宗太「私は旅が趣味でして。せつかく来たんですからしばらくの間、幻想郷を旅してみようかと」

れいむ「そう。でも、幻想郷は危険な場所よ。大丈夫なの？」

宗太「大丈夫です。なんか、この世界に来てから妙な力に目覚めまして、そのおかげか、妖怪にあってもすぐに逃げられますから」

れいむ「能力ってそんなにすぐ開花するんだっけ？」

まりさ「最近幻想入りしてきたやつは皆そうみたいだ。これも異変かもしれないな」

れいむ「そろそろ解決しないとまずいかしら・・・」

まりさ「ま、私がこれだけ調査しても原因の一つも見つけれられないんだ。霊夢にや無理だぜ」

れいむ「むむむ・・・」

宗太「じゃあ、私はこれで。萃香にもよろしく言うておいてください」

れいむ「そういうことは本人に言ってあげなさい」

すいか「よ、宗太。もう行くのかい？」

宗太「起きてきたんですか？ まだしばらくおきないと思ってたのに」

すいか「私と互角に飲める人間なんてそうはいないからね。気に入ったよ。 また来てよ。今度はお前も酒持って来て」

宗太「南原宗太。 名前、まだ言っただろう？」

すいか「そうた。よし、覚えたぞ。宗太、私はここで待ってるから、旅に疲れたらまたいつでも来い」

宗太「そうさせてもらいますよ」

幻想郷放浪記・第一回(3)

そう、あの出会いからもう数ヶ月も経ったのだ。あの時は、適当に見て回ったら帰ろうと思っていたのだが、まさかこんなにも長くこの幻想郷にいついてしまふとは思わなかった。その原因は、おそらく、目の前にいるこの少女のせいだろう。

すいか「なあなあ、霊夢が戻ってくる前にこの酒、二人だけで飲んじゃわないか？」

宗太「ダメ。酒は皆で楽しく飲むものだ」

すいか「ちえつ、一人飲みもさし飲みもいいもんだよ」

宗太「せっかくの幻の酒なんだから、皆で楽しもうじゃないか」

すいか「ま、それもそうか」

まりさ「お、何だ何だ？　こんなに大量の一升瓶は？」

すいか「げ、魔理沙・・・？」

さなえ「あら、忘年会のお誘いに来てみれば、どうやらこっちはもう始めちゃってるみたいでしたね？」

すいか「早苗まで・・・」

さくや「あら、気まぐれで来てみれば皆も同じだったのね」

れいむ「ちょ、ちょっと！ 何であんたたち昼飯時にこんなに集ま
ってきてるのよー!!」

ありす「安心なさい。料理は作ってきてあげたわよ」

れいむ「アリスまで・・・もう、しょうがないわね・・・。明日に
する予定だったんだけど、今日に繰り上げよ。忘年会やりましょう」

宗太「お酒の心配は要らないですよ。まだまだ大量にありますから」

まりさ「おおっ、さすがは宗太。幻想郷中の珍しい酒持ってきてる
んだよな!? 私はまず麦酒だ!」

さなえ「私、地霊温泉郷の地酒がいいです」

ありす「じゃあ、私はワインを頂戴。もちろん、人間の里産のもの
ね」

さくや「ふふっ、お嬢様も呼んでこようかしら?」

れいむ「やれやれ・・・忙しくなりそうね」

すいか「・・・」

宗太「萃めたのか? 能力で」

すいか「ま、せっかくいい酒があるんだしね。皆で楽しもうと思っ
てさ さて、お前たち! ここに、あの幻の日本酒といわれた

樽の銘酒があるぞ!！」

まりさ「おおっマジでか!?!」

さくや「あら、あれは……」

ありす「日本酒には興味ないけど……。まあ、珍しいものなら飲んでみる価値はありそうね」

さなえ「……あれって……。まさか」

れいむ「あれ、咲夜と早苗は飲まないの?」

さくや「そのお酒は屋敷にありますから。入手困難なものですし、皆さんで飲んでくださいな」

さなえ「私も、遠慮しておきます……。あはは」

すいか「よっしゃ、じゃあ飲もうか!」

『かんぱーい!!--!』

まりさ「……これは……」

れいむ「なに、これ……?」

ありす「……マズイわね」

すいか「どういうことだよ、宗太!!--!」

宗太「私も知らん。なんなんだ、この酒・・・」

さくや「幻の日本酒『泥沼』。まるで泥を飲んでいるかのごとく不味いことからそう名づけられた史上最底の日本酒ですわ」

さなえ「諏訪子さまも、神奈子さまもよく言っていました『泥沼』だけは飲んじゃいけないって・・・」

すいか「じゃあ、まさか入手困難な理由って・・・」

さくや「あまりの不味さに、単に発売になる前にお蔵入りしてしまっただけですわ。そのうち、人々にも忘れられて、幻想入りしてしまっただけでしょう」

すいか「そ、そんなあ・・・」

さくや「でもまあ、何でも幻想郷の一部の物好きな妖怪がこれを好んで飲んでいるらしく、年に一回だけ一升瓶十本程度だけ生産されているそうです。その余りが、ごくまれに霧雨店に流れてきて、その希少価値から『幻の日本酒』なんて呼ばれているうちに、尾鱗背鱈がついて、おいしい酒なのだという根も葉もない話になってしまったのです」

すいか「誰だ！ そんな物好きなやつ！！」

宗太「なるほど、希少価値すぎて誰も飲んでいないから、勝手に美味いものだと勘違いしていたのか・・・」

さくや「残念でしたわね」

すいか「うづう……楽しみにしてたのに」

ありす「まあ、所詮はこんなものよね。
があるんだからいいじゃないの」

ホラ、萃香。別の酒

まりさ「そうそう。幻の日本酒の噂こそ幻だったってことでいいじゃないか」

すいか「いいわけあるか！ ちくしょく……来年こそは絶対に究極の酒を見つけてやるんだから！ 宗太、来年もすっかり幻想郷めぐりして、新しい酒、持ってきてよ！」

宗太「はいはい」

れいむ「大変ね。あんたも」

宗太「まあ、私も楽しみでやってることだから」

こうして結局、来年もこのまま、幻想郷にいることになるのだろう。

でも、そんな毎日が楽しくてしょうがない、宗太なのでした。

どんどはね。

おまけ

ゆかり「いやあ、今年もこの酒の季節になったのね」

らん「またそのお酒ですか？ 美味しくないのに」

ゆかり「あら、藍ってば、このお酒の本質を分かってないのね」

らん「なんですか？ それ」

ゆかり「誰だつて不味いモノを飲んだら、興が冷めるでしょう？

この『泥沼』はね、酒という泥沼から抜け出せ、という意味があるのよ」

らん「なるほど、真の酒飲みにこそ、このお酒の存在意義が分かるということですか」

ゆかり「その通り。そして、このお酒があるから、どんなに飲んでもその泥沼から抜け出せるのよ」

らん「お酒の泥沼から抜けるのにお酒の力を利用する・・・その考えが既に『泥沼』だという意味もあるんでしょうね・・・きつと」

鋼鉄少女が幻想入り・序章（前書き）

例によって先行公開します。

リクエストにかなうものになっていけばいいのですが……。
自信ないです。

では、よろしく願います。

鋼鉄少女が幻想入り・序章

永き渡る戦いが終わったと言われたとき、ワタシが最初に思ったことは、残念だということ。戦うことでしかその存在を認められない我々は、この戦いが終わってしまえば、もう必要のない存在になる。

もっと戦いたい。もっと強い者と出会いたい。そして、自分の存在する価値を見出したい。そう思い、ワタシは軍を脱走した。それを追撃するのはワタシのかつての仲間たち。自我を持つワタシと違い、彼らはただ命令のみを遂行する人形たちだ。共に戦場を駆け抜けた戦友にも迷いなく銃口を向けてくる。

迷いなく、ワタシも攻撃を加え撃墜する。ワタシとてステイルメイデン、敵を倒すのにためらいはない。ミサイルで一気に撃墜し、そして、撃ちもらった敵をレールガンで撃ち落とす。だが、そこに別格の機体が出てくる。私と共にエースと呼ばれたステイルメイデンだ。重なり合う刃と刃。しかし、接近戦では相手のほうに分があったらしい。足を斬られ、バランスを崩したワタシはそのまま森の中に落下した。

気がつくとき、見知らぬ土地にいた。どうやら何者かによって運ばれたらしい。いったい何のために？ 誰が？ 考えても無駄なこと。ワタシの存在意義は戦うことにある。そして、ワタシを運んだ者もそれは分かっているはずだ。きつと、このまま新たな戦場へ向かえることだろう。そう思い、前を見た。薄暗く湿気の多いその場所、ワタシは彼女の声を聞く。

「???」お、目覚めたみたいだね。
「つてるかな?」

ちゃんと喋れるようにな

喋る? まさか、ワタシは戦闘用のマシンだ。ワタシにはこうして自我があり、思考することも可能だが、この体は、仲間たちと同じもの。音声を出力する機能などありはしない・・・はずだった。

セラフ「・・・ここは?」

まさか。声が出る。よく見ると、不恰好に取り付けられた旧型の音声出力装置。こんな場所に取り付けられると行動に支障が出るではないか。取り外そうとするのだが、目の前にいる少女を見て、そちらへの疑問のほうに優先された。

「???」お、いいねいいね。香霖堂から貰った『すぴーかー』とかいう機械は、この子と相性よかったみたいだ」

セラフ「あなたは・・・? 誰?」

「???」ん、私かい? 私はね

「

／／／／

ステイールメイデン。

それは、戦争のために生み出された戦闘用兵器。

その中に、戦いの中で自我を目覚めさせた奇跡の一機があった。

彼女の名は、セラフ。

新たな戦場を求め、軍を脱走し、撃墜された彼女の新たな戦場。

そこは、彼女の想像をはるかに超えた強敵が待つ世界であった。。。

／／／／

とてつもないスピードで幻想郷を駆け抜ける一人の少女。一直線に博霊神社に向かっていく。そして、境内に巨大なクレーターでも

作らんばかりに荒っぽく着地して、そのままの勢いで霊夢のいる母屋に駆け込んだ。勢いあまって、ちゃぶ台を吹き飛ばし、そのまま転がって台所まで行く。かまどに頭を強打し、その少女は涙目になっている。霊夢も同じように涙目だった。

れいむ「ば、ばかじゃないのあんた！ 神社壊す気！？」

あや「あやや・・・さすがに速すぎました・・・」

れいむ「ふざけるんじゃないわ！ 弁償しなさい！ かまどが粉々じゃないのー！」

あや「それどころじゃありません霊夢さん！！ 異変です！！」

れいむ「異変？ ブン屋のくせに今度はどこでそんなガセネタ拾ってきたのよ？」

あや「ガセじゃありません！ たった今、この私の目で確認したもののなんです！！」

れいむ「なによ？ 話くらいは聞いてあげるわ」

あや「ロボットです！」

れいむ「非想天則ね。それがどうかしたの？」

あや「違います！ あれよりももっと小さなロボットです！ しかも、動くんです！！」

れいむ「非想天則だって動くじゃない。どうせ宣伝用に小さいの作

「たつてところじゃないの？」

「あや「だから違うんです！ あんな偽者じゃなくて本物なんです！」」

れいむ「非想天則も本物じゃないの。河童にしては上出来よ？」

あや「あんただんだけ非想天則やりこんでるんですか！！ さっきから非想天則の話しかしてないじゃないですか！」

れいむ「冗談よ。で？ そのロボットが何かしたの？」

あや「まだ何もしてません。でも、あれは明らかに戦闘用ロボットです。きつと河童あたりが異変をたくらんでいるのかと・・・」

れいむ「だったら放置ね。異変を起こそうとしているんなら、その邪魔をするのはご法度なもの」

あや「そんな決まりあつたんですか？」

れいむ「決まりじゃないわ。暗黙のルールよ。妖怪は異変を起こすことで自らの力を誇示して、満足するのよ。そうしないと、妖怪はその存在を忘れ去られて力を失うか、ストレスがたまつて里に降りてきて人殺しでも始めてしまうわ。だから異変がある。故に、例え異変が起きる前に発見したとしても、その予兆が目に見えて分かるようになるまで見て見ぬふりをする。これも巫女の仕事よ」

れいむ「それは妖怪も一緒でしょう？」

あや「う・・・た、確かにそうですが、でも、こんなスクープ、

放置してて誰かに先を越されたら悔しいじゃないですか!！」

れいむ「それはあなたの理屈。そう思うのなら、自分で異変解決に
いったらどう?」

あや「ダメです。そんなことしたら、私が異変を起こすときに河童
に邪魔されかねません」

れいむ「じゃあ、放置しなさい。そのロボットの目的が何にしる、
向こうが何かしてくるまでこっちも動けないわ」

あや「いいんですか? そんなこと言って。約束したじゃないです
か、私の目の前で異変を解決したら、一面に取り上げるって」

れいむ「……」

あや「そうしたら、きっと参拝客もお賽銭も倍になりますよ?」

れいむ「……残念ね」

あや「はい?」

れいむ「ゼロには何をかけてもゼロよ」

あや「……泣きながら言わないでくださいよ」

鋼鉄少女が幻想入り・序章（後書き）

まあ、まだ序章なので話は動きません。

スピーカーのくだりは、ステイルルメイデンってどうやって会話するんだろうと考えた結果。今回のような感じになりました。

戦闘用兵器で、自我があるのはセラフだけなのにスピーカー搭載もおかしいし、正式名称から察するに量産型の一機でしょうから、一機だけ特別扱いも変だな、と考えたら、もう後付けするしかないかなあ、という結果に行き着きました。

まあ、降伏を呼びかける際にスピーカーを使うかもしれないけど、ロボットにそんなことさせないでしょ。効率悪いし。

今はダサダサなスピーカーを外付けしていて不恰好ですが、後でちゃんと内蔵式になりますのでご安心を。

では、よろしくです。

鋼鉄少女が幻想入り・第一回(1)(前書き)

依頼主様よりOKを貰いましたので、続きを投稿します。

さあ、機械の苦手な私の本気を味わいやがれ！

・・・過度に期待しない方向でよろしくです。

鋼鉄少女が幻想入り・第一回(1)

らん「いい天気だ……。もうすぐ春だなあ……」

らん「紫様ももうすぐ起きてくるころだ。今日は久しぶりに買出しにでも出ようかな……。？　ちえん、一緒に行こうか」

ちえん「はい」

ゆかり「ん……。あつたかい……」

ゆかり「もう春か……。春告精にはまだ早いみたいだけど」

ゆかり「まあ、久しぶりに早起きも悪くないわね。起きましよう」

ゆかり「ま、別段ホントに冬眠してるってワケじゃないから、起きてはいるんだけど……。皆して冬眠してるって言うから、出るに出不れないというか……。渡り鳥のようにして生きているというか……」

ゆかり「年取ると独り言が多くなるってホントね……」

ゆかり「藍は買出しか……。さすがは私の式、起きてくるタイミングを計ったわね」

ゆかり「でもま、帰ってくるまで時間もあまるし、二度寝でも」

ゆかり「・・・っ!？」

突然のレーザーを回避する。だが、よけた先にはとてつもないスピードで迫る弾丸。紫は弾幕でそれを受け止めると、いつきに敵に向かって跳躍する。

ゆかり「まだ寝巻きだったのに・・・ずいぶんとせっかちな敵もいたものね!！」

ゆかり「弾幕結界!！」

ゆかり「なにっ!？ 弾く？」

ゆかり「あれは・・・おかしな敵ね」

鋼鉄の体をした妖怪なんていただろうか、と考えて、笑う。これは、そう、外の世界の機械人形。戦争をしたいが、人の命を懸けるわけにはいかないと考えた、優しき戦争家たちが開発した、ステイルメイデンとかいうロボットである。

ゆかり「聞いたことがあるわ。その中でも、たった一機だけ、とてつもない力を目覚めさせた究極の機体があるって」

セラフ「ターゲット確認。・・・撃破する」

ゆかり「弾幕を弾くなんて、幻想郷じゃご法度よ!!」

紫の放つ弾幕はすべてセラフに弾かれる。苦し紛れに投げたクナイも、鋼鉄の装甲の前では役に立たない。セラフのレールキャノンの銃口が紫に向けられる。放たれた一撃は、幻想郷最速を自称する天狗すらも凌駕する一閃。スキマに飲み込ませ、紫はふふ、と笑みをこぼす。

ゆかり「あんなの直撃したら、私でも即死かしら？」

続いて放たれたのはミサイル。ただの砲弾か、と紫は鮮やかに回避する。しかし、それらは大きく円を描いて再び紫に迫る。

ゆかり「　　っ、誘導弾か!!」

逃げる紫に迫るミサイルの嵐。その間にも、鋼鉄の少女は更なる攻撃を用意している。紫の進路を妨害するように機銃を放つ。動きを止めた紫にミサイルが直撃。寸前で霊撃を放ち、ダメージは最小にとどめたものの、それでも紫を驚かせるには十分すぎる力であった。

破壊力、正確さ、そして完璧に計算された戦闘展開。まさしくこれは、自分自身だ。まさか、自分と同じかそれ以上の力を持った化け物がここにやってくるとは。

ゆかり「・・・ま、でも。力が互角なら私に勝てるのかって言うのは微妙なところだけど・・・ねっ!!」

反射するレーザーでセラフの動きを封じ、一気に接近戦に持ち込もうとする。だが、その間にもセラフの攻撃は止まらない。ミサイル、レーザー、機銃。すべてを持って紫を圧倒する。紫は一瞬接近をためらうが、それでも、近づかなければ攻撃のしようもない。追っても地獄、引いても地獄なら、一分でも可能性のあるほうにかけろべき。紫はなおも接近する。放たれたレーザーを弾幕で相殺し、弾き飛ばすと、セラフに触れられる距離まで一気に詰め寄った。

ゆかり「弾かれるなら、弾けないもので壊せばいいのよね」

セラフ「・・・」

しまった、と思うがもう遅い。セラフの左手から伸びるその刃は、既に紫を捉えている。振るわれた刃は紫の体に突き刺さる。

ゆかり「あらら。まさか、格闘も強いとは」

スキマが開く。その中に吸い込まれ、消えていく紫。

次の瞬間、無傷の紫がセラフの背後に姿を現した。

ゆかり「ステイルルメイデン、か・・・外の世界の人間はとんでもないものを作ったのね」

攻撃を受ける前に距離をとり、セラフを観察する。さすがの紫でも、鋼鉄の心を持つ彼女の行動は読めない。さて、どうしたらいいものか。紫は思う。決着をつける方法はある。だが、それをやるためにも接近する必要があるのだ。さっきのように式神で分身して接近するのでもいいが、おそらく、彼女は学習する。もうこの手は通用しないだろう。

背後を取った先の瞬間で、終わらせておけばどんなによかっただろうか、と紫はいまさら後悔した。だが本能が告げたのだ、逃げろ。あのとき、あのタイミングで決着をつけようと動けば、あの底知れぬ鋼鉄の少女にやられていた、と。

ゆかり「敵は未知の存在。何を持っているかも定かじゃないのに、接近するのはあまりにも分が悪い賭けね」

もう少し、観察する必要があるよね。紫は再び動き出す。セラフのすべての武器を見るまで、攻撃はお預けだ。

回避に徹し、時によけきれない攻撃はスキマに飲み込ませ、武器の形状、破壊力、弾道、それらすべてを記憶する。それだけでもう一時間は経過した。セラフは一向に動きを止める気配はない。機械は疲れることを知らないのだ、と紫は思い出す。

ゆかり「こっちは、冬眠から目覚めたばかりで、体力もないっていうのに・・・ほんと、タイミングの悪い子ね」

ゆかり「でも、もう決着よ。勝負は私の勝ち」

ゆかり「さあ、反撃開始と行きましょっか!!」

鋼鉄少女が幻想入り・第一回（1）（後書き）

襲撃する側の視点で描くと、緊張感がなくなるので、襲撃される側視点（紫目線）で描いています。

まあ、ロボットだし、一人語りすることもないでしょうから、いいかなあ……。

鋼鉄少女が幻想入り・第一回(2)

しばしの沈黙が続く。セラフも、紫も動かない。互いに動きを読みあっているのだ。そして、その長い沈黙を破り、先に動いたのは計算を先に終了させたセラフであった。

ゆかり「　　っ!!！」

ミサイルの雨。紫のはるか上に飛び上がったセラフが紫に降らせられた隙間のない弾幕。だが紫も負けてはいない。それらすべてをスキマに飲み込ませ、セラフに迫る。

ゆかり「光弾やレーザーを弾くその能力。たしかにすばらしいものね」

ゆかり「けど、どうしてそんなあなたが、足を負傷しているのかしら」

それは、かつて誰かによって倒された証。ゆえに、倒せないことはない。その傷の存在が、紫にとって勝機のようなものであった。

セラフの攻撃はすべてスキマに消えていく。そして、紫とセラフの距離がさらに迫ったとき、セラフはようやく、その左手の刃を伸ばした。それこそが紫の狙いであるとも知らず、セラフは紫をけん制しようと刃を振るう。

ゆかり「さて、自分の放った弾幕にやられる覚悟は出来たかしら？」

スキマが開く。そこから姿を現したのは、先ほどからスキマの中に消えていったセラフの弾幕たち。ミサイル、機銃、レーザーと大量の弾がセラフの目の前に突如として現れた。それらをレーザーの刃でなぎ払うセラフ。これでしばらくの間はあの刃をこちらに向けてはこれないはず。紫は再び接近し、そして彼女に勝利するための秘策をついに放つ。

ゆかり「その大砲、預からせてもらおうわね」

背中 of レールキャノンに向けて放たれたのは、紫の指の先からあふれ出る、紫の光。それは、空間と空間の切れ目であり、何者も逆らえない、最強の刃。

ゆかり「体が切断できないほど頑丈なら、空間ごと斬ってしまえばいいのよ」

セラフ「っ!!!」

レールキャノンが地上に落下する。それを確認した紫は、さて、と呟いてセラフの目の前に姿を現した。とっさにセラフは紫を殴りつける。大きく弾き飛ばされて、地上近くの木に引っかかる。

ゆかり「これくらいはさせてあげないとかわいそうかしら?」

普通の人間なら、もうそれだけで即死だ。だが、紫はまるで無傷むしろ、これくらいハンデだ、とでも言わんばかりである。

だが、その状況でも、彼女は紫の想像を超えてきた。これまでの

動きが嘘であったかのようなスピードで、紫に迫ったのである。

ゆかり「そんなっ！　ただの鈍重な鋼鉄兵器ってワケじゃないのね
！」

すぐに姿を消し、そして再びセラフの背後へ、しかし、今度はそれも読まれている。くるりと一回転。セラフの長い腕が紫を吹き飛ばす。

ブレーキをかけて空中で止まると、次はミサイル。紫も最高速度で逃げるが、次第にその距離は縮まっていく。そして、爆発。

セラフはそのまま落下する紫に機銃を放ち、止めを刺す。そして、彼女の体は、地上に叩きつけられた。

セラフ「任務終了、撤収開始」

ゆかり「待ちなさいよ」

式神？　いや違う。あれには確かに紫の生体反応があった。セラフはあまりの想定外な現象に動きを止めた。

八雲紫が、二人いるのだ。地上と、空に。

ゆかり「ちょっとくらい死ぬのが早くなっただって、そんなに変わるものでもないしね。死の前借りくらい、多めに見なさいよ」

そもそも、私が死ぬのかどうかも怪しいんだけど。紫はため息一つ、そう言っつて、にやりと笑った。

ゆかり「頭上注意。ついでに、正面もね」

紫は姿を消す。その瞬間、頭上には墓石、真正面からは電車。墓石をレーザーで消し去り、電車は受け止める。どこまで耐えられるものかしら、と紫は楽しみに笑っている。だが、それも、紫の想像をはるかに超えていたのだ。

電車を持ち上げ、そのまま紫に投げつける。

ゆかり「そんな・・・っ！ バカなっ！！」

とっさのことで回避しきれない。スキマに逃げ込むが、電車は少しだけ紫にかする。出てきた紫は頭から血を流し、肩を震わせて笑っていた。

ゆかり「面白いわ。すっごく。あなた、まさかここまでやれるなんて思っつてなかつたわよ。スピードも、パワーも、私の想像をはるかに超えてきた。流血試合なんて、千年ぶりくらいかしら？」

紫をここまで追い詰める敵。それが、このセラフという鋼鉄の少女。

ゆかり「スペルカードを用いないなら、もうこれ以上、弾幕を使つてあげる必要もないわね！
この私を本気にさせたこと、あの世で後悔しなさい！！」

そんな二人の戦いを遠くから見ている霊夢と文。

あや「いいんですかー？ 加勢しなくて」

れいむ「あんな化け物と戦うのなんてごめんよ。紫がやってくれるのなら、私の加勢なんて邪魔なだけよ」

あや「ちなみに、霊夢さん」

れいむ「何よ？」

あや「あのロボットと戦って、勝てると思います？」

れいむ「 愚問ね」

空中で胡坐をかいて、完全に傍観者をきどる霊夢を見、あきれてものも言えない文であった……。

+++BB・・・少女戦闘中+++

紫とセラフの激闘はさらに激しさを増していく。互いに必殺の勢いで攻撃。どちらかがよけられなかつたら、勝負は決まる。だが、そんな戦いにも限界が見えた。霊夢はぴくつと眉を動かす。

あや「霊夢さん？」

れいむ「まずいわ・・・紫のやつ。息が上がってる」

あや「まさか、あの大妖怪が」

れいむ「ええ。確かに大妖怪よ。でも、あいつ、まだ本調子じゃない」

あや「まさか・・・冬眠してるって話は本当だったのですか？」

れいむ「ええ。おそらくたった今目覚めたところだったんでしょぅね」

あや「加勢しますか？」

れいむ「あいつに死なれちゃ、幻想郷の結界は誰が管理するのよ！文、行くわよ!!！」

あや「あ、待ってください！ 霊夢さん!!！」

れいむ「何よ・・・」

あや「あそこにいるの・・・」

れいむ「・・・なんだ。あいつら、間に合ったようね」

ゆかり「・・・まいったわね」

セラフ「・・・」

ゆかり「本調子なら、負ける気はしないのに・・・」

セラフ「撃破する」

ゆかり「・・・これからは冬場も、少しは運動しようかしら」

鋼鉄少女が幻想入り・第一回(3)

????「紫様っ!!」

セラフのミサイルを弾幕で打ち落とす。そして紫の前に立ち、セラフをにらみつけた。

ゆかり「藍・・・遅いわよ」

らん「申し訳ありません。紫様の好きなものを探し歩いているうちに、時間がかかってしまいました」

らん「橙！ 今だ!!」

ちえん「了解です！」

橙がセラフの周りに弾幕を展開する。そして、藍はそれらの弾幕全てに自らの力を注ぎ込み、巨大な結界を形成する。

らん「よし、これで動けまい!!」

ゆかり「甘いわ、藍。あいつには弾幕は通用しない」

らん「えっ?」

そう言っている間に、セラフが動き出す。一人孤立している橙の

ほうに向かい、彼女を捕らえようと手を伸ばした。

らん「橙、逃げる!!」

ちえん「え、ええっ!?!」

恐怖と驚きで動けなくなっている。そして、セラフの手は橙をつかむ。その前に文が橙を抱きしめて、その場を離れていた。

ちえん「あ、あやさん!?!」

あや「霊夢さん! 今ですよ!!」

れいむ「分かってるわよ。 夢想封印!!」

セラフに迫る、霊夢の弾幕。だが、これもセラフの能力によって弾かれる。

れいむ「ええっ!?! 夢想封印は弾かれないと思ってたのに!?!」

ゆかり「バカね・・・私の弾幕すら弾くつてのに、あなたのインチキな法則無視で無効に出来るわけじゃない」

セラフ「敵、五体増加。 残弾も残り僅か」

れいむ「なら、私の新技、ここで披露してあげるわ!!」

セラフ「撤退する」

霊夢が接近した瞬間、セラフはとてつもないスピードで霊夢に近寄ってくる。まさか体当たりか、と霊夢はとっさに横に飛んで回避する。だが、彼女はそのまま一直線に飛び去っていく。あっけに取られた霊夢。バカね、と呟く紫。

ゆかり「撤退するって言ってたじゃないの。あの子の声、聞こえてなかったの？」

れいむ「う……」

らん「ここまで追い詰めて、みすみす逃すなんて……。まったく、博霊の巫女ってやつはどうしてこうも……」

れいむ「わ、悪かったわねっ!!」

あや「紫さん、どうします？ 私なら追いつけますが、追撃しますか？」

ゆかり「追いつけるのは私も同じこと。でも、いいわ」

あや「あんな力を持った化け物を、放置する気ですか!？」

ゆかり「違うわよ。彼女は本気で私を殺しに来たわけじゃあないもの。だから、いいのよ。弾幕ごっここの範疇として認めてあげるわ」

れいむ「殺しに来たわけじゃないって、どういうこと？」

ゆかり「彼女はね、おそらく誰かによって管理されてる。今回の襲撃も、その誰かによって指揮されたもの。きつと、私が死に掛けたら攻撃を止めるように言われてたと思うわよ」

らん「じゃあ、どうしてわざわざ紫様が本調子じゃない、この時期を狙って来たんですか!？」

ゆかり「私がそのことを知らずに、本調子のまま彼女と戦ったら、一撃で壊してしまうからでしょうね。まあ、分かっていたからこそ手加減してあげてただけど、まさか私の体力に限界が来るなんて思ってたなかったわ」

れいむ「歳よ、この紫BBA・・・」

ゆかり「何か言ったかしら、役立たずの巫女さん?」

れいむ「・・・なんでもないわよ」

らん「と、とにかく紫様、傷の手当を」

ゆかり「ええ。まだ寝起きだからか、傷の治りが遅くていけないわ」

ゆかり「あなたたちも家にいらっしやい。橙を助けてくれた新聞記者さんにも、役立たずなりにがんばってくれた巫女さんにも、ご褒美をあげなくちゃね」

れいむ「当然よ。昼飯くらいは出さないよね」

あや「すみません。お世話になります」

らん「いいんだよ。助けてもらったんだし。それに、今日は紫様が起きてくるからと、ご馳走の用意もある。むしろ、大歓迎さ」

ちえん「紫様の大好きなお酒もたくさん買ってきましたよ！」

ゆかり「あら、それは楽しみね。さあ、待ちわびた春の到来だもの、思い切り飲み明かしましょうか！」

+++少女飲酒中+++

れいむ「ところで、途中であなた一回死んだわよね？」

ゆかり「あら、ばれてた？ 彼女の砲弾を実際に受けてみようかと思っただけ。気まぐれよ」

らん「もしかして、いつもの手を使ったんですか？」

れいむ「いつもの手？」

らん「未来の死ぬ直前の自分を連れてきて身代わりにしてるんだ。紫様は死の前借りだって言ってるけど……」

ゆかり「ま、どうせ死ぬ直前の私なんだし、文句は言わないでしょう？」

れいむ「それ以前に、あなたが死ぬってこと自体が、不可思議よ」

ゆかり「ま、そうね。私もおかしいとは思ってるんだけど……。まあ、パラレルワールドの私なんでしょう。気にしちゃダメよ」
れいむ「なーんか、釈然としないわね」

あや「それにしても、どうしてあのロボットを彼女と呼ぶんですか？」

ゆかり「あら、気づかなかった？ あの子、女の子よ」

????「お、帰ってきたね」

セラフ「ただいま帰還しました、にとり」

にとり「ありゃ、レールキャノンが壊れたか……。あちこちやられたねえ。さすが、腐っても八雲紫か」

セラフ「では、約束の弾薬補給と、修理をお願いします」

にとり「分かってるよ。セラフのパーツをあちこち調べて、レールキャノンも新しいのを作ってみたし、それに、その足も、ちゃんと

治せるように準備をしておいたから」

セラフ「ありがとうございます」

にとり「いいのいいの。こっちもまさか、図書館で見たスタイルメイデンを調べられるとは夢にも思ってたし。ふふふ・・・八雲紫とも互角に戦えるロボットか・・・こりゃ、河童が異変を起こす日もそう遠くないねえ・・・」

予想だにしないところからもたらされた、はるか未来の産物。それが後に幻想郷に真の産業革命をもたらすことは、今はまだ誰も知らないし、別のお話・・・。

にとり「ね、今度はもっと強いやつのところに行こうか！ セラフも戦いたいんでしょ？ 私もいい試験データが取れるし、一石二鳥だ！」

セラフ「弾薬補給と、修理をしてくれるのなら、お付き合いします」

今は、ただただ、この機械マニアな河童のおもちやも同然な、セラフなのでした・・・。

どどどはね。

鋼鉄少女が幻想入り・第一回(3) (後書き)

霊夢の新技はまだ秘密です。

でも、セラフとも戦えるという自信があるくらいですから、
きっとそこそこ強いんじゃないかなあ……。

では、こんな感じでよろしくです。

冥界の影、楼閣の姫・序章（前書き）

例の如く、先行公開です。

リク主様からクレームがいたら書き直します。

個人的には白玉楼＋ゆうかりんというシチュが曲者。

・・・さて、どう絡ませていこうか。

冥界の影、楼閣の姫・序章

みよん「かーげーろつうのさーきにーはー、えいえーんの・・・」

????「あら、ご機嫌ね、庭師さん」

みよん「珍しいお客様ですね。幽香さんとは・・・」

ゆうか「あら、私が来たら悪いのかしら？」

みよん「そういうわけではありませんけど・・・ここには幽香さんの望むものはないと思います」

ゆうか「あるじゃない。ここに、大きな桜が」

みよん「西行妖ですか・・・？」

ゆうか「自然の摂理に反した、死の桜」

みよん「・・・あなたはこの桜のことを知っているのですか？」

ゆうか「そういうあなたは知らないようね。 真実を知っているのは紫だけか・・・」

みよん「????？」

ゆうか「なんでもないわ。 仕事を続けなさい」

みよん「言われなくても……って、あれ……」

ゆうか「どうかしたの？」

みよん「向こうの茂みのほうに、何か見えませんか？」

ゆうか「……なにかしらね？」

みよん「幽香さん、見てきてくれませんか？」

ゆうか「何で私が……」

みよん「幽霊だったら怖いじゃないですか……」

ゆうか「自分も幽霊の癖に、しょうのない子ね……」

+++少女捜索中+++

ゆうか「あら、これは……」

みよん「ゆ、幽霊ですか!？」

ゆうか「いえ、違うわ。これは……男の子ね」

みよん「男の子ですか？」

ゆうか「急に興味津々ね」

みよん「……どこの人なんでしょうか……?」

ゆうか「さあねえ。よく分からないけど、これは私が貰ったわ」

みよん「なぜそうなるんですか」

ゆうか「この子、妙な力を感じるわ。興味があるのよ」

みよん「ダメです。幽香さんは信用できません」

ゆうか「私にたてつくのかしら……?」

みよん「……っ!」

ゆうか「……分かったわよ。無理に奪うほどの興味もないしね」

みよん「では、彼は私が責任を持って引き取ります」

ゆうか「あなたのほうが下心みえみえじゃないかしら?」

みよん「……そ、そんなこと」

ゆうか「どつでもいいけど、あなたの主につまみ食いされないようにしなさいよ」

???「あら、誰がつまみ食いなんかするものですか」

みよん「幽々子さまっ!」

ゆゆこ「食べるなら堂々と正面からいただくわ」

ゆうか「それもそうか。妖夢、残念だったわね」

みよん「ええっ！　そ、そんなぁ・・・」

ゆゆこ「この子は私が貰うわ。冥界への幻想入りだなんて初めてなもの、丁重にもてなさないかねえ」

それから数時間後、俺は目を覚ます。

はじめて見た光景は、半透明の女の子と、巨大な桜の木。

それが、俺　杉崎洸司の物語の始まりだった。

冥界の影、楼閣の姫・序章（後書き）

冢司さん、ずっと倒れてるからなんの絡みもないです。序章なんてこんなもんだよね。ゆうかりんをどうやって登場させようかと思っ
てたら、こんな話になりました。後悔はしていないが、クレーム
は受け付ける。

本編では、みよんの新スペカ+冢司さんの本領発揮です。
では、よろしくです。

冥界の影、楼閣の姫・第一回（1）（前書き）

さて、本編です。

序章に引き継いで、みよんは洗司さんに一目惚れ中。

洗司さん、イケメン+さばさばした性格が魅力的です。

みよんが惚れる訳だぜ・・・。

まあ、リク主様からクレームがきたら変えますけどね・・・。

冥界の影、楼閣の姫・第一回（1）

目を開けると、目の前には、女の子がいた。

俺をじっと見ている。なんなんだ、この子は、と思った瞬間、この少女の姿の異常さに気づく。

洸司「は、半透明！？ しかも、裸！？」

????「　　っ！！」

驚いたのか、その少女は壁を突き抜けて部屋を出て行った。幽霊だったのだろうか。いや、それ以前に幽霊がいるのか？ 霊感があったのか、俺にも。そう考えているうちに、ばたばたとあわただしく廊下を走る音が聞こえてきた。

????「目覚めましたか？」

洸司「ああっ！ あんたはさっきの幽霊！？」

????「あれは違います。私であり、私ではありません」

洸司「なんだそりゃ？」

みよん「私は魂魄妖夢と申します。あなたが見たのは、こちらの私の半霊です。あなたが目覚めたら私を呼ぶようにとおいていたのです」

洗司「さつきは、なんか、人間のようだったけど・・・今は、球体なんだな・・・」

みよん「この子は自由に姿を変えられるのですよ。一番簡単なのが私に化けることなので、そうしているだけです」

妖夢と名乗った女の子は、そう言って半霊とかいう半透明の球体をいろんな形に変えていく。そして、最後に先ほど見た女の子の姿に形を変えた。そこで妖夢は気づく。そして、赤面しながら半霊を自分の後ろに隠した。

みよん「ああつ、いえ・・・。これは・・・あのですね。この子が裸なのは決して私の趣味ではなく・・・半霊は服を着てませんのでそうなっただけと言うか・・・。服装まで化けさせるのは難しいからと言うか・・・。他意はないです。決して！」

洗司「力説しなくても分かってるよ」

「こほん、と一つ咳払い。気を取り直して、と妖夢はその場に正座し、俺を見る。」

みよん「それで、あなたは何者なんですか？」

洗司「それより先に、質問がある」

みよん「何でしょう？」

洸司「ここはどこだ？」

みよん「冥界です」

洸司「冥界？」

みよん「魂の流れ着く場所とでもいいでしょうか。死した魂は審判を受け、その結果次第で、転生することが出来ます。そして、その転生までの期間を待つ場所が、この冥界です」

洸司「じゃあ、俺は死んでるのか？」

みよん「肉体を持った死者などいません。あなたは間違いなく生きていますよ」

洸司「なら、俺はどうしてここにいるんだ？」

みよん「それが私の質問です」

洸司「????」

みよん「原因もなく、こんな場所に迷い込むはずもない。どうしてあなたはここにいますでしょうか？」

洸司「……」

みよん「人には言えない、理由があるとでも？」

洸司「・・・まあ、半分幽霊がいるんだ。言っても笑われないか」

みよん「失礼な。私だって笑うときは笑いますよ」

洸司「影を渡つて、ここに流れ着いたんだ」

みよん「かげを、わたる？」

洸司「俺には影を移動する力がある。影のあるところなら、好きなように行き来できるんだ」

みよん「それに失敗して、ここに流れ着いたと」

洸司「違う。あの時は、何かがおかしかったんだ」

みよん「はい？」

洸司「俺の力を欲しがってるやつがいて、俺はそれに狙われてたんだ」

みよん「ふむふむ」

洸司「そいつらから逃げるために、俺は影に入った。だけど、その時、別の何かに吸い込まれたんだよ」

みよん「なるほど」

洸司「信じてないな」

みよん「何を言いますか。信じてますよ」

洸司「目を見て物を言え」

みよん「それは……。あまりにもあなたが私を凝視しているのが悪いんです」

洸司「なんだそりゃ」

みよん「……自覚ないのか、この人は」

洸司「で、信じるのか？」

みよん「信じるも何も。犯人を知っていますから」

洸司「犯人？」

みよん「幻想郷という世界を管理する大妖怪、八雲紫さまです。おそらく、あなたが狙われていたから、逃がしたのでしょう」

洸司「そうか……。じゃあ、今度礼でも言いに行かないとな」

みよん「紫さまならたまにこの白玉楼にもやってきますので、そのときに紹介しますよ」

みよん「さて、と。私は今、昼食の用意をしているのです。

あなたも食べますか？」

洸司「ああ、そういえば腹減った」

みよん「では、少々お待ちください」

+++少女料理中+++

ゆうか「あの少年、目を覚ましたみたいだけど、会いに行かなくていいのかしら？」

ゆゆこ「幻想入りで体が弱っているであろう今、私がかいに行ったら、そのまま私の能力に引き寄せられちゃうかもしれないでしょ？」

ゆうか「死を操る能力か、難儀なものね」

ゆゆこ「あら、花を咲かせるだけよりかは面白くてよ」

ゆうか「・・・ま、とにかく。あの子はしばらくこの冥界に引き止めておきなさい」

ゆゆこ「幻想郷で何かあったのかしら？」

ゆうか「何も無いわよ。いつもどおり奇妙な異変が続いているわ。けど、分かるでしょう？」

ゆゆこ「・・・あの子の力は、もしかすると、あの博麗の巫女とも同等かそれ以上、ってことかしら？」

ゆうか「あくまで私の見立てだけだね。・・・けど、むやみに人間たちに力を与えるのはよろしくない。人間が妖怪を恐れる心を失えば、それだけで妖怪は力を失ってしまうのだから」

ゆゆこ「そうねえ。あの適当な霊夢だからこそ、人間は妖怪を恐れ、自然を敬う心を忘れないのかもしれないわ」

ゆうか「そういう意味では、今代の博霊の巫女は最もいい仕事をしていると言えるわね」

ゆゆこ「先代のやり方も嫌いじゃなかったけどね」

ゆうか「その話はしない」

ゆゆこ「そうだったわね。さ、そろそろお昼の時間ね。よーむー？ ご飯はまだかしらーっ？」

みよん「はい、ただいまお持ちいたしますー!!」

冥界の影、楼閣の姫・第一回（1）（後書き）

洸司さんは最初っから能力を持っていた設定です。

そして、その能力が原因で幻想入りした事になってます。

地味に、『東方幻想記』のお話が混じってましたが、その辺は気にしない方向で。

冥界の影、楼閣の姫・第一回(2) (前書き)

さて、ついに洗司さんの実力が発揮される 때가 来ました。
そして、妖夢の新スペカも登場です。

冥界の影、楼閣の姫・第一回(2)

洸司「ごちそうさまでした」

みよん「すごい食欲でしたね。そんなにお腹が空いていたんですか？」

洸司「そうみたいだな。しかし、これからどうするべきか」

みよん「まあ、これからのことは後で考えるとして、しばらくはここで療養してください」

洸司「いいのか？ あんた、見たところ、この屋敷の主人ってワケじゃなさそうだが・・・」

みよん「ええ。私は庭師です。主からは許可を得てますので、大丈夫ですよ。元気になったところに会いに来て欲しいとのことですよ」

洸司「じゃあ、そうさせてもらおうか」

それから数日間、俺はこの白玉楼という屋敷で療養することになる。その間、ただの一度も主と出会うこともなく、この大きな屋敷の中で、まるで俺と妖夢、二人きりのような奇妙な生活を送った。

すっかり体の調子もよくなり、体力をもてあますようになった俺は、気まぐれに、白玉楼の中を散歩していた。すると、廊下の先で

のんびりとお茶を飲んでいる幽霊に出くわしたのだ。

洸司「あんたが、ここの主か？」

ゆゆこ「いかにも。西行寺幽々子よ。幽々子って呼んでね」

洸司「拍子抜けだな。こんな屋敷だから、もっと威厳のあるやつが主だと思ってただけど」

ゆゆこ「あら、屋敷を持つのにそれ相応の威厳が必要ってワケじゃないでしょう？　なら、私がここの主であっても問題ないじゃない」

洸司「ま、そうだな」

ゆゆこ「……ところで、洸ちゃん」

洸司「いきなり馴れ馴れしいな、あんた……」

ゆゆこ「本当のところ、あなたは何者なのかしら？」

洸司「……？」

ゆゆこ「影を渡る能力と聞いたけど、ホントにそれだけかしら？」

洸司「どういう意味だ？」

ゆゆこ「要するにね、あなたの实力を見てみたいのよ」

ゆゆこ「本当にあなたが妖怪にとって脅威になるのかを」

洸司「……っ」

ゆゆこ「妖夢」

みよん「はい、幽々子様」

ゆゆこ「洸ちゃんと一試合してあげなさい、スペルカード戦のルールは教えてあげたんでしょう？」

みよん「ええ。大丈夫ですよね、洸さん」

洸司「……ちょっと待て、なんか俺、流されてないか？」

みよん「問答無用です」

みよん「妖怪にとって脅威になる存在であるのなら、私にとっても敵」

妖夢「その力、測らせてもらいます」

刀を抜き、それを振るう妖夢。俺はとっさに影を渡り、西行妖の前まで移動する。その距離を、空を飛んで一気につめる。そして妖夢の鮮やかな刀の一閃。どうやら、戦いにかなり慣れてるようだ。だが、それはこちらと同じこと。軽々かわし、そして影から刃を取り出した。

ゆゆこ「やっぱり隠していたわね。その真の実力を」

妖夢「っ!」

妖夢の刀が俺の影を押さえ込む。鏝迫り合いだ。しかし、影は少しずつ妖夢の刀に押し返されていく。さすがは妖怪。人間とは力が違うらしい。いったんバックステップし、距離を開け、そして影から放つのは、弾幕。

洸司「影符『ブラックジャベリン』!」

漆黒の細長い弾幕が一斉に妖夢に向かう。それらを切り払い、さらに接近する妖夢。だが、それは俺にとって狙い通り。

妖夢「もらった!」

洸司「影符『ダークミスト』!」

俺は影を渡り妖夢の攻撃を回避、そして、俺の影が消える瞬間に、影から霧を生み出し、目くらまし。

妖夢「なっ、どこだ!？」

洸司「真下だよ」

妖夢の影から姿を現し、その刹那、妖夢の体を蹴り飛ばす。やはり少女の体だ。全力で蹴れば大きく吹き飛ばせる。しかし妖夢もそれくらいじゃ動じない。ふ、と不敵な笑みをこぼし、今です、と叫ぶ。

妖夢「半霊『妖夢』!」

その言葉と同時に、俺の体が羽交い絞めにされる。背後には半透明の少女。妖夢の半霊だ。逃げる際に半霊を影の霧の中に置いておいたらしい。どうやら、霧で視界不良になっていたのは妖夢だけではなかったようだ。

妖夢「断迷剣『迷津慈航斬』!!!」

洸司「なっ!?!? ちょっと待って、それはマズイ!?!」

半霊によって自由に動けないところに妖夢の必殺の刃。まさに絶体絶命。誰もがそう思うだろう。そして、妖夢もこれは勝利のチャンスだと信じて疑わない。それこそが俺の狙いであるとも気づかずに、だ。

ゆゆこ「……あらら、ホントにすごいわね。初めてのスペルカード戦で、妖夢を翻弄するなんて」

妖夢「くらえーっ！！」

洸司「影符『シャドウサーバント』！！」

妖夢の剣は空を裂く。強いて言えば、影で出来た分身を切ったくらいか。驚く妖夢。その真後ろに、俺はいる。

洸司「チェックメイト、だな」

影の刃が妖夢の背中のおそばでぴたりと止まっている。気配で感じ取ったのか、妖夢は振り向きもせずに行きますね、と呟いた。

ゆゆこ「でも、まだ甘い。私の妖夢は簡単に負けるような子じゃないわよ」

妖夢「私の修行の成果、お見せしましょう」

妖夢「幽体離脱『全人全霊』！！」

刹那、半霊が妖夢の体に纏わりつく。そして、彼女の体も同じように半透明になったではないか。

妖夢「あなたが影となり、姿を消すのなら、私は霊となり、同じく

姿を消しましょう」

洸司「・・・形は違えど、能力の意味は同じってところか！」

影に手をかざすと、そこから小さな影の弾幕が浮き上がってくる。それを一斉に妖夢に向けて放った。

妖夢「無駄ですよ」

妖夢の姿がぼんやりと消えうせる。そして、次の瞬間には俺の目の前にいた。手から弾幕を放ち、俺を狙ってくる。だが、そこで違和感を覚えた。そこで、再び同じ手口で攻撃を仕掛けてみる。

妖夢「だから無駄だと言っているではないですか！」

同じように妖夢も同じ方法で接近し、弾幕を撃つ。これで確信した。

洸司「お前、その状態だと刀を持ってないな？」

妖夢「・・・」

洸司「そりゃそうだ。肉体のない幽霊なものな。幽々子みたいに途方もない力を持っているならまだしも、付け焼刃程度の妖夢じゃ物質には干渉できないか」

妖夢「・・・う、うるさい！ 攻撃をすり抜けるこの状態なら、あなたの不利は覆りません！！」

洸司「そうでもないよ」

妖夢「な・・・っ!？」

洸司「そいつの弱点は大体イメージ出来た。・・・それじゃあ、妖夢に教えてやろうか。俺の実力を」

冥界の影、楼閣の姫・第一回(2) (後書き)

洸司さんの能力は非常に強力なものに仕上がりました。

能力の仕様上、理論上の制限がないからか、めちゃくちゃ強いです。

これからリクする人たちにも言うておくけど、『〆程度の能力』を選択するときは言葉をしっかり選んだほうがいいですよ。

結局、能力の強弱はウチの言葉の捉えたかた次第なので。

冥界の影、楼閣の姫・第一回(3)

妖夢「剣だけが私の取り柄じゃない!! 食らいなさい!」

洸司「よっ、と……。いいね、かわしくいことこの上ない」

妖夢「早く、落ちなさい!!」

洸司「残念だったね。落ちるのは、妖夢のほう」

妖夢「へっ?」

洸司「どんな場所にも影はある。光の有無も関係ない。例えば暗闇であるとしても、闇そのものが影となり、俺に道を示してくれる」

妖夢「……っ!!!!」

洸司「俺に渡られたくないなら、体を完全に二次元化してくるんだな」

妖夢の服のわずかな影から姿を現し、妖夢の半霊の中に侵入する。案の定、幽体離脱の名には相応しくない、ちんけなマジックだった。

洸司「半霊で体をコーティングして、一時的に霊体と同じ能力を得てるだけじゃないか。何が幽体離脱だよ」

妖夢「ですが、この中にいるということは、私も剣で戦える」

洸司「残念だったね。もう刀は使えない」

妖夢「・・・？ なっ！？ 抜けない！？」

洸司「言つたる？ どこにでも影はあるんだ。その鞘の中の影を操つて、刃を抜けなくしたんだ」

洸司「そして、俺はこの超接近状態で、妖夢の服の影から武器を取り出し放題」

妖夢「・・・」

洸司「どうする？」

みよん「・・・私の、負けのようですね」

半霊を解き、ゆつくりと地上に降り立つ妖夢。これで満足か、と俺は幽々子に言う。

ゆゆこ「ええ、十分よ」

ゆゆこ「あなたの力は妖怪のそれと同じね。人間にしておくには惜しい」

ゆゆこ「やっぱり、人間たちにあなたを預けるわけにはいかないわ。あなた、ここで働きなさい」

洸司「・・・」

ゆゆこ「あら、嫌なのかしら？」

洸司「そうじゃないけど……。俺にも仕事を選ぶ権利くらいあるんじゃないか？」

ゆゆこ「今の幻想郷はどこも就職難よ。あなたみたいに幻想入りしてきた人が大勢いるせいだね」

洸司「そうなのか？」

みよん「少なくとも、ここよりも好待遇の勤め先はないと思いますよ」

洸司「……まあ、そういうなら」

みよん「では、そうしましょう。私としても、そっちのほうが好きです」

洸司「何で、妖夢が喜んでるんだよ」

みよん「……そこ、聞きますかね？」

ゆゆこ「……ふふっ、これですごくにかなりそうね」

ゆゆこ「まったく、紫ってばこんな面倒ごと、私に押し付けて」

ゆゆこ「後でたっぷりご褒美でも貰いましょうかねえ」

洸司「・・・なんか、結局流されっぱなしだけど、まあいいか」

???「あら、面白い」としてゐるのね」

洸司「・・・誰だ、アンタ」

みよん「・・・幽香さん!?!」

ゆうか「私も混ぜてもらえないかしら?」

+++

ゆかり「・・・うーん、適材適所だと思ったんだけど、どうやら変な奴らに目をつけられたみたいね」

らん「紫様? どうかなさいましたか?」

ゆかり「いえね。かなりの力を持った人間を引き込んでしまっただけね。そんなのが幻想郷にいたら危ないから冥界に預けたんだけど、それも失敗だったみたい。もう勘付いた連中がいるのよ」

ゆかり「幽々子がどう動いてくれるかしだいね・・・」

らん「でも、そんな危険な人間をどうして幻想入りさせたんですか？」

ゆかり「・・・外にそんな厄介な力を持ったものを置いておくほうが危険じゃないの」

らん「あ、なるほど・・・」

ゆかり「それにしても、あの洗司とかいう少年、どこでどうやってあんな力を得たのかしら。まあ、どちらにしても、本人次第よね」

らん「紫様、ご自分で行かれないのですか？ 紫様が直接彼に道を示したほうが・・・」

ゆかり「・・・めんどくさいのよ」

らん「・・・春眠暁を覚えず、とは言いますが、一日中寝てるのは冬とあまり変わりませぬえ・・・」

ゆうか「なんてね、「冗談よ」

みよん「ゆ、幽香さん？」

ゆうか「あなたに任せるって言ったでしょう？ あなたが主にこの子を任せるのなら、私もそれに任せるわよ」

洸司「なんだ、あんた？」

ゆうか「風見幽香。妖怪よ。あんたを見つけたのはこの私」

洸司「そうかい。そりゃ助かった」

ゆうか「……しっかし、妖夢を倒すとは。ずいぶんな実力者ね」

洸司「……」

ゆうか「外の世界でも、似たようなことをしていたのかしら？」

洸司「さあね。……そんなこと、関係ないだろ？」

ゆうか「……それもそうか」

ゆゆこ「さ、話はこれでおしまいよ。妖夢、私、お腹空いたわ」

みよん「そういえば、もうすぐお昼の時間ですね」

洸司「よっしゃ、今日は俺も手伝うよ。なにせ、今日からここで働くんだしな」

みよん「よろしくお願いします」

ゆうか「・・・とんだ拾い物だったわね」

ゆゆこ「ええ、本当に。でも、私のところに連れてきたのは紫もなかなかいい判断だったと思うわ」

ゆうか「危険分子は、最も危険な者の手の平に置いておくってわけね」

ゆゆこ「それだけじゃないわ」

ゆうか「????」

ゆゆこ「あの子にとっても、ここが最もいい環境になるわよ」

ゆうか「・・・まあ、そうかもしれない・・・の、かしらねえ?」

影を使い、妖怪をも打ち負かす謎の実力者、杉崎洸司。

そして彼の力を危険視しながらも自らの手元に置くこととする幽々子。

聴こえ良い言葉で取り繕ってはいるものの、結局のところは賢人

によつていいように弄ばれているだけなのかもしれないわね、と洗司のこの先の旅路を案じる幽香なのでした。

どろどろはね。

冥界の影、楼閣の姫・第一回(3) (後書き)

個人的にお気に入りに入り作品に仕上がった今作ですが、どうだったでしょうか？

まあ、結局はリク主様がNGを出せばそれまでなんだけどね。

これからもよろしくです。

ドキドキ！？ 地霊温泉郷めぐり！ ・序章（前書き）

さて、先行公開です。

今回の作品はのんびり温泉めぐり・・・なのですが、

これまで東方二次創作は戦闘モノしか書いたことのない私の初
のんびり作品です。

はたして、上手く書けているのか・・・。

ドキドキ!? 地霊温泉郷めぐり! ・序章

そうだ、温泉に行こう。

それも、行っただけで自慢できるような、誰も知らない秘境の温泉に。そんな感じで思い立ったのが、数日前のこと。しかし、いまだき誰も知らないような秘境の温泉などあるのだろうか。考えた結果、たどり着いたのが妖怪と人間の暮らすもう一つの世界、幻想郷だった。

結界を越えるのはなかなか手間であったが、ここにはきつと誰も知らないような秘境の温泉があるに違いない。そんなことを考えていると、その労力も惜しくはなかった。この疲れを癒してくれる、素敵な温泉があるといいのだが……。

それから数日間、幻想郷の温泉事情を聞きまわっていると、どうやら地底に新しく出来たばかりの温泉施設があるのだという。その温泉旅館の名は『地霊温泉郷』。妖怪が管理している施設らしく、また、旧地獄と呼ばれる危険地帯にあることから、人間たちは立ち入らないとのこと。……これは、秘境と呼んでも良いのではないか。それに、その地霊温泉郷の近くに、誰も知らないような温泉があるかもしれない。これだ、と思い、我 藤村来栖は幻想郷の地下深くにあるというその場所へ向かったのだ……。

来栖「さて、やってきたはいいけど、どこにそんな場所があるのやら」

地底の妖怪たちの居住区であろうエリアにやってきた。そして、そこからさらに奥に気配を感じる。私の温泉センサーは、向こうに温泉があると指し示した。

来栖「向こうだな。硫黄の香りもする。間違いない」

古臭い無骨な建物が隣接する、妙な温泉旅館だった。しかし、どうやら温泉は自体は悪くなさそうである。とりあえず建物の中はパスして、空を飛んで露天風呂に直行する。のだが、どうやら境界が張られているらしく、空からは近寄れない。さすがは妖怪の温泉。こつやつて勝手に入ってくる妖怪を防いでいるのだろう。しかし、我にはそんな子供だましは通用しない。空がダメなら堂々と陸から潜入すればいいのだ。

来栖「……こんばんは」

????「……」

来栖「勝手に入らせてもらっつよ」

????「……ん？　なんか声が出たような……気のせいね」

所詮は妖怪である。私の力を持ってすれば、堂々と真正面から潜入できる。幻想郷的に言うところ『認識されない程度の能力』とでも言おうか。目の前に誰がいようとこの能力の前では我を見つけないこと

など出来ないのである。こついつときは非常に便利だ。

来栖「温泉は・・・ここか」

とうに入浴時間はすぎているが関係ない。そんなこと、姿が見えない我にはお構いなしだ。堂々と目的の温泉に向かう。広々とした温泉だ。ここまで立派だと、外の世界の温泉と代わり映えしないのだが、まあ、幻想郷にやって来て初の温泉なのだから、まあ細かいことは気にせず堪能するでしょう。

来栖「よし、入ります・・・か？」

まずい、先客がいた。

しかもこの時間に入っているということは従業員だろう。一応こちらの姿は私の能力の影響で見えてはいないのだろうが、湯に浸かり波を立たせれば見えていなくてもここにいることには気づかれる、姿を消す妖怪か何かだと勘違いされて攻撃を受けたら、のんびり湯に浸かる暇もないじゃないか。ここはいったん物陰に隠れて、向こうが出て行くのを待つとしよう。

先客は紫色の髪の少女だった。誰もいないのをいいことに、楽しみに温泉で泳いだり浮かんだりして遊んでいる。あんな幼い子供が働いているのか、と感心するが、あのマナーの悪さはいただけくない。注意でもしてやろうかと思ったが、今の我が姿を現すわけにも行かないか。

来栖「それにしても、綺麗な子だ……。こうしてみると、妖怪も人間とそんなに変わるものでもないのか」

ひとしきり遊び終えたのか、少女は仰向けに浮かんだまま動かない。ずいぶんと長湯だ。もしかすると温泉に入っている時間だけが唯一の休憩時間なのかもしれない。そう思うと不憫にも見えてくる。

????「あら、あなた。誰かしら?」

来栖「なっ!? 見えてる!?!」

????「……?」

????「そこに誰かいるの!?!」

紫色の髪の少女も気づいたようだ。騒ぎになるとまずい。すぐに温泉を離れ、ロビーまで退散する。

????「じいし?」

こいし「あ、お姉ちゃんだ。裸で何してるの?」

????「あのねえ……。これは温泉」

こいし「温泉……。温泉か。じゃあ、服着てる私がおかしいんだ」

「???」「ずいぶん久しぶりね。いつ帰ってきたの?」

こいし「最近地上をうろちよろとしてたからねえ……。帰ってきたのはついさっき」

「???」「そう……。ところで、いったい誰と話をしていたのかしら?」

こいし「うづん、誰とも。無意識に声かけたら返事が返ってきてびっくりしちゃった」

「???」「返事って……。じゃあ、誰かそこにいたってこと?」

こいし「覗かれてたんじゃない? お姉ちゃん」

「???」「……。覗きとは……。由々しき問題ね」

とりあえず服を着て、旅館の入り口で辺りを見回す。追っては来ていないようだ、と一安心。

来栖「……。はあ……。まさか見えてるものがあるとは……」

「???」「あの、どうかなされましたか?」

来栖「・・・っ!?!」

しまった、動揺してたから姿を消し忘れていた。妖怪がこちらのほうにやってきたではないか。こうなってしまうたらもうどうしようもない、たまたまここにやってきた客を装って、後はあの少女たちには会わないようにしてやり過ごそう。

???「もしかしてお客様ですか?」

来栖「ああ、そうなんだけど」

???「あの、失礼ですが、予約のほうは・・・?」

来栖「予約必要なの?」

???「申し訳ありません・・・本日は地上の団体様が宿泊してまして・・・部屋がないんです」

困ったなあ、とその女性は苦笑い。よし、これを口実に逃げよう。温泉はもう諦める。ほかの温泉を探そう。

来栖「じゃあ、今回は・・・」

???「あら、お客様?」

???「あ、さとり様。

あの、実は・・・」

まずい。さっきの女の子だ。まあでも、あの子には姿は見えてないだろうし、平静を装えばきっと大丈夫。早急に逃げよう。

さとり「あの、申し訳ありません……。本日はもう空き部屋がないのです」

来栖「ええ、そうみたいです。じゃあ、別の宿を探すのでこれです。」

さとり「ちょっと待ちなさい」

いそいそと出て行く我を引き止める少女。その声は先とは違い鋭い。さすがにそのまま逃げるわけにも行かず、足を止めた。

さとり「何がばれなくてよかった？」

来栖「な、何のことでしょう……？」

さとり「ふうん……なるほど。すべて分かったわ」

来栖「……え？　そうか、しまったっ！」

思い出す。そう、この地底は地上に住めない厄介者たちが住む場所。そして、妖怪からも忌み嫌われる存在と言われるその妖怪の末裔が、ここにいたっておかしくないではないか。そして、この少女の名前。間違いない、この少女の正体は……。

来栖「お前『さとり』かっ!？」

さとり「……お隣、この方を地霊殿に連れて行きなさい」

おりん「……仰せのままに」

さとり「さて、どう処罰しようものかしら……」

来栖「待ってくれ、誤解だっ！」

まったく、幻想郷温泉めぐりは、とんでもない幕開けだ。はたして、我はいつたいこれからどんな目にあつことやら……。

ドキドキ!? 地霊温泉郷めぐり! ・序章(後書き)

さとりんを覗きたい、という私の個人的な欲望から生まれた序章でした。

最初はその辺のシーンが超リアルだったんだけど、R18指定してないからカットしました。この小説は健全小説です。

リクの中で、東方知識あり、となっていたのですが、竜と神のハーフが一般人みたいに東方のゲームはやってないでしょ、と思ったので、幻想郷知識あり、に変更してます。ゆえに、妖怪の種族に関する知識はあっても、さとりやお隣のようない比較若い妖怪とは初対面という設定です。

まあ、他の言い訳はブログでやろうか……。

精進します。

ドキドキ！？ 地霊温泉郷めぐり！ ・ 第一回（1）

こいし「はぁ・・・温泉もいいものねえ・・・」

おりん「さて、どうしたものかねえ・・・」

さとり「・・・二回」

おりん「まあ、お客様に妙な噂がたつ前に、処分しちゃうのが普通かな・・・いくら妖怪といっても、核の炎で焼かれたら一瞬で蒸発しちゃうだろうしね」

さとり「・・・四回」

来栖「だから、勝手に入ろうとしたのは謝るし、覗きはただの誤解だって・・・」

さとり「五回」

おりん「でも、再犯をやらなとは限らない。あたいはさつさと死体にしちゃうのがいいと思います。 さとりさまもそう思いませんか？」

さとり「……六回」

おりん「ん？ さとりさま、何を数えてるんですか？」

ばん、とテーブルを叩き、いい加減にしなさい、と叫ぶさとり。

さとり「あなた、さつきからまるで反省してないでしょう!？」

来栖「だから、たまたまだったんだから、反省も何もなくて。心にやましい気持ちは一切ないからな」

さとり「本当にやましい気持ちはないんだったら、ちよくちよく私の裸を思い出すのをやめなさい！ もうここに来てから七回目です！ あなた、混血とはいえ神でしょう!？ どれだけ汚れた思考してるんですか!?!」

来栖「だって、見ちゃったものはもう忘れようがないじゃないか」

さとり「……八回目。いい加減にしたらどうなの？ 十代の子供じゃないんだから」

来栖「それはあんたが勝手に思考を読んでもただだろうが!」

さとり「見えるものは読めるのよ。あなたが思い出さなければこつちだって見えないんだからこれ以上見せるのはやめて頂戴」

来栖「……ずいぶん身勝手だな。だったら見なきゃいいだろ」

さとり「その言葉、そっくりそのままお返しします」

にらみ合う二人。お燐はため息をつく。

お燐「・・・それで、どうするんですか？ さとり様」

さとり「そうね。すぐにでも殺してあげたいけど、まあ、本当に覗きが目的じゃないようだし、それに、お客様に被害が出ていないから、今回は大目に見てあげますか」

来栖「本当か!？」

さとり「ただし、本当に再犯をしないとは限りませんので、これからしばらく、あなたが信用に足る人物かどうかこの地霊殿で監視させてもらいます」

来栖「分かった。ただし、条件がある」

お燐「殺されないと分かったとたん何様のつもりかねえ、あんた」

さとり「お燐」

お燐「・・・」

さとり「言ってみなさい。聞くだけ聞いてあげる」

来栖「もう分かってるだろ？」

さとり「・・・私は言えと言ったのです」

来栖「 我はこの幻想郷に温泉めぐりの目的でやってきた。ゆえに、その目的を果たせずに時間を割くのは嫌だ」

お燐「まさか、あんた。監視されてる間、うちの温泉に入れろって言うのかい！？ どこまで図々しいんだあんたは」

さとり「お燐。少し黙ってなさい」

お燐「はい・・・」

さとり「いいわ。その条件、飲みましょう」

来栖「本当か!？」

さとり「ですが、こちらも条件を提示します」

来栖「何だ？」

さとり「地底にいる間、能力の使用を禁じます」

来栖「まあ、そりゃそうだろうな。 分かってるよ」

さとり「お燐、彼を部屋にお通しして」

お燐「部屋って、独房か何かですか？」

さとり「私の部屋の隣でいいわ」

お燐「そんな、危険ですよ」

さとり「大丈夫。寝込みを襲われるほどが弱くはないつもりよ」

+++少女移動中+++

お燐「しっかし、あれだ。さとり様もよく許してくれたよ」

来栖「・・・」

お燐「運がよかったね、あんた」

来栖「さて、それはどうだか」

お燐「???」

来栖「できれば、さっさと開放してもらいたい」

お燐「それは、あんたがいかに早くさとり様の信用を勝ち取るかだね」

お燐「さ、あんたの部屋はここだよ」

長らく放置されていたような部屋だ。まあ、あの温泉旅館の仕事もあるのだから、手入れが行き届いていないのは仕方ないのかもしれない

れない。ベッドがあるだけかもしれません。

お隣「一時間位したら、旅館のほうに来るんだよ」

来栖「何させる気だ？」

お隣「働かざるもの食うべからず。ここに住む以上、仕事してもら
うからね」

来栖「まあ、それは仕方ないか」

お隣「じゃあ、よろしく頼むよ」

来栖「さて、もう一時間たった頃だな」

来栖「旅館のほうに出てみるか・・・」

旅館に向かうと、深夜だというのに妙に人がたくさんいる。入浴時間でもないのに、遠慮なく温泉に入っていく図々しい団体のようだ。酔っ払いのお姉さんがさとりに絡んでいる。

???「妹に聞いたわよ。覗きが出たって話じゃない」

さとり「犯人は捕まえて、もう処罰しました」

???「あら、仕事が速いのねえ・・・まあ、あなたの前じゃあ嘘はつけないか」

さとり「・・・来たのですか?」

来栖「・・・一時間位したら来いって言ったじゃないか」

さとり「ええ、でも少し待ってて頂戴」

???「あら、新しいペット?」

さとり「こんなペットはいりません」

来栖「あははは・・・」

さとり「もうすぐ最後のお客様が出てくるから、温泉の掃除をお願い。終わったら、好きにしていいわよ」

来栖「それは、温泉に入ってもいいってことか？」

さとり「約束は守るわよ」

????「待たせたわね」

ゆかり「あなたが最後？」

????「ええ、そうだけど」

ゆかり「ごめんなさいね。霊夢がどうしてもって聞かなくて」

れいむ「何よ、あんたもノリノリで入ってたじゃない。私は、入浴時間があるって知らなかったの」

ゆかり「ま、そんなわけだから。掃除、がんばってね」

来栖「任せてくれ。掃除は得意なほうだ」

ゆかり「そう。それは頼もしい限りね、さとり?」

さとり「・・・では、私はこれで失礼します」

+++少女移動中+++

来栖「じゃあ、我也掃除があるので」

ゆかり「覗き、あなたでしよう?」

来栖「っ!?!」

ゆかり「このタイミングで突然現れた新人なんて、考えればすぐに分かるわよ」

来栖「いや、その・・・それは、誤解で」

ゆかり「分かっているわよ。あなたはそんな悪人って感じじゃないものね。それは、さとりも分かっていると思うわよ」

来栖「???」

ゆかり「さて、いったい何の因果で、ここに留められているのか」

来栖「何が言いたい?」

ゆかり「あら、気を悪くしたなら謝るわ。でも、ひとつ言うておくわ」

ゆかり「あの子はね、あなたの思っている以上に子供よ」

来栖「……」

ゆかり「妖怪としても、生命としても、まだ小さな子供」

来栖「分かってるよ」

ゆかり「あの子の我侭に、少し付き合ってもらえるかしら？」

来栖「大丈夫。先を急ぐ旅でもない」

ゆかり「そうね……」

れいむ「おーい、何やってんのよ。さつさと部屋に戻るわよ」

ゆかり「はいはい……。じゃあ、新人さん、また会いましょう」

+++少女&BB A移動中+++

来栖「……我だって気づいていたのか。それとも、もう忘れていたか……。なにせよ、相変わらずの世話焼きだな、紫は」

お憐「さとりさま、あいつは大丈夫ですかい？」

さとり「大丈夫でしょう。それよりも、お空は？」

お隣「宴会の片付けですよ」

さとり「ちょっと、あの子にそういうことはさせないように言
ったじゃない」

お隣「大丈夫です。食器には手を触れるなど言って聞かせましたか
ら」

さとり「あの鳥頭に言って聞かせても無駄だって分かるでしょうに」

ガッシャーン！

「……うにゅー……やっちゃったー」

さとり「ほらね、言ったとおりでしょっ？」

お隣「あちゃー……これはあたいのミスですねえ」

さとり「さ、お空が仕事を増やさないうちに片づけするわよ」

来栖「さて、これで掃除も完璧」

来栖「しっかし、掃除したら温泉に入っていていいとか、逆じゃないの
かね……」

来栖「ま、いいや。温泉に入れるのなら文句はない」

来栖「やれやれ、ようやく幻想入り初の温泉だ」

来栖「一時はどうなることかと思ったが、まあ、よしとするか」

来栖「予想外の妖怪にも会えたしな」

来栖「にしても……さつきは見る余裕がなかったけど、景色もい
いし、いい温泉だ……な……?」

こいし「……」

来栖「……え?」

こいし「あ、どーも……」

来栖「ど、どうも……」

何故だ。何故いる。掃除中もしっかり無人かどうか確認したし、入浴前にも念には念をと、一回誰もいないか見て回ったというのに、何故、先客がいる!?

向こうも何か気まずそうにこっちを見てるしっ! これは、再びあの尋問を受ける羽目になるのか!?

こいし「あ、あのー……ここって、混浴、でしたっけ?」

来栖「えー……あー……いや、どうだったかなあ……」

こいし「あの、つかぬこと聞きますが」

来栖「なんででしょう?」

こいし「男の人、ですよねえ……?」

来栖「それは微妙だなあ……。どっちもというのが正しいかな」

こいし「でも、あれが……ついてますよ、ね?」

来栖「ああ、それはついてる」

こいし「……」

やば、対応を間違えた。もう顔真っ赤で今にも叫びだしそうじゃないか。今回はさすがに大目には見てくれないんだろなあ……。

さとり「ここは混浴よ、こいし」

こいし「あ、お姉ちゃん」

さとり「まったく、姿が見えないと思ったたらまだ入ってたの？」

こいし「あー……頭がくらくらする」

さとり「のぼせたんでしょ？ ほら、早く来なさい」

こいし「はい……」

来栖「……その子も従業員？」

さとり「私の妹よ。この子もあなたと同じで、姿を消せるの。大方、のぼせてるのにも気づかずそのまま入ってて、能力のコントロールが利かなくなっただってところでしょう」

顔が真っ赤だったのはのぼせていたからで、叫びそうな顔をしていただけということだ。なるほど、納得。

来栖「いきなり現れたから驚いたよ」

さとり「……………」

来栖「…………何か言いたいことでも？」

さとり「掃除、ご苦労様」

+++少女移動中+++

来栖「…………かわいくないねえ……………」

来栖「ま、それがかわいいのかな」

ドキドキ!? 地霊温泉郷めぐり! ・第一回(3)

それから一週間、我は信用を得るために馬車馬のように働いた。その結果、なぜかしらさとり以外の連中から絶対の信頼を勝ち取った。

お憐「やあ、来栖さん。掃除、お疲れさま」

来栖「やあ、おりん。今日は早いね」

お憐「いやあ、せっかくだし、朝風呂でもと思ってた」

来栖「まあ、まだお客さんの入浴時間じゃないし、別にいいけど」

お憐「来栖さん、一緒に入るかい？」

来栖「遠慮しておく。さとりに見つかったらどんな目に遭うか」

お憐「さとり様も強情だよねえ……。あんたが覗きなんかするやつじゃないって十分に分かってるだろうに」

来栖「ま、もうしばらくお世話になるぞ」

お憐「もういつぞ、ここに永住したら？」

来栖「このままじゃ、なし崩し的にそうなりそうで怖い」

お憐「違いない。じゃあ、また後で」

来栖「ああ」

すっかりこの通りである。しかしそれでもさとりは許してくれない。まあ、それにも理由があるんだが。それを追求することははばかられる。なにせ彼女はあの『さとり』なのだ。人のトラウマや嫌いなものをほじくり返す妖怪。間違ってもケンカなんかするわけには行かない。

来栖「でも、さすがにこのままずっとここで、ってわけにはなあ」

うにゅ「あ、クーちゃん。おはよ」

来栖「おはよう。おりんと逆に今日は遅かったね」

うにゅ「うーん・・・徹夜でゴミ袋を漁る夢を見た・・・あくむ」

来栖「カラスの宿命だなあ・・・」

うにゅ「あ、さとりさまがね。地霊殿にきてほしいって」

来栖「・・・なんだろ？」

うにゅ「いよいよ私の出番かなあ・・・？」

来栖「笑えない冗談はよしてくれ」

仕事でのミスはないはずだ。少なくとも怒られることではないは

ず。我は急いで地霊殿に向かう。さとりの部屋の前で一度深呼吸。

来栖「さとり、来たぞ」

さとり「入って」

来栖「用ってなに？」

さとり「あなたに外出許可を出そうと思って」

来栖「へえ、外出許可」

さとり「別の温泉に連れて行ってあげるわ」

来栖「ふむ・・・外出・・・って外出!？」

さとり「何よいきなり驚いて」

来栖「まさか、こんなにも早くここから出られるとは」

さとり「誰が出ていいと言った」

来栖「???? いや、今だって、外出許可って・・・あ」

さとり「そう、あくまで外出許可です。私が見張っているなら、あなたも覗きはしないでしよう? 私が付き添える時なら、いつでも外出してもいいわよ」

来栖「しかも、さとりの監視付きか・・・」

さとり「もちろんです。　　まだ、あなたを信用したわけじゃありませんから。当然、毎日この地霊殿に帰ってきてもらいます」

来栖「はぁ・・・信用を得るまで、まだまだかかりそうだね」

さとり「当然です。私は人を見る目はあります」

来栖「言葉の意味そのままの方だけな」

さとり「・・・やっぱり、外出許可はなしにしましょうか？」

来栖「ああつ、すみません。取り消します」

さとり「じゃあ、出かけるわよ」

来栖「どこに？」

さとり「言ったでしょう？　別の温泉よ」

来栖「別の温泉って・・・地底にあるのか？」

さとり「ええ。地霊殿の最奥に作ったのがあるの」

来栖「作った？」

さとり「地霊温泉郷の隠れ温泉にしようと思ったのだけど、この辺は妖怪が多くてやめにしたの」

来栖「へえ、妖怪ねえ」

さとり「何か言いたげね？」

来栖「いや、なんでもない」

さとり「私がいれば、妖怪なんてよってこないわよ」

来栖「読むなよ」

さとり「だったら考えないことね」

さとり「さ、ついたわ。この温泉よ」

来栖「へえ、温泉郷とは違ってこっちは硫黄泉か。温泉郷全体の硫黄の香りはここから来てたのか」

さとり「この先の山にこれの源泉があるの。巨大な硫黄泉の湖になってるわ。ちなみに、地霊温泉郷はここから逆方向の山から温泉を引いているのよ」

来栖「さすがは幻想郷。この近距離でまったく別の温泉が湧くとは」

さとり「さ、入りなさい」

来栖「遠慮なく」

来栖「・・・若干ぬるくないか？」

さとり「そのほうがゆっくり浸かれるのよ。熱いお湯だけがいいつてもじゃないわ」

来栖「まあ、それもそうか・・・」

さとり「・・・」

来栖「あのさ・・・そんなにじっと見ないでもらえるか？」

さとり「言ったでしょう？ 監視してるのよ」

来栖「いや、それはそうだけどさ」

さとり「・・・今、また妙なことを考えたわね」

来栖「いや、それは誰しも思うことじゃないのか？」

さとり「・・・」

来栖「・・・」

さとり「はいはい。分かりました」

+++少女脱衣中+++

さとり「もう、目を開けてもいいわよ」

来栖「了解」

さとり「お湯が濁ってて残念でしょう?」

来栖「いや、別にどうでもいいが」

さとり「まあ、わざわざ温泉に来たのに入らないのは損なもの」

来栖「言わなくても分かってるから」

さとり「別にあなたの要求に従ったわけじゃないわよ」

来栖「分かってる分かってる」

さとり「あの……」

来栖「何だ?」

さとり「実は、私、来栖に言いたいことが」

来栖「言わなくても分かってる」

さとり「・・・」

来栖「お前、『さとり』のくせに悟られやすいんだよ。顔を見ればすぐに分かる」

さとり「・・・」

来栖「まあ、こつやってたまに別の温泉に連れて行ってくれるなら、しばらく地霊殿にいてもいいよ」

さとり「ホント?」

来栖「読めば分かるだろ?」

さとり「分からないわ」

来栖「何で?」

さとり「世の中にはね、自分の心にすら嘘をつけるものもいるのよ」

そう言って、さとりは不意に立ち上がる。そして我の手を取った。

さとり「そして、人に悟られるほどわかりやすい子ほど、それが出来てしまうのよ」

さとりが手に持っているのはミサンガ。よく見ると、小さなしめ縄になっている。私の腕にそれをはめると、我をじっと見下してにやりと妖しく笑ったのだ。

さとり「ここに契約は完了したわ。あなたを正式に地霊温泉郷の従業員として雇用します」

来栖「なっ！ 汚いぞ！！」

さとり「しめ縄は神を縛る封印の鎖。混血とはいえ、その効力は十分よね。そこには博麗の巫女のありがたい言葉がこめられているわ。『それをくれた者に逆らうな』ってね」

来栖「くそっ、取れない！！」

さとり「ふふっ、八雲紫が何を入れ知恵したかは知らないけど、私をお子様だと思わないことね。いろんな妖怪に嫌われてる分、それらに復讐するために弱点や倒し方をたくさん知ってるんだから」

来栖「・・・いじめられっ子体質だな」

さとり「何か言ったかしら？」

来栖「なんでもないです」

さとり「さ、早く帰るわよ。今日は山の妖怪たちの団体様がいらっしやるんだから」

来栖「くそっ、信用したら開放するってのは嘘かよ！！」

さとり「当然よ」

さとり「信用で対価を払えるほど、私の裸は安くないんだから」

さとり「ま、鑑賞料分だけ働いたら、開放してあげるわよ」

こうして、来栖はまたしばらく地霊温泉郷に住むことになった。
結局、最初から最後まで、さとりの計画通りであったということだ。

しかし、始まりのきっかけは偶然であり、そして、紫が嘘をつくような妖怪ではないことを、来栖は知っている。

果たして、それすらも誰かが用意した運命だったのか。
それとも、ただの無意識がもたらした奇跡だったのか。
その答えを知るのは、お互いにまだ先のこと。

こいし「……んー……温泉はいいねえ……」

なににせよ、帰ってきたら、すっかりのぼせきっているこいしの介抱をすることになることだけは運命付けられている二人なのでした。

ゆるゆるに。

ドキドキ!? 地霊温泉郷めぐり! ・ 第一回(3) (後書き)

のんびり展開を目指して書いた今作だったが、初めての作風ゆえにリクに応えられなかったのが心残りかも。

来栖さんとさとりさまが仲良くなるのは、もうちょっと先の話かな・
・・?

あと、一人称が「我」なんだけど、読み方が「オレ」なので、たまに一人称が「俺」になってるかもしれない。見つけたら修正します。では、感想やら評価やらは自由にごうぞ。

迷いの竹林とイナバの月兎・序章（前書き）

どうも、例によって先行公開です。

今回は『鋼鉄少女が幻想入り』と同じく当サイトで受け付けたリクにつき、リク主様の評価の目が厳しいのではないかと心配しています。

今回でようやく6人目。第一期幻想入り希望者も残り半分です。

そして、今作は、最もどんな話にするか悩んだ一作です。

タイトルで分かると思う。今後、どんな話になってもいいようにあたりさわりの無いようなタイトルをつけてます。

では、どうぞ読んでやってくださいな。

迷いの竹林とイナバの月兎・序章

???「やば……。また迷った……」

迷いの竹林。そこは、訪れたものを確実に迷わせるという竹の森。一度通ったことのある道でも次回に来たときにそれが同じ道であることを気づかせない竹の成長の早さに加え、平衡感覚を狂わせる妙な力が働くのか、まっすぐ歩いても気づけばぐるりとその辺を一周しただけ、何てこともざらにある不思議な場所だ。とにかく、この場所。迷いやすいのである。

そして今日も、その魔力に引き寄せられたオレ　　ユーマは、
途方にくれて、その場に座り込んだ。

ユーマ「はぁ……。嫌になるなぁ……」

これで何回目だろうか。この竹林で迷うのは。

そのたびに、この竹林の住人である妖怪兎に助けてもらってはいるが、当然そのたびにお叱りを受けることになる。先日、見たことのない美しい女性に助けられたときなんて、とんでもなく怒られたっけ。今日こそは一人で竹林を歩いて見せようなんて……。やはりまだ無謀であった。

ユーマ「はぁ……」

ため息も出るさ。もういい加減、ここでの生活にも慣れてきたつてのに、未だにまともな仕事も出来てないんだから。お師匠様には、いるだけで価値だから気にすることはない、とは言われているが、それでも、居心地の悪さなんて解消されるわけでもない。そ

れに。

「???」やっと見つけた」

「ユーマ」・・・げ」

「???」帰りが遅いと思って来てみれば、案の定ね、あなた」

「ユーマ」どうして、あんたがここに・・・」

紫の髪、赤い瞳の妖怪兔・・・そう、オレの最大の悩みは彼女

鈴仙・優曇華院・イナバ。オレの働く屋敷『永遠亭』にて同じく働く先輩であり、幻想郷に来てまだ間もないオレの世話係だ。彼女は道の端で座っているオレを見下ろし、手で顔を押しさえながら深いため息をついていた。

246

「うどんげ」ほんっと、役立たず」

「ユーマ」ぐ・・・」

「オレは今、この性格の悪い先輩の下で働いている。」

「うどんげ」お使いも一人でも出来ないなんて、子供じゃあるまいし」

「ユーマ」悪かったよ」

うどんげ「悪くないわよ。　まさか、ここへ来てもう一ヶ月にもなるのにまだ竹林で迷うんだと想像すらしてなかった私が悪いのよ」

ユーマ「嫌味か？」

うどんげ「そう聴こえなかったのなら、あなたの耳は付け耳ね」

それはお前だろうが。

里での買い物を持って、オレたちは永遠亭まで歩く。数分もしないうちに到着した。なんだ、結構近くまで来ていたんじゃないか。喜ぶ俺に、たどり着けなきゃ意味なんてないでしょう、と言う鈴仙。

ユーマ「ああ・・・ようやく到着だ」

うどんげ「昼食の買い物まさか夕食の買い物になるとはね」

ユーマ「悪かったって」

うどんげ「気にすることはないわ。そうなるだろうと思って、初めてから期待してなかったし」

買い物は台所のほうに運んでおいてね、と一人でさっさと行ってしまふ鈴仙。　くそ、今日こそはちゃんとできると思ったのに。

ユーマ「ああもう……。ホント、就職先間違えたかな……」

そもそもどうしてこんなことになっているのか……。

それは、一ヶ月前にさかのぼる……。

迷いの竹林とイナバの月兎・序章（後書き）

まあ、鈴仙は立場上先輩に当たるわけで、厳しく教育しようとしているのが目に見えて分かる感じに仕上げてみました。

なぜこんな感じになっているのか。

そして、ユーマさんと鈴仙はいかにして出会ったのかは本編で明らかになる予定。

そして今作は『東方幻想夢』第一期の折り返し地点に当たるので、本作での幻想郷社会のことについても取り上げていこうかなと思います。

では、これからもよろしくです。

迷いの竹林とイナバの月兎・第二回（1）（前書き）

どうもです。

今回のお話はまた長くなりそうだったので、ところどころ端折って書き上げました。

前半はほとんど現在の幻想郷事情に関するお話です。

だって、もう今回の主人公は能力が能力だったから、ここでやるしかなかったんだもの。多めに見てください。

では、今回もよろしくです。

迷いの竹林とイナバの月兎・第一回（1）

幻想郷。 それは、とあるゲームの舞台であり、妖怪たちの住む理想郷。 オレたちの住む世界とは結界で分かれたれているその場所は、ちょっとした偶然と奇跡を持って、たどり着けることがあるらしい。それを人は『幻想入り』と呼ぶ。

そして最近になって、急激にその幻想入りが増えているのだという。原因はいまだはつきりとしないうが、結界の周期的な歪みのようなものだという噂もあり、外の世界はちょっとした神隠しブームになっている。 友人の友人が幻想郷に行つて帰つてきたつてレベルでだ。 そんな都市伝説めいた話をかぎつけたオレは、とある場所にやつてきた。

それは、博麗神社。 正確にここであるという話は一切聞かないが、実はオレは以前からここがそうなのではないかと言うあたりをつけていたのだ。 地味に自宅からそんなに離れていないその古びた神社は、人がいないはずなのにもかかわらず、なぜか建物は朽ち果てることなく、ずっと昔からそこにあるのだと近所のばあさんが言っていた。 そんな胡散臭い神社、間違いなく博麗神社に違いない。

幻想入りしてなんになるって訳でもないけど、きっとその周期的な歪みがなくなつてしまえば、幻想入りできる可能性は格段に低くなつてしまう。 行けるチャンスがあるときに行つておかないと後で後悔するかもしれない。 そんな小旅行的な気分幻想入りに臨む才

「ユーマ」さて・・・後は結界の歪みの噂は本当なのかだな」

生命の生きる気配をまるで感じない静かな神社。しかし、今日はいつもと違う。人の気配がするのだ。どうやら、先客がいるらしい。まあ、そこそこ近所でも有名な神社だ。神隠しの真相でも探りにきた近所のガキが遊んでいるのかもしれない。境内に向かう階段を登り、そして、神社に到着する。その刹那、オレはその世界の異変に気がついたのだ。

???「お、おいおい！ たかが煎餅一つくらいいいじゃないか！？」

???「こっちはそれが最後の一つだったのよ。いいから覚悟なさいっ！」

ユーマ「なっ・・・博麗霊夢に霧雨魔理沙!？」

まさか、大当たりだ。本当にあの場所は博麗神社だったということだ。そして、オレは本当に幻想入りしたのだ。都市伝説なんて眉唾物の中にも本物はあるということである。信じてよかった。

まりさ「霊夢、お客さんのようだけせ」

れいむ「魔理沙、あんたは後でシメるからそこで待ってなさい」

ため息をついて、霊夢はこちらにやってくる。さっきまでの恐ろしいげな雰囲気はどこへ行ったのか、彼女は優しい笑顔で俺を見た。

れいむ「こんにちは」

ユーマ「い、こんにちは」

れいむ「どちらからいらっしやっただんですか？」

ユーマ「・・・外の世界だけど」

れいむ「あら、事情は既に飲み込んでいるのね」

ユーマ「まあ、外でも噂になってるからね」

れいむ「そうなの？
ふうん、これはいよいよ由々しき事態
なのかもしれないわね」

まりさ「お、いよいよ偽巫女が本気で仕事に出るのか？」

れいむ「冗談。金にならない仕事はしないわよ」

まりさ「仕事をしても賽銭は入らないけどな」

れいむ「・・・好きに言っただけさ」

れいむ「それで、話が分かってるなら、質問の内容も分かるかしら
？」

ユーマ「ああ、しばらくは帰らない。少し遊んでみるよ」

れいむ「遊ぶ、ねえ・・・」

まりさ「遊ぶにも先立つものは必要だぜ。

日々の糧を得るも

のがなければ、餓死してしまうのは道理だ」

ユーマ「要するに、金だね」

れいむ「悪いけど、今、あなたみたいな人が大勢いるのよ」

ユーマ「まあ、こっちでも噂になるくらいだしね。それがどうかしたのか？」

れいむ「申し訳ないんだけど、こっちで仕事の紹介は出来ないわ。自力で探してくれる？」

まりさ「人だけ余って仕事はなし。今の幻想郷じゃ、人間は仕事を求めてさまよう妖怪になってるぜ」

ユーマ「どっちも同じようなものか……」

れいむ「人間の里にはもうほとんど仕事はないわね。余った人間たちは自力で仕事を作るか、あるいは妖怪を退治して金を稼いでいるらしいわ。中にはろくでもない連中もいるみたいだし」

まりさ「乙女は怖くておちおち外も歩けない世の中になったもんだぜ」

れいむ「空を飛んでるあんなにや関係ない話ね」

ユーマ「ま、どうにかなるでしょ」

れいむ「その考えが命取りにならなきゃいいわね」

まりさ「ま、ダメならダメでここに来たらいいんだ。それで元の世界に帰れるぜ」

ユーマ「大丈夫大丈夫。気楽にいくさ」

+++少年移動中+++

れいむ「・・・大丈夫かしら、あの子」

まりさ「ああいうやつが一番、妖怪に利用されやすいんだぜ、霊夢」

れいむ「・・・」

まりさ「ま、私は知ったことじゃない。せいぜい職探しの妖怪たちに取って食われないように祈っておけ」

人間の里での職探しは、霊夢たちの言うとおり困難を極めた。どこもかも人であふれている。道の端には、何をするわけでもなくたずむる人、職を求めて歩き回る人、職探しの妖怪とはよく言ったものだ。まさに、人々は血眼になって今日の糧を得るために奔走している。オレの知っている幻想郷とは違う。ここは、紛れもなく現代の縮図だ。

職探しをあきらめ、いったん里の外へ出る。幸い、幻想郷の地理には詳しいので、迷うことはない。とりあえず妖怪の山の方角は危険なので、迷いの竹林に向かうことにする。

とはいえ、ここは妖怪の住む世界だ。人里を離れてしまえばそこに民家や働けそうな場所などなく、ただただ舗装されていない道と原風景が広がっている。結局、その日は何も見つからず、幻想郷を歩き回っただけで終わってしまった。

二日目、三日、四日、時はすぎていく。偶然に通りがかった獵師から動物の肉や筍なんかを恵んでもらったおかげで何とか生きている。しかし、それでは幻想郷で暮らしているとは言いがたい、どうにかして今日こそ仕事を見つけ出そう。そう思っ行って行ったのは、人間の里にある一つの小屋。そこは、つい最近になって出来た職にあぶれたものたちの集会場。建物の中には、今日やってきた仕事を取りまとめる者がいて、集会場にやってきた者にそれらを与えているらしい。要するに日雇い労働者の斡旋所である。

建物の中はピリピリした独自の雰囲気で満ちている。まるで戦場だ。中には刀を持った危なそうな連中もいる。

ユーマ「あの・・・仕事を探しに来ただけど」

????「ああ、悪いね。今日の分はもう全部決まっちゃったよ」

ユーマ「一足遅かったか・・・甘く見てた」

????「金が欲しいんなら、あの辺の連中にも頼んでみたらどうだ？ あいつらは妖怪退治屋だ。上手くすれば仕事の手伝いでもさ

せてもらえるかもしれないよ」

ユーマ「ああ、いや……。いいよ、また明日来るから」

????「そうかい、じゃあ、明日はもつと早くくるんだな」

ユーマ「そうするよ。じゃあ」

さすがに妖怪退治は気がひけた。この世界のことを知っているオレからすれば、妖怪を傷つけることなんて出来るはずがない。さて、これからどうしようか。そう思いながら、今日も迷いの竹林の近くを散歩する。このままじゃ、結局外の世界に帰ることになりそうだ。

ユーマ「せっかく来たつてのに、何にも出来ないとは。現実 is 厳しいねえ……」

独り言をつぶやいて、ふと竹林のほうを見る。はるか向こうに、小さな光を見つけた。あれは、まさか、光る竹？

ユーマ「まさか。でも、たしか光る竹つて、幻想郷じゃ薬の材料になるつて話じゃなかったか？」

それを売れば、しばらく金には困らないかもしれない。よし、あれを取りにいこう。そう決意し、オレは迷いの竹林の中に入って行った。

迷いの竹林とイナバの月兎・第一回(2)

ユーマ「なんだ、コレ・・・？」

光をたどって向かった先にあったものは、光る竹なんかじゃなかった。そこにいたのは、妖怪兎。皆傷つき、中には血まみれで倒れているものもいる。

ユーマ「おい、大丈夫か！？ いったい何があったんだ！？」

妖怪兎「っ！？ 人間！ 皆、また人間が来たよ！！」

妖怪兎「せっかく追い返したのに、キリがないね」

妖怪兎「でも、相手は一人だよ。今度は大丈夫だよ。やつちやおう！」

そういつて、兎たちは一斉にこちらを睨みつける。その目は明らかに敵意のまなざし。何があったのかは知らないけれど、どうやら激しく誤解されているようだ。

ユーマ「・・・逃げるしかないね、こりゃ」

妖怪兎「あっ！ 逃げるよ！」

妖怪兔「追っよ！」

来た道を引き返し、竹林の外まで逃げてしまおう。そう思い、踵を返して走る。しかし、さっきやってきたはずの道は、もう既に別の道に見える。それどころか、今自分はどこを走っているのかも分からなくなってきた。ちゃんと引き返せているのだろうか。そんなことを考えているうちに、気づけば同じ場所にたどり着いていた。

ユーマ「あれ・・・？」

妖怪兔「迷ってみたいね」

妖怪兔「逃げたって無駄だよ」

そう、ここは迷いの竹林。必ず迷うとまで言われた場所だ。こんな場所で、妖怪と追いかけてこんなんで、あまりにも勝ち目のない勝負じゃないか。

ユーマ「くそっ」

妖怪兔「さっきの仕返し」

妖怪兔「どうせ人間なんていっぱいいるもの。一人いなくなっても気づかないよね」

ユーマ「っ・・・!!」

その刹那、妖怪兔を貫く一本の矢。振り返ると、そこにはさっき斡旋所にいた妖怪退治屋がいる。

退治屋「お前は・・・さつき集会所にいたやつか!？」

ユーマ「お前・・・何してるんだよ!？」

退治屋「迷いの竹林に住む、妖怪を退治している。そこを退け、そいつを倒せば終わりだ」

ユーマ「バカかお前は!？ こいつらがいったい何をしたって言うんだよ!」

退治屋「妖怪は退治されるべきものだ。これは当然のこと」

ユーマ「金を稼ぐ手段なんて他にもあるだろ!？ 悪さをしてない妖怪まで殺して何になるんだ!？」

退治屋「なら、こいつらが悪さをするまで待ち続けて、俺たちは餓死すればいいのか？」

ユーマ「っ!」

退治屋「どうせこいつらは死んでもまたどこから生まれてくる。だが、俺たちはそうは行かない。死んだらそれまでだ。なら、こいつらの命を食らってでも、俺たちは生きるべきだ。そうだろ？」

ユーマ「・・・それでも、オレはっ! こんな、認めない!」

退治屋「 どうやら、お前には言葉が通じぬらしいな」

再び放たれる矢。それはオレの直前で軌道が逸れ、竹に命中する。あんなのが当たったらひとたまりもない。しかし、後ろにいた妖怪兔は動じることもなく彼に立ち向かう。

妖怪兔「死んでいった仲間の仇！！」

退治屋「無駄だっ！」

腰に携えた刀がきらりと光る。妖怪兔の体をたやすく貫いて、退治屋は彼女を切り捨てた。あっという間だった。

退治屋「・・・これで全滅か、あっけないものだ」

そつつぶやいて、彼は妖怪兔の頭をつかんで持ち上げる。

ユーマ「お前、何する気だよ!？」

退治屋「殺したという証拠を持ち帰る必要がある。耳でも切り取っていけば十分か」

彼はそう言い、兔の耳に刃をあて切断する。まだ意識があつたのか痛みに泣き叫ぶ妖怪兔に見向きもせず、まるでゴミでも扱つかのようにその辺に投げ捨てた。

ユーマ「待てよ」

退治屋「何だ？」

ユーマ「お前、あれを見てもなんとも思わないのか？」

退治屋「あれは妖怪だ。俺の知ったことじゃない」

ユーマ「・・・あんなに痛がっているのに、お前は気にしないのかよ」

退治屋「ならお前は動物の肉を食らうときに、動物の痛みを感じるのか？」

ユーマ「・・・」

退治屋「同じことだ。人間が生きるために家畜を殺して肉にするように、俺はこいつらを殺して生きている」

退治屋「幻想入りの少年。ここはお前たちの住む世界とは違う」

ユーマ「・・・」

退治屋「・・・ふむ、無駄話が過ぎたようだ」

退治屋「奴が来る。里まで送ってやるからついて来い」

ユーマ「奴って、誰だよ？」

退治屋「迷いの竹林で兎狩りをすると現れる妖怪だ。こいつらとは格が違う。逃げるぞ」

退治屋は踵を返す。オレもそれに従い、一緒について行く。だが、走り出して数分もしないうちに、それはやってきたのである。

退治屋の足元に打ち込まれる弾丸。足を止められた退治屋は弓を構え、その姿を探す。しかし、俺には見えていた。

ユーマ「後ろだっ!!」

退治屋「っ!?!」

もう遅い、動物のような速さで退治屋の背後を取った兎は一瞬で彼を蹴り飛ばす。

退治屋「・・・来たか・・・因幡てゐ」

てゐ「まったく・・・。あたしがいない隙を狙ってまたろくでもないことをしてくれたものだねえ。　　今度は生かして帰さないよ」

退治屋「少年！ 逃げろ！」

ユーマ「な、何言ってるんだよ！ どうやって逃げれば」

退治屋「ここは俺が何とかする。お前は逃げる。　　それに、こいつはこの竹林の妖怪兎の長、コイツを倒せば、かなりの賞金になるはずだ」

ユーマ「……死ぬ気なのか？」

退治屋「少年、退治屋はもともと人間を守るためにある仕事だ」

ユーマ「……分かった。死ぬなよ！」

+++少年逃走中+++

てゐ「お優しいことで。でも、最後のお願いは聞けないんじゃないかい？」

退治屋「頼みがある。あの少年は俺とは無関係だ。だから」

てゐ「追うな、ってか？ 自分はあたしの仲間を殺しておいて」

退治屋「……」

てゐ「ま、妖怪ってのは、人間と違って利口だからね。それくらいは分かってるさ。でもね、あたしは利口でも、ほかの連中はそうじゃないかもしれないねえ」

三十分くらい走ってその場に倒れこむ。なにせ全力疾走だ。足腰はもう限界。体力も底をついた。あの退治屋は無事だろうか。考えるが、追っ手が来ない時点で大丈夫なのだろうと確信する。しばらく休んで、再び走る。一向に竹林を抜けられそうな雰囲気はない。そうしているうちに、日も暮れて、あたりは真っ暗になる。むやみに走ってまた彼女に見つかったら厄介だ。

ユーマ「しっかし、因幡であつて。確か見かけたら幸運が手に入るんじゃないかたつたけ？　　ああ、追つてこない時点で幸運を使い果たしてるのか……」

ここは朝になるまで動かないほうがいいだろう。竹の多い場所に身を隠し、あたりの様子を伺うことにする。暗闇の中、オレはしばらくそのまま動かない。そうしているうちに、ついうとうとしてしまふ。だが、いつ妖怪兔が襲撃してくるか分からない。頭を振り、眠気を振り払う。でも、それでも睡魔は襲つてきた。

そうこうして、もう二時間は経つただろうかという頃の事だ。遠くから、歌声が聞こえてきたのは。夜雀が歌っているのだろうか、と辺りを見回してみる。だが、その声は空から聞こえるものではない。地上から聞こえてきている。そして、その歌声はだんだん近づいてくるではないか。身を低くし、気配を殺す。そして、歌声の正体がついに姿の見える場所までやってきた。

ユーマ「あれは……妖怪兔？」

たくさん妖怪兔たちが、何か大きな箱のようなものを抱えて歩いているのだ。その先頭には、先ほど見た、因幡であの姿がある。

ユーマ「まさか、あれって……」

それは葬列。そう、あの箱の中にはきつと退治屋が殺した兔たちが入っているのだろう。兔たちの中には、泣いている者もいる。

ユーマ「……」

気づけば、葬列の後を追っていた。しばらくついていくうちに、開けた場所に出る。小高い丘の上には、満月。その一番上に棺を置き、それを囲むように兎たちは立っている。
不意に、てゐが一步前に出た。そして、彼女は棺に火を放つ。

てゐ「来世は、妖怪なんか生まれくるんじゃないよ」

てゐの言葉と同時に、妖怪兎たちは歌いだす。幼いころに聞いたことのある歌だ。タイトルは知らないけれど。

ユーマ「……」

しばらくそうして、兎たちは歌っている。だが、歌う声はだんだんと小さくなり、そして聴こえなくなる。

てゐ「……さて、皆はもう帰りな」

てゐの言葉に従い、妖怪兎たちはみなばらばらに去っていく。てゐは最後までそこに残り、燃えていく仲間を見届けていた。全て燃えて何もなくなった後、不意に彼女はこちらを見た。

てゐ「人間は、さ」

ユーマ「っ!?!」

てゐ「どうして皆仲良く出来ないのかねえ」

ユーマ「・・・」

てゐ「妖怪は、皆、姿形は違っても、仲良くやっていけるんだ。でも、人間は違う。そりゃあ確かに、妖怪は人間に怖がれるものだけどさ。でも、あたしたちはここで平和に暮らしてるだけなんだ。それを、妖怪だからって殺されたらどう思う? こいつらにだって家族がいるんだ。生きて、いたんだ。それを、どうしてお前たちは平然と奪っていけるんだい?」

ユーマ「・・・人間は」

ユーマ「人間は、妖怪みたいに強い生き物じゃない」

てゐ「・・・」

ユーマ「ごめん・・・。上手く言えない」

てゐ「・・・いいんだよ。バカなことを聞いた。人間の里に帰りたいんだろ? 送っていくよ」

ユーマ「いや、いいよ。そこまで世話になるわけにはいかない」

てゐ「あの男からの約束なんだ。竹林で迷っていたら、助けてやつ

てくれってさ」

ユーマ「あの男？」

そうだ、あいつは生きているのか？」

てゐ「妖怪は無駄な殺生は好まない。例えそれが、本当に殺してやりたい相手でも、ね。それに、あいつにも家族がいるんだ。あたしたちと同じ悲しみを、あいつの家族に与えるのはかわいそうじゃないか」

ユーマ「……」

てゐ「さ、ついておいで、朝までには里につけるよ」

迷いの竹林とイナバの月兎・第一回(2) (後書き)

自分でも何かいてるのか分からなくなるような展開。

でも、こういうやり取りが好きなのはガンダム大好き。

退治屋のイメージはFateのアーチャー。

えっ？ アーチャーっぽくないって？

その辺は多めに見てくださいよう。。。。

迷いの竹林とイナバの月兎・第一回(3)

次の日、ようやく日雇いの仕事を獲得したオレは、妖怪の山の近くに流れる川に橋を架ける工事を手伝った。そうして手に入れたバイト代は、案の定たいした額ではない。こんな日々の食事にも困る生活をしているのでは、外にいてもあまり変わらないのではないだろうか。

ユーマ「・・・帰ろうかな。向こうに」

ふとそう思った。だが、思いとどまった。あの妖怪兎たちの悲しい目を思い出したのだ。これが、あの幻想郷なのだろうか？ ゲームの中の幻想郷は、もっと皆平穏で、殺し合いなんかなくて、いい世界だったはずだ。この幻想郷を、このままにしているのか。

違う。

こんな世界は、オレが、みんなが望んだ幻想郷なんかじゃない。きっと、何かオレに出来ることがあるはずだ。

その日からオレは幻想郷中を走り回って、その策を探した。三日、四日、と時間は過ぎていく。でも、それでも答えは見つからず、結局オレがたどり着いたのは迷いの竹林だった。

オレには何も出来ないのか？ じゃあ、どうしてオレはここに来れたんだ？ 何の意味もなく、幻想入りしたのか？ 最初は確かに、ただの小旅行だったかもしれない。でも、今は違う。

ユーマ「・・・」

迷うことなく、迷いの竹林に再び足を踏み入れる。二度も幸運な
んが続くはずはない。今度はきつと、帰ってこれないだろう。でも、
オレがここに帰ってくるようなことがあるならば、まだ何かに希望
を持ってもいいのかもしれないと思える気がする。ただの気まぐれ
で、そして、最後の賭けのようなものだ。

竹林の中を歩いていく。

そして、そこで出会うのだ。

彼女と。

まりさ「 よう、霊夢。あれからどうだ? 」

れいむ「んー。とくに何も無いわよ」

まりさ「嘘付け。何だそのパンパンに膨れた小銭入れは? 」

れいむ「んっふっふ・・・なんか最近急に参拝客が増えてきたのよ
ね」

まりさ「気持ち悪い笑い方をするなよ」

れいむ「そういうあんたはどうなの？ 機嫌よさそうじゃない」

まりさ「聞いてくれよ！ あの幻のキノコと言われたセイヨウオオベニテングマイタケが見つかったんだ！」

れいむ「何よその何でもくつつければ最強みたいなネーミング」

まりさ「とにかく最強なんだよ！ これで私の魔法は百年先に進んだぜ！」

れいむ「しっかし、あなたといい、私といい、ずいぶんいいことずくめね」

「???」あら、あなただけじゃないわよ

れいむ「出たなスキマ妖怪」

ゆかり「ついにね。いい時代になったのよ」

れいむ「いい時代？」

ゆかり「外の世界は最近ずいぶんと好景気になってたからね。人々の忘れていたものを手に入れてしまう幻想郷は長く冬の時代を迎えていたわ」

まりさ「今は秋だぜ。冬はこれから来るんだ」

ゆかり「でも、それももうお終いよ。向こうでちょっとした大イベ

ントが起きたからね。幻想郷も、忙しくなるわよ」

れいむ「外の世界で何が起こったのよ」

ゆかり「 第二次世界恐慌よ」

ふたり「・・・はあ？」

ユーマ「ずいぶん歩いたな・・・」

ユーマ「でも、結局、戻れずか」

ユーマ「ま、こんなもんだよ。人生って」

ユーマ「あーもう。バカなことしないで帰ればよかった」

????「・・・そこに誰がいるの？」

ユーマ「ん？」

????「 人間？ 迷い込んだの？」

ユーマ「違う。ちょっとした賭け」

「???」迷いの竹林で？」

ユーマ「一人で帰れたら、俺の勝ち」

「???」じゃあ、負けね。私が送って行ってあげるわ」

ユーマ「いい。帰らない」

「???」はあ？ あなたね。竹林で自殺なんかしないですよ？ 最近
そついうの流行ってるらしくて兎たちが迷惑してるんだから」

ユーマ「その代わりに、俺に新しい仕事でも探してくれ、鈴仙さん」

うどんげ「なっ!？ 何で私の名前を知って・・・」

ユーマ「もう疲れた。 もう何日も歩いてたから」

うどんげ「ちょ、ちよつと!？ ここで死ぬなって言ってるじゃないの！ 起きなさい!?!」

悪いけど、ルール違反する。賭けはオレの勝ちだ。

どつやら、てのくれた幸運はまだ残ってるらしい。

「???」栄養失調ね。

まあこの不況なもの、仕方のないこと

「お」

うどんげ「お師匠様、この人、大丈夫なんですか？」

えーりん「大丈夫よ。点滴して、しばらく休ませれば治るわ」

えーりん「しっかし、ラッキーね。とんでもない拾い物だわ」

うどんげ「はい？」

えーりん「あら、知らないのかしら？ 幻想郷の景気がよくなったって話」

うどんげ「あー。そう言えば里で聞きました。なんでも、地底のほうで大規模な工事があつて、職にあぶれた人たちが皆そつちに就職したとか」

えーりん「地霊温泉郷の二号館ね。その建設が終わつても、今度は幻想郷中の温泉掘りに大忙し。しばらく人間たちが仕事に困ることとはなさそうね」

うどんげ「里のほうも、人口が増えたので町を拡張する計画が立つてるそうですよ。その辺の計画も進めば、もう無意味な妖怪退治なんてしている暇なんかなくなりますね」

えーりん「それを、彼がもたらしたのよ」

うどんげ「・・・この人が？」

えーりん「彼の能力は福を与える能力とでも言いましょうか。彼が幻想郷を歩き回った結果、幻想郷が好景気になったのよ」

うどんげ「でも、それって単なる偶然じゃ……」

えーりん「さあ、それは知らないけど、でも、ま、何らかのきつかけがなければ事態は動かないもの。長らく膠着していた不景気を吹き飛ばしたのは、いったい何がきっかけだったのか」

うどんげ「……」

えーりん「お礼って訳ではないけれど、ここで雇うくらいはしてあげてもいいんじゃないかしら」

うどんげ「ええっ!？」

えーりん「あら、不満？」

うどんげ「不満って訳じゃないですけど……。お師匠様、何かたくらんでません?」

えーりん「いいえ。企んでません」

うどんげ「私の目を見て言ってください。何ですかその目の泳ぎっぷりは」

えーりん「いやねえ。自分の師匠を信じられないのかしらこの子」

うどんげ「物欲に目がくらんでませんか? お師匠様に福が来たら、里の人間は病気で死にますよ!」

えーりん「冗談よ。 ホントの所は、人の幸福を左右する力を人に与えてはいけないからよ」

うどんげ「と、言いますと?」

えーりん「今回の好景気はまあ、状況が状況だったし、大目に見るとして。 でも、実際のところ、この力は本来あってはならないものでしょう? 福って言うのはね、自分でつかむものなの。そんなことを人に頼ってしまっっては、人間は墮落してしまう」

えーりん「それに、人を幸せにする人間がいるって話が流れて見なさい。すぐにでも彼は人間に生け捕りにされて祭り上げられてしまおうでしょう。 それじゃ彼がかわいそうよ」

うどんげ「なるほど、だから、私たちが飼い殺すと」

えーりん「言い方が悪いけど、その通りよ。永遠の時を生きる私たちには一時の幸も千年の不幸も等しく同じようなもの。彼の能力を私たちが吸い上げてしまえば、むやみに彼を利用しようとする輩が出てくることはないでしょう」

????「ま、もしいたとしても、私たちが追い返せばいいってことね」

うどんげ「輝夜さま? 珍しいですねここに来るなんて」

かぐや「新しい住人の顔を見に来たの」

かぐや「じゃあ、この子はうどんげに任せましようか」

うどんげ「ええっ！？ 私がやるんですか！？」

えーりん「私は新薬の開発で忙しいもの。それに、この子に出来そうなことはあなたと同じような仕事でしょうし。しばらく一緒に仕事をしてあげて、いろいろと教えてあげなさい」

うどんげ「ううう・・・分かりましたよ」

迷いの竹林とイナバの月兎・第一回(3) (後書き)

この辺は大幅カットしました。

三日四日分のエピソードがあるんだけど、もっぱらさり行かないと話が終わらないからね・・・。

思い悩む少年は好き。そして若さゆえの意味不明行動も好き。ユーマさんには悪いけど、やっぱり小説ってこうじゃないとね。クレームは覚悟の上です。

迷いの竹林とイナバの月兎・第一回（4）

うどんげ「茶がぬるい」

うどんげ「お米、硬いんだけど」

うどんげ「あら、まだ埃が残ってるじゃないの」

うどんげ「ちょっと！ 姫の着物は乱暴に扱わないでよ！ あなたよりもずつと高いんだから！！」

うどんげ「お使いもまともに来れないのかしら？」

うどんげ「まだ寝る時間じゃないわよ。まともな仕事も出来ないなら、寝ないでよろしい」

うどんげ「・・・筍掘りで、まさか竹炭拾って帰ってくるなんて思わなかったわよ」

うどんげ「はあ？ また迷った？ 言い訳だけは一人前ね」

そんな感じであつたという間の一ヶ月だった。楽しかったかつて？
お前の耳は付け耳か。

もうやめたい。そう思って屋敷の縁側でたたずんでいたある日のことだった。夕食の片づけが終わってひと段落した鈴仙がオレの所
にやってきたのである。

うどんげ「あら、サボリ？」

ユーマ「サボリじゃない。もう仕事終わった」

うどんげ「ふうん……。ずいぶん早くなったわね」

鈴仙はオレの隣に座る。もうすぐ冬よ、と不意に呟いた。

うどんげ「冬になるとね。あたり一面真っ白になって、とっても綺麗よ。妖怪兎たちも、毛が冬毛に生え変わって、見た目一発で誰が誰だか分かんなくなっちゃうんだから」

ユーマ「……」

うどんげ「私をはじめてここに来たときの冬に、てめがいなくなっただって大騒ぎしちゃって。そしたら、白髪頭のてめがお前の真っ赤な眼は何を見てるウサって。もう、今思い出しても笑っちゃうわ」

ユーマ「……」

うどんげ「……ここに来たこと、後悔してる？」

ユーマ「ぶっ倒れたとき、勢いであんなこと言っただけじゃなかった」

うどんげ「……ふふっ、そうね」

ユーマ「・・・でも、少なくとも、拾ってくれたことは、感謝してる」

うどんげ「そう。なら、拾ったかいがあったわ」

ユーマ「あのさ、鈴仙」

うどんげ「なにかしら?」

ユーマ「なんか、急に雰囲気違うな」

うどんげ「そう? まあ、いつも仕事中はあなたのせいでイライラしてるからかもね」

ユーマ「・・・じゃあ、俺がもっとちゃんと働けるようになったら、鈴仙はずっと優しいのか?」

うどんげ「さあて、それはどうかしら」

うどんげ「でも。期待されているから怒られるのであって、初めっから何も期待していないなら、ずっと優しいのかもしれないわね」

ユーマ「それはつまり、オレにはもう期待していないと?」

うどんげ「あくまで、仕事のお話よ」

ユーマ「???」

うどんげ「伝わらなかったかしら?」

ユーマ「答えをあいまいに流されたように感じるのはオレだけ？」

かぐや「そうねえ。うどんげってば、面倒な言い回しするのねえ」

うどんげ「な、姫様!？」

かぐや「私も混ぜなさいよ。 ホラ、一緒に飲みましょう?」

うどんげ「ダメですよ。ユーマは明日も仕事が・・・」

えーりん「明日くらいは休んでいいわよ。 たまには、夜更か
しするのも悪くはないわ」

えーりん「今夜はせつかくの満月だもの。兎たちも、今頃お餅でも
搗いてるんじゃないかしら」

うどんげ「もう・・・姫もお師匠様も、ユーマに甘すぎます」

ユーマ「いいのかなあ・・・鈴仙?」

うどんげ「・・・今日だけ。特別よ」

幻想入りから一ヶ月。

あれからと言うものの、妖怪退治の数はめつきり減った。

里の人間の話だと、そんなものに人手を割けるほど暇じゃなくな
ったらしい。

今、幻想郷は人間の里の拡張に大忙しだ。妖怪も、人間も、皆仲良く協力して共に、新しい幻想郷を作ろうとしている。

そんな奇跡をもたらしたのは、いったい誰であったのか。

結局のところ、オレは何も出来なかったのだが、まあ、それでもいいか。なににせよ、今ここにあるものは、俺たちが知る幻想郷なのだから。

ユーマ「じゃ、本日もお疲れ様」

うどんげ「・・・乾杯」

幻想郷に福をもたらした少年、ユーマ。

彼がもたらした好景気は、幻想郷に思わぬ変革をもたらした。

しかし、その結果、再び大きな異変が起こることになるのだが、それはまた、別のお話・・・。

どんどはね。

迷いの竹林とイナバの月兎・第一回（4）（後書き）

新人には新人の苦勞が、先輩には先輩の苦勞がある。

社会人になるとそういうところも見えてきていい感じ。

けっして鈴仙は嫌われなくてユーマさんに厳しいわけじゃないんですよね。

そして、今後のイベントの理由付けのために、再びユーマさんの能力を利用する私。

いいキャラクターの提供、本当にありがとうございましたっ！

俺と慧音の寺子屋日誌・序章（前書き）

どうも、先行公開です。

今回の序章はもこ視点です。

さて、どうなることやら……。

俺と慧音の寺子屋日誌・序章

しかし、執拗な攻撃だ。

いったい何の価値があるというのか、私にとっては無用の長物に見えるこの小さな宝玉に。妖怪たちがこれまで徹底して追撃を仕掛けてくるということは、やはり、そういうことなのだろう。危険な仕事、確かにそうだ。これだけの数の妖怪を相手にするのは人間業では不可能だ。

??? 「慧音、ろくでもない仕事に手を出したもんだな！」

慧音「うるさい！ いいから走れ！」

だが、その前にやることがある、私は宝玉を慧音に投げ渡すと、振り返り、追ってくる妖怪たちに迫った。

慧音「妹紅！？ 何をしている！！」

妹紅「フジヤマ、ヴォルケイノ！！」

周囲に火を放ち、敵をかく乱する。陣形が乱れた隙に乗じて、妖怪共を地上に引きずり落とす。だが、まだ追撃は続くらしい。もうすぐそこまで妖怪が迫ってきているではないか。

慧音「妹紅！ 相手にするな！」

妹紅「・・・まったく、キリがないね」

さて、どうしてこんなことになったのか。

それは、昼に寺子屋にやってきた子供の頼みであった。

子供「お父さんを助けて！」

慧音「どうしたんだ？ いったい何があったんだ？」

子供「お父さんが、仕事がなくなったから、妖怪たちの宝を盗む仕事をするって言ってるんだ！」

妹紅「・・・妖怪の宝あ？ そりゃ、誰の依頼だよ」

子供「わかんない。けど、山の妖怪の住処にあるっていう白い宝玉を取りにいって・・・」

妹紅「山の妖怪・・・宝玉。 天狗だな」

慧音「そんな、お前の父はただの商人だろう？ 天狗は退治屋でも手を焼く相手・・・。危険すぎる！」

子供「でも、それをしないとお父さん、もう仕事がもらえなくなるからって・・・」

妹紅「……で、それを私が取ってくればいいんだな？」

子供「行ってくれるの？」

妹紅「気は乗らないけど、お前、自分の父さんが無駄死にするのなんて見たくないだろ。幸い私は死なないからな。代わりに取ってきてやるよ」

慧音「妹紅！ そんな安請け合いをするんじゃない」

妹紅「でも、慧音は行く気じゃないか。なら、私もついて行く」

慧音「……頼めるか？」

妹紅「どうせ暇をもてあました不死者だ。好きに使え」

そして、今。その宝玉を無事に手に入れた私たちは天狗から追われていた。これだけの敵を引き連れて里に戻るわけにも行かず、里を避けるように大回りして、現在は迷いの竹林を走り回っている。しかし、さすがは天狗だ。迷いの竹林の中でも一切迷うことなくこちらを追ってくる。そして、的確に攻撃を撃って来るのだ。こちらも反撃しようとしても敵のチームプレイに邪魔をされ、思うように攻撃を行えない。

妹紅「統制された動き……ただの哨戒天狗ってわけじゃないみたいだな」

慧音「連中は鴉天狗だ。下っ端の連中とは格が違う」

慧音「よほどこの宝が大切なものなのだろう」

妹紅「だが、あの子供たちの生活には変えられない。ここまでやり
ちまったんだ、あとは、どうにかするしかないだろ？」

慧音「そうだな・・・っ!？」

不意に真正面から天狗が現れる。かまいたちを操り、慧音に攻撃
を仕掛けてきたのだ。

妹紅「慧音っ!!」

慧音「大丈夫だ・・・かすっただけだ」

???「あややや・・・誰かと思えば里の半妖に死なない人間じゃ
ないですか」

妹紅「あいつ・・・確か」

慧音「射命丸、文・・・」

あや「私たちの宝を盗んだのは、あなたたちですか？」

妹紅「どうせいらぬもんだろ？ だつたらいいじゃないか」

慧音「これが無いと困るものがあるんだ。頼む、譲ってはくれない
か？」

あや「それが無理だと分かっていたから、盗んだのではないです
か？」

慧音「……………」

あや「ちよつと痛い目に遭ってもらいますよ。これはおしおきですからね」

文はそう言い、スペルカードを取り出した。

刹那、大きな竜巻が慧音と私を分断する。激しい風に阻まれてしまったのだ。そして、周りを取り囲む鴉天狗の集団。いい戦略だ。

妹紅「だが甘い。」

私と張り合おうなんて千年は早いぞ」

一斉に弾幕を放ち、こちらの動きを止めようとする天狗たち。だが、そんな甘い攻撃じゃ、幾度も死線を潜り抜けてきた私には通用しない。

妹紅「フジヤマヴォルケイノ！」

再度放つ炎の弾幕。鴉天狗を打ち倒し、道を開いた私はすぐに慧音の元に走る。向こうには文がいる。慧音ではとてもじゃないが渡り合える相手ではない。

妹紅「慧音っ！！」

あや「来ましたか……でも、一足遅かったですよ」

慧音は倒れている。だが、まだ宝玉を手放そうとしないのか、鴉天狗たちが彼女に群がっている。怒りに震えた私は慧音に駆け寄った。

妹紅「慧音に触れるな!!」

あや「宝玉を、返しなさい!」

妹紅「近寄るなあ!!」

弾幕とか知らん。文の起こした風すらも飲み込む圧倒的な炎で敵をけん制する。私の目を見て本気と悟ったのか、文も苦笑いして周りの天狗たちを下げさせた。

あや「その宝玉は、人間に渡してはならないものです」

あや「必ず、危険な目に遭いますよ」

あや「里の人間が、今の彼女みたいなことになってもいいのですか?」

妹紅「・・・」

あや「・・・まあいいでしょう。一度、痛い目を見ないと分からない生き物ですからね、人間は」

その宝玉は預けます。文はそう言って去っていく。私は抱きかか

えた慧音を見、血の気が引いた。

慧音の体が、半分ない。

まるで食われてしまったかのように、体の右側に大きな穴が開いていたのだ。右腕はかろうじてくっついていてるものの、皮一枚といった感じで、ちよつと引つ張つたらたやすく千切れてしまいそうだった。

妹紅「慧音・・・？」

慧音「妹紅・・・、すまないな。よけそこねたよ」

妹紅「・・・っ、そうだ、永遠亭！」

慧音「いい・・・もう、間に合わない」

それより、と慧音はあの宝玉を私に預けてくる。慧音の血で、宝玉はすっかり紅色に染まっていた。

慧音「これを、あの子に・・・」

妹紅「・・・いやだ。これはお前が渡せよ！」

慧音「無茶を言うな・・・私は、お前じゃない」

妹紅「……いやだ！ 慧音！ 死んだらダメだ！」

慧音「悪くないな……お前に泣かれるのも」

慧音「ありがとう」

妹紅「……慧音？」

妹紅「慧音！！」

眠ったように動かない慧音。呼吸はだんだんと静かになっていく。

ああ、そうか、これが、死。

私には来ない、来るべき時。

いやだ。

こんな形で慧音と永遠にお別れなんていやだ！

泣きながら、慧音の体を抱きしめて、何度も彼女の名前を呼ぶ。

都合がいいものだ。こんなときにだけ神様に祈る自分なんて。

起きるはずもない奇跡を信じて、祈る自分なんて。

????「おい、その人、何やってるんだい？」

そこに、あいつは

みずきはやってきたんだ。

俺と慧音の寺子屋日誌・序章（後書き）

あー。まとまりがない。

しっかりとストーリーをねって作った結果がこれだよ！　って感じ
です。

やっぱ小説は勢いで書くほうが得意だなあ。

本編は勢いで書いていこうと思います。

ちなみに宝玉の正体は、来月くらいまで秘密です。

俺と慧音の寺子屋日誌・第一回(1)(前書き)

慧音は気さくなお姉さん、もこは女子校でもてる女子風なイメージで書いてみた。

そして水鬼さんは・・・本編で確認してみてください。

俺と慧音の寺子屋日誌・第一回(1)

俺と妹紅は宝玉を無事に受け渡し、慧音が眠っている建物に戻ってきた。寺子屋に隣接するその建物は、妹紅曰く慧音の家であるという。中に入り、部屋で寝ている慧音の様子を確認する。

???「うん、もう熱も下がったし、傷も問題なさそうだ」

もこ「よかった・・・後は目を覚ますだけか」

慧音「・・・ん」

慧音「もう、朝・・・か？」

慧音「朝!?!?・・・どうして？」

???「あ、起きた？」

もこ「慧音!?!」

慧音「私、どうして・・・? 死んだはずじゃなかったのか?」

もこ「ああ、それはあいつが助けてくれたんだ」

慧音「・・・あいつ」

もこ「幻想入りしてきたらしい。名前は水鬼。 あいつがあつという間にお前の怪我を治したんだ！」

水鬼「無事でよかったよ。 初め見たときはもう死んでるかと思ってたんだけど」

慧音「ああ、まさか私も生き延びるとは思わなかった。 ありがとう、助かったよ」

水鬼「どういたしまして」

慧音「何かお礼をしなくてはならないな」

水鬼「いいよ、そんなの」

もこ「だったら、こいつの働き口でも探してやったらどうだ？」

慧音「・・・働き口、か・・・たしかに、十分な礼かもしれないな」

水鬼「????」

もこ「今の幻想郷はな、ちょっとした大不況なんだよ」

慧音「お前のような外来人が増えてしまっただけ、仕事不足なんだ」

もこ「で、慧音。お前が斡旋できる仕事ってあるのか？」

慧音「そうだな・・・稗田家で手伝いでもさせるか、あるいは、寺子屋で働いてもらうか。・・・そうだ、保険医なんてどうだ？」

水鬼「保険医？」

慧音「と、言うよりは診療所の医者だな。寺子屋に隣接する

診療所 要するに、ここで医者をやってみないか？」

水鬼「医者って・・・悪いけど医者じゃないぞ」

慧音「ちよつとした怪我を治せばそれでいい。この里には
医者がいなくてな、迷いの竹林の中に腕利きの医者があるんだが、
そこにたどり着く前に死んでしまうことも多い」

もこ「何せこのご時勢だ。刃傷沙汰も多い。初期治療が間に
合わなくて、例え永遠亭にたどり着いても手遅れになってることも
ある」

慧音「死ぬはずだった私をよみがえらせたその力、幻想郷のために
使ってはくれないか？」

水鬼「・・・分かった。でも、条件がある」

慧音「何だ？ 何でも言ってくれ」

水鬼「とりあえず、住むところを確保したいんだが」

慧音「ああ、それなら診療所の上を使えばいい。私もここに住んで
いるんだが一部屋空いているし、そこでいいなら好きに使ってくれ」

もこ「お、おい！ 慧音！！」

慧音「ん？ なんだ？」

もこ「仮にもこいつは男だぞ・・・？」

慧音「だから何だ？」

もこ「 あ、あのなあ・・・」

慧音「ミズキといったか、お前は命の恩人なんだ。遠慮は要らないぞ」

水鬼「じゃあ、お言葉に甘えましょうか」

慧音「そうと決まったら。まずは部屋の掃除だな。しばらく放置していたからな。綺麗にしておかないと」

もこ「お、おい・・・もう動き回って大丈夫なのか？」

水鬼「傷は完璧にふさがってるから、まあ大丈夫だとは思っけど」

もこ「お前に聞いてない」

慧音「ん？ 大丈夫だぞ？ この通り健康体だ。さて、私は部屋を掃除してくるから、妹紅はミズキに里を案内してやってくれないか？」

もこ「な、何で私が！？」

慧音「どうせ暇だろ？ それに、お前とミズキ、なんだか仲よさそうじゃないか」

もこ「だ、誰がこんなやつ！」

水鬼「・・・地味に傷つくなあ」

+++少年少女移動中+++

水鬼「で、ここが人間の里か・・・」

もこ「ま、人間の里と言いながらもあちこち妖怪がいるんだけどな」

水鬼「そうなのか？」

もこ「これだけ大きな市場があるのは幻想郷では地底とここだけだ。妖怪たちもそれを利用しにやってくる。ほら、あそこにもいるだろ？」

????「あ、妹紅さん。お久しぶりです」

もこ「よう、九尾の。主は元気にしてるかい？」

らん「ええ、まあ。最近はいったい何を考えていらっしやるのか、

あちこち幻想郷を飛び回ってますよ」

もこ「異変でも企んでるんじゃないだろうな？」

らん「さあ、よく分かりませんが・・・まあ、紫様に限ってそんなことはしないと思いますよ。　じゃ、また今度」

もこ「おう」

水鬼「妖怪とも親しいのか？」

もこ「長く生きていると自然とそうなる」

水鬼「長く？　　そんなに歳行っている様には見えないけどな」

もこ「不老不死なんだ。　　これでも数百年は生きてるんだぞ」

水鬼「・・・へえ」

もこ「なんだ、驚かないのか」

水鬼「いや、幻想郷にきてから驚きの連続で、もう驚くって感情も消え失せたよ」

もこ「張り合いのない奴」

水鬼「・・・悪かったな」

もこ「ところで、お前。慧音のことをどう思っている？」

水鬼「ん？ 特に何も？」

もこ「女として、かわいいとか綺麗だとか思っていないか？」

水鬼「思っていない思っていない」

もこ「本当だな？ 何も意識していないな？」

水鬼「ホントホント」

もこ「・・・ならいいんだ」

そう言っておかないと、後で面倒なことになるってことはお見通しな俺であった・・・。それから、あちこち里を見て回って一時間位して帰宅する。だが、部屋はまるで片付いていなかった。

慧音「うわぁ・・・懐かしいな。これ、一昨年の卒業生のじゃないか」

もこ「慧音・・・？」

慧音「・・・はっ！ ち、違っんだ妹紅！ 決してサボっていたわけではなく、ちょっと休憩していたというか・・・」

水鬼「・・・もうそのやり取りが面倒くさいなあ。妹紅、手伝って。さっさと終わらせよう」

もこ「そうだな」

慧音「ち、違うんだ、ホントに・・・ちよつと懐かしいものが出てきただけで、さっきまではちゃんと掃除を・・・」

俺と慧音の寺子屋日誌・第一回(2)

もこ「ふう、あらかた片付けたな・・・」

ぱん、と手を叩き、階段の下から慧音に声をかける妹紅。

もこ「けーね！ 荷物は後どれくらいあるんだ!？」

慧音「最後の一つだ！ 私が運び出すからもういいぞ!」

もこ「よし、じゃあ私は茶でも淹れてくるか」

水鬼「嫌な予感しかしないんだが・・・」

慧音「つと、案外重い・・・」

水鬼「・・・階段から落ちるか・・・？ あるいは・・・荷物の下敷きか」

慧音「よい、しよつと・・・ ツ!?!?!?!」

慧音「ぎゃああああ!」

水鬼「予想外の来た!？」

もこ「どうした、慧音!?!」

階段を駆け上がる妹紅。部屋に向かうと、慧音は箱を持ち上げよ

うとしている。 いったい何があったのか。

もこ「慧音？」

慧音「……つごけない……」

もこ「はい？」

慧音「……ぎっくり腰」

もはや笑い話である。

慧音「ううう……すまない、ミズキ」

水鬼「まあ、いいけどね」

もこ「……」

慧音「ああ、助かった。 しかし、ずいぶん万能な力だな。もう治ってしまったぞ」

水鬼「まあ、俺にもよくわかんないんだけど、こっちに来てからこんな能力が身についたんだ」

慧音「幻想郷に来たものは何かしらの能力に目覚めるらしいからな。お前のこの力もそれなのだろう」

もこ「能力の正体も知れないうちから乱用するなよ。どんな副作用があるかも分からないんだ」

水鬼「それは分かってるよ。今のは緊急事態だったから仕方ない」

もこ「それは分かるが・・・」

慧音「なんだ、私があのままのほうがよかったのか？」

もこ「そうじゃない、そうじゃないけど・・・」

もこ「と、とにかくだ！ 部屋から運び出した荷物をどうするか決めてくれ」

慧音「ああ、実を言うとそれは診療所の荷物がほとんどなんだ。下を私の応接間に使っていたからあそこに追いやっていたが、実際にはここに置くべきものたちだ」

水鬼「一部、慧音の私物もあつたけどな」

慧音「私物じゃない。生徒の提出物たちだ」

もこ「じゃあ、箱から出してここに並べておけばいいのか？」

慧音「ああ。では、さっさとやってしまおうか。午後からは授業があるしな」

それから三人で黙々と作業を行った。

正午前にはすっかり片付き、殺風景だった一階も診療所らしくなっていた。

慧音「二階の掃除も終わったぞ」

水鬼「ようやく終わったね」

もこ「・・・やれやれ」

慧音「なんだ、妹紅？　　ああ、悪かったな、つき合わせて。

昼食くらい食べていくといい」

慧音「水鬼も、今日からは私が食事を用意してやるから安心してくれ。　　寺子屋の保険医としての給料が払えない分、衣食住はちゃんと保障してやるから」

もこ「・・・」

慧音「妹紅？　　どうした？」

もこ「帰る」

慧音「あっ、おい！　　どうしたんだ!？」

もこ「今日は用事がある！　　帰る!!!」

慧音「何なんだあいつは・・・?」

水鬼「・・・面倒なことになりそうだなあ」

慧音「何がだ？」

水鬼「妹紅、何か激しく勘違いしてるんじゃないか？」

慧音「あいつが？ あいつは鈍いから大丈夫だよ」

水鬼「慧音も相当だと思っけどねえ・・・」

慧音「何のことだ？」

水鬼「いいえ、なんでもないです」

よくない方向に進んでいかなきゃいいが・・・。

午後からは寺子屋。保険医として働くことになった俺を紹介し、それから授業が始まった。授業の内容はいたって簡単、字の書き方、計算の仕方、幻想郷の歴史・・・。まあ、普通に小学校で学ぶ程度のことだ。夕方になったころ、授業は終わる。授業時間もあいまいなようで、いい頃合いになったタイミングで慧音が休憩を挟んでいるだけ。なんとも自由な学校だ。

慧音「明日はサッカーをやるからな。 体操着を忘れないように」

生徒「はい！」

水鬼「サッカーなんてあるのか？」

慧音「ちよつと前に幻想郷ではやったんだ。妖怪たちの間でな」

水鬼「化け物ぞろいの幻想郷じゃ、ちよつとした超次元サッカーが
拌めそうだね」

慧音「まあ、子供たちだからそんなに激しいものでもないが、怪我
するものもいるかもしれない。明日はミズキにも働いてもらうかも
な」

水鬼「今日はちよつと退屈だったから、それくらいで丁度いいかな。
まあ、怪我人が出ないのが一番いいことなんだけど」

慧音「そりゃそうだ」

二人、顔を見合わせて笑う。

。。。。
それを遠くから妬ましい目で見ている者がいることも知らずに。。。

俺と慧音の寺子屋日誌・第一回(2) (後書き)

寺子屋のシーンは書きたいことがたくさんあったため、終わらなくなりそうだったからカットしたら、今度は逆に短くなるという罠。ちょうどいい話の長さで書けるよう精進します。

俺と慧音の寺子屋日誌・第一回(3)

夜。夕食を食べ終えて部屋でのんびりしていると、突然部屋に巨大な白い物体がやってくる。

水鬼「うわっ！ 布団オバケだ！」

慧音「何をバカなことを言っている。ほら、お前の布団だ」

水鬼「いいのか、もらっても？」

慧音「元々ここにあったものだ。来客用に使っていたんだが、妹紅くらいしか使っていないからいいだろ」

水鬼「妹紅・・・？」

慧音「匂いをかいでも無駄だぞ？ ちゃんと干してあるからな」

水鬼「誰がかぐか」

慧音「まあ、冗談はさておき。 どうだ、幻想郷は」

水鬼「ん？ まあ、いい世界だね」

水鬼「外の世界じゃ、こんな星空は拝めないから」

慧音「外の世界は地上に星空があると聞いているぞ？」

水鬼「人工的に作られた星空だけだね、それは」

慧音「 帰りたいとは思わないか？」

水鬼「まあ、そう思うといえば思うのかな。向こうにだって生活があるんだし」

慧音「まあ、それもそうだな」

水鬼「でも、ここにこれてよかったとは思ってるよ」

水鬼「ここには、向こうにはないものがたくさんあるから」

慧音「それは、向こうにも言えることじゃないか？」

水鬼「まあね、でも、大切な何かはここにしかないんじゃないか？」

水鬼「人間が忘れるべきじゃなかった、大切な何かが」

慧音「・・・そうなのかもしれないな。 さ、今日は疲れただろ、ゆっくり休んでくれ」

水鬼「分かってるよ。明日はサッカーなんだから？ 慧音のぎっくり腰が再発しないように祈ってるよ」

慧音「あれはもう大丈夫だ」

水鬼「分からんよ？ 一回なると癖になるって言つから」

慧音「怖い事言わないでくれ・・・」

+++少女移動中+++

水鬼「しっかし幻想郷か・・・とんでもない世界に迷い込んだものだ」

水鬼「ま、でも最初に会えたのが慧音と妹紅で助かったな。人食い妖怪だったら早速殺されてたかもしれない」

水鬼「・・・まあ、とにかく、今日は疲れたし、寝ますか・・・」

水鬼「明日はサッカーか・・・とりあえず、慧音は審判だな。また腰を痛めたら大変だし・・・」

水鬼「本日も、お勤めご苦労様でした」

+++慧音の部屋+++

慧音「ミズキ、か・・・」

慧音「いい同僚にめぐり合えたのかもしれないな」

慧音「ふふっ、明日の授業が楽しみだ」

慧音「外の世界の生き物が次々と幻想入りしてくる異変。 無
法妖怪の話聞いたときは、どうなることかと思っただが、ああいう
奴が幻想入りしてくるなら、少しは明るく見てもいいのかもしれない
」

慧音「それにしても、あの宝玉・・・本当になんだったのだろうか」

+++屋外+++

????「慧音の部屋の明かりが消えた・・・」

????「みずきの部屋も・・・大丈夫だな」

????「よし、大丈夫だろ。 さあて、帰るかな」

ゆかり「あら、妹紅じゃないの、何やってるのかしら?」

もこ「紫!?!」

ゆかり「もしかして、夜這いかしら?」

もこ「バカっ! 誰がそんなことするか!」

ゆかり「ふふ、どうやら、寺子屋に新しい先生が来たみたいね」

もこ「保険医だ。教師じゃない」

ゆかり「外の世界の人なら、それだけで十分教師が務まるわよ」

もこ「……」

ゆかり「外の世界じゃあ、同じ職場の人間と結婚するケースって案外多いらしいわよ」

もこ「慧音が、結婚!?!」

ゆかり「ま、あの慧音に限ってそんなことはありえないと思うんだけど　　って、聞いてないか」

もこ「……」

新しい世界に希望を抱く水鬼。

初めての同僚に心躍らせる慧音。

そして、ライバルの登場に動揺を隠せない妹紅。

果たしてそれは、水鬼の杞憂で終わるのか。

今はとりあえず、慧音の腰のことだけが気がかりな水鬼なのでした。

ゆるゆるぽ。

俺と慧音の寺子屋日誌・第一回(3) (後書き)

そして、結局話が短くなる。

なんかもうすみません・・・。

宝玉の謎を解き明かすエピソードがあっただけど、それやったらもう長編作品になっちゃうのでカットしました。

宝玉の正体については来年あたりまで秘密ということ・・・。

風神少女の住む山で・序章（前書き）

はい、今回も序章の先行公開です。と思いきや、これだけだと話が分かりにくくなってしまったので、第一回（1）も一緒に公開します。

今回はバトルモノ＋恋愛モノです。

まあ第一回じゃ、まともに恋愛してる暇はなさそうですが・・・。
では、今回もよろしくです。

風神少女の住む山で・序章

「あなたには、なにもできない」

「だって、あなたは、人間なもの」

血濡れの黒衣を身にまとう女性は俺を見て、そう言った。
手には、ついさっきまで生きていたはずのもの。

「あなたは、人間だから」

女性の言葉が冷たく突き刺さる。けど、それでも、この悲しみを、痛みを、今、目の前にいるこいつに教えなければ俺はきつと溺死する。

この暗く淀んだ、悲しみの水底で。

気がつくくと、目の前には一本のナイフ。女性が床に落としたのだ。それを拾い上げ、俺は彼女を見た。

「それでも、俺は・・・」

「俺は？」

「おまえを、殺したい」

「???」 出来るのかしら?」

目の前に落ちている骸は俺の家族。目の前にいる女性はその死体の一つを抱え、俺を見ている。俺は、その先にいる、得体の知れない化け物に向かって走る。

「???」俺はっ！俺はあ！！」

妖怪「！！」

声になっていない化け物の雄叫びが、周囲に響き渡る。決着は一瞬だった。雄叫びに驚き、立ち止まった俺の頭上を飛び越えて、女性が妖怪を一蹴したのである。

「???」何か、出来たのかしらね?」

「???」・・・」

「???」あのまま行ったら、きっとあなたは死んでいた。分かるでしょう? 人間なんてそんなもの。所詮は私たちに勝てるよ
うなものではない」

「???」・・・」

「???」それでも、あなたはまだ私に刃を向けるのね・・・」

「???」家族が死んだんだ・・・。あの化け物に、お前たち妖怪に

殺されたんだ！」

「???」「参ったわね。私は人を殺す趣味なんてないんだけど」

「???」「死ねえええええ！！」

しかし、ナイフは彼女の眼前で止まる。彼女の扇子がたやすくナイフを押さえ込んだのだ。驚いたその瞬間には、もうナイフは砂のように風に消えていた。

「???」「!?!」

「???」「言っただけでしょう？　これが妖怪の力……あなたとは比べ物にならないくらいに、途方もない力よ」

「???」「俺は……お前たちを許さない」

「???」「でしようね。許してほしいなんて思わないわ」

「???」「どうすればいい？　どうすれば、俺は力を得られるんだ？」

「???」「あなたが力を得るのは、この世界では無理よ。その方法があったとしても、あなたはそれを拒むでしょう」

女性は笑う。そして、俺　　降神彰人に言ったのだ。

「???」「よその世界に行けばいいのよ」

風神少女の住む山で・序章（後書き）

今回、結局、全員が???という名称だった・・・。

誰が誰だかわかりにくいと思います。登場しているのは黒衣の妖
怪と彰人さんだけなので、口調とかで判別してくださいね。

風神少女の住む山で・第一回(1)

湖を越えた先にある、古びた屋敷、紅魔館。そこは吸血鬼の住む館と呼ばれ、人間たちが近寄ることのない場所。ある日、そこで事件は起きた。

フラン「あははっ！ もつと遊ぼうよ！」

咲夜「　　っ!？」

フランドール・スカーレットが地下室を抜け出して、屋敷を飛び出したのである。それを止めようと後を追った咲夜とフランドールの空中戦。戦いは始終、フランに圧倒されていた。

フラン「いつくよーっ!! 禁忌『レーヴァテイン』!!」

咲夜「　　くっ!」

紙一重で回避し、反撃のチャンスをつかがう咲夜。だが、そんな隙を微塵も与えない彼女の猛攻にただ耐えることしか出来ない。

咲夜「仕方ありません。　　少々本気で相手をさせてもらいます」

咲夜「メイド秘技『殺人ドール』!」

ナイフが一斉にフランを取り囲む。だが、フランは冷静だ。的確に隙間を見切り、そこから咲夜までの道を導き出したのだ。

フラン「甘いよね、咲夜」

咲夜「申し訳ありませんが、そうでもありませんわ」

フラン「くたばりなさいっ！！」

咲夜「完全殺人『アイアン・メイデン』！！」

フランのレーヴァテインが咲夜の体を切り裂く前に、咲夜は勝負を決めていた。フランの目の前には、刺さるまでコンマ一秒前のナイフ。そして、咲夜はフランの真後ろ。

咲夜「少々おいたが過ぎましたわね。妹様」

フラン「痛いわね」

咲夜「!?!」

フラン「銀のナイフ。吸血鬼にはちょっと痛い代物よ」

フラン「痛いなあ」

フラン「一人、倒したくらいで終わらないのは分かってるでしょう？」

咲夜「・・・フォーオブアカインド、ですか」

三人のフランが、咲夜を見て笑っている。そして、たった今、倒したはずのフランも、まるでダメージなどないような風に振り返って咲夜を見たのである。

フラン「超禁忌『レーヴァテイン×4』!!」

咲夜「　　っ!!」

フランの攻撃が、一斉に咲夜を襲う。辺り一面紅く照らしだすその強大な力は咲夜を一撃で倒し、湖に落下させる。それを、紅魔館に向かうために空を飛んでいた一人の少女が見ていた。

魔理沙「・・・これは、面倒な夜になりそうだぜ」

+
+
+

さかのぼること数分前、何かいいスクープでもないかとあちこち飛び回っていた妖怪の目の前に、一人の少年が降って来たのだ。飛んでいる背中に突然落ちてきたのだから、当然バランスを崩し、真下の森に落下する。

彰人「いってー・・・。くそ、なんなんだよ、あのババア」

???「あやや・・・いつたいなんなんですかあ・・・」

彰人「ん？ 誰だお前は」

???「いいからその尻をどけてください。動けません」

彰人「・・・お前、妖怪か？」

???「なんでもいいですからどいてくださいー!!」

刹那、風が巻き起こり、少女の体は宙に舞う。空中で体をひねり、こちらに向き直ると、空中で静止し、こちらを睨んでいた。足にはなにやら風の塊のような物体がくっついている。どうやらあれで浮いているらしい。

???「あなた、何者なんですか!？」

彰人「妖怪に恨みのあるものだ」

???「・・・それで、私の上に落ちてきたのですか？」

彰人「それは偶然だ。俺だってわけがわからないんだ」

家族が妖怪に殺され、同じく殺されそうになった俺を守った妖怪。彼女が言った『よその世界』とは、どうやらここらしい。

あの後、突然やってきた紫色の服を着た妖しい女性に引つ張られ、気がつけばここにいたのだ。何の状況説明も受けていない。ただ、あの黒衣の妖怪が、紫の妖怪のことを「ゆかり」と呼んでいたこと

だけは覚えている。

あや「あ、ご挨拶が遅れました。私、射命丸文と申します。新聞記者をしています」

彰人「俺は降神彰人。人間だ」

あや「それで、わけが分からないとは？」

彰人「お前に話す必要はないだろ？」

あや「あやや・・・随分な態度ですねえ」

あや「ここがどこで、どうすればいいのか、あなたは分かってないでしょう？ そんな状態で私がどこかに行ってしまったら、あなたはこの森で野垂れ死ぬしかないんですよ？」

彰人「・・・」

あや「ここは情報交換と行きましようよ。私はあなたに安全な場所までの行き方を。あなたは、私にこれまでのいきさつを」

あや「むしろ、あなたは得をしていると考えるべきかと思いますが？」

彰人「分かったよ」

彰人はこれまでの経緯を文に話した。妖怪に家族を殺されたこと、

黒衣の妖怪に助けられたこと、そして、「ゆかり」という紫の妖怪によってここにつれてこられたこと。

文はそれを聞いてふむ、と神妙な顔をした。ろくでもないことの始まりに首を突っ込んだみたいですね、と笑っている。

あや「あなたは、どうやら八雲紫によって幻想郷に引き込まれたようですね」

彰人「幻想郷？」

あや「この世界のことです。あなたの力が欲しいという言葉に対する答えとでも言いましょうか」

彰人「????」

あや「幻想郷にいる人間は妖怪の影響を受けて力に目覚めることがあるといえます。それも、妖怪とも互角に渡り合える力を得る場合もあるそうです」

彰人「黒衣の妖怪の言葉の通りってわけか」

あや「その黒衣の妖怪っていうのが気になりますねえ・・・一体なんなのやら・・・」

外の世界の情報は一切入ってきませんからねえ。文はそう言っただけ空を見上げる。

あや「もう夜も更けてきましたね」

人食い妖怪が出る前に里

に向かいます・・・か」

空に何かを見つけたのか、文は手を振る。彰人も同じように空を見上げると、一直線にこちらに向かってくる少女がいるではないか。

「????」「文様！ 大変です！ 紅魔館でとんでもない事件ですよ！」

あや「椀？ どうしたって言うんですか？」

もみじ「フランさんが紅魔館を脱走したそうです！ 妖怪の山に向かっているようなんです！！」

あや「・・・何ですって？」

文の表情を見て、ただならぬ状況であることはすぐに分かる。この世界でも同じように事が始まるのだと、彰人は予感しているのだ。

風神少女の住む山で・第一回(1) (後書き)

空から女の子が降ってきた。なんてジブリ作品もありましたが、今回は男の子が落ちてきましたね。

そして、今作登場のオリジナルスペカは『東方幻想記三部作』の第一作「東方妖紀行」に登場するスペカです。詳細についてはそちらの小説の最後に方にある「グリモワールオブマリサ？」をご覧ください。

風神少女の住む山で・第一回(2)

天狗の里についた頃には、既に戦闘が始まっていた。

哨戒天狗と山の妖怪たちが一丸となつてその小さな女の子

フランドールと戦っている。しかし、それでも彼女の圧倒的な力に
ねじ伏せられ、戦況は圧倒的に山の妖怪たちのほうが不利であった。

空を飛べない彰人は文に背負われて妖怪の山にある天狗の里に連
れてこられた。緊急事態であるが故、彼を人間の里に連れて行く暇
などなかったのだ。文は彼を椀に預けると、すぐに戦列に加わろう
と飛び立つ。椀は空を見上げ、ずっと戦況を確認している。そして、
明らかな勝敗が見えたのか、彼女は彰人の手を引き、山の神社に向
かいますよう、と言ったのだ。

彰人「なに言ってるんだよ？ あれを放置していくのか？」

もみじ「ここにはあなたも巻き込まれます。神社まではさすが
に彼女も行かないと思います。あの子は文様がきつと何とかしてく
れるでしょうから、安心してください」

彰人「バカかお前。あの状況を見て俺がそんな言葉を信じると思っ
てるのか？」

もみじ「……」

妖怪たちの一斉射撃が一瞬で相殺される。フランはそれらを弄ぶ
が如く、一人ずつ落としていく。戦列の最前線でフランの行動を妨
害し、天狗たちをリードする文は、始終、分身した三人のフランか
ら攻撃を受けていた。

あや「・・・さすがは吸血鬼の妹。その力は桁違いですね」

あや「ですが、私も負けてはいませんよ」

フラン「あは、まだ動けるんだ？」

フラン「もうその足、動かないんじゃないかしら？」

フラン「そろそろその翼も、もぎ取ってあげようか？」

あや「出来るものなら、やってみなさい!!」

フランの周囲を取り囲む文の弾幕。身動き取れなくなったその瞬間に、残りの天狗たちが一斉に動き出す。超巨大な竜巻を起こし、フランを一気に引き裂いたのだ。

あや「どうですか？ 天狗の団結力を思い知りましたか？」

フラン「甘いわね」

あや「!？」

フラン「禁忌『レーヴァテイン』!!」

今倒したフランは三体。残り一体を倒すまで戦いは終わらない。しかも、気がつけばフランはまた四人に増えている。どうやら全員を同時にしとめなければ終わらないらしい。

あや「自分の弱点は、おみとおしですかっ!？」

フラン「当然じゃない。もう数百年も私は私なの。いい加減、私のことくらい分かってくるわ」

フラン「だから分かるのよ」

フラン「あなたたちじゃ、私には勝てないの」

フラン「絶対禁忌『禁じられた遊び×4』!!」

四人が一齐に放つ十字架。それらは一直線に文に向かう。回避を試みるが、そのあまりの密度について文も被弾する。

あや「くっ……うあああ!!」

フラン「あらま。まだ死んでない」

フラン「でももう虫の息だね」

フラン「こんなのと遊んでもつままない」

フラン「じゃあ、壊しちゃおう？」

体に突き刺さった十字架を抜き、文は笑う。全身から血が流れ、原型がなくなりに引き裂かれた衣服も既に血で赤く染まっていた。それでも、彼女は守りきったのだ。自分の翼だけは。

あや「さあ、皆さん退きなさい」

フラン「!？」

あや「幻想郷最速の名に相応しい、私の本当の戦いを見せてあげます」

文「幻想風靡!!」

突如、目にも留まらぬ速さで一体のフランが撃墜される。気がつけば、文の姿はどこにもいない。二体目、三体目と次々にやられていく。だが、フランは冷静だ。次に自分のところにやってくるとわかっていたら、かわすのなんて容易いこと。闘牛士のような鮮やかさで文の体当たりを回避すると、それを同じ速さで文のすぐ隣を飛び始めたのだ。

文「なっ!？」

フラン「傷つきすぎたわね。

あんよがふらふらだわ」

文「くっ!　だが、まだです!」

急停止し、文はフランの進行方向の先に竜巻を起す。あのスピードでは止まれるはずがない。だが、それも失敗だった。とうよりも間違っていた。竜巻はフランによって破壊され、いとも容易く突き破られたのだ。驚く文にフランは一気に接近する。

フラン「えーっと、げんそー、ゆーび?　だっけ?」

文「!？」

フラン「ま、名前なんてどうでもいいか」

そのままの勢いで文に突進する。そのまま森に落下し、文は動かない。山の妖怪たちもそれを見てすっかり戦意喪失したのか、動かない。フランはつまらない、と呟き、手をかざす。

フラン「つまらないおもちゃなんていらさないわ」

だが、その手を握るその瞬間に、里のほうに何か動きを見つけたフランは、興味がそっちに移ったのか、里のほうをじっと見つめた。

彰人「妖怪同士の殺し合いになんて興味はないけど、でも、だからって、何もしないでいられるか！」

彰人「俺は、お前を許さない！」

もみじ「ちょっと、暴れないでください！ バランスが崩れます！」

フラン「下っ端天狗と、あれは、人間の子かしら？」

フラン「なあに、あれ。空を飛べないからって天狗の背中に乗って戦う気なのかしら？」

勝てるわけないでしょう。そんなのじゃ。フランはそう眩きながら妖しく笑っていた。そして、周りの妖怪たちも皆同じ気持ちだった。なにせ、椀が彰人を背負って飛んできたのだから。

もみじ「あまり接近すると危ないです。彼女はかなり強力な剣を持っているので」

彰人「でも、やるしかないだろ？」

椀「・・・わかりましたよ。後悔しても、知りませんからねっ!!」

フラン「近づけるかしら？ 禁忌『恋の迷路』!!」

椀「!？」

彰人「かわせ！」

もみじ「そ、そんなこと言われても！」

彰人「右だ！ 右に逃げるんだ！ 隙間があるだろ!？」

椀「あっ・・・あそこですね！ 分かりました！」

言われるがまま、弾幕の隙間に入り込む椀。彰人の的確な指示に、椀も素直に驚いていた。あの刹那のタイミングで弾幕の隙間を見つけて出すとは、と。

彰人「ばかつ、違う！ そっちに行くと動けなくなるだろ！」

もみじ「じゃ、じゃあどこに行けばいいんですか!？」

彰人「ああもう、じれったい。お前は俺が落ちないようにバ
ランスだけ取ってればいいから！」

もみじ「へっ？ つて、ええ！？」

不意に、椀の背中の上で彰人が立ち上がったのだ。まるでスケー
トボードでも操るかのごとく、椀の背中の上で彼女を操作したのだ。
彰人が落ちないようにバランスを制御すると、それだけで椀は弾幕
の隙間まで導かれていく。それを見たフランは大笑い。

フラン「あははっ、おもしろーい！ 人が妖怪を乗り物にしてるう
！」

もみじ「こんな屈辱……。ですが、これしか方法がないのなら」

椀は不満げだったが、事実、弾幕をかわす技術も知恵も椀にはな
い。仕方なく、自分の剣を彰人に預ける。

彰人「これは？」

椀「彼女の心臓に突き立ててください」

彰人「お前っ！ そんなことしたら死んじゃうだろうが！！」

椀「吸血鬼がそんなことで死にますか。第一、それくらいの
衝撃を与えないと彼女は戦闘不能になっただけじゃありませんよ？」

彰人「 分かったよ」

そろそろ恋の迷路も終着地。フランの目の前まで接近できる。次の弾幕が始まるまでのその刹那の間に、この刃を突き刺す。椀を巧みに乗りこなし、彰人はフランへの接近を試みた。

彰人「3、2、1・・・。 　　ここだっ！！」

弾幕が止むその一瞬。彰人は刃をフランに向けて突進する。

だが、それはたやすく止められた。

フラン「私も、剣持つてるんだよ」

椀「レーヴァテイン・・・！？」

彰人「なんだよ。その光の剣、実体の武器にも干渉しやがるのか」

フラン「大正解！」

手に持った刃は真つ二つに切り裂かれる。とっさに椀が彰人を振り落とし、最悪の事態だけは免れたものの、彰人の体は森へと落下していく。それを追いかけて急降下する椀。

椀「くそっ！ 追いつけ！！」

このままでは間に合わない。

俺は死ぬのだろうか？

彰人は思う。このまま、結局、妖怪を倒すことも、敵を討つこともできないまま、無力な人間のままで……。

彰人「……いや、そうじゃないだろ……俺は」

俺は、妖怪を倒すまで。力を得るまで、生きるんだ！

あや「彰人さん!!」

森から飛び出した文が彰人の体を受け止めて、再び空に舞う。急降下する勢いのまま、落下していく椀もついでに受け止めると、なんてバカなことをしているんですか、と文は怒った。

あや「あなたは人間なんです。出来ない事をするんじゃないやありません!!」

彰人「無理じゃないさ」

あや「?????」

彰人「　　もう大丈夫だ。一人で、飛べる」

あや「なにをバカな　　って、ええ!？」

文から離れた彰人は、彼女と同じ高さで静止しているではないか。そして、次の瞬間、折れてしまった椛の剣を持って、フランのほうまで飛んでいったのだ。

フラン「あら、ホントは飛べたのね？」

彰人「違う。　　たった今、飛べるようになったんだ」

気づけば、椛の剣は、すっかりもとの形に戻っているではないか。それを見た文は、一人呟く。

あや「まさか・・・本当に妖怪以上の力を得たというのですか!？」

彰人「さあ、第二ラウンドといこうか」

風神少女の住む山で・第一回(3)

フラン「レーヴァテイン!!」

彰人「甘い!」

フラン「くそっ、まだまだ! 禁忌『カゴメカゴメ』!!」

彰人「まだまだ!」

次々とフランのスペルカードが攻略されていく。もともと空中戦の素質があったのかもしれない。全方位から飛び交う弾幕も、いともたやすく回避して見せた。そして、フランとの距離もそれに伴ってどんどん近くなっていく。

ついに奇立ちが隠せなくなったフランは、弾幕をやめ、レーヴァテインだけで彰人に挑みだす。しかし、そうなると形勢は逆転した。なにせ吸血鬼と人間。力勝負ではどうしても分が悪い。

フラン「弱い! 弱いわよ!」

彰人「くそ、やってくれるじゃないか」

フラン「これでお終いだあ つ!!!」

大きく上段に構えて、一気にそれを振り下ろす。勢い余ってその

まま空中で一回転して、どうだ、とフランは彰人を見る。だが、そんな見え透いた攻撃に当たるほど愚かではない。一気に距離を開けて回避した彰人は、そうか、そんなこともできるのか、と呟いていた。

フラン「うー……。もう、あんなのいらない!!」

フラン「粉々になっちゃえ　　っ!!」

フランが手をかざし、握る。その刹那、彰人の持っていた杖の剣が砕け散ったのだ。

彰人「お、おいおい……。それはシャレにならないだろ……。？」

フラン「今度はお前だ!　消えてなくなっちゃえ!」

彰人「じゃあ、その前に実験を一つ」

フランが再び手をかざす。だが、その瞬間、目の前で起きたことに驚いて、その勝利のチャンスを逃したのだ。

フランの目の前には、フランと同じ剣を構えた、彰人の姿があった。

彰人「禁忌『レーヴァテイン』!!!」

フラン「そ、そんなの!?!　　だ、だって、私、ちゃんとスペ

ルカード持つてるのに!?! どうしてお前がそれを使えるのよ!?!」

彰人「 悪いな。作らせて貰ったよ」

フラン「な、なによそれっ!?! でたらめにも程があるわ!?!」

彰人「お前が、言うなっ!?!!!」

フランの剣で、彼女の体を弾き飛ばす彰人。一撃でもかなりの威力なのか、フランの小さな体はもうそれだけでボロボロになっていた。

フラン「うー……」

うめく様に呼吸をしている。さすがにこれは強すぎたか、と彰人も少しあせった。だが、そこに追い討ちをかけるかのように、はるか上空から超巨大なレーザーが落ちたのだ。

彰人「……なっ!! バカ! せっかく手加減してたのに!! 死んだらどうするんだよその魔女!?!」

フランの真上を飛んでいたのは、箒にまたがった魔女。 魔理沙である。文と桜は突然の魔理沙の登場に驚いていたが、彰人は一切驚いてはいなかった。正直な話、彼女はずっとそこにいたのだから。

彰人「光学迷彩か、それは？ さつきからちらちら気になってたんだ」

魔理沙「河童のマークの発明品だけ。 お前、誰だか知らんが強いんだな」

彰人「それより、お前 あいつはどうなったんだよ？」

魔理沙「ああ、安心しろ、あんなので死ぬほどやわじゃないぜ」

それから少しして飛んできたメイド服姿の妖精たち。 辺りをきよるきよるして、フランを見つけると、彼女を抱えてそそくさと逃げ去ってしまふ。 なんなんだ、あれは、と訊ねる彰人にお迎えだぜ、と魔理沙は笑っていた。

魔理沙「私は魔理沙だ。 お前の名前は？」

彰人「降神彰人」

魔理沙「降神彰人な。 覚えてぜ」

今度は私と弾幕ごっこだけ、と言い残し、妖精メイドの後を追っていく魔理沙。 一体なんだったのか、と考えて、すぐにやめることにする彰人。 不毛な思考はやめておいたほうがよさそうだ。

彰人「ここは、俺の住んでた世界とは何もかもが違う。 それだけだ」

フランの襲撃から一時間ほど経過した。天狗や山の妖怪たちの手当てに追われ、すっかり彰人は放置されている。しばらくして、手当てが終わった文が彰人のほうにやってきた。

あや「やあ、ご苦労様です」

彰人「ああ。　　っていうか随分な服だな。ほとんど裸じゃないか」

あや「あはは・・・酷くやられちゃいましたからねえ」

彰人「直しておくよ」

彰人がそう言うと、たちまち文の服は元通りに直ってしまったのだ。驚く文に、どうだ、と得意げな彰人。

あや「いきなり力に目覚めてしまいましたね。　　どういう能力なんですか？」

彰人「まあ、よく分かんないけど、想像したものが目の前に出て来るんだ。　　どうやら怪我とかを治すようなことはできないみたいだけど、あの白い天狗の刀も、元の形を想像したら直ったし、あの吸血鬼の剣も、あれ自体の生成はできなかったけど、あの子の持っていたカードをイメージしたらできたんだ」

あや「まさか、スペルカードをコピーしたって言うんですか!？」

彰人「これがその証拠。空を飛んでいたのだった。文がやっていた空気の玉みたいなので浮遊する方法を真似して作っただけだし」

スペルカードを見せる彰人に、文は呆れてものも言えなくなる。その場に座り込み、彼の持つとんでもない力に驚き、そしてようやく出た一言。

あや「……は。あー……驚きすぎて変な汗が止まりません」

彰人「なんだそりゃ」

あや「えっと、じゃあ、もしかして、妖怪への復讐も始めちゃう感じですか？」

彰人「……」

あや「彰人さん？」

彰人「少し考えてみる。少なくとも、家族を奪った妖怪は嫌いだし、許せない。けど、文や白天狗と一緒に戦ってみて、なんか、違うなって思えてきた」

あや「……ほ」

彰人「なに安心してるんだよ？」

あや「あーいやいや。なんでもないですよ？ あー、そっだ、今日

は私の家に泊まっていてください。もう夜も遅いですし、人間の里に行くのは明日にしましょう」

彰人「文、お前、さっきからなんか態度が違わないか？」

あや「そ、そんなことないですよ。 あはは・・・」

もみじ「文様！ 皆さんの手当て、終わりました！」

あや「あーそうですか・・・。あ、あのですね、椀」

もみじ「彰人、今日はどうするの？ 泊まるとこないなら私の家に泊めてあげようか？ 彰人は天狗の里を守ってくれたんだもの、今日はいつぱいもてなしてあげるよ」

あや「も、椀！？ いきなり呼び捨て!？」

彰人「あー、でも、文が泊めてくれるって」

もみじ「ダメですよ！ 文様ってば、お部屋がいつつも汚いですから。 その点、私の家はちゃんと毎日掃除してますからきれいですよ。お布団も今日、干したばかりですし、文様の家の押入れに何年もしまったままのお布団に寝たら体を壊します」

あや「・・・椀・・・」

彰人「・・・じゃあ、お言葉に甘えようかな」

もみじ「やった！ じゃあ、文様。彰人はうちに泊めますので」

あや「ちょ、ちょっと待ちなさい椛！ 事の重大さを分かっているのです……か……」

もみじ「あ、自己紹介まだでしたね。私、犬走椛といいます」

彰人「 あー、よろしく。ところで、文はあのままにしておいていいの？」

もみじ「いいんですよ。明日にはもう傷も治ってるでしょうし」

あや「あー……。ダメだ。完全に恋する乙女だよ、あいつ」

あや「幻想郷の全妖怪の命運を握っているとも知らないで、あの子ってば……」

彰人が妖怪に対して復讐するというのなら、止められるのは連れてきた張本人しかないようなレベルの力に目覚めてしまった彰人と共に戦い、すっかり彰人に惚れてしまった椛。

そして、彰人の気持ち一つで自分の命がなくなってしまうということに気づき、ただただ恐怖する文。

今はただ、椛が彰人に失礼なことをしないかだけが気がかりであった……。

どんどはね。

おまけ

咲夜「お屋敷を抜け出した罰として、お尻ぺんぺんです」

フラン「うゝん！！ それだけは嫌あゝ！！」

咲夜「抵抗しても無駄ですよ？ 逃げても時間を止めて追いつきま
すからね」

フラン「さくやゝ！ ごめんなさいゝ！ だから勘弁してゝ！！」

咲夜「ダメです。さ、せめて潔く自分でお尻を出しなさい」

+++少女お仕置き中+++

咲夜「今度、勝手にお屋敷を抜け出したら、今の倍、叩きますからね」

フラン「ううう……いたい……」

フラン「……こんなことになったのも、あの人間のせいだわ」

フラン「覚えてなさい……絶対に仕返ししてあげるんだから!!」

353

咲夜「ふう……妹様にも困ったものです」

レミリア「咲夜、鼻血が出てるわよ」

咲夜「あら、これは失礼」

レミリア「今夜は何かあったのかしら？ 随分と騒がしかったけど」

咲夜「ええまあ、それなりに色々」と

咲夜「とっても楽しい夜でしたわ」

レミリア「鼻血、また出てる」

風神少女の住む山で・第一回(3) (後書き)

さて、今作も洗司さんのように主人公最強設定になってしまった。能力は「ありとあらゆるものを創造する程度の能力」です。なんでも創造できるなら、スペカくらいコピーするのは簡単でしょうしね。

ちなみに、ウチの東方二次創作においてのスペカの設定はただの弾幕の使用宣言に用いるだけでなく、あれ自体に霊力がこめられており、カードさえあれば誰でもそのカードの弾幕を使ってしまうようになっていきます。また、まだ未使用のスペカの霊力を暴走させることで霊撃を使用します。

この時代の幻想郷には、スペカ戦で疲れきった者を倒そうとする無法妖怪がいるので、その対策です。

その分、スペカの重要性が増していますので、盗難注意です。幻想郷も危険な時代になったものだ……。

ここに
ある日々と、魔法使い・序章（前書き）

どうも、例の如く序章を先行公開します。

今回は幻想入りする前のお話を序章に持ってきた。

まあ、読んでやってくださいな。

ここにある日々と、魔法使い・序章

ただ、ぼんやりと川の流れを見つめていた。

ここが何処なのか、私は知らない。

そして、この川の流れが何処に行くのかなんて、知る由もない。

ただ、ぼんやりと、川を見ていた。

対岸は何処までも遠く、まるで海みたいな川だ。

でも、波打っていないから、これは川なのだろう。

ふと、気づく。私はどこかに向かって歩いていると。

この先には、なにがあるのだろうか？

「???」あなたはまだ、帰るところがあるだろうか？

そんな声を、聞いた気がする。

気がつけば、見知らぬ場所にいた。いや、私はその場所を知っている。ここは 近所の川原だ。遠くで子供たちが野球をしている声が響いていた。

ゆっくり起き上がり、私は足元に転がっていたボールを拾う。どうやらこれがぶつかって目が覚めたらしい。サッカー少年がすみませーん、と遠くから走ってくる。

????「いくよーっ！」

それっ!!!」

ボールを高く蹴り上げて、少年に渡す。ありがとうございます、とふかぶかお辞儀する少年に笑顔で手を振って、さて、と私 蓮香佳奈は呟いた。

佳奈「次のアルバイト、探さないとなあ・・・」

世の中、第二次産業革命なんて嘘だ。世間の目は非常に冷たいもので、元自衛隊員、なんて経歴の女性を一般事務とかで雇ってはくれない。結局、退官前の職業訓練なんて、一切意味などなく、ましてや天降りなんて出来るわけもなく、今ではすっかり職にあぶれたフリーターである。

佳奈「今、世界は日本を中心に技術革新を始めているっ！なんて、どっかの経済学者が言ってたけど、その恩恵が一般に浸透するのなんて、十年先か、二十年先か・・・」

世間じゃこの年の女なんて嫁に行き始めるころだというのに、私はずっと男に囲まれた職場だったにもかかわらず、縁はなく。アルバイト情報誌を片手に、流行遅れの服装で町を練り歩く私のような人間には、ナンパなんてまるで他所の国の言葉のよう。

佳奈「あー・・・もう。いつ他所の国にでも行くの？」

世の中には傭兵、と言う職業もある。それなりに慣らした私だ、出来なくもないと思う。でも、両親が泣くのでやめておこう。

あーあ。どこかにこんな私を受け入れてくれるような世界はないものかしら。

なんて、思ってた刹那、目の前に一台のダンプカー。

佳奈「!?!」

しまった、赤信号。考え事をしていて見逃した。

もう遅い。残念だけど、ここまでのようです。

そして、今に至る。

佳奈「あー……。川の流れが綺麗だねえ……。」

ただ、ぼんやりと、川を見ているしかない私であった……。。

1111にある日々と、魔法使い・序章（後書き）

第二次産業革命、とは東方幻想夢以外の私の小説に登場する用語です。

日本国内での魔術の発見をきっかけに起こった、大きな技術革新です。いわゆる魔科学というものが大成し、世の中には魔術製品とかが溢れ、世界は日本を中心にして、新たな時代に進もうとしている頃です。

まあ、スティールメイデンのようなロボットがある時代ですから、これくらいの技術革新は当然のこと・・・せふせふ。

それよりも、佳奈さん死んじゃったよ!?

でも大丈夫。きっと何かが起こるさ。幻想入りシリーズだもの。

ここに
ある日々と、魔法使い・第一回(1) (前書き)

今作はせつかく魔法使いというタイトルなので、

ウチの小説内の魔法概念に関する説明も織り交ぜてみました。

詳しくは一番最後のあとがきで。

「ここにある日々と、魔法使い・第一回（1）」

佳奈「ここはどこなんだろうか……」

佳奈「川、なんか、夢の世界みたい」

佳奈「さて、ここにいっても何にもならないし、歩いてみようかな」

川の上流に向かって歩いていく。この道を行けばどうなるものか、行けば分かるさ、なんて誰かが言っていたようなことを思い返す。

佳奈「うーん。それにしても、ホントに川なの？ これ」

あまりの川幅の広さに正直驚いていた。対岸がまるで見えないなんて、こんな川、現世じゃありえないね。やっぱりここは別世界なんだ、と改めて思う。

佳奈「記憶がはっきりしてきたわ。おかげで、自分が死んだって実感してる。……はあ、やるせない」

佳奈「あーもう……。冷蔵庫に昨日買って来たロールケーキ、半分も残ってたのに。出かける前に食っておけばよかった」

佳奈「家の片付けもしておけばよかった。洗濯物たまったままだよ。あれ、見られるのかー。恥ずかしいなあ」

死んだ人間とは思えない気楽さで、さっさと川の上流を目指して歩いていく私。だって、もうなるものになっちゃったんだもの、いまさら考えたって無駄無駄。赤信号を無視した私に非があるんだし、特に怨めしやな事もない。いつそ転生してさっさと人生やり直したいくらいだ。

佳奈「あら、あそこに人がいるね」

佳奈「おい。あなたも死んだ口の人かしらーっ!？」

手を振ってそっちに向かう。だが、近づくにつれて、違うということに気づいた。やばい。そんな気がして、踵を返す。

????「待ちなよ」

佳奈「あー・・・逃げちゃダメ？」

????「ダメ」

佳奈「あなたから、やばそうな匂いがするのよね」

????「へえ、そりゃ、勘のいいことで」

佳奈「やっぱ、逃げちゃダメ？」

????「ダメだよ。あんたは死んだんだ。

それも、こことは

管轄外でね」

佳奈「管轄外って・・・地獄に管轄があるのかしら？」

????「ここは幻想郷の地獄の入り口。あんたが行くべき先は外の世界の地獄だよ」

佳奈「じゃあ、丁重に送り返して　くれないみたいね」

????「ああ。こんなケースは初めてなんだ。　あたいの上司も、地獄省の役人たちも、あんたのことを調べたがっている」

????「死体がどうして、幻想入りできたのか」

佳奈「幻想入り・・・？」

????「さて、これだけ知れば今は十分だろ？」

????「その体ごと、預からせてもらうよ」

佳奈「冗談。私の体は私のものよ。　それを奪う権利は、あんなにゃ、ないわね」

謎の女性は突如、巨大な鎌を取り出した。しかし、私だって負けてはいない。ポケットにたまたま入っていた十円玉を取り出して、不敵に笑う。

????「そんな小銭で、この大鎌に勝てると思ってるのかい!？」

佳奈「うんにゃ、勝てるなんて思ってないよ」

佳奈「けど、脅しをかけるにゃこれで十分さ」

佳奈「必殺！ 『空間十円傷』！！」

十円で空をなぞる。すると、どうだろうか。あの、黒板に爪を立てた時のような不快な音がするのだ。ああ、背中がぞわぞわする。

佳奈「はい、おまけ」

騒音に動きを止めた謎の女性に、十円を投げつける。頭に直撃し、かん、と乾いた感じのいい音が鳴った。うん、いい空洞音だ。そして、ダツシュで逃げる。

????「あ、コラ！ 待ちやがれ！！」

佳奈「待てと言われて、待つバカは、私くらいだね」

立ち止まり、再び女性のほうに向き直る。そして次に取り出したのは、道端で拾った軍手の片方。なんで道に落ちてるのか……。つついっ拾って、再利用してしまう貧乏性が怖い。

佳奈「必殺！ 『空間一本背負い』！！」

????「なっ！？ うわあああ！！」

空間を掴んで、その範囲ごと思い切り川に投げ込んだ。どうだ、見たかこの異能力。地獄の死神さんも一ひねりだ。

「????」やつてくれるじゃないか・・・」

佳奈「うわ。まだ諦めてない」

「????」こうなったら、遠慮する必要はないねえ・・・」

佳奈「何をなさるおつもりで？」

上段に構え、謎の女性は力をためている。その間、私は逃げる算段を整えていた。だが、ふと気になって訊ねる。

佳奈「そういえば、お名前はなんだい？」

「????」・・・」

佳奈「教えてくれたっていいじゃない」

こまち「小野塚小町。三途の川の水先案内人だ」

小町「死符『死者選別の鎌』!!」

上空から落下してくる巨大な斬撃。それを受け止めて、私は再び不敵に笑っていた。

こまち「な、何、まさか、受け止めたのかい!？」

佳奈「ごめんねえ。力任せじゃ、私に勝てないよ」

佳奈「奥義『空間崩し』!！」

軍手をつけた手で斬撃を殴る。すると、その攻撃は空間後と崩れ落ちた。その衝撃の強さからか、小町の鎌も粉々になっている。

こまち「これは・・・どうやらあたいの手に余るねえ」

佳奈「じゃあ、見逃してよ」

こまち「そういうわけにも行かないのさ」

小町「この仕事が終わったら、一ヶ月も特別休暇をくれるって言うんだ。あんたは絶対に連れて行く」

佳奈「げ・・・。しつこさにはそういう理由があるんだ」

こまち「本気で行くよっ!！」

佳奈「ちょ、ちょい待ち! こっちはもうネタ切れで・・・」

空間崩しを使ったら軍手の強度じゃもうボロボロになってしまふ。ああ、せめてゴム手袋ならもう一回くらいは使えるのに。

ポケットを漁り、何かないかと探す。でも、何も入ってない。ああもう、私も手を入れたら何でも出てくるようなポケットが欲しい。

こまち「くたばりなっ!!」

一気に距離をつめる小町。だが、刹那。私と小町の間一本、槍が刺さったのだ。

???「それを使いなさい!!」

佳奈「・・・オツケー!!」

槍を取り、小町に向ける。そんなものが扱えるのかい、と余裕な小町。だが、笑っていられるのも今のうちだ。

私は、刃物を持つと性格が変わるんだ。

佳奈「超奥義『空間裂傷』!!」

槍を振り回し、空間に傷をつける。すると、そこから一気にエネルギーが噴出し、小町に直撃した。

佳奈「あーあ。世界が泣いてるよ」

痛いつてさ。倒れている小町の顔の横に槍を刺し、彼女を見下ろす。

こまち「わかった、降参だよ」

佳奈「分かればよろしい」

私は、槍を投げた少女を見て、手を振る。まさに、ナイス横槍。

???「あの人が、聖の言っていた、生きる死者・・・」

???「まさか『第三法の儀』を再び執り行う日がこようとは、夢にも思わなかった・・・今度は、上手くいくといいんだが」

1111にある日々と、魔法使い・第一回(2)

少女は、槍を返すなり、それを翻して私に向けたのだ。

????「あなたは私と共に来てもらいます」

佳奈「いきなりでごあいさつだ。 わけを話してよ」

しょう「失礼しました。私、寅丸星と申します」

佳奈「寅丸？へえ、寅なんだ」

しょう「そんなことはどうでもいいです。 あなたは、私の主に呼ばれているのです。すぐに私と共に来てください」

佳奈「あなたの主人、ねえ・・・牛かしら？」

しょう「今、干支で考えましたね」

佳奈「寅の上は丑でしょ」

しょう「だとすれば、リーダーはネズミですか」

佳奈「あなたの部下は、ウサギさんね」

しょう「わーい、かわいいなあ・・・って、違います！..!」

しょう「いいから来て下さい！ あなたにはすぐにでも『第三法の儀』を受けてもらいます！」

佳奈「第三法の儀？」

しょう「歩きながら説明します。さ、ついてきてください」

小町を置いて、さつさと二人で歩いていく。それを寝転がったまま見ていた小町。星の言葉に、まあどうでもいいか、と呟いていた。

しょう「第三法と言うのは、いわゆる魔術のジャンルにおける、法術のことです」

佳奈「法術かあ・・・ヒーラーって儲かる職業だよな。医者や商売上がったたりだ」

しょう「六法はご存知ですか？」

佳奈「第二次産業革命直後に大別された魔術のジャンルのことだよな。第一法から、自然魔術、錬金術、法術、符術、幻術、妖術・・・。そして、第七法の異能力と第八法の魔法」

しょう「まあ、本当は千年も昔からそう大別されていたんですけどね」

佳奈「じゃあ、第三法の儀っていうのは、法術に関係することなんだね？」

しょう「いえ、そういうわけではないです。実際には、一から三までの魔術を全て用いた、歪みを戻す魔術なんです」

佳奈「歪みを戻す？」

しょう「あなたは生きているのにもかかわらず、死体としてこの幻想郷にやってきた。主が言うには、現象の歪みであると」

佳奈「歪みねえ・・・歪みねえな」

しょう「意味が分からないです。とにかく、そのままにいるのはあまりにも不安定なのです。一刻も早く、その体を蘇生させて、人間に戻さなくては、どうなるか分かったものじゃないんです」

佳奈「腐るのかな？」

しょう「分かりませんが、その可能性もあります」

佳奈「これがホントの腐女子だね」

しょう「あなたの言葉は時々よく分かりません」

佳奈「ところで星ちゃん」

しょう「しよ、星ちゃん？」

佳奈「今、私は何処に向かっているのかしら？」

しょう「命蓮寺です。そこに、私の主である聖白蓮がいます」

佳奈「その人が丑なんだ」

しょう「失礼な！ まあ、丑といえば丑・・・なのかなあ」

+++少女移動中+++

しょう「ここが命蓮寺です」

佳奈「寺だね」

しょう「名前の時点で気づいてください」

しょう「ここが本堂です。 聖、蓮香佳奈を連れてきました」

ひじり「ご苦労様。 あなたが佳奈さんですね。私、聖白蓮と申します」

佳奈「ホントに丑だった!!」

なむさん「う、うし?」

しょう「こ、コラ!! 余計なことを言うんじゃない! いいから

そこに座る!」

ひじり「・・・あなたは、ここに連れて来られた理由はもう、星から聞かされていますね?」

佳奈「生きる死体なんでしょ? 私」

ひじり「そう。 あなたの今の状態はあつてはならないものなのです。 すぐにでも『第三法の儀』を行いましょう」

佳奈「それってさ、成功するの?」

ひじり「安心してください。 私は六法全ての魔術を極めていきます。 第三法の儀など、たやすいことです」

佳奈「うーわ、胡散くさ。 私の知ってるそういうマスター系って、大抵ただのホラ吹きよ。 信用しろってほうが無理」

しょう「あなた・・・聖に失礼じゃないですか!」

ひじり「いいのよ。 確かに、信用できないのは当然のことです。 では、しばらくの間、私にその身を預けてはくれませんか?」

佳奈「はい?」

ひじり「その身のまま、外に出すわけには行きません。 私を信用してくれるまで、あなたにはここにいてもらいます」

佳奈「それって、監禁じゃないの?」

ひじり」「そう思ってもらってもかまいません」

佳奈「……うーわ。とんでもないのに捕まったなあ」

なず「あんたが佳奈か？ 私はナズーリン。しばらくの間あんたを監視することになったからそのつもりで」

佳奈「ナズちゃんね。よろしく」

なず「しっかし、ご主人と対等に話すだけでなく、白蓮にも楯突くなんて、あんた、とんでもない度胸だね」

佳奈「まあね。強いから、私」

なず「ここがあなたの部屋。まあ、要するに私の部屋だ。ここで一緒に寝泊りしてもらおう」

佳奈「了解。ネズミが多いね」

なず「私の部下だ」

佳奈「上司じゃなかったんだ……」

なず「なんか言ったか？」

佳奈「なんでもない」

二二二にある日々と、魔法使い・第一回(3)

それからしばらくの間、私は命蓮寺に住むことになった。そしてそこで、幻想入りの話も聞いた。どうやら、私は死んだはずだったのに、幻想郷に流れ着いてしまったらしい。そして、そこでどういう手違いがあったのか、死んだまま蘇ったのだという。

そして一週間ほど経った朝のこと、ついにその異変は始まったのだ。

??? 「かりかり」

??? 「かじかじ」

佳奈「んー……ネズミくんたち、朝から何をかじっとるんだ？」

佳奈「あ、腕いたい。なんだろこれ」

そう思って、目を開けて腕を見る。すると、ネズミが私の腕に纏わりついて、肉をかじっているではないか。

佳奈「ぎゃあああああー!!」

なず「どうした、佳奈……うるさいぞ
あー!」
って、つわあああ

しょう「なんですかぁ・・・朝から騒々しい・・・」

なず「コラ、お前たち！ 離れないか！！」

佳奈「痛い痛い痛い痛い！！ どうかの青狸じゃないんだから！！」

しょう「きゃああつ！！ 聖！ ひじり〜！！！！」

ひじり「熟成したほうが生肉はおいしいって言いますからね」

佳奈「冗談じゃないっての！ ホラ、見てよ！ こんなにかじられちゃったんだから！！」

なず「ああもう、まだ狙ってるのかお前たち！ 今度かじったらクビだぞ！！」

しょう「ネズミ怖い・・・」

ひじり「星が怖がってどつするのよ。 ほら、さっさと第三法の儀を行つわよ」

佳奈「私、まだあなたのこと信用できないんだけど・・・」

ひじり「そんなこと言って。次はネズミに足をかじられますよ?」

佳奈「……よろしくお願いします」

聖「さて、とこれで魔方陣は完成ね」

しよう「聖、言われたとおり、パチュリーさんと魔理沙をつれて来ましたよ」

パチエ「……なにこの魔方陣は。第三法の儀じゃない」

まりさ「なんだ? その第三法ってのは?」

パチエ「あなたは魔法の勉強をやり直しなさい。今じゃ外の世界の人間ですら知ってることよ」

まりさ「悪かったな、不勉強で」

パチエ「ふむ……目の前にはリビングデッドが一つ。そして、自然魔術を得意　　とうかそれしか使えない魔理沙に、錬金術が使える私、そして、全ての魔術を扱える聖白蓮。　　要するに、手伝わって事ね」

ひじり「察しがよくて助かるわ。私ひとりでも問題はないけれど、いざとなったときのバックアップ役が欲しいのよ」

パチエ「ま、それなら確かに私は適任ね。法術は使えないけど、一法、二法に関してならあなたよりできる自信があるわ」

ひじり「頼もしい限りね」

まりさ「私は何のために呼ばれたんだぜ？」

パチエ「もう本当にどうにもならなくなったときは、容赦なくあなたの魔法で消し炭にしてしまいなさいって事」

まりさ「私は掃除屋じゃないぜ・・・」

パチエ「ま、いくら歪みの修正といえど、人体蘇生なんて人間技じゃないものね。これくらい万全を期したほうがいいわ」

ひじり「協力してくれるかしら？」

パチエ「私も人体蘇生には興味があるわ。喜んで引き受けましょう」

佳奈「おーい、私は放置かい・・・？」

なず「静かにしてなよ。蘇生中にネズミに見つかっても知らないぞ」

佳奈「はーい」

程なくして第三法の儀が始まった。魔方陣は白く光り輝き、その

中央で寝ている私の体が、宙に浮く。その前に白蓮は立ち、私の胸に触れ、何か呪文のような言葉を呟き始めた。

パチエ「安定しているわね。 これなら、私の出番もないか」

まりさ「暇だぜ」

しかし、そこでアクシデント。ナズーリンの予想通り、ネズミが侵入したのである。魔法人の周りにしかれた結界を噛み切り、内部に侵入したのである。

魔理沙「なっ！ 何だこいつら!？」

パチエ「あのネズミ妖怪は何をやっているのよ!？」

そのころのナズーリンたち。

なず「暇だー……」

ぬえ「暇だねー……」

しょう「暇ですねー……」

……後で全員シメる。覚悟しとけ。

佳奈「わわっ！　ね、ネズミ！」

ひじり「動かないで！　私を信じなさい」

佳奈「・・・分かったわよ」

ひじり「パチユリーさん、頼めるかしら」

パチエ「ネズミを消極的にやっつける方法なんて知らないわよ！！」

まりさ「一瞬で消し炭にしてやるぜ」

パチエ「ばか！　魔法陣に傷が入ったらその時点で失敗よ！」

佳奈「わわっ！　かじってる！　足かじってる！！！！」

パチエ「魔理沙！　捕まえなさい！」

まりさ「任せとけ！」

まりさ「こら、おとなしくしろっての！」

まりさ「わわっ！　服の中に入った！！」

パチエ「ばか！　なにやってるのよ！！」

まりさ「わわわっ！ 中で動き回るんじゃないぜ！！！」

パチエ「暴れるな！ 服を脱ぎなさい！！！」

佳奈「……もうなんかどうでもいい」

ひじり「……だからすぐに儀を行いましょうって言ったのです」

それから二、三匹のネズミが侵入したものの、全て捕獲され、無事に第三法の儀は成功した。とりあえず、白蓮の法術によって腐食を治療してもらい、すっかり体も血が通ってあったかくなった。ネズミ退治で疲れ果てた二人の魔法使いは、儀が終わると同時に逃げるように帰って行った。

なず「おー、終わったかい？」

ひじり「ナズーリン。 ちょっといらっしやい？」

なず「ん、なにかな白蓮？」

佳奈「……」

しょう「終わりましたか。 顔色がよくなりましたね」

佳奈「……星ちゃん」

しょう「なんですか？」

佳奈「こっちはネズミに結界を破られて大変だったのに、あんたたちはここで何をしていたのかなー？」

しょう「え？　じゃあ、まさか、ナズーリンは・・・」

佳奈「今頃、たっぷりお説教されてるでしょうね」

しょう「・・・そして、私は？」

佳奈「今から私に折檻されるの」

しょう「そ、そんなあゝ！！！！」

ぬえ「そそくさ・・・」

佳奈「ぬえちゃんも、逃げられると思わないでね」

ぬえ「あ、あははー、やっぱ、ばれてる？」

佳奈「　　二人とも、そこになおりなさい」

+++少女正座中+++

佳奈「奥義『空間十円傷』！！！！」

ぬえ「ぎゃあああ!!」

しょう「そ、それだけは！ それだけは勘弁してくださいっ!!」

こうして、佳奈は無事、蘇ることができた。

しかし、結局のところ、彼女がどうして幻想入りできたのかは謎のまま。そして、どうして死者が死体のまま蘇ったのかも謎のまま。

結局、何一つ解決しないまま、第三法の儀によって全ての真実は、白蓮の手によって葬られたのであった。

どんどはね。

おまけ

まりさ「結局、第三法の儀ってなんだぜ？」

パチエ「さあて、ね。歪みを強制する魔術だつて聞いてるけど、実際のところ、何をして、何をもたらすのかは何一つ知られていない魔術よ。なにせ、第三法の儀が行われたのは、人類の歴史上、これが二回目だったのだから」

まりさ「そうなのか」

パチエ「ちなみに、一回目もあの聖白蓮が起こしているらしいわね。つまり、結局のところ、あの魔法使い以外、あの魔法の効果と結果は知らないのよ」

まりさ「そうなのか」

パチエ「もしかすると、歪み、という言葉自体が、全ての結末を意味しているのかもしれないわね」

まりさ「そうなのか」

パチエ「あんた、聞いておいてからに話、聞いてないでしょ」

まりさ「そうなのか」

パチエ「もういいわ。あなたに話した私がバカだった」

まりさ「そうなのか」

1111にある日々と、魔法使い・第一回(3)(後書き)

小町と絡ませるためだけにくっつけたリビンゲデッド属性が、まさか一話まるごと使う長さの話になるとは思わなかった。

第三法の儀に関しては、俺と慧音の寺子屋日誌にでてきた宝玉と同じく、今は正体不明のままにしておきます。

大長編イベントの際に、その意味が明かされる予定です。

さて、魔術のお話でしたね。

ウチの小説に出てくる魔術概念は、今回説明した感じのとおりです。これは、エルディアーナや妖紀行に適用されている設定です。

ですが今後、東方幻想夢でこの設定は使わないつもりです。

あくまで今作の『第三法の儀』の三法ってなんだ？ という質問が出たときに答えると後付けっぽくなってしままうのが嫌なので、先に書いただけです。

この設定は裏設定程度に覚えておいてください。

ほんわかほのぼの日和〜早苗さんと一緒・序章（前書き）

どうもです、今作も例によって序章の先行公開です。

今作はちよっと危険なカ・ン・ジ？

いいえ、ケファイ・・・げふんげふん。

いつもどおりですよ。ええ、いつもどおりの秀囲気です。

では、よろしくです。

ほんわかほのぼの日和〜早苗さんと一緒・序章

私　東風谷早苗はその日も、朝早くから境内の掃除をしていました・・・。

早苗「ふんふんふーん、ねこがとぶー」

すわっこ「やあ早苗。今日もご機嫌だね」

さなえ「あら、諏訪子様。おはようございます」

さなえ「今日は早いんですね。なにかありましたか？」

すわっこ「ああ、今日はね、ちょっとした集まりがあるんだよ」

さなえ「集まり、ですか？」

すわっこ「なんでも、幻想郷に住んでいる有力者を集めての話し合いらしい。　　いったい何があるんだか」

さなえ「どこでやるんですか？　それ」

すわっこ「天狗の里だつて。　　そんなわけで、今日は神奈子もそれに行くことになってるから、留守番よろしくね」

さなえ「はい、分かりました」

すわっこ「夜遅くまで帰らないよ?」

さなえ「はい。留守は任せてください」

すわっこ「間違い起こしちゃダメだよ?」

さなえ「何の話ですか?」

すわっこ「愁のこと」

さなえ「はい?」

すわっこ「神奈子ったら、昨日の晩からずっとその話しかしないんだよ。やっぱりどつちかが残ったほうがいいじゃないかとか、見張り役を用意したほうがいいんじゃないかとか」

さなえ「はぁ・・・そうですか」

すわっこ「ま、あれだ。くれぐれも間違いのないように」

さなえ「何が間違いなのか、イマイチよく分かんないです」

すわっこ「あー? この幼女からそんなことを聞き出したいのかい?」

さなえ「・・・あ」

さなえ「し、失礼しました」

すわっこ「うん、察しがよくてよろしい」

きゃのん「諏訪子。そろそろ行くぞ」

すわっこ「はいはい。じゃ、ちゃっちゃと行きますか」

かなこ「早苗」

さなえ「はい、なんででしょうか？」

かなこ「いざとなったら、迷わず引き金を引くんだぞ」

さなえ「と、トカレフ・・・？」

すわっこ「お、案外詳しいね。見ただけで名前が分かるとか」

かなこ「じゃあ、行ってくる」

さなえ「ちょ、ちょっと！ 神奈子様！ こんな何処で手に入れ
たんですか！！」

かなこ「気にするな。 留守を頼む」

すわっこ「じゃあ、私からはこれだ」

さなえ「なんですか？ この箱は」

すわっこ「幼女の口からそんなことを聞きたいのかい？」

さなえ「・・・っ!？」

さなえ「す、諏訪子様っ！！！」

すわこ「はっはっは、いざと言つときはちゃんと使つようじにお願ひするんだよ」

さなえ「それ以前に！ 愁さんはそんな人じゃありません！！！」

さつきから話に出てくる愁と言う人。大和愁。彼は、つい先日、この山にやってきた人間の男性。そして、わけあつて今はこの神社に住んでいます。

諏訪子様と神奈子様は彼に近寄るなど言いますが、彼はまだ幻想入りして間もないのです。右も左も分からないような人を助けるのが、巫女としての勤めです。

彼の部屋の前に行き、一呼吸置いてから挨拶する。

さなえ「愁さん、おはようございます」

二人の心配なんて杞憂に決まってる。その頃の私は、そんな風に安易に考えていたのでした……。

ほんわかほのぼの日和〜早苗さんと一緒・序章（後書き）

何か似ている。

さて、何に似ているのでしょうか？

正解はテレビ番組の再現VTRです。

なんかの事件の被害者になったようなテレビ番組の再現VTRをイメージして序章を書いてみた。そして、今作は更なる挑戦。

幻想入りした発端や、幻想入り直後のお話はカットします。

その辺は皆さんで自由にイメージしてください。これがウチの小説の醍醐味だぜ。

ほんわかほのぼの日和〜早苗さんと一緒・第一回（1）（前書き）

今作は情景描写をほとんど省いています。

なぜって？ 住み慣れた空間内で行動していれば、誰も情景なんかに目が行かないし、考えることもないからさ。

察する、ということも、小説を読むためのスキルだと思う。

その辺を養っていただきたいです。

では、ごじゆ。

ほんわかほのぼの日和〜早苗さんと一緒・第一回（1）

愁「おはよう、早苗さん」

早苗「あら、今日は起きていたんですか？　いつもお寝坊さんなのに」

愁「まあ、今日くらいはね」

早苗「今日、何かありましたっけ？」

愁「幻想郷の主要な妖怪たちが集まって、天狗の里で会議らしいよ」

早苗「愁さんもそのことを知ってたんですか？」

愁「知らないのは早苗さんだけだよ。昨日の夜遅くに紫さんが来て、それだけ言って帰っていったんだ」

早苗「紫さんですか」

愁「神奈子さんも諏訪子さんも、もう出かけたかい？」

早苗「はい、もう出発しましたけど」

愁「そうか・・・じゃあ、今日は二人つきりだね」

早苗「そうですね。せっかくお二人もいないことですし、今

日は羽を伸ばせそうです」

愁「伸ばす羽はないけどね」

早苗「ものの例えですよ。

さ、朝食にしましょうか」

愁「了解」

+++少女食事中+++

愁「しっかし、僕がまさかこんなに早起きできるとは」

早苗「いつもはお昼前ですものね」

愁「まあ、神奈子さんが毎晩のように晩酌につき合わせるからいけないんだけどね」

早苗「神奈子様ってば、あれほど言ったのにまだ晩酌に誘っているんですか？ あ、おかわりいがかですか？」

愁「じゃあ、いただきます。早苗さんの注意なんて聞いてないよ。早苗さんが寝たところに僕の部屋にやってきて無理やり連れて行くんだから困ったものさ」

早苗「そうだったんですか……。なんか、知らない間にお酒が減っていると思ったら……」

愁「まあ、楽しいからいいんだけどね」

早苗「まあ、それならいいですけど」

+++少年少女食事中+++

早苗「お茶、飲みます?」

愁「ああ、ありがとう」

早苗「ところで、幻想郷に着てからもう一ヶ月経ちましたけど、もうこっちの生活には慣れましたか?」

愁「慣れたねえ……。最初、こっちに来たときは大変だったけど、今じゃすっかり幻想郷の住人だよ」

早苗「まさか、いきなりあんな目に遭うなんて驚きですよね」

愁「そうそう。早苗さんがいなかったらホントに危なかった」

早苗「こっちも驚きましたよ。まさか、人間があんなことになつてるとは思いませんでしたもの。妖精か何かの悪戯かと思つて、最初スルーしましたもの」

愁「ああ、あれは焦った」

早苗「でもまあ、あの時の縁で今もここにいますから、不思議なものですよ」

愁「確かに……」

早苗「さて、そろそろお洗濯しないと。」「ちそうさまでした」

愁「じゃあ、僕も手伝うよ」

+++少年少女洗濯中+++

早苗「幻想郷には電気がありませんから、洗濯機もただの置物なんですよねえ……」

愁「香霖堂に売り払ったらどう？」

早苗「そうしたいんですけど、香霖堂さんも厳しい時代になってますし、あまりあの人に出費をさせるのはどうかと……」

愁「仮にもあの方はこういうものを買い取る商売人なだけど？」

早苗「でも、売れないでしょ？」

愁「否定はしない」

早苗「さ、手早く終わらせちゃいましょう」

愁「洗濯物つてこれかい？」

早苗「あっ！あんまり触らないでください！」

愁「????」

早苗「私の下着が混じってますから」

愁「じゃあ、僕は何を手伝うのさ？」

早苗「……」

愁「……」

早苗「居間でお茶でも飲んでてください」

愁「了解」

+++

早苗さんが洗濯を終わらせた頃、僕は特に何をするわけでもなく、居間に置いてあった本を読んでいた。どうやら、早苗さんが読んでいたものらしい。なぜか某ファミ通文庫の栞がはさんである。推理小説なのに、どうしてこんな栞が挟んであるのかはよく分からない。

愁「・・・そうだ。これを、こうして・・・」

+++少女洗濯終了+++

早苗「よし、終わり！」

早苗「お昼までまだ時間あるし、さっきの小説の続きでも読もうかな」

愁「・・・」

早苗「ふんふんふーん、ねこがとぶー」

早苗「さあ、いったいこれからどうなるのかしら」

早苗「え？ あれ？ うそ？ ええっ！ なんで!？」

愁「かかった」

早苗「あつ！ 愁さんですね！！ 栞を差し替えたの！！」

愁「いやあ、うっかり落としちゃって」

早苗「そんな偶然ありますか！ 本が落ちただけならまだしも、栞が偶然犯人を言い当てるページに挟まるなんて！！」

愁「ありえる偶然だね」

早苗「ありえない偶然ですっ！！ ああもう、楽しみにしてたのに・・・」

愁「ま、落ち込まないことだね」

早苗「愁さん、イジワルです」

早苗「死ねばいいと思います」

早苗「っていうか、死んで詫びて下さい」

愁「酷い言われようだね・・・」

早苗「新しい本、パチュリーさんのところで借りてこようかな」

愁「今日は留守番でしょ？」

早苗「完全犯罪のマニュアル本とか、ばれずに人を殺す方法とかの本」

愁「僕が悪かったです。ごめんなさい」

早苗「分かればよろしい」

それからしばらく、特に何も話さないまま、時間が過ぎる。第一、二人つきりで話すことなんか、今までなかったのだ。共通の話題もないし、あまり趣味も会いそうにない。

愁「あー・・・暇だ」

早苗「そうですねえ」

愁「早苗さん、何か面白いものとかないの？」

早苗「そんなのありません。今日はのんびりしましょっよ」

愁「退屈しないの？」

早苗「しないほうがおかしいです」

愁「そつちが本音が」

早苗「いつもは神奈子様も諏訪子様もいますから、忙しいですね」

愁「毎日忙しいと、急に暇になったら何していいか困るよね」

早苗「そうですね。 なにかやりますか？」

愁「何かあるの？」

早苗「確か、私の部屋に人生ゲームが」

愁「二人でやるようなものじゃないでしょ」

早苗「……ですね」

愁「ところで早苗さん」

早苗「なんですか？」

愁「この家のトイレって、何で水洗なの？ 上下水道ないよね、幻想郷って」

早苗「それは聞いてはいけないことです」

愁「……なぜ？」

早苗「私も知らないんです。 ここに引っ越してきて初めのころに、水道が使えないって言ったら、神奈様が一晩で何とかしてくれました」

愁「一晩で？」

早苗「やっぱり神奈子様はすごい方なんですよ・・・その後しばらく、近所の妖怪の方を見かけませんでしたけど」

愁「強制労働で突貫工事が・・・しかも一晩。そりゃあ、妖怪が寄り付かなくなるわけだ」

早苗「どういう意味です？」

愁「聞かないほうがいいと思うよ」

それからまたしばらくして、昼食の時間になった。早苗さんにはつこり笑顔で本日の昼食を運んでくる。

早苗「今日の昼食は蛙のから揚げです」

愁「諏訪子さんが泣くぞ」

早苗「冗談ですよ・・・あはは」

+++少年少女食事中+++

愁「それにしても、いったい何の集まりなんだろうね」

早苗「天狗の里の話ですか？ 確かに気になりますね」

愁「この時期だし、栗拾いの算段でもしてるのかな？」

早苗「まさか」

愁「ま、そんなことありえないか」

早苗「私、栗ご飯苦手です」

愁「あ、そっちの心配してるの？」

早苗「甘みって、ご飯がすすむものじゃないと思います」

愁「秋の味覚に文句を言うんじゃないやありません」

早苗「じゃあ、愁さんはイチゴ大福をおかずにご飯を食べられますか？」

愁「僕の友人にご飯にファンタグレープをかけて食べてた奴がいたなあ……」

早苗「御見逸れました」

愁「僕じゃないけどね」

+++ 少年少女食後のひととき中 +++

早苗「午後イチってだるくありません？」

愁「高校生じゃないんだから」

早苗「私は、まだ年齢的に高校生です」

愁「あれ？ でも確かもうここに来て数年経ってるんじゃないの？
だったら、どう考えても」

早苗「ゲームキャラは年数が経っても加齢しませんよ？」

愁「自分でゲームキャラと言い切ったな」

早苗「お昼寝でもしますか」

愁「いいねえ」

+++少年少女お昼寝中+++

ほんわかほのぼの日和〜早苗さんと一緒・第一回（2）

さて、そんなわけで、もう小学生がお帰りの時間なんだけど。未だに早苗さんは目覚める雰囲気がない。来客だというのに、居間で堂々と寝息を立てている。

まりさ「天狗の里で妖怪が集まってるのか。そりゃあ、きっと異変の計画でも練ってるんだぜ」

愁「そうなの？」

まりさ「妖怪共が結託して異変を起こすのか、そりゃあ楽しみみだぜ」

まりさ「そのときは、お前も戦ってくれるのか？」

愁「遠慮しておく。あまり戦いには向かないからね」

まりさ「なに言ってるんだよ。パチュリーの廉価版みたいな能力持ってるくせに」

愁「廉価版とは心外だね。言うておくけど、普通の魔法使いに負ける気はしないよ？」

まりさ「お、じゃあ、今ここのでやるか？」

愁「遠慮しておく。早苗さん起きちゃうし」

さなえ「……………むう……………」

まりさ「かわいい寝顔だぜ、まったく……………」

愁「……………ところで、魔理沙」

まりさ「なんだぜ」

愁「栗ご飯は嫌いかい？」

まりさ「いきなり何の話だぜ……………」

さて、魔理沙も帰って、そろそろ夕食の時間である。

早苗さんを起こすべきか。それとも放置しておくべきか。

まあ、まだ腹も減っていないし、別にいいだろう。たまの休みなのだ、今日くらいはゆっくりさせてあげようじゃないか。
しかし、そうになると、今度は退屈してしまう。

愁「洗濯物ももう取り込んだし。

やることないなあ」

辺りももう暗くなってきた。部屋の蛍光灯はもちろん電気がないから使えない。居間の天井には、昔ながらのランプがぶら下がっている。火を灯し、とりあえずしばらくぼーっとして過ごす。そのうち、早苗さんは目を覚ました。

早苗「私、結構寝てました？」

愁「もう夕食の時間だよ」

早苗「ええっ！？ 起こしてくればよかったのに」

愁「早苗さんのあまりの酈のうるささに身動きが取れなかったんだよ」

早苗「もう、嘘ばかり」

早苗「そんなこと言う人は夕食抜きですよ」

愁「すみませんでした」

早苗「分かればよろしい」

+++

その頃、天狗の里では宴会が始まっていた。

すわっこ「さて、もう夜だね」

きゃのん「まさか、終わるところかそのまま宴会になるとはな」

すわっこ「まあいいじゃないの。二人にはなんだかんだで働いてもらってるし、たまには休みくらい」

かなこ「いいや！ ダメだ！ あの年頃の人間二人がいたら、同性どうしても間違いが起こる！！」

すわっこ「あんたは人間を何だと思ってるんだい？」

かなこ「やっぱり私は帰るぞ」

ゆかり「あら、神様はこんな妖怪同志の集まりには興味ない？」

かなこ「紫か・・・すまないな。今日は帰らせてもらう」

ゆかり「せっかくいいお酒が手に入ったのに」

かなこ「なに？」

ゆかり「飲んでみたいと思わない？ 珍しいお酒なのよ？」

かなこ「・・・じゃあ、一杯だけ」

すわっこ「それが妖怪の思っ壺なんだよ、神奈子……」

「こりゃ、まあ、後は神のみぞ知るってやつだ。諏訪子は眩き、ニヤニヤと笑う。

諏訪子「人は恋する生き物だ。好き同士なら、何も遠慮は要らないのさ。さ、神奈子、飲んで飲んで」

+++

夕食を食べ終えた頃、急に早苗さんはおとなしくなった。ついさっきまで、楽しく会話をしていたのが嘘のようである。妙な沈黙と気まずい空気が流れていた。どうにか空気を和ませようと、無理やり話題を広げようと何か探す。

愁「秋だねえ……」

早苗「あ、寒いですか？ 窓閉めますよ？」

愁「いや、そういっわけじゃないけど」

早苗「……」

愁「……………」

愁「そういえば、魔理沙がりんごを置いていったよ」

早苗「あ、台所に置いてあったやつですよね。　　食べますか？」

愁「いや、おなか一杯です」

早苗「……………」

愁「……………」

さつきからずっとこんな感じである。

早苗「…………二人とも、帰ってくるの遅いですね」

愁「夜までかかるって言うってたしね」

早苗「もしかして、夕食いらなかったのかな」

愁「妖怪たちの宴会に巻き込まれてる可能性はあるね」

早苗「……………」

愁「……………」

途切れ途切れに会話を繋ぎ止め、どうにか間を保っている。しかし、それも次第に減ってきた。さて、いったいこの空気は何なのだろうか。

愁「早苗さんってさ、幻想郷に来る前は高校生だったんだよね？」

早苗「ええ、そうですけど……」

愁「友達とか、今どうしてるとか気になったりしない？」

早苗「気になりますねえ……。もしかして、もう結婚とかしてたりして」

愁「最近の子は早いからねえ、なにかと」

早苗「隣のクラスの子なんて、できちゃった結婚して学校辞めちゃったんですよ？」

愁「へえ、そりゃすごい」

早苗「もう、私のクラスでも先生がすごい目を光らせちゃって。学校中で恋愛禁止令が出る勢いでしたね」

愁「それはまた……すごいな」

早苗「もう、大変でしたよ。うかつにクラスの男の子とも話ができなくて……」

愁「ははは……」

早苗「……」

何故そこで黙る……。また会話が途切れたじゃないか。

早苗「あ、お先にお風呂入ってきてくださいね」

愁「いいよ、早苗さんが先で」

早苗「いえいえ。どうぞお先に」

愁「じゃあ、お言葉に甘えて」

早苗「どござどござ」

居間から出る。そこで、ほっと一息つく。

愁「何なんだ。この妙な感覚は……」

きつと早苗さんも同じことを思っているに違いない。まさか、二人っきりの夜がこんなにも気まずいとは思っていなかったのだ。

愁「・・・とりあえず、風呂入るか・・・」

後のことは後で考えよう。これはそのための時間なのだから。

ほんわかほのぼの日和〜早苗さんと一緒・第一回（3）

早苗「はぁ・・・さっぱりしました」

しかし、お風呂上りの気分とは裏腹に私の心はさっぱりして
ない。いったいどうしてこんなにも話しにくいのでしょうか。

諏訪子様から貰った例のもののせいなのでしょうが、妙に愁さん
を意識してしまう。私だって女の子だ。それに現代人なんだ。どう
して気まずいのか、どうしてこんな気分なのか、その理由が分から
ないわけじゃない。そして、それは、愁さんも同じこと。

早苗「・・・これ、一応持っていたほうがいいのか・・・」

諏訪子様から貰った箱から一枚取り出して、パジャマの胸ポケット
に忍ばせる。そして、一応念のため、トカレフも と思って
やめた。パジャマの何処にこんな大きなものを隠せばいいんだ。

トカレフは脱衣所に放置して、居間に戻る。愁さんは幻想郷縁起
を読んでいた。私が愁さんのために買ってきたものである。

早苗「何か面白いものでもありましたか？」

愁「いや、まあ、特にはないよ」

早苗「幻想郷は妖怪がたくさんいますから、しっかりと読んで知識を
蓄えておくといいですよ」

愁「そうだね」

早苗「……」

愁「……」

早苗「あ、リンゴ、食べます?」

愁「あ、うん。そうしようか」

早苗「じゃあ、取ってきますね」

ぼと、と胸ポケットから落ちる例のブツ。すぐに拾い、見ていなかったかを確認する。ガン見してるよ。……こんなものを持っていてるってばれたら、まるで私が愁さんのことを信用してないみたいじゃないですか。

早苗「ち、違うんですよ?」

愁「……」

早苗「あの、これは、その……諏訪子様がくれたものでして……」

愁「……」

早苗「万が一……間違いが起こったときのために、と」

愁「・・・何の心配してるんだか、諏訪子さんも」

早苗「え？ あ、そ、そうですね・・・。もう、諏訪子様ってばなにを考えているのやら・・・」

愁「あはは・・・」

早苗「あははは・・・。じゃあ、リンゴ取って来ますね」

よかつた、笑い話ですんだ。

ほっと一息ついて台所にリンゴを取りに行く。しかし、そこで事件が起きたのです。

????「かさかさ」

早苗「ん？ 何か音がしたような・・・」

????「かさかさ」

早苗「明かり明かり」

????「かさかさ」

早苗「よいしょ、っと・・・」

りぐる「かさかさ」

早苗「・・・」

「じつきー」かさかさかさ

早苗「きゃああああっ!!!」

愁「早苗さん、どうしたの？」

早苗「じ、じつきつき……」

愁「何だ、Gか。 こんなもの適当に退治しておけば」

そう言っ、愁さんはスリッパでGを見事に退治。
しっかり後始末までしてくれました。

愁「早苗さん、もう大丈夫だよ」

さなえ「は、はい……」

愁「……戻るよ。リンゴ食べよう」

さなえ「はい……」

その後も始終、微妙な空気のまま、結局、気まずい時間が流れ続けていました。そして、すっかり夜も更け、眠い時間になってきました。しかし、気まずい空気のままですっさと部屋に戻るのにはあまりにも無責任な気がして、どうにかして今日が楽しい日であったということにしたいくて、眠い目をこすって、何か話題はないものか

と探していました。

愁「・・・眠いなら寝たらどう?。」

さなえ「せつかくですし、少しくらい夜更かししても大丈夫です」

愁「・・・」

さなえ「・・・」

愁「あのさ、早苗さん」

さなえ「はい」

愁「・・・寝ようか」

さなえ「・・・ダメです」

愁「どうして?。」

さなえ「こんな日は、もう来ないかもしれないんです」

愁「まさか、またいつかあるよ」

さなえ「今日がもったいないんです。明日になって、また、同じ日々に戻るのかと思うと・・・まだ何か出来るんじゃないか。何かしたいことがあるんじゃないか、そう思うと、どうしても、今日を終わりにしたくないんです」

愁「気持ちは分かるけど、眠いのを我慢してまで考えることじゃないと思うよ」

さなえ「・・・分かってます。でも・・・愁さんと過ごす、初めての夜なのに、このまま何も無いなんて、もったいないんです」

愁「・・・」

さなえ「せつかくの大切な日なんです。思い出にしたいくて、けど、どうしても何も思い浮かばなくて」

さなえ「それで、考えたんです」

早苗「今日から、私のことは早苗って呼んでくれませんか？」

愁「・・・はい？」

早苗「お願いします。そうじゃないと、今日を終わりにできないんです・・・愁さん」

愁「・・・早苗」

早苗「はい」

愁「なんか、照れるね」

早苗「ですね」

愁「さ、これでようやく寝られる。

じゃあ、お休み、早苗」

早苗「あ、待ってください」

愁「なに？」

早苗「せっかくなんですから、記念に、あれ、使ってみませんか？」

愁「はい？」

早苗「いっしょに、しましょっよ」

+++

朝。結局明け方まで続いた宴会からようやく抜け出した神奈子と諏訪子は急いで神社に向かっていた。

かなこ「諏訪子！ どうして止めてくれなかったんだー！」

すわっこ「勝手に飲んだのは神奈子でしょう？」

かなこ「ああもう心配だ・・・愁め・・・私の早苗に何かしていたら、粉々にしてやるー！」

すわっこ「ま、私がいる限りそんなことにはならないけどね」

かなこ「さなえーっ！！！ 今帰ったぞーっ！！！」

すわっこ「随分静かだねえ・・・」

かなこ「早苗っ！」

すわっこ「部屋にはいない」

かなこ「おのれ、愁め！ まさか、自分の部屋に連れ込んだのではあるまいな！？」

すわっこ「そんなのじゃないみたいだよ、ホラ」

居間で眠っている二人。テーブルには、諏訪子があげた例のブツと、人生ゲームが置いてある。

かなこ「徹夜で人生ゲームか・・・」

すわっこ「ま、二人らしいといえば二人らしいよね」

かなこ「だが、これは何だ、諏訪子？」

すわっこ「おおっと、神奈子。この幼女の口からそれが何であるかを聞きたいのかい？」

かなこ「聞きたくない。 さて、今日の昼食は豪勢に行こうか。

久しぶりに、私が腕を振るおう」

すわっこ「二人が起きたら、お昼食べて、これの続きに混ぜてもらおうか？」

かなこ「ああ、そうしよう」

さなえ「ああ、また子供が・・・車に乗り切りませんよう・・・むにゃ・・・」

愁「うーん・・・しゃっきんがあ・・・」

諏訪子「夢の中でも二人でゲームしてるよ・・・。ふふっ、やっぱり人間って、面白い生き物だねえ」

目が覚めたら、この夢は終わる。だから、もう少し、このまま夢を見させてあげよう。そっと毛布をかけて、二人の寝顔を見守る、諏訪子なのでした。

どんどはね。

ほんわかほのぼの日和〜早苗さんと一緒・第一回(3) (後書き)

小説内の視点があちこち飛ぶのも、あえてです。

どこぞの人が小説はひとつの視点から書くものだ、と言っていたので、フリースタイルの自由度の高さを見せ付けたくてやった。

台本形式が嫌いで、誰が喋ってるかもわからないような「」の連続ばかりの小説を書いている人がいますけど、読者に伝わらなかつたら、それまでです。

いかにして読者に自分の意図する場面を伝えるかが小説書きの仕事です。

そして、ウチの小説には、意図する風景も描写もありません。

ウチが与えるのは、こういう会話があったという事実と物語を読み解くための支援をする最低限の文章だけです。

それ以外は自由に、読者に想像していただきたいと思います。

想像する楽しさを読者に伝えたいというウチの考えが気に入らないなら、無理に読んでいただかなくても結構です。楽しめる人だけ楽しんでください。プロになるつもりのない人間だからこそ言える言葉です。

では、長くなったのでここまで。

今作についてのあとがきは、ブログのほうで書きます。

神と半人半神 時々、現人神・序章（前書き）

さて、今作は初のメイン絡みキャラ被りとなった水本蒼奈さんの幻想入り小説です。

ですが、第一回では他の幻想入りキャラとは絡まないという規約です。で、愁さんは出てこないの、あしからず。

では、今回もよろしくです。

神と半人半神 時々、現人神・序章

「????」しかし、困りましたね。 これじゃ身動き取れないじゃないですか……」

目の前には敵。 こちらは既に包囲されている。正直、素直に投了したいものだが、あつちは私 水本蒼奈を本気で殺そうとしているのだ。まさか、ホールドアップして出て行くわけにも行かない。

まさか、これほどの戦いになるとは思わなかったのだ。

身を隠していた木が呪いの風を受けて腐り落ちる。そして、そこにすかさず、御柱の雨が降り注いだ。大きく跳躍し、それを回避すると、御柱を渡り、一気に駆け抜ける。

蒼奈「食らいなさい!」

十手を取り出し、正面の女性に振りかざす。だが、それもいともたやすく受け止められ、逆に数倍の威力の反撃を受ける。地面に落下した後も、追撃の手が止まらない。雨の如く降り注ぐ弾幕を回避し、どうにか反撃のチャンスをつかがう。だが、本気状態の神に隙なんてあるはずもなく、防戦一方。

さすがは神を名乗るものたちだ。その実力はすば抜けている。
八坂神奈子、洩矢諏訪子。この桁違いの力を持つ神を相手に、は
たしてどうやって勝利を奪おうか。

考える間もなく、弾幕が降り注ぐ。そして、その数は次第に増し
てくる。どうやら向こうも決着をつける気なのだろう。

神奈子「そろそろ終わりにしようじゃないか。 諏訪子！」

諏訪子「はいはい・・・崇符『ミシヤグジさま十字砲火』！！！」

蒼奈「 つ!?!? 」

洩矢諏訪子の操る風は、触れたものをたちまち風化させる滅びの
風。そこに、神奈子の放つ御柱が十字を切るようにこちらに飛んで
くる。まさしく十字砲火。風に追いつかれたら即死、御柱に挟まれ
ても即死。

これは、さすがに切り札を使わざるを得ない。

蒼奈「・・・ちよつと、痛いですよ? 」

投げつけたのはその辺の小石。諏訪子の風を受けて塵と消える。

それを見て、笑う神奈子。

神奈子「そんなもので・・・

馬鹿にするなっ！！」

一斉に降り注ぐ御柱。怒りに震える声が妖怪の山中に響き渡った。そして、刹那に轟音ととてつもない衝撃。土煙が立ち、辺りはまったく見えなくなる。

神奈子「ふん・・・愚か者め。

神に逆らった報いだ」

諏訪子「・・・」

諏訪子の風は、未だ止まらず。ゆっくりと土煙と御柱を崩していく。そして、露になる、私のもう一つの姿。

神奈子「な、んだと・・・？」

諏訪子「やっぱりか。只者じゃないと思っていたけど・・・」

銀の髪が風になびく。諏訪子の呪いの風を受けても一切その姿は揺らぐことなく、ここにある。驚く神奈子に、諏訪子はまだ冷静だった。

神奈子「なんだ、あいつは・・・急激に霊力が増している？」

諏訪子「神奈子、下がりな。もうあなたの手に負える相手じゃない」

恋する乙女は最強なんだよ。諏訪子は眩き、そして笑う。

諏訪子「それがあなたの本性ってワケだ。ようやく私と本気で戦う気になったんだね？」

蒼奈「ああ。早く始めよう。早苗が、待っているんだ」

諏訪子「早苗は渡さないっ！！！」

蒼奈「絶対に、手に入れる！！！」

蒼奈「人の恋路を邪魔するやつは、この私が消し去ってやる！！！」

神と半人半神 時々、現人神・序章（後書き）

いきなりのマジ戦闘からスタートさせてみました。
どうしてこうなったのかは本編で。

そして、今作の諏訪子の力についての補足。

グリモワールオブマリサを見ると『ミシヤグジさま』は風をイメージしているそうなので、今作において『ミシヤグジさま』は、弾幕ではなく本物の風ということにしています。

そしてそこに諏訪子の能力『坤を創造する程度の能力』を重ねて『ミシヤグジさまの風に触れると土に還ってしまう』という解釈になっています。

ミシヤグジさまって崇り神だし、攻撃は遠慮なしってこと・・・。

その辺を踏まえて、本編もよろしくです。

神と半人半神 時々、現人神・第一回（1）（前書き）

今回は話のメインを序章で書いてしまっているので、全体のエピソードが短くなりそうだ・・・と思ったら、案外普通に書いてしまった。

中途半端な長さだなあ・・・。

神と半人半神 時々、現人神・第一回（1）

れいむ「あのね。 毎日賽銭を入れてくれるのはありがたいんだけど……」

蒼奈「はい」

れいむ「外の世界のお金じゃなくて幻想郷のお金を入れてくれるかしら？」

博麗神社。 そこは、幻想入りした者たちが必ず訪れ、そして、一つの決断を迫られる場所。まあ、そんなものは私には関係のないことですが……。

今、私の目の前でふくれっ面している女性が、この神社の巫女、博麗霊夢。博麗の巫女、という幻想郷にとって欠かすことのできない役目を担う方なのだと言うが、どうにもその辺は嘘臭い。このところ毎日のように、ここへ通っているものの、彼女は大物と言うよりも、むしろ小物。そして、守銭奴だ。

蒼奈「でも幻想郷じゃ、五円なんて相当の大金じゃありません？」

れいむ「まあ、ね。 確かに幻想郷じゃ五円なんて見たこともないような大金よ。でもね、幻想郷で外の世界のお金を換金してくれるのは紫だけなの。あいつつてば、外の世界の貨幣価値に換算した交換しかしてくれないから、結局五円もはした金なのよ」

蒼奈「紫って、先日のお姉さんですか？」

れいむ「そ。 今度会ったら、ちゃんと礼を言いなさいね」

蒼奈「はい」

賽銭を入れ、いつものようにお参りする。しかし、霊夢はその刹那に賽銭箱の蓋を開け、私が入れた五円玉を取り出していた。

蒼奈「神様も何もないですね」

れいむ「当たり前よ。 この神社に神様はいないもの」

蒼奈「そりゃあそうでしょう。 人々から忘れ去られて力を失った妖怪の住処である幻想郷ですもの 巫女からも忘れ去られた神様は、今頃どここの幻想郷にいるのやら」

れいむ「言ってくれるわね」

蒼奈「あら、また弾幕ごっこでもしますか？」

れいむ「遠慮しておく。 あんたとやると疲れるのよね」

蒼奈「光荣です」

れいむ「誉めてないわよ」

一週間前くらいか、私はこの幻想郷にやってきた。

そして、今はこの博麗神社に入り浸っている。

人間の里での職探しは、困難を極めていた。なにせ、未だに原因がわからないという今回の異変。

幻想郷に大量の人と妖怪が流れ込んでくるというその異変は、明らかにこの小さな幻想郷にとつて、大きな異変であった。

就職難。 無法妖怪の台頭。そして、食糧不足。

かねてより今年は凶作になるという情報もあり、現在、幻想郷は未曾有の混乱の中にあつたのだ。

今日も妖精に連れられて二人の人間が博麗神社にやってきた。普段は悪戯好きの妖精たちも、幻想郷全土の巨大な異変をどうにかしようとかんばっているらしい。まあ、博麗神社までやってくるのは、ごく一部の妖精だけ、なのだけど。

れいむ「ふうん……。それで、あなたは外に帰るつもりなの？」

人間「当たり前だ！ あんな化け物どもものいるこんな世界にいられるかよ！ 俺はすぐにでも帰るぞ！！」

大多数の人間は幻想入りしても外に帰りたがる。

まあ、最初に行き着いたのが博麗神社とか人間の里なら、少しはここにもいいと思えるのかもしれないが、最初に迷いの竹林とか妖怪の山に出てしまった日には、帰りたいという気持ちも分かる。

れいむ「じゃあ、さっさと送り返すわよ。もう迷い込まないようにね」

人間「ああ、もうこんな世界はこりこりだ。じゃあな、巫女さん」

今日、博麗神社にやってきた人間は二人とも外の世界に帰っていった。まあ、向こうの世界に未練があるのなら、そうするのが正しい。無理して引きとめる義理も価値も、今のこの幻想郷にはないのだから。

霊夢の仕事を見ながら、私は母屋の縁側で、先の人間を連れてきた大妖精　大ちゃんと話している。

蒼奈「まるで浜辺に打ち上げられた、捨てられ船のよう」

大ちゃん「はい？」

蒼奈「世界は浜。そして、船は幻想郷。船の中には浜に生きる者たちが捨てたものが溜まっていくんです。自然を敬う心、夜を恐れる心、過去の過ちと、栄光。そして、その結果、消えるべくして消えていった、多くの生命」

大ちゃん「・・・」

蒼奈「果たして、この幻想郷はノアの箱舟なのか、あるいは、沈み行く大和なのか」

大ちゃん「前者だと思います」

蒼奈「その心は？」

大ちゃん「そうじゃなければ、幻想郷に生きる命は救われませんか」

蒼奈「・・・いい答えですね」

でも、それは間違いです、なんて、口が裂けても言えなかった。

午後。霊夢の提案もあり、私は妖怪の山に行くことになった。人間の里で職にあぶれた私は結局、妖怪のテリトリーに住みつかなければならなかったのである。まあ、そんな予感始めからしていた。私の身には、半分神の血が流れている。ゆえに、人間とは違う。別段、里に住む必要もないし、あまり、人に奇異の目で見られるのは好きではないから、今回の霊夢の申し出は喜んで受け入れた。

+++

蒼奈「人間の里にしか住めない人たちだっていますからね。私はまあ、そうではないので、別に構いませんよ」

霊夢「よかった。じゃあ、これ」

蒼奈『これは?』

霊夢『紹介状よ。 山の上にも神社があるから、そこに行きなさい。 あそこの連中のほうがあんた向きよ』

+++

蒼奈「山の上には奇跡を起こす巫女がいるって、里の人間は言っていましたねえ……。 いったい、どんな方なのか」

早苗「今日もいい天気ですねえ……」

早苗「さて、境内の掃除もこれでお終いと」

????「よう。 あんたが、ここの巫女かい?」

早苗「???? はい、そうですけど……?」

????「その力、俺にちょっと分けちゃくれないかい?」

早苗「っ!?!」

無法妖怪A「お前の力があれば、この幻想郷は俺のものだっ!」

早苗「きゃあああ!」

無法妖怪の手が早苗に伸びる。だが、その妖怪を一撃で砕く、巨大な柱。それを見て、安心したのも束の間。それを扱っていたのは、早苗の予想していた神ではない。

無法妖怪B「東風谷早苗。その命と力。俺様が貰ってやるよ」

神と半人半神 時々、現人神・第一回(2)

蒼奈「ふむ・・・随分と妙な雰囲気ですね」

さすがは妖怪の山とでもいうべきか。いかにも何かでそのような雰囲気である。こんなところ、確かに人間が寄り付くべき場所じゃない。じゃあ、そんな場所にこれから住まなければならぬ私は何なのだろうか。今更、体よく厄介払いされた感が拭いきれなくなってきた。

???「離してください!! 誰か! 助けて!!」

???「おとなしくしろつての! 殺されたいのか!」

不意に誰かの叫ぶ声が聞こえた。声のする方角を見ると、どうやら開けた場所のようである。おそらく、ここが目指していた神社なのだろう。十手を手に、声のほうへ走る。

蒼奈「何をしている!」

???「たすけてください!!」

緑色の髪の女の子だ。腕を掴まれている。そして、掴んでいるのは、明らかに異形の妖怪。丸太のような巨大な柱を持ち、こっちに

来るなど叫んでいる。

無法妖怪「こいつの命がどうなってもいいのか!？」

蒼奈「う．．．人質ですか．．．」

無法妖怪「そういうことだ。 近寄るなよ」

蒼奈「近寄りませんよ」

蒼奈「でも、もう決着です」

無法妖怪「なんだと？」

蒼奈「ここから去りなさい」

無法妖怪「．．．?」

蒼奈「既にあなたは私の罠にかかっています。むしろ、あなたが今ここを去らなければ、あなたのほうが危ういですよ?」

無法妖怪「．．．は。そ、そんな脅し．．．」

蒼奈「果たして、本当に嘘でしょうかねえ？」

無法妖怪「……」

蒼奈「この指を鳴らすと、発動しますよ」

無法妖怪「……」

蒼奈「さん、に、い」

無法妖怪「く、くそっ！ 覚えてやがれ！！」

蒼奈「まあ、私、指鳴らせませんけどね」

無法妖怪が去った後、そう呟き、鳴らない指を鳴らす。案の定、かすれた音がした。

その場にへたったまま動かない少女に手を差し伸べる。

蒼奈「大丈夫ですか？」

????「……」

蒼奈「……あの、大丈夫かしら？」

「????」・・・えっ？ あ、はい！！ 大丈夫ですよ！！」

蒼奈「そう、それはよかった」

蒼奈「私、水本蒼奈っていいいます。 この神社の関係者の方はいらっしやるかしら？」

さなえ「あ、私です。 東風谷早苗といます」

蒼奈「じゃあ、あなたが奇跡の巫女かしら」

さなえ「私のことを知っているのですか？」

蒼奈「里でちよつと聞いたんですよ。 こちらにかわいらしい巫女さんがいるって」

さなえ「そ、そんな・・・かわいいだなんて」

蒼奈「博麗神社の巫女からの紹介状があるのですが」

さなえ「あ、拝見します」

早苗は紹介状を見て、苦笑いしている。 いったい何が書いてあるのか、と横から覗くと、そこには、まあ予想通りの文面があった。

『面倒なやつ来た。 後は任せる。 霊夢』

やっぱり体よく厄介払いされたようだ。まあ、毎日のように通いつめていたのだから仕方ない。

さなえ「霊夢さんに面倒な奴って言われるって事は、相当ですね」

蒼奈「おかしいですね。毎日、神社にお参りしてただけなのに」

さなえ「もともと人が寄り付かない神社でしたから。まあ、毎日人が来るっただけでも、わずらわしいんじゃないでしょうか？」

蒼奈「そんな人がよく巫女なんてできるわね」

さなえ「同感です」

立ち話もなんだからと、母屋にやってきた。

さなえ「ところで、さっき、本当に罫を仕掛けていたんですか？」

蒼奈「そんなもの急に出来るわけないじゃないですか。　　嘘っぱちですよ」

さなえ「その割に、真に迫ってましたね」

蒼奈「まあ、それは私の能力ですからね」

さなえ「能力、ですか・・・どんな能力なんですか？」

蒼奈「秘密」

さなえ「えー、教えてくれたっていいじゃないですか」

蒼奈「ダメ。教えない」

さなえ「蒼奈さん、イジワルですね」

蒼奈「秘密のある女こそ、輝くものよ」

さなえ「・・・っ!？」

蒼奈「早苗？　どうかしたの？」

さなえ「な、なんでもないです・・・」

赤面する早苗。それを見て、狙い通り、と微笑む私と目もあわせずに、今日は泊まっていつてくださいな、と彼女はうれしそうに言っていた。

神と半人半神 時々、現人神・第一回(3)

私が山の神社に来てから、もう一週間にもなるつかというある日のこと。たまたま遊びに来ていた魔理沙から、ひとつ気になることを聞いた。

まりさ「今日は二人はいないのか？」

蒼奈「ふたり？」

まりさ「神奈子と諏訪子だよ。 なんだ、ここに住んでるくせに会った事ないのか？」

蒼奈「一度もないですね。 どうしてでしょうか？」

まりさ「まさか、何か妙なことでもたくらんでるんじゃないな」

その予感が的中したのは、その日の午後のことだった。天狗の里にて所用を済ませて帰宅すると、境内に二人の女性が立っていたのである。

蒼奈「あら、神社に何か御用ですか？」

????「それはこっちの台詞だ」

鋭い声だ。とてもじゃないが、平和的じゃない。

????「その能力で早苗を誘惑し、何をするつもりかと聞いている」

蒼奈「あら、誘惑したつもりなんてありませんわ」

????「今の幻想郷には、早苗の力を利用しようと狙う無法

妖怪が多い。貴様もその一部か？」

蒼奈「だとしたら、どうします？」

神奈子「この八坂神奈子。全身全霊を持って、貴様を、抹殺

する……っ!!」

蒼奈「安心してください。そんなつもりじゃないですから」

神奈子「なら、何をするつもりだ？」

蒼奈「あら、好きな子にすることなんて一つじゃないですか」

????「おおっと、そっちの趣味の人か」

神奈子「諏訪子、黙っている。悪いが、お前は早苗本人の意

思を操っているに過ぎない。そんなお前の捏造した感情を認めるわけにはいかないな」

蒼奈「操っているだなんて、大げさな」

蒼奈「私は能力を使ったのは一回だけです。それ以外は、彼女本人の意思ですよ」

諏訪子「使ったことは認めるんだね」

蒼奈「嘘をついても、通用しませんでしょうから」

諏訪子「うん。素直でいい子だね。けど、一度でもきっかけを与えてしまえば、そこから揺らぐのが女心」

蒼奈「……それも、認めます」

諏訪子「一度でも、捏造した事実があれば、それでもう有罪さ」

諏訪子「幻想郷を出ていきな。あんたはもう、早苗に会わせるわけには行かない」

蒼奈「……お断りします」

諏訪子「私たち二人と戦うとでも？」

蒼奈「早苗が好きなら、それくらい」

蒼奈「それに、障害があつてこそ、恋は燃えるってものです」

++++

そして、現在に至る。

諏訪子「私の力を受けても死なないなんて、ふざけた力じゃないか！」

蒼奈「・・・」

諏訪子「はっ！ 愛想も悪くなったもんだね！」

諏訪子の弾幕はさらに勢いを増していく。だが、それらは一つたりとも、私に触れることはない。

『消』を操る能力。

それが、この状態の私が持つ能力。

諏訪子の放つ弾幕から、殺傷能力を消し、全てを形骸とする。弾幕を全て消し去ってもいいのだが、それをするのは少し燃費が悪い。今は最小限でいいのだ。余計なことはいらない。

蒼奈「ケリをつけるっ!!」

諏訪子「やってみせろっ!!」

ついに弾幕戦から格闘戦に切り替えた。諏訪子は体の大きさからは想像もできないような圧倒的な腕力でこちらを圧倒してくる。さすがは神である。見た目で判断はできない。

だが、それはこちらも同じこと。

蒼奈「陰陽玉!!」

諏訪子「なっ!?!」

投げつけたのは鈍器　　もとい霊夢の陰陽玉。博麗神社に通いつめていたかいがまさかここで発揮されるとは思わなかったが、ここで使わずにいつ使う。全力投球した陰陽玉は諏訪子の顔面に直撃し、彼女を地面に落とす。

神奈子「なっ、お前・・・」

蒼奈「最近は何騒な世の中になったものだ」

神奈子「お前が言つな!!」

御柱を振り回し、接近する神奈子。押さえようと、御柱を受け止めるが、予想外の威力に体が吹き飛ぶ。どうやら単純な力は神奈子が勝るらしい。

神奈子「しとめてやる!!」

蒼奈「時間もないから、これで決めるか・・・」

神奈子「超神祭『エクспанデッド・オンバシラ・改』!!!」

蒼奈「清術『創世の起』!!」

雨の如く降り注ぐ、逃げる一分の隙間さえない無数の御柱。それを塗り替える、私のスペル。御柱は見る見るうちに消え去り、そしてその力は、神奈子にまでも及んだのだ。

神奈子「なっ!?! バカなっ うわあああっ!?!」

諏訪子「あーあ・・・。やってくれちゃったねえ」

神は死なない。だが、その神性を削がれれば、神には何も残らない。

そこに残っていたのは、早苗の待つ神社と、削がれてもまだ尚、大きな力を残している諏訪子だけ。それ以外は、全て消滅していた。

諏訪子「神奈子つてば、無理してくれちゃって……。まあ、数日もしないで復活するからいいけど」

諏訪子「それよりも、あの子の方が危険かな」

髪の色はすっかり元に戻り、肩で荒く息をする。そして、数秒もたたないうちに、そのまま倒れたのだ。

諏訪子「桁違いの力は、それだけ負担も大きいってことだ。だからこそ、私がまだ動けるって事を忘れるべきじゃなかったね」

諏訪子はそう言い、ゆっくりと私に歩を向けた。

諏訪子「早苗は、渡さない」

そして、手に持った陰陽玉を振りかざした。

神と半人半神 時々、現人神・第一回（4）

蒼奈「……………」

早苗「くどくど……………」

すわっ「…………しゅん…………」

蒼奈「……………」

早苗「…………ガミガミ　　がみがみ…………」

すわっ「…………あっあっ…………」

蒼奈「…………」

早苗「　　ですからっ！！　　今後は絶対に　　」

すわっ「…………し…………へ…………」

蒼奈「……」

早苗「泣いたって無駄ですよ！ 今日と言つ今日は絶対に許しませんからね！！」

すわっこ「だって、私は早苗が無理やり操られてるものだと……」

早苗「言い訳は結構です！ 蒼奈さんはそんなことする方じゃありません！！！」

早苗「まさか人を見る目もないんですか！？ それでよく神様なんて務まりますね！？ むしろ、それじゃ神失格です！」

すわっこ「そ、存在の全否定！？」

ああ、なんか怒ってる。

ぼんやりと意識は戻ったけど、どうにも目を開けてはいけない雰囲気だ。もう少し、傍観しているとしましようか。

早苗「外が騒がしかったから一体何をやってるのかと思えば、母屋の玄関が封印されていますし。どうにかこじ開けたと思ったら、境内は跡形もなく、諏訪子様は蒼奈さんを殺そうとしてるし！！」

すわっこ「境内はあいつがやったんだってば」

早苗「誰がやったかなんて関係ありません！ 元通りに神社を修復して、神奈子様が復活するまで、ご飯抜きです！」

すわっこ「そ、そんなっ！？ それだけは勘弁してよ！！」

早苗「自業自得です。それと、蒼奈さんは誰がなんと言おうとうちに住ませますからね！」

すわっこ「……………うう……………分かったよ」

早苗「ああ、本当にかわいそう……………蒼奈さん……………付きっ切りで看病しますからね……………」

すわっこ「……………」

早苗「……………諏訪子様？」

すわっこ「……………けいだいのしゅり、いってきます……………」

早苗「……………いってらっしゃい」

こうして、蒼奈は自分の住処と大切な人を手に入れた。
だが、しばらくは神二人と険悪な日々が続くのだろう……。

とりあえず境内の修復作業が終わるまでは、このまま狸寝入りを
決め込もうと決意する、蒼奈なのでした。

どんどはれ。

+++

後日談……。

神奈子「あ……。ようやく復活か。長かったな」

すわっこ「お、神奈子。一週間ぶり」

神奈子「もう一週間も経ったのか？　それで、あいつはどうなった？」

すわっこ「あそこにいるよ」

早苗「蒼奈さんって、肌綺麗ですよねー。羨ましいなあ。何か秘訣とかあるんですか？」

蒼奈「あら、早苗も十分綺麗ですよ。　秘訣か・・・そうですねえ。とりあえずはちゃんとお手入れすることかと」

早苗「参考になります」

蒼奈「後でお手入れの仕方とかいろいろ教えてあげますよ。隅から隅まで、ね」

さなえ「・・・っ!？」　　お、お願いします・・・。後では言わず、今、こっで・・・」

神奈子「コラーっ!!!　　貴様、私の早苗に何してるんじゃないっ!」

神と半人半神 時々、現人神・第一回（4）（後書き）

さて、今作は戦闘シーンを序章に書いて、本編にて割愛するという常套手段を用いてみた。この技法は、序章ではった伏線を後半で一気に回収して、読者の盛り上がりを誘います。

ですが、今回ウチが使ったのは、伏線を用いないバージョン。これは、読者の盛り上がり方を中途半端にすることができます。

序章で盛り上げて、その後ちよつとずつ熱冷ましして、いざ、実際に盛り上がる場所は既に書いてあるので、盛り上がりきらなくなる、という技術。

要するに、盛り上がりの前借りですよ。うまくすれば、熱い戦闘シーンも冷静な目で読ませることができます。

正しいこの技法の使い方は、なすきのこさんの「DDD」を読め。

あの人は、この技法の天才です。

今作に関してのあとがきはブログで。

では、これからよろしくです。

紅魔の門番物語・序章（前書き）

さて、今作は東方キャラ視点での物語にしてみました。
その理由は・・・本編で。

紅魔の門番物語・序章

??? 「情けないものね……。なんと進入を許せば気が済むのかしら……?」

倒れている私を見下す目が冷たい。優しく手を差し伸べるどころか、その手にはナイフが握られていた。彼女の名は、十六夜咲夜。私の勤め先である紅魔館のメイド長であり、私の上司に当たる人だ。咲夜さんは、ため息一つ、リストラでもしようかしら、と呟く。

咲夜「幸い、昨今の幻想郷は何かと人も多い。無法妖怪を倒す生業をするものもいるって言うし、その辺から引き抜けば……」

??? 「ま、待ってください!!」

咲夜「何よ、美鈴」

美鈴「それって、私はクビってことですか!? で、でも、私はちゃんとやってますよ! ただ、ちよつと労働環境が苛酷すぎて、本来の実力が出せていないだけです!!」

あなたは言葉の意味をちゃんと考えなさい。咲夜さんは呆れ顔をし、腕組みする。

咲夜「あんたも人間の里とかでそういう言葉の知識を得ているのでしょうけど、甘いわね。リストラってのは、別に相手をクビにするだけじゃないわ。本当の意味は『再構築』って意味でね。組織や会社がより効率的に運営できるように、物事を見直すってことよ」

咲夜「門番が役立たずなのは、組織の失態　ゆえに、上司である私の失態とも同義」

咲夜「これ以上の失態を減らすためにも、私がああなたの労働環境を改善するわ。ま、それでもあなたが結果を出せないなら、それはあなたの責任ってことになるけどね」

美鈴「じゃあ、まさか……」

咲夜「オーバーワークが過ぎるのが原因なのでしょう？　その居眠り癖と、動きの鈍さは」

美鈴「は、はいっ！　二十四時間交代なしの環境ゆえ、実力が発揮できていません！」

咲夜「……その言葉、今回だけは信じてあげる」

そして、咲夜さんは笑顔で言う。

咲夜「でも、それでもダメなら、本当にクビよ？」

美鈴「……肝に銘じます……」

咲夜さんの仕事は速い。それから数日もしないうちに、新しい門番を連れてきたのだ。

咲夜「……この子が、新しい門番よ」

「??？」

美鈴「……人間ですか？」

咲夜「でも、侮らないほうがいいわよ。この子は間違いなく逸材なんだから」

自慢げに胸を張る咲夜さん。よほどの自信があるのか、かなり上機嫌の様子。こんなにも楽しそうな咲夜さんなんて見たことがない。じゃあ、しばらくは一緒に鍛錬と仕事をして、慣れてきたら一人でやらせて見ましよう。私が言つと咲夜さんは、研修の細かいことは任せるわよ、とご機嫌に屋敷に戻っていく。

だが、その振り返りざまに、言ったのだ。

咲夜「あ、美鈴。もしもこの子が一人でも十分に仕事がこなせるようなら、あなた、クビだからね」

美鈴「そ、そんなあ！！」

咲夜「安心なさい。その時は妖精メイドに加えてあげるから」

そう。リストラの意味は再構築。私はすっかり忘れていた。この子がもしも、本当に逸材なら、私がいる必要がなくなるのであった。……結局クビになるかもしれない。そう思うと、なんか涙が出てきた。

美鈴「ううう……。あなた、名前は？」

クロル「……クロル。これからお世話になります」

美鈴「……ええ、よろしくね」

こうして咲夜さんが太鼓判を押す、謎の少年が紅魔館の門番に加
わったのだ。

紅魔の門番物語・序章（後書き）

クロルさんの声はなんか鈴村健一で脳内再生されるなあ・・・。
何故そうなるのか・・・。なんかその理由も、まあ本編で分かる気がするけど。

咲夜さんの紅魔館リストラ計画第一弾となった今作。しかし、別段、紅魔館が赤字ってわけでもないの、労働環境の見直しがメインとなっっています。

むやみやたらにクビにするだけが、リストラではないのですよ。
お仕事を円滑に進めるための組織の再構築をリストラと言うのです。

業績不振ゆえ、給料を削ったり、ボーナスをなしにしたり、クビにするのが世間一般のリストラですが、逆に業績がいいから、思い切った新しい設備を導入したり、社員数を増やして一人へかかる負担を軽減したりするのも立派なリストラってわけです。

そして、クロルさんの実力はいかに・・・。

では、今回もよろしくです。

紅魔の門番物語・第一回（1）

それから数日たったある日のことだった。私はいつものように、お嬢様の紅茶の支度をしている時である。美鈴がやってきたのだ。

美鈴「おはようございます、咲夜さん」

咲夜「あら、おはよう。あなたがここにいらっしゃるってことは、もしかして」

美鈴「はい。今日から彼には一人で門番をやってもらうことにしました」

咲夜「じゃあ研修ももうお終いつてことね」

美鈴「まあ、ひとまず今日の正午まで、ちゃんと門番としての仕事ができるか次第ですけどね」

ふふ、と笑みがこぼれる。わずか数日で美鈴に認められるような実力者を拾ってきた私の才能が怖い。

咲夜「それで、クロはどんな感じかしら」

美鈴「すごいですよ。最初は全く使い物になりませんでしたけど、私が教えるたびに、すぐにそれをマスターしてしまうんです」

咲夜「そうでしょう。　　だって彼の能力は『相手の技術を盗む程度の能力』なんですもの」

咲夜「私も初めは驚いたわ。無法妖怪に襲われている人間を助けようと思ったその刹那、襲われていたはずの彼が一気に無法妖怪を退けたのですもの。　　しかも、無法妖怪の使った技で」

美鈴「・・・」

咲夜「なによ、不満げね」

美鈴「不満ってワケじゃないですけど・・・でも、咲夜さんは彼を過大評価しすぎな気がします」

咲夜「あら、この間のことがあるから、彼のことを評価して欲しくないのかしら？」

美鈴「ち、違いますよっ!!」

咲夜「あれは冗談よ。　　妖精メイドじゃなくて、妹様専属の遊び相手になってもらうわ。　　その方が妹様も喜ぶし」

美鈴「そ、そうじゃなくて！　　彼の能力は　　」

咲夜「はいはい……。朝食、久しぶりにここで食べてく？」

美鈴「……いただきます」

今朝焼いたばかりパンと、目玉焼きとサラダを作って美鈴に渡す。暖かい食事なんて何年振りでしょうか、と涙ぐむ彼女を見て、不憫に思えた。

咲夜「美鈴、ところで、あなたはどうして彼を過大評価だということかしら？」

美鈴「……彼の能力は、きっと咲夜さんの思っているものとは違うってことです」

咲夜「……でも、彼は確かに才能を持っているわよ。そうじゃないきゃ、無法妖怪なんて倒せないもの」

美鈴「まあ、確かに、才能があるのは認めます。いずれ、私よりも強くなることでしょう」

咲夜「ほら、やっぱりそうなんじゃないの」

美鈴「でも、私にはそこまでのような気がしてならないんです」

所詮は人間なんですから。美鈴の言葉に私は苛立つ。

咲夜「それは、私に人を見る目がないって言いたいのかしら？」

美鈴「そ、そんなわけじゃっ！」

咲夜「・・・美鈴、あのね」

美鈴「はい・・・」

咲夜「言いたいことははっきり言いなさい」

美鈴「・・・」

咲夜「・・・」

しばし、沈黙する。

咲夜「まあ、いいわ。 彼が実際に役に立つのかどうかは、その時がくれば分かるのでしょうし」

美鈴「・・・」

その時、大きな地響きと共に、膨大な魔力の流れを感じる。
これは、マスタースパーク？

しかし、それは紅魔館に当たったわけではなさそうだ。窓の外を確認すると、箒に乗った魔女は空高く、その魔法を放っていた。何の脅しだろうか。真下を見ると、クロがいる。

美鈴「あの白黒！

加勢に行ってきます！！」

咲夜「待ちさない！」

足を止める美鈴を手招きし、私は笑う。

咲夜「いい機会よ。

あなたもここで、彼の才能の真価を見て

いきなさい……」

紅魔の門番物語・第一回(2)

クロル「へえ。すごい魔法だ」

まりさ「どうだ。驚いただろう？」

さ、食らいたくなかった

ら、ここを通すんだな」

クロル「そういうわけにも行かない。これも仕事だからね」

まりさ「・・・脅しも通用しない、か。こりや前の門番とは違って、一筋縄じゃいかなそうだぜ・・・っ！！！！！」

箒を真下に向け、一気に急降下する魔理沙。だが、地面にぶつかるその直前に体を起こし、そのまま着地することなく、クロルに迫ったのだ。

美鈴「あれは・・・まずいですっ！！」

まりさ「『ブレイジングスター』！！」

マスタースパークを推進力に、さらに加速する魔理沙の体当たり。クロルごと、門を壊してしまうつもりらしい。だが、彼も一向に動く様子を見せない。あれが直撃したら、人間なら即死どころの騒ぎじゃない。跡形もなく消し飛んでしまう。

咲夜「さあ、クロ・・・その力を見せてあげなさい！！」

咲夜さんの言葉通り、クロルはその力を発揮した。体当たりを片手で受け止めたのである。その手の平からは、緑色の光が放たれていた。

まりさ「なにっ……それは……まさか？」

美鈴「気功拳……やはり、私の技術を盗んでいましたか……」

クロル「気功拳『ゴッドハンド』!!!!」

緑色の手が巨大化し、魔理沙を完全に受け止める。そして、そのまま彼女を空高く放り投げた。

クロル「気功波『流星拳』!!」

まりさ「わわっ、それはちょっとまずいぜ!!」

打ち上げられた魔理沙に追撃の弾幕。青色に光る巨大なごぶしの弾幕が一斉に魔理沙に迫る。

魔理沙「……っ！ 霊撃!!」

弾幕を強引に相殺し、どうにかバランスを保ち、筈にまたがる。そして、次は魔理沙の番だ。

魔理沙「星符『スターダストレヴァリエ』!!」

魔理沙の放つ星の弾幕がクロルに降り注ぐ。だが、さっきのゴッドハンドは防御にも使えるらしい。星をなぎ払い、魔理沙への反撃のチャンスを伺っている。

魔理沙「これは、取って置きだぜ」

魔理沙「星符『スターリングシュート』!!」

星の弾幕で星の形を形成し、それを一気にクロルに向けて放った。しかし、その弾幕はあまりにもお粗末だ。星の形を形成する星弾幕は、あくまでその線を描いているだけ。中心部分は完全に安全地帯だ。クロルもそれは分かっているのか、星の中心に入り込み、回避していく。だがそんなの、あからさまな罠に決まっているではないか。

美鈴「いけません！ クロル!!」

魔理沙「もう遅い！ その中に入ったらもうお終いだぜ!!」

魔理沙「これで、決めるっ!!」

安全地帯を隙間なく埋める、星の形をしたレーザーが放たれる。クロルも気功で防御するが、そんな程度では魔理沙のレーザーは止められない。と思いきや、完全にその力を相殺しきったのだ。それを見て、魔理沙は眼を丸くしている。

クロル「・・・やるね」

魔理沙「・・・伊達に魔法使いはやってないぜ」

クロル「次は全力で行くよ」

魔理沙「臨むところだぜ!!」

クロルが跳躍すると、一気に魔理沙のいる高さまで飛び上がる。まさか、空を飛ぶ魔法を盗んだというのか。いや、違う。あれは、彼のルール通りだ。私は確信し、そこで観戦をやめて部屋を出る。

咲夜「美鈴!？」

美鈴「このままじゃ、クロルは負けてしまいます!!」

この戦いを見て、分かったのだ。彼の能力は、やはり、幻想郷向きじゃない。魔理沙には、絶対に勝てないのだ。

クロル「気功拳『ゴッドハンド』!!!!!!」

魔理沙「面白い！ ならば私は恋符拳『マスターハンド』だっ！！！」

クロルの気功拳と魔理沙の即興スペルがぶつかり合う。威力は完全に互角。だが、さすがに男と女。純粋な力で魔理沙に打ち勝ち、一気に彼女を地面に叩き付けた。

魔理沙「・・・くそ・・・服がボロボロだぜ。 あー、しかも口の中切った。痛つたいなあ・・・」

クロル「帰る気になったか？」

魔理沙「冗談。 だって、負ける気がしないんだ」

クロル「・・・」

魔理沙「お前の実力は分かった。 だが、お前の実力はそこま

でだ。恨むなら、実力のない師匠を恨むんだな」

魔理沙「マスタースパーク!!!!」

クロル「気功『断光拳』!!!!」

魔理沙の放ったレーザーを、クロルは緑に光った手で切り裂く。驚く魔理沙だったが、まだそれは不完全だ。圧倒的な火力と力を持った魔理沙のレーザーを完全に相殺し切れてはいない。

魔理沙「出力を上げるぜ！ファイナルマスタースパークだ!!!」

クロル「・・・俺は」

クロル「俺が勝つ！お前なんかには、負けてたまるか!!!!」

クロル「気功『真・断光拳』!!!!」

緑の光がさらに強くなる。それどころか、レーザーをも飲み込んで、その力をどんどん強くしていくではないか。その底知れぬパワーを目の当たりにし、魔理沙は震える。この短時間で、これほどまでの成長を遂げるような奴が幻想郷にいたのか、と。

魔理沙「すごい奴が門番になったもんだなっ！　だが、そんな危険なやつは、ここで門番廃業だ！」

魔理沙「日恋符『ロイヤルマスタースパーク』！！！」

美鈴「いけません！！！！！」

私は魔理沙に飛び蹴りし、スペルの発動を中断させる。二対一かよ、と呟く魔理沙。そして、私は周囲の惨状を確認し、クロルに叫ぶ。

美鈴「クロル！　二人がかりでしとめますよ！」

クロル「了解」

魔理沙「いつもの門番だけなら、たいした相手じゃないが・・・あいつはやばいな・・・二人まとめて焼き払うか？」

考える魔理沙をじっと睨む私。だが、クロルの視線は別のほうを向いていた。紅魔館の屋上にある、巨大な時計だ。

クロル「三……二……一……」

クロル「業務時間終了です。美鈴さん、後はお願ひします」

美鈴「ええっ!? 魔理沙はどうするんですか!？」

クロル「でも、美鈴さんは正午に交代だって言ったじゃないですか」

クロル「それに、俺、腹減りました」

美鈴「そ、そんなあゝっ!?!」

さつさと紅魔館に戻っていくクロルを見、魔理沙は大笑いしていた。

魔理沙「あっはっはっは……な、何だよアイツ……。私をここまで熱くさせておいて、交代の時間ですって……」

魔理沙「……仕方ない。この欲求不満は、お前にぶつけるとしようか! 日恋符『ロイヤルマスタースパーク』!!!」

美鈴「ええっ!? ちょ、ちょっと待って きゃあああああ

ああっ!?!?!?!」

紅魔の門番物語・第一回(3)

咲夜「クロ。初めての一人でのお仕事はどうだった？」

クロル「ええ、まあぼちぼち・・・咲夜さん、お昼は？」

咲夜「あら、ごめんなさい。今、持って来るわね」

咲夜「はい。どうぞ」

クロル「・・・」

咲夜「どうしたの？ トマトをじっと見つめて」

クロル「・・・いただきます」

咲夜「随分と、あの白黒に苦戦してたみたいね」

クロル「ええ、まあ・・・」

咲夜「この間みたいに白黒の魔法を盗んじやえばよかったじゃない」

クロル「それは出来ません」

咲夜「あら、どうして？ あなたの能力は『相手の技術を盗む程度

の能力』なのでしょう?。」

クロル「・・・違います」

咲夜「え?」

クロル「俺の能力は『武術を極める程度の能力』です。だから、魔法は覚えられません」

咲夜「そ、そうなの・・・」

クロル「でも、大丈夫ですよ」

クロル「次は俺が絶対に勝ちますから」

咲夜「その根拠のない自信は・・・いったい何処から来るのかしら、ね・・・?」

どうやら美鈴の言葉は正しかったようだ。自分には思ったほど、人を見る目はないらしい。武術なんて幻想郷で覚えているのは美鈴くらいだ。そして、それを極める能力ということはあくまで、一瞬で美鈴クラスの達人になれるということ。でも、所詮そこまで

だ。

美鈴並の強さ、あるいは美鈴以上の強さを得ても、弾幕戦が浸透している幻想郷では、その程度の実力、ということである。

残る希望があるとすれば、美鈴の将来性にかける程度のレベル、ということである。結局、今回のリストラ計画は、仕事にまじめな美鈴が一人増えただけ、ということだ。

がつくりと、肩を落とし、ため息をつく私。

咲夜「ああ、お嬢様になんて報告したらいいの・・・」

口が裂けても真実を語るわけには行かない、と、どうにかして自分の保身が出来ないものか、必死で言い訳を考える、私なのでした・・・。

485

+++

パチエ「コラ、魔理沙。私の許可なく勝手に私の力を吸い上げないでもらえるかしら」

まりさ「それは、ここに来るための必要経費だけ。本、借りに来たぜ」

パチエ「にしても、今日は随分とボロボロね。途中で妹様に

でも会ったのかしら？」

まりさ「違うぜ。新しい門番と戦ったんだ」

パチエ「門番？ ああ、あの少年か・・・」

パチエ「弱かったでしょう？ あの子」

まりさ「とんでもない。 その逆だぜ」

パチエ「・・・私の見立て違いだったのかしら？」

まりさ「私のレーザーを飲み込む気功なんて、初めて見たぜ」

パチエ「なにそれ？ あの子は美鈴の師事を受けていたはず

よ。美鈴に出来ないことを、彼がやったとでも言うのかしら？」

まりさ「ああ。 恐らくそれがあいつの能力の正体。 きっと美

鈴も後三百年くらい修行したら、ああなるってことだぜ」

パチエ「それは・・・気の遠くなる話ね」

まりさ「その上、アイツはまだ進化する」

パチエ「あら、天井知らずってことなのかしら？」

魔理沙「物事に極める、なんて言葉はないんだぜ。一つの頂点に達したら、それがまた、別の物事の始まりになるんだ。そうして、どんどん進化していくんだぜ。それが人間ってもんだ」

パチエ「・・・要するに、戦えば戦うだけ強くなる、と。あなたも災難ね。そんな化け物が門番になったら、ここに来れなくなるんじゃない？」

魔理沙「お気遣いどうも。でも、そんなの関係ないぜ」

まりさ「次は絶対に私が勝つぜ」

パチエ「その根拠のない自信は・・・いったい何処から来るのかしら、ね・・・？」

どうやら、新しい門番は天井知らずに力をつけていくという、とんでもない能力を持っているらしい。だが、私もそれに負けないくらいに日々、進化を続けている。あいつの進化が、私に追いつくのが先か、私の進化が、あいつでは太刀打ちできない領域に達するのが先か。

これは、いいライバルの出現だぜ、と心を躍らせる、私なのだっ
た・・・。

どうしてかな。

紅魔の門番物語・第一回(3) (後書き)

クロルさんの声がすずけんだった理由……。

それは、まあ、ゴッドハンドですね。

名前自体はイナイレから貰ってきましたが、映像イメージはデステイニーガンダムのおれです。

クロルさんの能力は武術を極める、という幻想郷向けな能力じゃありませんが、物事に極めるといふものは存在しない、ということですよ。

限界を知らなければ、どこまでも進化し続ける。そんな新たな幻想入り住人の登場ですね。さて、この先いったいどうなっていくのやら……。

デウォーカーと紅魔館・序章（前書き）

どうもです。

今作はちよつと構想到手間取った上に、タイトルが決まらずに悩み続けた作品となりました。

でも、時間かかった割りには、完成度低いぜ。

では、今回もよろしくです。

デイウォーカーと紅魔館・序章

薄暗い部屋の中で、ぼんやりと天井を見つめていた。

「????」あ、起きましたか」

不意に、声が出たと思うと、俺の顔を覗き込む女性が一人。ほっとしたような表情をし、運のいい人だ、と苦笑いしていた。

「????」あなたは、誰だ……?」

「こあ」あ、私はこの図書館で司書をしています。小悪魔です」

「????」それは、名前じゃないだろ……」

「こあ」名前はありません。あ、主からは『こあ』と呼ばれますので、そう呼んでください」

「こあ」それで、あなたのお名前は?」

静「椎名静……」

「こあ」椎名さん、ですね」

「こあ」というその女性は、不意に部屋のカーテンを開ける。いい天気だ。そう思っていると、こあはふむ、と神妙な面持ちでこちらを見ているではないか。

こあ「本当だ。 灰にならないですね」

静「な、何の話だよ・・・」

こあ「パチユリー様の言うとおりですか・・・本当にすごいですねえ」

静「パチユリー？」

こあ「私の主です。 今、呼んできますので待っていてください
ね」

こあはパタパタと慌しく走っていく。それからしばらくして、彼女に連れられて、妙な服装の女の子がやってきた。

パチエ「あら、本当にデウォーカーになったのね。 運のいい子だわ」

こあ「ね、ね。パチユリー様、私の言うとおりだったでしょう？ ホントに灰になりませんでしたよ？」

パチエ「はいはい。よくできました」

こあ「えへへー」

静「あのさ。 俺にもわかるように話してくれないか？」

パチエ「あなた、ここに来るまでの経緯を覚えていないのかしら？」

静「・・・ずっと道に迷っていたのは覚えてる。でも、それ以降はよく知らない。気がついたらここにいたって感じた」

パチエ「そう。ショックで記憶が飛んでいるのね。じゃあ、思い出させてあげるわ」

私もこの方法で、あなたに何があったのかを知ったんだけどね。パチユリーという少女はそう言いながら、持っていた本を開く。そして、こちらに手をかざすとなにやら呪文のような言葉を呟いた。

パチユリー「これから、あなたが忘れていた過去を頭から取り出して、もう一度あなたの記憶に移植するわ。それで、全て思い出せるはずよ」

よく分からないことを言ったことだけはよく分かった。だが、彼女の言葉は、すぐに理解できるようになる。言葉どおりの現象が起きたのだから。

あの時、俺の身に起こった全ての事をはっきりと思い出したのだ。

パチエ「思い出せたかしら？」

静「・・・そう、か・・・。俺は、あいつに」

パチエ「そう。そして、ある病をうつされた」

静「病？ まさか、いや・・・そんなことは」

その言葉に、何を思ったか、パチュリーはくすくすと笑っている。

パチエ「あなたの思っているような病なら、まだ救いがあったかも知れないわね」

パチエ「・・・でも、そうじゃないわ」

パチエ「とびつきり重い、不治の病をうつされたのよ、あなた」

デウォーカーと紅魔館・序章（後書き）

静さんの設定は若干、苦戦を強いられました。

私の小説の場合は吸血鬼に噛まれて吸血鬼化するという例がなく、そもそもレミイに噛まれた人間はどうなるかの事例もないので、完全に月姫風の設定をパクって来た感じですよ。

吸血鬼の出る小説は結構書いてきたのに、吸血鬼がうつるという前例がないって……私の小説遍歴はいつたいなんなのだろうか……。

デウォーカーと紅魔館・第一回(1) (前書き)

ちよつと今回は作成難航してるので、(1)だけ先に公開します。
うーん・・・やっぱ吸血鬼は難しい。そして、レミイの運命操作も
難しい。

運命を操るって、すごい漠然でイメージを掴みにくいよね。

では、本編をどうぞ。回想シーンからスタートです。

デイウォーカーと紅魔館・第一回（1）

道に迷う、どこの話じゃなかった。あの時の俺は、まるで違う場所を歩いていたのだから。何処を目指していたのか、この旅に何の目的があったのか。それすらも分からなくなるほどに、迷っていた。

ここは何処なのだろう、なんて些細な問題でしかなく、自分が何でここにいるのか、どうしてここに迷い込んだのか、のほうที่สำคัญだった。とにかく、誰かに会わなければ、その疑問も晴れることはない。だから、人のいる場所を求めて彷徨い歩く。そんな日が数日続いた。幾日も彷徨う中で、一回も人に会うこともなく、俺はその場所にたどり着いてしまった。それが、俺の一つの決着だったのかもしれない。

考えれば妙な話だった。山の中、湖のほとり、草原、何処を歩いても、何も見つからないなんて。その時点で、全てが定められたものの中にあつたというのならば、答えなんて簡単に見つけられる。

俺は、この日、あの少女に出会う運命にあつたのだ。

紅色の屋敷。門番は居眠り。人の気配。それだけあれば、現状の俺を釣るには十分すぎる餌である。導かれるようにして、館の中に入る。そして、そこで待っていた少女は微笑んでいた。

「????」
「やっと、会えたわね」

紅の瞳に、牙のように尖った犬歯で自分の指を噛み、微笑む少女。俺がここに来ることが必然であったように、彼女がその行為に及ぶことも、また必然であった。

静「・・・っ！！！」

????「ふふ、逃げられるわけないでしょう?。」

????「お前はこうなる運命の下に生まれたのだから」

少女は手を胸の前で組み合わせ、祈るように何か呟く。すると、彼女の背後から、一斉に紅色のオーラをまとう鎖のような物体が飛び出した。それらはこちらに向かって飛んでくる、どうにかかわすものの、逃げる際に足を引っ掛けて転倒する。そこに、少女は飛んできた。

????「私はね。 お前を食うために待っていたんだ。焦らすようなことはしないで頂戴」

馬乗りになって、彼女は牙をむく。そして、俺の首筋に噛み付いたのだ。 痛みはない。むしろ、この感覚は快感に近いものがあった。だが、その間にも、ゆっくりとその終わりが近づくのが分かる。体の血が抜けていく感覚。少しずつ、近づく死の感覚だ。

「????」

少女が息をするたびに、体が大きく震えている。そして、飲みきれない血が、彼女の口から溢れて服を染めていく。彼女の顔は、紅く染まり、そして、それでもなお、噛み付いた牙を離すことはなかった。

少女の手が、背中に回る。抱きつくようにして血を吸い上げる少女。吸血鬼にとって、この行為が何を意味するのかを教えるかのように、彼女の息は荒くなり、体が熱くなっていつているのが分かる。

だが、それも終わりが来る。

「????」は、あ……んあっ!!!!」

ついに口を離し、少女は甲高く甘い声を上げた。震える体とじわりと衣服越しに染みてくる彼女の体液の温かさに、俺は安心したのかゆっくりと目を閉じる。

ああ、これが、俺の死。

飲みきれない血を口から溢れさせ、快感に酔いしれる少女の遊びにつき合わされ、死ぬのだろうか。そんなことを考えている間に、もう意識はなくなっていた。

静「そして、今に至る・・・ってことか」

パチエ「今のくだりの何処にあなたの想像する病をうつされるところがあつたのかしら・・・？」

パチユリーは腹を抱えて笑っていた。こつちだつて、記憶が戻つたといえ、意識を手放して以降、あの少女に何をされたかなんて知らないのだ。それで、病がうつつた、なんて言われたら、そつちを疑うじゃないか。笑いすぎでこぼれた涙を指で拭い、パチユリーはそんなことをするような子じゃないわよ、と言う。

パチエ「はー、おかしい。第一、あんな小さな女の子なのよ。そういうことはまだ知らないんじゃないかしら？」

静「吸血鬼なんだろう？ それなりに年齢もいつてるんじゃないのか？」

パチエ「その分、成長も遅いものよ。あの子は特にね。きつと、血を吸うことも、なんか気持ちいいだけやってるのでしよう。あの子は純血の吸血鬼だから、血液を摂取する必要もないし」

静「吸血鬼って血を吸わないと生きていけないんじゃないか？」

それは間違いね。ただの都市伝説よ。パチユリーはそう言いながら、こあに耳打ちする。

こあ「はい、ただいま」

こあはさっさと部屋を出て、そしてすぐに戻ってくる。

こあ「持って来ましたー」

パチエ「ありがと。さて、あなたには吸血鬼とは何か、についてから話さなきゃならないみたいね」

パチユリーは椅子に座り、眼鏡をかける。こあは絵本でも読んでもらうような気分なのか、楽しそうにその場にちょこんと座っていた。

パチエ「あなたたちの世界にも、吸血鬼を初めとする異種族がたくさんいたと思うけど、あなたはそれを知っているかしら？」

静「キツネ娘が秋葉原周辺で出没するっていう噂を聞いたことがある。それと、東京にある風俗店のあった廃ビルにレズの吸血鬼が住

んでいるって都市伝説も」

パチエ「・・・知らないとみなすわよ」

静「それでいい」

パチエ「・・・異種族ってというのは、人間とは違う進化の過程を経て、人間と相違ない形まで至ったもの。あなたたちの国では、妖獣とも呼ばれているわね。吸血鬼は、これの一派。一説には吸血コウモリから派生したとか、そもそも単種生命体の一種だったとか言われているわ」

パチエ「彼らの寿命は永遠といわれるほど長く、実質的な寿命は存在しないに等しいわ。でも、その代わりと言っていいほど多く、致命的な弱点が存在する」

パチエ「十字架、ニンニク、流水、太陽の光。銀製の凶器や、心臓に杭を打たれるのにも弱いわね。ここまで弱点の多い生き物は、地上には存在しないのよ」

静「で、血の話は？」

パチエ「せっかちなね。それを今からするのよ。それで、吸血鬼にとつての血、のことなんだけど。実を言うと、純血の吸血鬼には吸血なんて必要ないの。でも、吸血鬼は厄介な性質を孕んでいるわ。それは吸血をすると性的興奮を得るということ」

パチエ「そして、吸血鬼は生まれながら病気を持っている。しかも吸血の際に使用する牙から分泌される麻酔のような液体にその病原菌が含まれていてね、相手を噛んだ際に血管に病原菌が入り込み、感染するわ」

まあある意味では、あなたの想像通りってワケ。パチユリーはくすくすと笑いながら、隣に座るこあの頭をなでる。

パチエ「その病気の正体こそ、吸血鬼の病。吸血鬼は生まれながらにして吸血鬼という病気を持ち、そして、吸血しようとして相手に噛み付くと、相手にその病がうつり、同じく吸血鬼にしてしまう」

パチエ「だからこそ、高貴な吸血鬼は相手に病をうつさないように、さもワインを飲むかのごとく、血をグラスに入れて飲むのよ」

レミィも最近はそうしていたはずだったんだけど、と咳く。でも、ただの気まぐれでしょうね、と呆れ顔で自ら返答した。

パチエ「そして、この病原菌に感染したものは、二つの道をたどるの。一つは拒絶反応で死亡する。そして、もう一つは病原菌を受け入れて、吸血鬼となる」

静「じゃあ、俺は吸血鬼になったのか？」

その問いに、いい質問ね、と彼女は答える。眼鏡を外し、本をこ
あに渡して立ち上がる。

パチエ「残念。

あなたがたどった道は第三の道よ」

デウォーカーと紅魔館・第一回（1）（後書き）

ロリがエロい。

ようじよがえろい。

レミイがいきました。

はい。東方幻想夢初の濡れ場ですぜ。

吸血鬼の設定は月姫の真祖設定を一部踏襲してるので、血を吸わないと生きていけないわけじゃないです。ただ、吸血時は性的快感を得られるので、吸血鬼は血を吸う、という設定になってます。

だからまあ、ここでいう吸血鬼という病は、ぶっちゃけ性病の一種ですね。

そして、序章のこあと続き、今回はパチエがかわいい。では、続きはもうちょっとお待ちください。

デウォーカーと紅魔館・第一回(2)

レミィ「……うー」

咲夜「さて、お嬢様……。いい加減正直に話してはくれませんか？」

レミィ「……だって」

咲夜「言い訳は無用」

レミィ「……」

咲夜「……人間の運命を一つ丸ごと変えてしまう。それがどれだけ大きな危険と悲劇を招くか、お嬢様には分からないのですか？」

咲夜「いいですか？ 運命というのは、始まりと終わりの柱に結ばれた糸のようなもの。どんな糸をたどろうとも、必ず同じ結末にたどり着くのです。ですが、お嬢様の能力は、その結んである柱を変えてしまうようなもの。それによって、どんな影響があると思いますか？」

レミィ「……」

咲夜「・・・本来の運命にかかわるはずだった者たち全ての運命が
変わってしまうんです！ しかも、彼らの場合は結んである先は変
わらないから、大きな不幸を生む可能性だってあるんです！

彼と結婚する運命だったものは、死ぬまで結婚できず、彼に命を
救われる運命にあったものは、そこで死んでしまうんです！」

咲夜「お嬢様のしていることは、未来の改竄なのです。　これ
以上、私のようなものを生み出すのは、やめてもらえませんか？」

レミィ「そんなの、分かってる」

咲夜「じゃあ、どうして・・・」

レミィ「だって・・・」

レミィ「・・・やっぱり、言えない」

咲夜「ホラ、たいした理由なんてないんじゃないですか。　た
だの気まぐれでやったのでしょうか？」

レミィ「ち、違う！！　それは、違うの！」

咲夜「なら、私に話せないような重大な理由があるのですか？」

レミィ「・・・」

咲夜「・・・もう結構です。 これ以上は何を聞いても無駄の
よじですから」

咲夜「でも、一つだけ言っておきます。 運命を操ったところ
で、その者の心までは縛れませんよ」

+++少年少女移動中+++

静「で、俺はこれからどうなるんだ？」

パチエ「レミイ次第でしょうね。 まあ、とにかく本人に会っ
てみないことには始まらないわ」

パチエ「さ、ここがレミイの部屋よ」

俺は、パチユリーから、一通りの経緯を聞かされた。

レミリアという吸血鬼に噛まれて、吸血鬼感染したこと。こあが
廊下で倒れていた俺を発見して、図書館まで運んできたということ。
そして、太陽が効かないという特異な吸血鬼になってしまったとい

うこと。

人は、それを吸血亜種　　デイウォーカーと呼ぶ。本来の吸血種の枠から外れた規格外品。世界的に見ても、指折り数えるほどしかないという超貴重種である。

パチユリーが言うには、ただの奇跡であるという。

だが、レミリアの差し金であるかもしれないと、こあは言った。そして、今、ここにいる。全ての真相を知るために。

これも、レミリアの定めた運命だったのか。

または、運命の悪戯が起こした奇跡なのか。

レミリアの部屋のドアを開ける。すると、開いたドアのわずかな隙間から、何かが飛び出してきた。あまりの勢いに吹き飛ばされる。

静「いたた・・・」

パチエ「あら、どうやらお出迎えだったみたいね」

静「レミリア・・・か」

レミィ「・・・」

パチエ「聞きたいことがあるの、レミィ」

レミィ「……………」

パチエ「レミィ？」

レミィ「」

少女の手には、紅の槍。驚く俺たちにそれを向け、レミアアはじつとこちらを睨んでいた。なんのつもりよ、問いかけるパチュリーの言葉に答える間もなく、彼女はそれを振りかざしたのだ。

こあ「パチュリー様！！！」

パチエ「……………ご乱心つてところかしら？」

魔法のシールドで槍を受け止める。そして、パチュリーは反撃とばかりに魔道書を開き、そこから炎を放った。

パチエ「いったい何のつもりかしら？
もしかして、本当に
おかしくなってしまったの？」

レミィ「……………いや、私は正常だよ」

レミィ「自らの犯した過ちは、自らの手を持って肅清する」

パチエ「……狙いは彼、か……」

パチエ「こあ。椎名くんを連れて屋敷を出なさい。今日は天気がいいわ。レミイには追いかけてられない」

こあ「……は、はい！」

静「ちよ、ちよっと待て！ お前はどつするんだよ！」

パチエ「気安いわよ。お前呼びわりしないで頂戴。レミイはあなたの命を狙ってる。私が彼女を抑えておくから、あなたはさつさと屋敷を出なさい。彼女は純血種だから、太陽の下まで追つてはこれないわ」

静「俺も戦う！」

パチエ「ナマイキ言うんじゃないわよ、ド素人のクセに。……幻想郷はね、あなたのいた世界のような、ゆるい世界じゃないのよ」

そう言った刹那、パチユリーの周りに色つきのクリスタルのような石が現れる。その膨大な力に、周囲の空気が一変する。この世界に来てまだそんなに日が経っていない俺にだってわかる。パチユリーの力は、外の世界のどんな兵器よりも強い。

桁違いの力。そしてそれを目の当たりにしても、一切動じないレミアという吸血鬼。それを見れば一目瞭然だ。俺にどうにかできるレベルの話じゃない。この場にいるだけで、殺されかねない。

こあ「パチユリー様に任せておけば大丈夫ですよ。 さ、行き
ましょう」

静「あ、ああ……」

+++少年少女移動中+++

レミイ「私に楯突くなんて、随分偉くなったものね、パチエ」

パチエ「あら、元より偉いつもりよ。あなたのワガママにいつも付き合っ
てあげてるのは誰かしら？」

レミイ「あいつは、あそこで死ぬ予定だったんだ。それが死ななかつた
から、咲夜に怒られた。 だから殺して、結果を同じにするのよ」

パチエ「残念ね。 長生きしてるくせに勉強不足よ」

レミイ「なに……？」

パチエ「今更殺したところで、結果は同じにはならないわ。私と出
会い、そして、デイウォーカーとなってしまうのだから。あなた
のそれは、ただの責任放棄。 面倒なことからそうやって逃げ
るのは、あなたの悪いクセね」

パチエ「ちょっと、お灸を据えてあげるわ」

レミィ「どうしてあいつを守るんだ？ さては、あいつに惚れたか？」

パチエ「冗談きついわね。魔法使いに恋心なんて感情は存在しないわ」

パチエ「ただ、あなたのその態度と傲慢さ、そして、改竄された未来が気に入らないだけよ」

レミィ「ならば変えるか？ その運命を」

パチエ「・・・消し炭になっても、文句言わないでよねっ！」

デウォーカーと紅魔館・第一回(3)

屋敷全体が大きく揺れる。どうやら二人の戦いが始まったらしい。俺はこあの案内を受けて、屋敷の出口を目指していた。

こあ「とりあえず、お屋敷を出たら、人間の里に向かってください。お嬢様は夜になれば一人で屋敷から出られますから、夜は必ず安全な場所に身を隠してくださいね」

静「・・・ああ、分かった」

玄関に到着し、こあは扉を開ける。

こあ「では、私はここまでです。パチュリー様を一人にしておけませんから」

静「・・・あのさ、やっぱり俺も」

こあ「ついさつきまで人間だったあなたじゃ相手になりません。いから早く逃げてください」

静「でも、あなたにもパチュリーにも助けてもらった恩がある」

こあ「そんなものに恩なんか感じなくて結構です。元はといえば、われわれの主が原因なのですから。だから、早く逃げ」

妖精メイド「こあ様ーっ!!」

パタパタと慌しく走ってくるメイドが一人。羽が生えているのだから飛べばいいのに。

こあ「どうかしましたか？」

妖精メイド「パチュリー様が大変です！ お嬢様が暴れてて、お屋敷も壊れちゃって・・・メイド長が買い物に行つてて、私たちじゃどうにもできないんです！！」

何とかしてください、と泣きつく妖精メイド。しかし、こあにはどうすることも出来ないことくらい、俺にだって分かる。なら、一体どうすればいい？ そんなこと、誰にだって分かる。

静「やっぱ、俺が行く」

こあ「ちょ、ちょっと待って！ あなたじゃダメなんですってば！」

静「そんなの、やってみなきゃわかんないだろ？」

こあ「・・・私がパチュリー様に怒られます」

静「怒るパチュリーが死んだら元も子もないだろ？」

こあ「・・・分かりましたよ」

+++

パチエ「・・・は」

レミィ「どうした？ 自慢の魔法もネタ切れかい？」

パチエ「血を吸ったばかりだから、調子がいいよね、レミィ」

レミィ「ああ、いい気分だよ」

パチエ「でも、それが命取りになる事だってあるわよ」

パチユリーは床に右手を着いて呪文を唱える。すると、レミリアの周囲に巨大な魔法陣が現れて彼女を捕縛する。

パチエ「吸血鬼の弱点である流水と銀の鎖で編み上げた対吸血鬼用の捕縛結界。それも、相手の力を吸い上げて強度を増す特別仕様」

レミィ「なっ！？ パチエ！ こんなもの、どうやって・・・？」

パチエ「長年、吸血鬼と同居しているのよ？ 対策くらいは練っているわよ。自分の身は自分で守らないとね」

レミィ「ふ。 はははっ！ 甘く見られたものだな。この私がこんなおもちゃでどうにかなると思ったのかい？」

パチエ「せいぜい強がってなさい。その結界の中じゃ、あなたの本当の実力の半分も発揮できないから」

レミィ「半分？ それだけあれば十分さ」

パチエ「 っ!？」

レミィ「不夜城レッド!!!!」

紅色のオーラを纏い、パチユリーの結界を突き破るレミリア。驚くパチユリーに、そのまま体当たりする。

パチエ「・・・やっってくれるわね」

レミィ「は。 私を甘く見てたんじゃない？」

パチエ「もう怒ったわ。 本当に消し炭にしてあげる」

レミィ「できるものなら、やってみな！ 神槍『スピア・ザ・グングニル』!!!!」

パチエ「日符『ロイヤルフレア』!!!!」

パチュリーが放つ太陽のエネルギーとレミアアの放つ夜のエネルギーのぶつかり合い。日光に弱いレミアアがどうやっても不利なこの状況だが、それすらも跳ね返す、レミアアの底なしのパワー。次第にロイヤルフレアは押し返されていき、レミアアのグングニルがパチュリーに迫る。

レミィ「は。すまないな、パチエ。所詮は魔法使いと吸血鬼の差は歴然だよ」

パチエ「・・・」

ついにロイヤルフレアを突き破る紅の槍。一直線にパチュリーに迫っていく。ついに諦めたのか、魔道書を閉じるパチュリー。グングニルの直撃を受け、屋敷の壁に打ち付けられた。

レミィ「私に楯突くから、そついう目に遭つ」

パチエ「」

レミィ「二度と私に逆らおうだなんて夢見ないことね」

パチエ「ええ。まさしくこれは夢」

レミィ「・・・なに?」

パチエ「言ったでしよう? 消し炭になっても、文句言わないですよ」

ね、って！」

パチエ「日恋符『ロイヤルマスタースパーク』！！！」

レミィ「は。合成魔法かい！？ でも、それは甘い！」

レミィ「双神槍『ダブルグングニル』！！！」

パチエ「合成魔法？ あなたの目は節穴ね」

パチエ「魔法使いを、舐めんじやないわよっ！！！」

二本のグングニルすらも受け止めるパチュリーの魔法。レミアアの桁違いの力をも上回る、更なる桁違いの力。だが、その大きな力はパチュリーの体では扱いこなせるものではない。初めはグングニルを押し返したものの、少しずつ、レミアアの力に撃ち負けていく。

パチエ「……こんな時に……」

レミィ「病弱は罪だねえ。どんなに大きな力を持っていても、それを使いこなせないなんてさ」

パチエ「……」

レミィ「グングニル二本。受けたら今度こそ命はないよ」

レミィ「じゃあね、パチエ」

パチユリーの魔法を突き破るグングニル。再びパチユリーに迫る。今度こそ終わりだ。パチユリーはじっとレミリアを睨み続けていた。

こあ「パチユリー様!!!」

グングニルがパチユリーを貫くその一歩前。こあがパチユリーの体を抱いて回避する。グングニルは屋敷の床に直撃し土煙を上げて、そのまま一階まで貫通する。廊下には、巨大な穴が開いていた。

こあ「パチユリー様！ パチユリー様あ!!!!!!」

パチエ「……ばか。あとでお仕置きよ……」

回避に成功しても、わずかに掠ったのか、こあの足から大量の血

が流れ落ちていた。

そして、俺は、土煙に乗じてレミリアの背後に回る。そして、一気に彼女に迫った。

静「食らえ!!」

レミリアの腕を掴み、壁に投げ飛ばす。吸血鬼化の恩恵か、腕力は以前とは比べ物にならないくらいに向上している。レミリアの小さな体は壁を貫通し、隣の部屋の家具に直撃して止まる。そこに更なる追撃。吸血鬼は太陽光に弱いならば、そのまま屋敷の外に出してしまえば勝機はある。飛び蹴りで屋敷の壁を貫通させれば、俺でもレミリアに勝てるはずだ。

静「はあああぁっ!!」

レミィ「ホント、甘い考えね」

一直線に向かう俺の脚を掴むレミリア。その威力も、すべて彼女の体に相殺され、壁にはひびの一つも入っていない。どんな体の仕組みをしていけば、こんなことが出来るのか。そんなことを考えている間に、俺は弾幕に取り囲まれていた。

レミィ「咲夜といい、あなたといい。

人間って、そんな簡単

に吸血鬼に勝てると思っっているのかしら」

弾幕が鋭く俺の体に突き刺さる。今まで経験したことのない痛みだ。体を貫通し、吹き出した血がレミリアの体を赤く染めていく。

レミィ「いいわ。今度は、死ぬまで飲みつくしてあげる」

レミリアは再び俺の首筋に噛み付いた。またあの時と同じだ。結局、同じ運命をたどるのだろうか。諦めた刹那、牙が首から離れる。

こあ「静さん!!」

こあの放った弾幕だ。レミリアの額に命中したらしい。俺はその隙に彼女から離れる。

レミィ「ふ……ふふふ……。小悪魔の、分際でエ

っ!!!!!!」

放たれるグングニル。このコースならば一直線に俺とこあを貫くだろう。だが、今度は俺にも勝機がある。レミリアに噛まれたその瞬間に感じたのだ、彼女と俺がつながるその瞬間を。そして、それは、レミリアと同じ、桁違いの力。

静「血槍『レッド・グングニル』!!!」

傷口から血が噴き出し、それが俺の中心に集まる。巨大な槍を形

成したそれらは、一直線にレミリアのグングニルへ向かう。威力は完全に互角。だが、俺の策はそれだけじゃない。

レミィ「なんだその貧弱な槍は！ 私の真似事か！？ そんなんじや、この・・・わたし・・・の・・・やり、は」

レミリアの牙が教えてくれたこの力の使い道。それは、操れるのは自分の血だけじゃないということ。レミリアの胃に溜まった、俺の血すらも、そしてレミリアの体に流れる血ですらも、俺の能力を逃れることは出来ないということだ。

静「血操『ルース・ブラッド』！！！」

レミィ「そんな・・・わたしの、力が・・・消えていく!?!？」

パチエ「バカね。吸血鬼の病を移したのはあなたじゃないの。いわば、あなたは椎名くんの親も同然。あなたが教えてくれなくても、レミィの牙が、吸血鬼の本能が、すべてを教えてくれたみたいね・・・。吸血鬼の力は、夜と血の力。そして、今は昼であり、その力の源である血は、今、椎名くんに奪われた」

こあ「すごい・・・レミリア様のグングニルを押し返してます!!！」

パチエ「夜の吸血鬼が人間の天敵であるように、昼の椎名くんも、吸血鬼の天敵ってことね」

レミィ「そんなの、そんなの、許さない！！！！」

レミィ「今見せるときが来たようね。私の最強最大のスペル！！」

レミィ「喰らいなさい！！！！」

咲夜「な、何ですかこの有様は！？」

背後からそんな声が聞こえた刹那、レミアアのスペルカードは跡形もなく砕け散っていた。そして、その次の瞬間には、俺は図書館で目覚めることになる……。

ディウォーカーと紅魔館・第一回(4)

レミィ「ぱちえく……。おまたから血が止まらないよう……。」

パチエ「よかったわねー。今夜はお赤飯よ」

こあ「くすくす……。」

咲夜「しかし、すごい能力に覚醒したものですわね。血を操るとは、お嬢様の血を抜き、貧血にさせただけでなく、さらには胃の中の血を下して、お嬢様の力の源を全て奪い取ってしまうなんて」

パチエ「レミィ、まるで女の子の目みたいじゃない。記念撮

影でもしようかしら？」

レミィ「出てくるあなが違うっ！！」

こあ「しかし、全然起きませんね、静さん」

咲夜「強い能力に目覚めたのですから、しばらく目覚めませんよ」

パチエ「そうね。その間に、彼をどうするか考えましょうか」

咲夜「それで？ お嬢様は彼を殺して全部なしにしてしまおうとしていたようですが……。」

レミィ「あ、あううう・・・」

咲夜「それでは何の意味もないということが分からないんですか！
？ 結局、お嬢様のワガママで何人もの人が不幸になるかもしれないんですよ！？」

レミィ「だって、だって。 絶対死んじゃうって思ってたんだもん・・・。まさか、吸血鬼に・・・しかもデイウオーカーになるなんて思ってたんだもん」

パチエ「レミィが操ったのは、吸血鬼になる運命じゃなかったってことね。 つまり、彼の血が吸いたいがために、屋敷にやってくる運命を用意したら、たまたまその先がデイウオーカーになる運命だったってところかしら・・・幼稚にも程があるわ」

レミィ「幼稚って何だ！！ 吸血鬼の吸血はだなあ・・・」

こあ「ただのオナニーです」

レミィ「!?!」

こあ「って、パチユリー様の本に書いてありました」

パチエ「はいはい。女の子がそんな言葉使っちゃダメよ」

こあ「えへへ」

レミィ「・・・」

咲夜「呆れてものも言えせんわね・・・そんなことのために、一人の運命を狂わせて、それも、殺してしまおうだなんて」

パチエ「人の迷惑にならないように、自分の腕でも噛んでいれればいいものを・・・」

レミィ「そ、それこそただの・・・お・・・じゃない・・・」

パチエ「人を使ったところで、その先がないなら一緒」

レミィ「その先って・・・？」

パチエ「呆れた・・・ホントに子供だったのね」

咲夜「とにかく。彼は責任を持って紅魔館で預かります。お嬢様専属の従者としますから、そのつもりで」

レミィ「えええっ!？」

咲夜「当たり前でしょう？ 彼がこうなったのはお嬢様の責任です」

こあ「嫌なら、いいんですよ？ 私と一緒に図書館で働いてもらいますから」

レミィ「ああ、ダメダメ!! コイツは私のもの!!」

パチエ「あら、今更どうしてそんなに庇うのかしらね？」

レミィ「だって・・・血、おいしかった・・・から」

咲夜「・・・申し訳ありません、パチユリー様」

パチエ「いいわよ。レミィのワガママなんていつものこと」

パチエ「それよりも、今後、彼女に付き合わされる彼が不安だわ」

静「あれ・・・ここは？」

レミィ「やっと起きたか！ 早く私の血を止める！！」

パチエ「あー、待ちなさい椎名くん。今、天狗のブン屋を呼んでるから。 皆で記念写真撮りましょうね」

レミィ「やーっ！！！！ それだけは勘弁してーっ！！」

こあ「くすくす」

こうして、椎名静は吸血鬼「デイウォーカー」となり、紅魔館で

働くことになった。

大いなる力を持つ反面、多くの弱点を持つ吸血鬼。だが、彼はその弱点を克服した最強の異種族。はたして、彼の登場により幻想郷はどう変わっていくのか……。

レミィ「もう怒った！ あんたなんて一生ここで飼い殺しよ……！」

咲夜「お嬢様！ その態度は何ですか……！」

こあ「くすくす」

静「……何なんだ……？」

パチエ「思った以上に、レミィに好かれてるってことよ」

静「……意味が分からない」

なにせよ、ここはいつたい何処なのか。そして結局、俺はどうなったのか。その辺を一切理解できなかった、静なのです。

どんどはね。

おまけ

「……うー……地上で何か面白いことになってるじゃない」

「……」
「どうかありませんでしたか？ 総領嬢様」

「……」
「退屈よ！ 地上はあんなに面白そうなのに！ どうしてこつちじゃ何も起きないのかしら！？」

「……」
「いつちよ大きな地震でも起こしてやろうかしら……」

「……」
「お止めください。またケガしても知りませんよ？」

「……」
「ちよつと、衣玖！ 偵察に行つてきなさい！」

衣玖「はい？」

「……」
「偵察よ！ あの連中つてば、もしかしたら天人に楯突こうとしているかもしれないわ！ 私も行つてくるから、あなたも行きなさい！」

衣玖「あ、ちよつと！ 総領娘様！

つて、ああ、もう・・・

衣玖「・・・面倒なことになりましたねえ」

ディウォーカーと紅魔館・第一回（4）（後書き）

吸血鬼設定をどうするかで悩みすぎた拳句、結局、分かりやすい解説を入れようとすることがあまり長くなったという。二次創作の典型的ダメタイプ。

二次創作って、読者はそこまでリアルさを求めてないから、原作ブレイクしない程度にやっておけば残りは読者が補完してくれるんだよね。

ゆえに、分かりやすい小説を書くのがベストですよ。

誰がどのセリフを喋っているかもわからなくなるような一方通行の小説なんでもつてのほか。そんなものを書くくらいなら、私のようにセリフの上に名前を入れたほうがマシってことです。

自分の好きなように書いてる小説ならまだしも、人に読ませる小説なら、人に分かりやすいものを書きましようね、と書けば、東方幻想夢の全体像が見えてくるでしょう？

さて、そんなわけで、今回をもって、東方幻想夢・第一期のリクエスト編を終了します。

そして、第一期の締めくくり小説として『東方幻想夢』2011・襲撃』を投稿し、今期の終了とさせていただきます。

第二期も変わらぬご愛顧をよろしくです。

序章（前書き）

どうも。

ついに第一期も終了ということ。まとめた小説を投稿します！
ブログのほうで参加希望を募りまして、その結果、参加していただ
けるとコメントしていただけた方が登場する、イベント企画の第一
弾「東方幻想夢〜2011・襲撃」です。

まあ、読んでやってくださいな。

序章

ぴこ、ぴこぴこ……。

いぬ「かーげーろうのきーきにーはーえいえーんの……」

佳奈「おや、犬兔くんじゃないか」

いぬ「おお。佳奈さん。本編では活躍ご苦労さま」

佳奈「よくわかんないけど、ありがとう」

佳奈「お散歩かい？」

いぬ「そうだぜ。よく分かったね」

佳奈「さつきからぴこぴこと足音が鳴ってたからね」

いぬ「おお。先日香霖堂からパクってきた『ぴこぴこサンダル』が裏目に出たか」

佳奈「香霖堂さん……商品幅広いなあ」

いぬ「そんなわけで、占ってあげようか」

佳奈「どんなわけかは知らないけどね……」

いぬ「・・・水難の相が出てるぜ」

佳奈「水難・・・ねえ」

いぬ「乙」

佳奈「あれ、もう行っちゃうの？」

いぬ「嫌な予感がするんだぜ」

+++不思議生命体移動中+++

佳奈「・・・ぴこぴこうるさいなあ・・・あれ」

佳奈「さて、と・・・今日は何をして過ごそうか、な・・・？」

空を飛ぶ、小さな飛行物体。外の世界ならば飛行機か、なんて簡単に済ませられるけど、ここは幻想郷。しかも、あれは空高くを飛んでいるから小さいんじゃない。もとから、人間程度のサイズなのだ。それが、私の真上を飛んだとき、突風が吹きつけて私の帽子をはるか遠くに飛ばしていく。私は飛んでいった帽子の行方なんて気にも留めず、空を飛ぶその物体に釘付けになっていた。

佳奈「・・・ステイルルメイデン09型後期生産モデル・・・？
どうしてあんなものが幻想郷に・・・？」

佳奈「・・・なんか、怪しい動きを感じるね。あれは、戦争の道具
なんだ。幻想郷に、あつてはならないもの」

佳奈「いよっし、誰のものは知らないけど、いつちよぶっ壊しに
」

????「おい、そこな人間」

佳奈「はい？」

背後から声。振り返るとそこには十歳くらいの小さな少女。真っ
白い肌と白く輝く長い髪。白いワンピースと、とにかく全身真っ白
な女の子だ。里の人間か、あるいは妖怪か。まあ、話してみないこ
とにはよく分からない。私は彼女の目の高さに合わせてしゃがみ、
何か用かな、と訊ねる。

????「ここは、どこじゃ？」

佳奈「・・・はい？」

どうやら幻想入りの少女らしい。なんか上から目線のような言葉
遣いが気に入らないけど、まあ、きつと高貴な身分の女の子なのだ
ろう。

佳奈「ここはね、幻想郷って言うんだよ」

????「ふむ。幻想郷・・・あやつの世界か」

何かぶつぶつと呟いている。危ない女の子なのかもしれない。まあ、とにかくこういうときは博麗神社に連れて行けばいいだろう。さっさと連れて行って、あのステイルメイデンを追わなければ。

佳奈「・・・ところで、あなた、お名前は？」

????「名前?・・・名前か」

佳奈「そう。お名前、言える？」

私がそう言った刹那、風が吹き付ける。少女の髪が風になびき、色のないその線が太陽の光を受けて光り輝いていた。美しい、というよりも神々しいその姿に目を奪われる。

だが、次の瞬間放った一言は、私のその思いをいとも容易くぶち壊すのだ。

水妖妃「童に名などない。水妖妃と、そう呼べばよい」

・・・ほらね。誰もが前言撤回したでしょう?そして、次の私の一言こそ、皆が思ったことだと思つ。

佳奈「……こりゃあ、とんだ電波さんの登場だぁ……」

タイトルをつけるのなら「電波少女が幻想入り」ってどうでしょうか……？ そんな感じで、今回の物語は幕を開けるのだった。

序章（後書き）

序章までは誰かの視点で描かれてますが、本編からは第三者視点に変更します。

最初はね。それぞれの視点から描こうと思ったんだけど、そうすると読みにくくなるじゃん。ウチの小説のメイン部分は読者の脳内補完能力と想像力にかかっているので、それを妨げるような書き方は控えることにしました。

今年の小説書きとしてのテーマは「あなたが作る小説」にしていこうと思います。それゆえに、一読であらすじが把握できるような文章を書けるように精進します。

では、これからもよろしくです。

開戦

幻想郷を駆け抜ける一陣の風の如く、宗太は走っていた。目指す場所はいつもの博麗神社。しかし、今日はいつもの手土産はひとつも持っていない。あつという間に境内に到着し、掃除を終えてひと段落していた霊夢を呼ぶ。

宗太「霊夢、大変ですよ！」

霊夢「今日はいきなりな登場ね。

ブン屋じゃあるまいし」

宗太「事件です」

霊夢「はいはい。言っただけよ。って、事件？」

事件、と言う言葉を聴き、奥で今日一番の酒盛りを始めていた萃香がのそのそと四足歩行でやってくる。

萃香「んあー？ どつたの？」

宗太「……妖怪の山が、人間の里を襲撃しました」

霊夢「……何ですって？」

宗太「妖怪の山の、天狗を中心とした妖怪たちが一斉に里にやってきて攻撃を開始したんです」

霊夢「……それって、まさか」

宗太「ええ、恐れていた事態です」

ここ数ヶ月で起こった大量の幻想入りの結果、以前の幻想郷にあったパワーバランスは崩壊し、妖怪と人間との間での対立は日に日に大きくなっていった。

無法妖怪による人間への襲撃事件や、それを討伐する人間たちによる罪のない原住妖怪の虐殺。それが原因で人間と妖怪の衝突がたびたび発生していた。そのたびに人間の里と妖怪たちの間で幾度と無く話し合いの場が設けられていたのだが、妖怪の山はこれまで完全なる沈黙を守っていたことを思い出す。まさか、この日のために人間の里との接触を絶っていたのではないか、と思うくらいに、だ。

萃香「・・・人間と、妖怪の、全面戦争ってところかい？」

宗太「その通りです」

霊夢「あちゃあ・・・サボってたのが裏目に出たか」

霊夢は苦笑いする。そう、今回の異変に際し、彼女はこれまで一切解決に向けた動きを見せていないのである。やっていることといえば、いつも通りの幻想入りした人間を外に送り返すことくらい。

まあ、守銭奴である彼女には妖怪絡みでない上、儲ける要素の無い今回の異変は対象外なのかもしれないが、その結果、妖怪と人間の全面戦争になってしまったのであれば、それは人間を守るべき立

場である彼女の落ち度であった。

宗太「いつまでも今回の異変を解決しなかったのが、今回の事件を招いたのは分かりませんが、とにかく、この戦いは止めるべきかと」

霊夢「でも、人間の里にだって、強いやつらはいるじゃないの。大丈夫じゃない？」

宗太は首を横に振る。

宗太「それが、妖怪の山には、とんでもない隠し玉があったんです」

萃香「霊夢の言ってた、あの機械人形だね？」

霊夢「……あんな化け物が、妖怪に加担しているの？」

宗太「……このままでは、人間の里が。いえ、幻想郷が危険です」

+ + + +

宗太が博麗神社にやってくるその数時間前。妖怪の山のふもとにある小さな洞窟に、一人の少女が降り立った。そこには、彼女が探している少女の住処がある。そこは、外の世界からもたらされた機械が溢れる、巨大な研究施設であり、工房。別世界のような異様な雰囲気、来訪者　　射命丸文は息を呑んだ。

文「やれやれ、辺鄙なところにあるから探しましたよ」

その声に振り返る少女。水色の服に緑の帽子。妖怪の山に住む河童の一人、河城にとりである。少女は自分の後ろにある巨大な何かをシートで覆い隠し、不敵に笑う。

にとり「おや、天狗がいったいこんなところに何の用だい？」

文「あなたに用があるってワケじゃありませんよ。　　あなたの後ろにある彼女に用があるんです」

にとり「何のことだい？」

文「　　隠したって無駄ですよ。私、あの戦いを目撃しているんですから」

にとり「・・・」

文「彼女の戦闘記録には私のことは残っていないかったんでしょうね。そうじゃなければ、私から隠し通せるなんて思わないでしょうし」

にとり「……この子をあなたたちに貸すわけにはいかないね」

文「あら、『彼女』は戦争の道具なんですよ？　しかるべき場所で、しかるべき者がそれを使うべきなのです。　それに、あなたも興味があるんじゃないですか？　目覚めた直後とはいえ、八雲紫に勝利した『彼女』の本当の力に……」

文「そうでなければ、危険を冒して八雲紫と戦わせるなんてこと、しませんよねえ」

にとり「……」

文「あなたには今回、私が起こす異変のバックアップをお願いしたいんです。　すでに『彼女』の修理と新装備は完成しているのでしょうか？　それに、この巨大工場の正体は『彼女』の修理用予備パーツの生産ラインとみました。……いつでも戦争を起こせるってことなのでしょう？」

にとり「……もう、隠しても無駄だね」

にとりはシートを外し、その後ろに隠れていたセラフを文に見せる。お久しぶりです、と笑顔で挨拶する文に、セラフは何も答ええない。

文「つれないですねえ」

にとり「新型の小型スピーカーの取り付け中なんだ。これをつけな

いと以前みたいには喋れないよ。　　もう少しで取り付けが終わるからもう少し待ってて。　　しかし、異変だなんて。どんな異変を起こす気なのさ？」

にとりの疑問に、良くぞ聞いてくれました、と文はご機嫌に笑う。そして、すぐにその笑顔を含みのある黒い笑顔に変貌させ、小さく呟いた。

文「人間の里を襲撃します」

その言葉に、にとりはドライバーを取り落とした。地面に転がり、カラン、と乾いた音を立てる。冗談だろ、と振り返るにとりに、冗談なワケないでしょう、と真顔の文が答えた。

545

文「　　目的は、盗まれた宝玉を取り返すためです」

にとり「宝玉って、あの天狗がたいそう大事にしていたあの真珠みたいな玉かい？」

文「ええ。先日、里に住む半妖、上白沢慧音によって盗み出されました。　　彼女たちの目的は、とある人間を助けるためというものであることが分かったため、私たちも黙認したのですが、その後の宝玉の行方に問題がありました」

にとり「大方、どこかの貴族の家にも行ったんじゃないかい？」

文「正解です」

にとり「ま、詳しくは聞かないよ。あんたにも秘密はあるんだろうし」

文「お察しただけたようで……。感謝します」

にとり「ところで、天狗の里にも強い人間が来たって噂を聞いたけど。彼はどうするつもりなんだい？ 人間を襲撃するなんて聞いたら、あんたを殺すかもしれないよ？」

文「彰人さんですか？ ええ、もちろん協力してもらうつもりです。ですが、彼は妖怪を嫌っていますから、真実を告げても協力はしてもらえそうにないので、ちよつと事実の色をつけて、我々はやむを得ず襲撃するのだという体にあります」

にとり「……それが裏目に出なきゃいいけどね」

鋼鉄少女と保険医

町が混乱に包まれる中、水鬼はその者の姿を見た。炎に包まれ、黒い煙が上がる空を飛ぶ、鋼鉄の物体だ。その全身には巨大な箱。そこから発射されるミサイルの雨。全てを撃ち終えたのか、その箱を外し里の中央に位置する商店広場に投げ込んだ。その箱は明らかにその物体の本来の装備でないことはよく分かる。その証拠に、それが外れたときに現れた姿は、外の世界のニュースで見たことがある、あの兵器であったのだから。

水鬼「あれは……」

寺子屋に里の人間を避難させている途中。不意に空を見上げて咳く水鬼に慧音がどうした、と声をかける。

水鬼「慧音、あれを」

慧音「あれは……妖怪……なのか？」

水鬼「外の世界のロボットだ。しかも、軍が所有するような戦闘兵器だ」

慧音「そんなものがどうして里に!？」

水鬼「さあね。知らないけど、ひとまず言えることは」

慧音「あいつを倒さなければならぬということ、だな」

水鬼「妹紅がいてくれれば、もう少し楽に戦えるんだが・・・」

慧音「あいつのことは言うな。まったく、突然行方をくらま

したかと思えば、地霊温泉郷にいるなんて手紙をよこしてきて・・・あのバカは」

水鬼「だからこそ、このタイミングなんじゃないのか？」

そうだな、と慧音は呟く。妹紅がいれば、あんな鋼鉄の鎧などいとも容易く溶かして終わりだ。彼女のいないこのタイミングを狙ったの襲撃なのだろう。あれが何処からやってきて、何の目的で里を襲撃しているのかはまだ分からないが、このまま黙って見ていられるほど、慧音も水鬼も甘くはなかった。

慧音「水鬼、は・・・相変わらず飛べないのか」

水鬼「悪いが、俺の能力は癒しでね。戦闘向きじゃないし、

空も飛べないよ」

慧音「ミスキ・・・得意げに言わないでくれ。ホラ、これを預けておくから」

慧音が渡したのは三枚のスペルカードと剣。日本刀ではなく、どうやら古い時代の両刃剣らしい。鞘に収めたまま使え、と慧音は言う。

水鬼「鞘に収めたままって・・・それじゃ斬れないじゃないか」

慧音「その刃は斬るための剣ではない。まあ、今はそんなことを説明する時間はないか。とにかく、鞘に収めたままですんだ。それと、スペルカードは私がお前のために考えた新作だ。弾幕戦初心者のミズキでも十分使用できるはずだ」

慧音はそう言って、赤色のスペルカードを使うように言う。紅く縁取りされたカードを手に持ち、使用宣言をすると、カードに火がつき、一瞬で燃えて無くなる。これでスペルカードの恩恵を受けることが出来るぞ、と慧音は言うが、特に変わった様子は無い。

慧音「どうだ？」

水鬼「弾幕が出るんじゃないのか？」

慧音「違う。そのスペルカードはただの身体強化だ。翔符『ジ・イカロス』と名づけた。お前に渡したスペルカードは、いずれも使うと私の霊力を持っていくことが出来る。要するに、私の力が使えるようになるということだ。今のカードの効果は、私の霊力を使い、空を飛べるようにするというものだ」

水鬼「・・・お、ホントだ」

慧音「ミズキなら、すぐに感覚をつかめるはずだ。

さ、さっ

さとあいつを止めにくぞ!」

ふたり、空を飛び、セラフの待つ場所を目指す。しかし、その途中でセラフに気づかれたのか、ミサイルが飛んできた。

水鬼「お、おいおい! シャレにならんっての!」

慧音「打ち落とすぞ! 爆風で吹き飛ばされるなよ!」

慧音は的確にミサイルの中心を射抜き、爆発させる。案の定、強烈な爆風に吹き飛ばされるが、慧音がとっさに手を引っ張り、水鬼を抱き寄せて一緒に煙の中を突っ切る。そして、一直線にセラフの前までやってきた。

ふたりは抱き合うような形で宙に浮き、静止してセラフと対峙する。

慧音「これが外の世界のカラクリ人形か・・・興味深い」

セラフ「・・・半妖を確認。 人物特定。 上白沢慧音と水鬼」

慧音「私を知っているのか!?!」

水鬼「そりゃそうだろ。 人物を特定できなきゃ、同じ場所にいる友軍を巻き添えにしてしまうからな」

セラフ「靈力測定・・・危険値突破

計画の障害と認識します」

慧音「おお、どうやらミズキも靈力が危険値もあるらしいぞ」

水鬼「それは・・・光栄なことです！！！」

慧音の肩を押し、二人は散開する。放たれたレーザーを回避し、大回りで再びセラフに向かう。慧音の動きには一切の無駄が無く、さらにはセラフの追撃の機銃を自分の方向に向けさせて、こちらの動きを支援してくれている。幾度と無く戦い抜いてきた慧音の慣れた動きに対し、水鬼はようやく空を飛ぶコツがつかめてきたという感じだ。それでも慧音が作ってくれた隙を使わないわけにはいかないと、貰った剣を構え、セラフに再び接近した。

慧音「今だ！ ミズキ！！！」

水鬼「どこまでやれるか分からんが・・・くらいな！」

剣はセラフの肩に命中する。ゴン、と鈍い音がして、その衝撃が水鬼の体に伝わってくる。手が痺れた。案の定、打ち負けているし、傷一つつけることが出来なかった。

慧音「あちゃあ・・・やっぱり無理があつたか・・・」

水鬼「鞘に収めただからだろ！ これ、抜くぞ！」

慧音「抜いてもいいが、さび付いているから斬れんぞ」

水鬼「はあ？」

慧音「とにかく、その剣はそのまま使え。それと、どうやら、敵も動きを見せてきたようだ」

里の周囲を取り囲む妖怪の影が遠く見える。だんだんと接近してきているようだ。攻撃が本格化するってワケか。水鬼が呟くと、慧音は水鬼に一気に接近し、彼を地面に叩き落した。

慧音「このままでは寺子屋に避難している者たちも危ない！ 私がここを抑えておく間に、里の外に逃がすんだ！」

水鬼「逃げるったってどこに逃げるんだよ！」

慧音「迷いの竹林だ！ そこならば天狗も追ってはこない！」

水鬼「・・・迷って死ぬかもしれないぞ」

慧音「ここで殺されるよりはましだろう？」

そりゃそうだ。水鬼は頷き寺子屋に向かう。そして、残った慧音はセラフと、周囲を取り囲む妖怪の群れを見つめ、ため息をつく。

慧音「退治屋が妖怪たちを抑えているはずだ・・・妖怪といえど、さすがに罪もない住人を殺すつもりもないだろう。・・・だが」

慧音「どうしてだ・・・どうしてこうなった・・・」

セラフ「・・・上白沢慧音の排除を開始する」

慧音「これがあなたの目指した世界の結末かつ!!!!」

慧音は弾幕を展開し、セラフに迫る。だが、それらは全て機銃で弾かれて届かない。一気に距離を詰め、レーザーを放つが、それすらも彼女の能力に弾かれてしまう。驚く慧音をよそに、セラフは左腕に取り付けられた装置からスペルカードを取り出し、使用宣言する。

セラフ「スペルカード使用宣言 戦術『MR01』」

慧音「スペル、カードだと!?!」

慧音「こんな、ことを・・・これだけのことをしたお前が！ そんなものっ!!!!」

慧音「・・・妄史『幻想夢 - ロストヒストリー - 』!!!!」

セラフの放つミサイルが一斉に消滅する。そして、その代わりに周囲に現れたのは慧音の放った巨大な弾幕。セラフでは到底回避できないレベルの密度で放たれたそれらはゆっくりとセラフを取り囲み、逃げ場を奪っていく。そして、ついにセラフが動けなくなったとき、慧音が放つとどめのレーザー。

慧音「歴史の闇に、消え去れっ!!」

セラフ「・・・」

しかし、迫る弾幕も必殺のレーザーもセラフには通じない。そして、反撃とばかりにセラフのレールキャノンが慧音を捉える。

セラフ「排除する」

慧音「・・・っ!？」

叫ぶ声もあげる間もなく、レールキャノンが慧音を貫く。かつて紫が直撃すれば即死、と言ったその言葉に偽りのない破壊力が慧音の体を一撃で粉々に吹き飛ばす。だが、慧音もそれだけでは終わら

ない。

慧音「言ったはずだ。これは歴史の闇だと」

ここでの記録は全て無かった事になる。慧音は呟き、そして再びセラフに迫る。

慧音「そして、お前の死んだ歴史だけを、ここに刻む！」

隠し持っていた小刀でセラフの腕に傷を入れる。予想通り、微妙に色が違う場所は、本来の彼女の装甲ではないらしい。

慧音の想像通り、セラフ本体と微妙にカラーの違う箇所は、にとりがつけた改造パーツや修理箇所である。セラフの装甲と同じ金属を精製する技術は現在の幻想郷には存在せず、修復した箇所は全てつぎはぎのように別の金属で埋められている。弾幕は変わらず弾かれるものの、刃物などを用いればその修理箇所に傷を入れることが出来るのだ。それが、現状でのセラフの唯一の弱点といえる。

しかし、その弱点を突くには、彼女に接近しなければならない。一度の奇襲は上手くいっても次はそう簡単にはいかないのだ。ミサイルとレールキャノンの雨霰に慧音は舌打ちする。

慧音「何か・・・策でもあればいいのだが・・・っ!？」

水鬼「手伝うぞっ!!」

不意にセラフの真下に現れた水鬼。セラフの足を取り、地面に叩きつけた。なんて馬鹿力だろうか。呆気にとられた慧音が、なんでと呟く。

水鬼「何でって・・・里の人間の避難が終わったからさ。　ち
ようど竹林の入り口に薬屋の兎がいて、永遠亭に避難させてもらえることになったよ」

慧音「そ、そうじゃない!　どうしてあんな鉄の塊を投げられるんだと聞いている!!」

水鬼「あれ?　忘れてないか?　俺は純粹な人間じゃないぞ。　慧音と同じく半妖だ」

慧音「・・・あれ?　そうだったか?」

首を傾げて慧音がとぼけた顔をする。忘れてたな、と水鬼が慧音を睨む。

慧音「いやあ、その割にはあまりにも人間くさかったからつい・・・」

水鬼「現代妖ってのは人間社会にまぎれて生きてるから、人間っぽ

いのは当然だよ。でも、こいつだけは隠しようがない」

水鬼は額に生えた角を見せる。その刹那、彼の髪と瞳が紅く染まる。

慧音「ミズキ・・・それ」

水鬼「俺は角を隠せる体質でね。まあ、それとは逆に、こいついとも出来るってことさ」

セラフが体勢を立て直し、レールキャノンを発射する。二人は再び散会し、地上にて待つ彼女に迫る。

水鬼「今度は同時攻撃だ。決めるぞ！」

慧音「でも、どうやって!?!」

水鬼「・・・分かるだろ？俺は鬼なんだ」

慧音「・・・了解した」

鬼の超人的な力の原動力。それは、自らの体の構造に由来する。人間よりもはるかに強い心臓を持つ鬼は、その心拍数を自在に操ることで血液の温度を上昇させる。そして、温まった鬼の血液は筋

力を圧倒的に向上させる働きを持つ。つまり、彼らは自らの力をさらに高める性能を生まれながらにして備えているということ。

それを人は『鬼道』と呼んだ。歴史上、最も強い力と爆発的な威力を発揮するこの力は、鬼の強靱な肉体を持つとしても扱いきれない代物ではなく、半妖である水鬼にとっては、命さえも削る行為に等しい。

それを知っているからか、慧音も何も言わなかった。ただ、この一撃に全てをかける。あいつを倒して、この戦いに決着をつける。その思いだけを持って自らの拳に力をこめる。

慧音「　　砕け散れ！」

水鬼「鬼道・第二『鬼道拳』！！！」

機銃もミサイルも全て慧音が相殺する。必殺のレールキャノン回避し、水鬼はついにその拳をセラフに打ち込んだ　　かに見えた。

水鬼「・・・誰だよ。あんた」

セラフと水鬼の間に割って入ったのは、一人の少年。手には紅く燃える巨大な刃が握られている。少年の刃と水鬼の拳がぶつかり合い、周囲には衝撃が走った。あれは、と呟く慧音。そう、彼の正体を彼女は知っている。

慧音「ミズキ！ そいつは妖怪の山に住む人間だ！」

水鬼「・・・なっ!？」

とつさに距離を開け、地面に着地する。人間だというのに妖怪に加担するのだろうか。お前たちの目的は何だ。叫ぶ水鬼に、少年 降神彰人は答えない。

彰人「・・・恨みはないが、すまないな」

そう言つて、燃え盛る刃を慧音に向ける。動きを止めていた慧音にはそれをよける術がない。

水鬼「鬼道・第三『鬼道玉』!!」

巨大な炎の塊を投げつけて彰人の接近を阻む水鬼。そしてすぐさま彰人の前に立ちちはだかり、炎に包まれた拳で彰人に迫る。

ぎん、と、とてもじゃないが刃と拳が打ち合う音とは思えない音が響き渡る。そしてそのたびに強烈な衝撃が周囲に伝わった。呆気にとられて動けない慧音。

水鬼「慧音！ お前はあのロボットを抑えておけ！ 俺がコイツを倒す！」

慧音「あ、ああ・・・了解した・・・」

とはいえ、セラフも動かない。何をしているのか分からないが、じつと二人を見つめて静止している。しばらくして、ようやく動きを見せたかと思えば、その場から離れ、寺子屋のほうに向かうではないか。それを追って、その場から離れる慧音を見、水鬼は彰人の剣を片手で受け止めた。

水鬼「もう一度聞く。 お前たちの目的は何だ？ 町を焼き払ってまで、成すべきことなのか？」

彰人「・・・お前たちに話す必要はない、と文に言われている」

水鬼「・・・どうやら、引っ叩かれなきゃ分かんないみたいだな」

その頃、セラフは寺子屋の真上でレールキャノンを構えていた。どうやら、標的は寺子屋らしい。水鬼があそこに避難している者たちを逃がしたから、さして大きな被害はでないだろうが、慧音にとっては大問題であった。あそこには、これまでの生徒たちとの思い

出がある。やめろ、と叫び、セラフのレールキャノンの前に立ちふさがる。

慧音「どうしてだ！？ どうして、何もかもを奪い去る！？」

セラフ「・・・」

慧音「里の人間が、何をしたって言うんだ・・・」

慧音「確かに、宝玉を奪ったのは私だ。だが、その報いを受けるのは私だけで十分なはず。 どうして、ここまでするんだ！」

レールキャノンが放たれる。だが、それは慧音に命中するよりも早く、巨大な柱によって受け止められていた。

「???」御柱でようやく止められますか……。 やれやれ、とんでもない破壊力ですね」

慧音「お前たちは・・・」

御柱に乗って現れたのは二人の女性。八坂神奈子と水本蒼奈。蒼奈はセラフを見つめ、すごいものが出てきましたね、と笑っている。

神奈子「さて今日は一時休戦だ。蒼奈、あのガラクタを処分して来い」

蒼奈「神奈子は何をするんですか？」

神奈子「人間と妖怪の争いに神が介入するわけにはいかん。だから、お前を連れてきたのだろう？」

蒼奈「私も一応は神なのですが・・・まあ、いいでしょう」

御柱から降りた蒼奈は慧音を見つめてにっこり笑う。

蒼奈「早苗が妖怪の山の不穏な動きに気づいたのです。おかげで極力早くここにやってこれました。神と言う立場に加えて妖怪の信仰も集めている手前、山の神社の者たちはあなたたちを助けるわけには行きませんが、私はそういうことは気にしません」

どちらが悪いかなんて、これの惨状だけで十分です。

蒼奈は十手を構え、セラフを睨む。そして、髪の色が銀に変わるや否や、彼女の穏やかな雰囲気が一変した。

蒼奈「慧音。分かるな？」

慧音「・・・ああ、支援する」

鋼鉄少女と保険医（後書き）

水鬼さんの隠れた設定登場です。まあ、隠してなかったけどね。

水鬼さんは鬼と人間の混血なので、ウチの小説の鬼設定を継承しています。ゆえに、能力とは別物の鬼という種族の特性のような力を備えています。

その辺の説明は『妖紀行』の「桜散花」のあとがき地獄に書いてあったと思うので気になる人は読んでください。まあ、今回の話にある解説以上のものは書いてないと思うけどねっ！

そして、次話では第三勢力が動き出す・・・予定。

今作は見切り発車作品なので、どうなるかは自分でも分からないんだよねえ。

亡霊賢者とおバカ吸血鬼

人間の里で起こった大きな争いを、八雲紫はただ見ていた。その表情は鋭く、まるで何かを睨んでいるかのよう。てつきり、紫が事前にこの戦いを止めるのだろうと思っていた藍は、この予想外の展開に対して、どうしたものか、と悩むばかり。橙には家から出ないようにと言いつけて、ただ紫の傍らで彼女の命令を待っていた。

????「あなたの望む結末は、果たしてこうだったのかしらねえ」

そこに現れたのは紫の親友である、西行寺幽々子。彼女のすぐ後ろにいた妖夢が軽くお辞儀する。

紫「望んじやいないわよ。こんな、愚かで、情けない結末は」

幽々子「まあ、所詮こんなものよ。妖怪は人間を食らって生きる者。人間は妖怪を退治して自らの生きる希望を得る者。これまで仲良く平和にやっていっていたほうがおかしいのだから」

藍「ゆ、幽々子様・・・？」

紫「藍。下がりなさい」

藍「はい？」

紫「幽々子と話があるの。妖夢も、出て行ってもらえるかしら？」

言葉に従う二人。そして、部屋の中は紫と幽々子の二人きりになる。しばし沈黙し、そして不意に幽々子が問う。

幽々子「あの宝玉はなんなのかしら？」

紫「いきなりな質問ね」

幽々子「天狗があそこまでして奪還したいあの宝玉。ただの宝石ではないのでしょうか？」

紫「相変わらず勘はいいのね。そうよ。あの宝玉はただの石ころなんかじゃないわ。けど、そんなことを聞いて、何になるのかしら？」

既に戦いは終結に向かっているわ。今更あなたが手を出したって何か変わるものではないでしょう？ 紫の言葉に、そうね、と素直に答える幽々子。

幽々子「でもね、紫。私は無益に人が死ぬのを見たくはないわ」

紫「だからこそ？ あの宝玉を人間から奪って妖怪に返すつもりかしら？ それとも、妖怪を殺してでも人を救うか？」

紫「宝玉の価値を知ってなんになる、西行寺幽々子。それと同等の宝物でも与えて、仲良くしましょうね、なんていうつもりかしら？」

そんなことする必要もないわよ。すぐに戦いは終わるわ。紫の言葉に、幽々子はその穏やかな表情を一変させた。

幽々子「……教えてくれないのなら、その体に聞くしかないわねえ」

紫「……あたしとやろうって言うのかしら？ いいわ。あ

なた、最近調子に乗りすぎてるし、そろそろお灸でも据えてあげなくちゃね……っ!!」

窓ガラスが割れ。一気に何かが飛び出した。その衝撃で家がつぶれそうなくらいに大きく揺れる。いったい何があった、と藍は飛び出した物の正体を探す。その正体は空にあった。

紫と幽々子。二人ははるか上空でにらみ合う。紫は手招きし、藍を呼び寄せる。二対一なんてずるいじゃない。幽々子の言葉に、あなたもやればいいじゃないの、と不敵に微笑む紫。

紫「ま、その従者で出来るのならば、だけどね」

藍「紫様・・・？ 何を言って・・・」

紫「あら、藍ってば気づかなかったのかしら？ あの子、妖夢じゃないわよ。どこかのそっくりさん。空も飛べないし、半霊も持っていない。ただの物憑きの妖怪よ」

紫の言葉に、真下にいる妖夢を確認する。背格好も立ち振る舞いも妖夢そのものだったから気づかなかった。確かに、彼女は半霊を連れていない。それどころか、腰に携えた刀も同じ長さの日本刀が二本。いつもの刀ではなかったのだ。

紫「緊急事態にあわてて気づかなかったのかしら？」

藍「す、すみません……。ですが、じゃあ、あの妖怪は何者ですか？」

紫「現代妖よ。外の世界の冥界を束ねる姫君の守護の剣つてところかしら？」

もう正体を隠す必要はないわよ、と紫が言う。少女は一度幽々子を見、彼女が頷いたのを確認してから、白髪のかつらを外し、自らの黒髪をさらした。

正宗「　　いかにも。私は五大妖『靈冥姫』に仕える剣、正宗丸」

藍「ま、まさむねまる?」

紫「江戸時代の刀匠よ。　　稀代の名工と言われた刀鍛冶だったけど、その正体が女だと知れると一転してその刀は名刀くずれだと馬鹿にされ、そしてその末に自らの刃で自刃した、悲劇の天才」

その刃は天をも切り裂くといわれているわ。紫の言葉に、あはは、と笑い出す幽々子。

幽々子「詳しいのね。自分の弱点には」

藍「っ!？」

藍「そんなはずはない!　　紫様に弱点など」

紫「それがあるのよ。　　正宗丸の刃は天をも両断する無敵の刃。あの刀にかかればどんな妖怪でも一撃よ」

幽々子はゆつくりと地上に降り、正宗丸に接近する。正宗丸は刀を幽々子に預け、妙に得意げに笑って見せた。

幽々子「なによ。なにがそんなにおかしいのかしら？」

正宗丸「いえ。本当にあなたは主上にそっくりだと思いましたが」

幽々子「そういうあなたも、妖夢にそっくりよ」

二人で笑い、そして同時に呟く。

ゆゆ&正宗「冥刀『正宗丸』」

刀を抜くと、その刃に正宗丸の体が吸い込まれていく。その刹那、銀色の刃はどす黒く変色した。それと同時に放たれた漆黒の妖気に包まれて刃の幅も大きくなる。禍々しいまでのその靈圧に藍はたじろいだ。あれだけのエネルギーの塊をぶつけられれば、確かに無傷というわけにはいかなさそうだ。

藍「ゆ、紫様あ・・・」

紫「情けない声を出すんじゃないの。どうせ最初から負け戦なら、せいぜい一花咲かせましょう?」

藍「負け戦って・・・？」

紫「妖夢は何処に行ったのでしょうかね？」

はつとする。そう。幽々子のやってきたタイミングといい、妖夢に化けて出てきた正宗丸と言う現代妖といい、そして、この戦いですらも、幽々子によって仕掛けられたもの。

藍「幽々子様の目的は・・・私たちの目をスキマから遠ざけること！？」

紫「そう。そしてその理由は、里に送り込んだ二人を私に足止めされないように・・・そうでしょう？」

幽々子「さあて、どうかしら？ ホントは、いい加減その若作りをやめたらどうかしらって忠告に来たのかもしれないわよ？」

紫「・・・」

藍「言うてはいけないことを・・・っ!？」

紫「上等よ。覚悟しなさい、幽々子。もう一回死なせてあげる」

幽々子「じゃあ、あなたは死の初体験ってトコかしら？ 綺麗に散らせてあげるから、暴れちゃダメよ？」

こうして、亡霊の姫と幻想郷の賢者の決戦が幕を開けた・・・。

その頃、紅魔館ではレミリアを一人がかりで椅子に縛り付けていた。

レミィ「くそ、離せーっ！ 絶対里に行くんだいー！」

咲夜「お嬢様が行くと余計に事態が混乱します！ ここは落ち着いて静観しましょう！？」

レミィ「いやーだーっ！ー！」

のん「ああもう！ なんて馬鹿力！？ 銀の鎖なんて役立たずじゃないのーっ！ー！」

静「・・・」

のん「椎名くん！ 黙ってないであんたも手伝え！！」

静「いや、俺はどっちかっつていうと加勢に行くべきだと思っつから」

のん「あんたはどっちの味方なのよ！？」

静「どっちかっつていうと、どれの味方でもない。 少なくとも、

レミリアをそこに縛り付けるよりは、里に連れて行くべきだと思っ
けど？」

レミィ「おおっ！ よく言ったぞ！ それでこそ私の息子だ！」

のん「病気をうつしただけでしょうが。 まあ、それでも親子

なのかな？ 吸血鬼的には」

静「少なくとも、こんな幼女の母はお断りかな」

レミィ「お前、どっちの味方だ！？」

静「だから、どっちの味方でもないってば」

そうこうしているうちに完全に椅子にくくりつけられたレミリア。
今回は全身隙間なく鎖でぐるぐる巻きにしたため、さすがのレミリア

アでも抜けられない。しばらくの間じたばたしていたが、ついに無理だと分かったのか、泣き出した。

のん「ちょっとかわいそうだったかな・・・？　ねえ、咲夜さん？」

咲夜「嘘泣きです。　　甘やかすとつけあがりますから、厳しくするよつに」

れみい「うー・・・咲夜！　後で覚えてなさいよ！」

のん「おおう。ホントに嘘泣きだった」

静「・・・」

????「何やってるのよ、あんたたち」

扉を開けて入ってきたのは霊夢だった。後ろには宗太と萃香もいる。のんは霊夢さんじゃないか、と笑顔で挨拶した。

のん「今日は取り込んでから、明日にしてくれませんか？」

霊夢「その取り込みを取り込んであげるわよ　　レミリア、里に行くわよ」

レミリア「ね、霊夢・・・？」

霊夢「妖怪と人間の全面戦争よ。悔しいけど、私の力だけじゃ足りないの。どうか、あなたの力を貸して頂戴」

その場にいた皆が呆気にとられた。あの霊夢がレミリアに頭を下げたのだから。レミリアも、しばらく黙っていたが、不意にふっふと笑い出す。

レミリア「吸血鬼と契約して、ただで済むと思っているのかい？」

霊夢「命でも何でもくれてやるわよ。私一人の命なんて、幻想郷に比べたら、安すぎる対価よ」

レミリア「・・・私が妖怪側につくかもしれないのだぞ？」

霊夢「その時は、私があるあなたを殺すわ」

霊夢の真剣なまなざしに、いいだろう、とレミリアは答える。そして、ついさっきまでどんなに暴れても壊せなかった鎖をいとも容易く千切り、空に舞う。

レミリア「お前に力を貸してやる」

霊夢「よし、じゃあ。行くわよー！」

窓を開け、一気に外へ飛び出す霊夢。それにレミリアもついていく。

れみい「よし、行くぞ！
つて、ぎゃあああああっ！！！」

咲夜「ああっ！ お嬢様が一瞬にして灰に！？」

時刻はまだ昼。傘も差さずにレミリアが外に出るのは自殺も同然の時間であった……。

のん「吸血鬼の心理を利用したね。さすが妖怪退治のスペシャリスト」

静「……確かに、取り込みは取り込んだな……」

霊夢はぐるりとUターンして帰ってくる。そして、窓の外から手招きし、咲夜と静を呼んだ。

霊夢「私が欲しいのは、あんたたち二人だけ。レミリアを引き取ったんだから、少しくらい協力しなさいよ？」

静「レミリアはどうなったんだ……？」

霊夢「ああ、風に流れていったけど、まあ満月の夜になれば帰ってくるわよ」

咲夜「失礼な。人の主を家出少女みたいに言わないでくれますか？」

霊夢「似たようなものでしょう？」

咲夜「まあ、否定はしません」

のん「・・・あんたも十分に失礼だよ」

さて、と霊夢は振り返って、遠くに見える里を見つめた。なにやらまた動きがあったようだ。七色の巨大レーザーとそれにぶつかる何かが見える。きつとまたあの祭り好きがやって来たに違いない。

霊夢「急ぐわよ。早く行かないとあの泥棒に出番まで盗まれちゃうわ」

亡霊賢者とおバカ吸血鬼（後書き）

はい、おバカ展開ですね。

地味に、この先はマジメ展開じゃなくなっていくといつこの小説の特性。

最後のほうになればなるほどギャグ展開になっていく予定です。果たして、この戦争の結末はいかに・・・。

さらに戦つものたち

セラフと彰人が戦っている裏で、文は人間の里の中を低空飛行で翔け回っていた。目的は当然、白い宝玉　などではない。宝玉の回収は既に完了していた。後は、彼女のもう一つの目的を果たすだけである。ミサイルポッドの空き箱が捨ててある商店広場に到着し、そこからセラフが残した痕跡を探る。

文「・・・ミサイルポッドの発射口の向きが、こっちだから、目的のものは向こうにあるということですね・・・」

商店広場の最奥にはセラフが第一に襲撃した屋敷がある。セラフの残した痕跡は、その場所を指し示していたのだ。

文「・・・なるほど、全ての元凶はあそこにあるってことですね」

燃えてしまう前に、急ぎましようか、と走り出す文。そこに、何物かが放ったレーザーが飛んでくる。側転してかわし、面倒な人が来たものですね、と苦笑い。

魔理沙「何が面倒だよ。こんな面倒事を起こした張本人のクセに」

アリス「酷い有様ね。　死者がいなくてもせめてもの救いかしら？　それでも、許されたものじゃあないわ」

文「時間がないんです。道を開けてもらえますか？」

アリス「時間？ そんなものは初めからないわよ。罪人に許された自由時間なんて、あるはずないじゃない」

魔理沙「シンデレラでも、時間になったらおうちに帰るものだけ」

アリス「ここで引導を渡してあげるわ」

文「困りましたねえ。このままじゃあせつかくの独占スクープが無駄になっちゃいます。ここは、強引に抜けるしかありませんね」

巨大な風を纏い、文は一気に駆け抜けようとする。幻想風靡の構えだ。しかし、二人は動じるどころかその場を動かず、真つ向から幻想風靡を受ける気だ。いいでしょう、と文はスペルカードを取り出す。

文「そんなに死にたいのなら、あなたたちが死亡者第一号ですよ！

『幻想風靡』！」

魔理沙「誰が死ぬって？」

文「!？」

アリス「・・・あの引きこもりの魔女にでも出来たこと。この私に出来ないとも思っただのかしら？」

魔理沙の八卦炉とアリスのスペルカードが重なる。その刹那、八卦炉から放たれたのは虹色に輝く超巨大レーザー。

魔理沙「虹恋符『アーティフルマスタースパーク』だぜっ!!」

美しい光と荒ぶる風がぶつかり合う。その破壊力は共にすさまじく、周囲の建物を衝撃波で破壊していく。だが、二対一というこの状況下、文の風は次第にその威力を失って虹色の光に押されていた。

文「こんなっ！ こんなものがっ!!」

魔理沙「人間なめんな。本気になれば妖怪なんて敵じゃないぜ」

ついに風は全て消え去ってレーザーに飲み込まれる文。そのまま

屋敷の外壁にぶつかって気絶している。そして、魔理沙はその場に座り込んで大きく息を吐いた。

魔理沙「なあ、アリス・・・やっぱパチュリーみたいにさ」

アリス「却下。あの魔女はあんたに甘すぎるのよ。無条件で自分の魔力を供給するなんてバカじゃないの？ 合成魔法なんだから、あんたの魔力も使わないと意味がないじゃない」

魔理沙「だからって4：6は酷いぜ！ 私は人間なんだからそんなに魔力を使ったら干からびる！」

アリス「あなたの魔法なんだからそんなの当・・・然・・・？」

魔理沙のレーザーで吹き飛んだ屋敷の屋根から何かキラキラしたものが降ってきた。それを手に取り、アリスはじっと見つめる。

アリス「・・・これ、金箔？」

魔理沙「ああっ！？ アリス！ あれを見る！」

屋敷の屋根がなくなり、露になったのは黄金の宝物庫。中にはかなりの量の宝石や金塊が積まれている。

魔理沙「天狗の狙いはあれだったのか……？ だから、あそこは一番に襲撃したくせに火を放たなかった……？」

アリス「……そういえば、この商店広場を中心としたエリア以外には火を放っていないわね。それどころか、郊外は建物にも傷一つない」

魔理沙「死者も出てないし……なにやらキナ臭いぜ」

アリス「キナ臭いのは、古い木造の商店が燃えているからよ」

魔理沙「それもそうか。ま、黒幕も倒したことだし、私たちは退散するか」

アリス「……私は残るわ。あの金塊でも貰って帰ろうかしら」

魔理沙「ああつ！ それなら私も残るぜ！！」

ついに機銃も弾切れになった。全ての実弾を撃ちつくしたセラフは攻撃をレーザーメインに切り替える。しかし、その直線的な軌道

は慧音にも蒼奈にも容易く見切られてしまう。

状況が不利であることを悟ったのか、セラフはついに撤退を開始した。長い戦いだつたと、慧音はそのまま地面に着地して倒れこむ。その体を抱きかかえ、蒼奈はおつかれさまです、と微笑んだ。

蒼奈「しかし、武器を補給すればすぐに戻ってきますね。三十分以上も戦ったというのに、結局彼女に傷一つつけることも適わないとは・・・」

蒼奈は自分の力量不足に唇を噛み締める。だが、悔しがっている時間があるのなら、少しでも里の被害を抑えるのが先だ。周囲を取り囲む天狗たちは未だにまともな攻撃には出てこないが、いつ彼らが攻撃に転じるかは分かったものではない。

蒼奈「とにかく今は、自分に出来ることをやりましょうか」

蒼奈は再びその姿を変える。御柱の上で高みの見物をしていた神奈子は蒼奈のただならぬ雰囲気驚いた。

神奈子「ば、バカかお前は！ まさか、能力で火を全て消し去るつもりじゃなかるうな！？」

そんなことをすればまた昏睡するぞ！ 神奈子の忠告も聞かず、蒼奈はふん、と鼻で笑っていた。

蒼奈「これ以上の被害を出すわけには、いかないだろうが！」

蒼奈が両手をかざすと、火の勢いは見る見るうちに小さくなる。だが、それと同じ勢いで蒼奈の霊力も落ちていく。しかし、蒼奈が力尽きる前に人間の里の火は全て消えた。蒼奈の力が勝ったのである。

神奈子「なんて、バカなやつだ……」

蒼奈「……タイミングの悪いやつだ」

蒼奈の言葉に神奈子は空を見る。セラフだ。武器を補給して再び戻ってきたのである。しかし、たった今、力を使い切った蒼奈では、とてもじゃないが勝てる見込みはない。

最後の賭けだ、と、姿を人間モードに戻し、蒼奈は彼女の心に呼びかける。

蒼奈「 やめなさい!!! 」

セラフ「……排除、開始」

止まらない。彼女の機械の心には、言葉など通じないのだろうか。いや、違う。蒼奈は彼女の攻撃を行ってきた場所を思い返す。

無人であることを十分に確認できる大きな屋敷の庭。避難が完了して人が近寄らなくなっていた商店広場。慧音と水鬼の会話を受けて、人がいなくなったことが分かった寺子屋。そして、今この戦場は何もない寺子屋の運動場。

そう。彼女は初めからこの里と人間を標的にしているわけじゃない。だからこそ、人を巻き込まないように考えて行動している。これだけのことが出来るのであれば、きつと彼女にだって心はある。きつと、伝わるはずなのだ。

蒼奈「止まれえ

っ!!」

セラフ「・・・っ!?!」

セラフは急停止し、その場に着地した。
止まった。言葉が通じたのだ。

蒼奈「・・・やった・・・」

セラフ「・・・」

蒼奈「あなたの心に、届いたのですね・・・?」

私の声が。そう言った刹那、蒼奈は倒れてしまう。能力を使いきた反動が出たのだ。しかし、蒼奈が気絶してもセラフは一向に動かない。どうやら蒼奈の本気の叫びはかなり強い効果を与えたらしい。

神奈子は呆れてものも言えず、黙ったまま蒼奈を抱えて山に帰っていく。セラフはあのまま放置しても大丈夫だろう。

神奈子「……コイツ、思った以上に大物なのかもしれない」

満足げに眠る蒼奈を見て、神奈子は呟いた。

紫の攻撃についに膝を折った幽々子。正宗丸を地面に突き刺し、荒く息をしている。だが、紫は汗一つかいていない。圧倒的な実力差だ。藍は思う。自分が加勢する必要など一切なかったと。

幽々子「……やって、くれる、わね……」

紫「情けないわね。それでも冥界の姫かしら？」

外の冥界の主はもっと強いでしょう？ と正宗丸に問いかけるが、彼女は一切答えない。幽々子は力を振り絞って再び立ち上がる。そ

して、正宗丸を振りかざす。

紫「修行不足ね。もう少し剣の腕を磨くべきだったんじゃない？」

軽く弄ばれ、足払いで転倒する。くすくすと優雅に笑う紫を幽々子は睨みつける。

紫「おおこわ。そんなに怒らなくてもいいじゃない？ あなたの作戦は成功したんだから」

幽々子「・・・怒ってなんかいないわよ」

ゆっくりと起き上がり、正宗丸から手を離す。そして、勝ち誇ったように微笑んで見せた。

幽々子「いつペン死ぬとね、感情なんてどうでもよくなっちゃうのよね。怒りとか、悲しみとか、そういうのは生きているものだからこそ得られる感情なのよ」

幽々子「だから、この私に感情があるなんて思わないことよ。もし、それがあつたとすれば、それは罠」

紫「!?!」

幽々子「さあ、今度は藍も混ざりなさいな。二人で勝てないのなら、六人がかりよ」

気づけば背後には藤村来栖の姿がある。彼は紫を押さえ込み、幽々子は一気に正宗丸を振りかざす。

藍「紫様!」

ユーマ「おっと、ここは通さないよ」

藍の進路を阻むユーマ。どうしていきなり彼らが現れたのか。藍も、弾幕が使えないような人間に手荒な真似は出来ないため、ユーマの進路妨害に手を焼く。さらに、その背後からは弾幕を展開して一気に藍に迫るうどんげ。奇襲攻撃だ。

藍「おのれっ!?!」

霊撃で弾幕を吹き飛ばし、強引にユーマも引き離そうとする。だが、そこにやってきた妖怪を見て、藍は動きを止めた。

藍「……お前は……?」

さとり「・・・私が呼び覚ませるのはトラウマだけじゃないわ。

あなたの思い描く未来への恐怖も呼び起こせるの」

さとり「あなたの大事な式神が死ぬ映像を見たくなかったら、大人しくしてなさい」

藍「どうしてお前たちがここにいる？ どうやってここにやってきた!?」

幽々子「力を借りたのよ。あなたたちの知っている大妖怪からね」

正宗丸がゆつくりと紫に突き刺さる。

藍「紫様っ!!」

ユーマ「大丈夫だって。ここは幽々子さんに任せておきなよ」

藍「・・・??」

うどんげ「・・・なんでも、幽々子様曰く、こうでもしないと境界が締まらないらしくて」

来栖「やれやれ、せつかくの外出許可なのに、温泉にも入れないとは」

さとり「後で地上の温泉に連れて行ってあげるから、もう少し働きなさい」

幽々子「よし、これでいいわ」

正宗丸を抜き、鞘に収める。すると再び少女が姿を現した。そして、藍に向かってご協力感謝します、と一礼する。

藍「……どういうことだ？」

ユーマ「今回の異変の元凶は、紫さんだっ たってことさ」

藍「異変って……幻想入りする異変か？」

うどんげ「お師匠様の話だと結界が緩んでしまったのが原因だそうです。名前をつけるなら『弛緩異変』だそうです」

藍「しかん、いへん……？」

幽々子「最近の紫はすっかり丸くなっちゃったものねえ。博麗の巫女と遊んでばかりだったし。妖怪としての尊厳をまるで失っちゃったから、能力が弱くなってきたのよ」

さとり「それで、とある方たちが協力を持ちかけてきた。今回の戦争でもきつと紫は動かないだろうから、その温くなった魂に火を入れてやれって」

正宗丸「それで、唯一、紫様の体に傷をつけることが出来る私と幽々子様でこの作戦を立てたのです」

来栖「ま、一回死ねば神経もまた鋭くなって戻ってくるだろうさ。そうすれば今回の騒動も終わるってことだよ」

藍「な、なんか納得いかないぞ！ 紫様に限ってそんなこと」

紫「あるのよねえ・・・それが」

藍「ゆ、紫様・・・!？」

幽々子「復活早いわね、あなた」

紫「閻魔様に嫌われてるからね。逝っても地獄から追い返されるのよ」

幽々子「自分から這い出てきたくせに」

紫「でも、おかげでよく分かったわ。まさか、私の怠惰が結界を緩ませていたとは・・・藍も、よく気づかなかったわね」

藍「・・・申し訳ありません」

うどんげ「お師匠様が言うには過労がそもそもの原因らしいですよ。結界の維持も大変なのに巫女と遊び歩いているからこんなことになったって言っていました」

紫「・・・以後、気をつけるわね」

さとり「さて、後は人間の里の戦争がどうなるかだけど・・・」

幽々子「そっちは問題ないわ。あの子達が何とかしてくれるもの」

ユーマ「じゃあ、こっちはこっちで異変を解決したってことで、地霊温泉郷で宴会でもしますか？」

うどんげ「調子に乗らない！ 永遠亭に避難している人たちが大勢いるんだから！ 私たちは帰ってお師匠様の手伝いよ」

さとり「じゃあ、それが落ち着いた頃に来てくださいね。宴会の準備、しておきますから」

来栖「・・・それって、まさか」

さとり「忙しくなるわよ。里の温泉はお預けね」

来栖「・・・そんなことだろうと思ったよ」

藍「ところで、紫様・・・戦争のほうはどうなってますか？」

紫「んー？ どれどれ、見てみましょうか・・・？」

さらに激しさを増していく水鬼と彰人の戦い。燃え盛るレーヴァテインと素手で渡り合う水鬼。しかし、水鬼の体にも限界が訪れた。鬼道とはもとより鬼の強靱な体があつて始めて完成するもの。人間との混血である水鬼にはあまりにも荷が思い。

限界を悟ったのか一気に距離を開けてから鬼化を解く水鬼。どうした、と問いかける彰人に人間なのにとんだ化け物だな、と舌打ちする。

水鬼「・・・慧音。二枚目のスペルカード、使わせてもらおうぞ！」

緑色に縁取られたスペルカードを使う。すると、一気に体力が回復したではないか。どうやら、霊力を急速に回復させるスペルだっ

たらしい。その分、慧音の消費が心配だが、今はそんなことを考えている暇はない。再び鬼化し、今度はさらにその力を高めていく。いくら霊力が回復しても体は修復されない。これまでのような互角の戦いをしたところで、すぐにこちらが力尽きるのは目に見えている。だからこそ、鬼道の段階を上げることが必要だと判断した。

水鬼「鬼道、第四『鬼道砲』！！！」

手から放たれるレーザー。レーヴァテインでどうにか弾くが、彰人はその力に驚いていた。痺れるほどの破壊力。そして、さっきとは桁違いに増している力。これが鬼。

彰人「よし、こっちも本気でやらせてもらつよ」

水鬼「・・・来いっ！！」

彰人「『幻想風靡』！！」

水鬼「『鬼道砲』！！」

????「影符『シャドウレイ』！！！！」

二人に向かって放たれた黒い弾幕。二人は攻撃を中断してそれを回避する。

彰人「・・・お前は？　そうか・・・文の言っていた危険人物」

二人の少年と少女がそこに立っていた。まさに、漁夫の利でも取りに来たかのようなタイミングだが、どうやらそんなことお構いなしらしい。空気を読めよ、と水鬼は思う。

妖夢「宝玉を渡しなさい！」

目的は彰人が隠し持っている宝玉らしい。実はセラフが屋敷を襲撃している間に回収していたのだ。なぜかしら彰人がそれを持っていることが知れている辺りも胡散臭い。いったい誰の差し金だろうか、と彰人は思う。

妖夢「行きましょう。洸司さん　あの宝玉を回収します」

洸司「やれやれ・・・面倒なことに巻き込まれたものだ」

洸司はそう言って再び黒い弾幕を展開する。

洸司「もう戦っているのはお前たちだけだ！　さっさと決着をつけて、終わりにしようじゃないか！」

水鬼「それを、お前が先延ばしにしたんだろうが！！！」

彰人「宝玉は、渡さない!!」

ゆかり「……………」

らん「……………」

少しずつ、戦争の方向性がずれていつていることをそれとなく感じていた紫と藍であった……。そして、ここにやつらがやってきてしまえば、さらにこの方向性がずれていくかもしれない。

紫「き、危険ね……。いい加減……」

藍「え、ええ……。男の子ってやつはどつしてこつも熱いんでしようかねえ……………」

幽々子「それなら大丈夫よ。いいエキシビションを用意しているから」

紫「?????」

藍「?????」

紫「……………つて、あんたがこの戦争の首謀者みたいになってるわよ!?!」

そんなことを言いながらも、すっかり本来の趣旨から遠ざかった戦争の結末が気になってしょうがない紫なのでした・・・。

さらに戦うものたち（後書き）

もはや宝玉とかどーでもいい感じになるように仕上げてみた。後悔はしていない。

そして、ちよつとずつ明らかになっていく戦争の謎。

もはやグダグダになっているにも関わらず、この後やってくる霊夢はいつたい誰と戦うのか……？

ヒントは河童！

そして、幽々子様が異変解決しちゃった！？ 果たして幻想夢はこれからどうなるのか！？ 第二期存亡の危機が幻想郷に迫ってますぜ！！

妖忌妃が幻想入り

佳奈「かーげーろっのさーきにーはー、らららーるーらー・・・」

水妖妃「なんじゃ、その歌は？」

佳奈「なんかうつつちやったんだよね。いつつもあの不思議生命体が歌ってるから」

佳奈と水妖妃はふたりで里に向かっていた。博麗神社には誰もおらず、居間に置いてあった置き手紙には「里に行ってます」とあったからである。

しかし妙な女の子だ、と佳奈は思う。幼そうな容姿にもかかわらず、話してみれば結構大人なのだ。まあ、ませているだけなのかもしれないが。それに、いやに幻想郷にも詳しい。この子は幻想入りの少女ではなかったのだろうか。まあ、あんな電波な名前を名乗ったのだから、きっと妖怪の類なのだろう。

不意に、水妖妃は立ち止まる。いったいどうしたの、と問いかけると、彼女はふむ、と怪しく口元を緩ませた。

水妖妃「博麗の巫女が、動いたようじゃな」

その頃、里ではすっかり戦闘ムードはなくなって天狗たちも一箇所に集まっていた。しかし、それでも水鬼たちの戦いは続いている。セラフも未だに動かないし、慧音も倒れたまま放置されている。

しかし、その結果に満足がいけないものが一人。にとりである。まだまだ試してみたい装備があったのに、と悔しがる彼女はついに痺れを切らしたのか里まで飛んできたのである。そして、なにをやってるんだい、とセラフに叫ぶ。

にとり「セラフ！ 戦うことがあなたの役目じゃなかったの！？ 私の新装備の力、見せてやりなさい！」

その言葉でようやく我に帰るセラフ。完全に蒼奈の力によって操られていたのだ。まさか、ワタシにも操られるような心があるとは、と素直に驚き、そして、手に持っている新しい武器を見る。

にとり「さあ、いっけーっ！！！」

セラフ「了解。 出撃します」

飛び立とうとしたその刹那、ちょっと待ちなよ、と声がする。その刹那、セラフの真正面には鬼が立っていた。セラフですらも追えない速さで彼女の目の前までやってきたのである。

にとり「なっ……」

萃香「ありがと、宗太。もう降ろしてくれ」

萃香を肩車していた宗太は、やれやれ、と笑っていた。

宗太「まさか、機械人形の正体がスティールメイデンとは」

萃香「知ってるのか？」

宗太「外の世界じゃ有名なロボットですよ。まさに、第二次産業革命を代表する技術革新の象徴ですからね」

萃香「うーん……そんな貴重品、壊していいのか？」

宗太「霊夢の言いつけなんですから守らないと。酒盛りをする場所がなくなってしまうからね」

にとり「……よし、手始めにこいつらをやっつけちゃえ！」

セラフ「了解」

萃香「宗太。下がってな。

あたし一人で十分さ」

セラフ「 鬼を確認」

萃香「そう。私は鬼だ」

セラフ「排除、開始」

萃香「桁違いになっ！！」

セラフは手に持っていた新しいレーザーライフルを発射する。しかし萃香はレーザーを片手で押さえ込み、そんなもの屁でもないね、と笑っている。

にとり「まだまだ！ その新兵器は八卦炉搭載のマスターベイオネツトだ セラフ！ 見せてやりな、そいつの最高出力を！」

セラフ「 スペルカード使用宣言。魔剣『マスターソード』」

突如、レーザーは巨大になる。それに比例して出力も格段に上昇した。危ない、と宗太は萃香を抱えてその場から離れる。宗太の予想通り、レーザーは周囲を跡形もなく消し去っていた。

萃香「なんだよー。あれくらいなんでもないっつてば」

宗太「あれが何なのか分かってないのか？ あの女の子がベイオネ

ツトと言ったじゃないですか」

萃香「何だよそれ？」

宗太「ベイオネット、つまり、銃剣。 あれは・・・レーザーでもあり、超巨大な剣でもある」

萃香「光の剣ってわけか」

宗太「おそらくただのレーザーじゃない。どこかのご都合主義のロボットと同様に物理的に干渉するはず。 あのサイズの剣につぶされたら、さすがの萃香も生きてないんじゃないか？」

萃香「うーん。 そう言われると自信ない」

にとり「幻想郷と外の世界の技術の融合だ！ さあ、セラフ！ その力を見せてやれ！！」

セラフ「了解」

その巨大な光の刃を軽々と持ち上げ、セラフは一気に宗太の元へ走る。だが、宗太も負けてはいない。セラフ以上のスピードで刃を回避する。

宗太「これじゃ防戦一方ですね」

萃香「決着をつけるよ。さっさと降ろせ」

宗太「そういうわけには行かないかな。今降ろしたら間違いなく真つ二つ」

宗太が逃げるたびにセラフの速さも増していつているのだ。宗太の能力がなければ既にあの刃に切り裂かれているだろう。

しかし、だからといってセラフの速度を操るわけには行かない。一度対象に触れる必要のあるこの能力では、高速で飛び回っているセラフに触れるのは至難の業だ。むやみに近寄れば逆にセラフの思っ壺である。

宗太「・・・あーもう、仕方ないか。戦うつもりなんてなかったんだけど・・・」

速度を最大まで上げて一気に距離を開ける。そして、萃香を抱え、不敵に笑った。その妖しさに、え、え、と戸惑う萃香。

宗太「萃香。その頑丈さに賭けますよ」

萃香「え、え？なにそれ、なんか怖い！」

光の剣を構え、最高速度で迫るセラフ。そして、萃香を抱えたまま動かない宗太。何をする気だ、とにとりが考えるよりも早く、そ

の決着はついていた。

宗太「速符『神速空間』！！」

スペルを使うと同時に萃香をセラフに投げつける。すると、投げた萃香の速度が見る見るうちに上昇し、セラフにぶつかる頃には既に音速を超えていた。既に音速に迫る勢いであったセラフと萃香がぶつかり合う。その衝撃はすさまじいものであった。

宗太「うーん・・・交通事故って怖いですね」

まるで人事のように笑う宗太。賭けは彼の勝利であった。萃香は額をちよつとすりむいた程度、地面に突っ伏して唸っている。そして、セラフはマスターベイオネットを持っていた右腕ごと吹き飛ばされていた。鬼の石頭が、現代最高の頑丈さを誇るスティールメイデンに勝利したのだ。

にとり「そんな・・・ことって・・・」

河童の技術が人間に負けるはずがない、と地面に膝をつくにとり。そんなこと気にも留めず、宗太はセラフに近寄ってありがとございませぬ、とお礼を言ったのだ。

宗太「いやあ、最後の最後で思い留まってくれて助かりました」

セラフ「……」

にとり「……ちょ、ちょっと待て！ それ、どういう意味!？」

言葉の意味どおりですよ、と宗太は言う。

宗太「彼女が自分自身で刃をしまったのです。そうでなければ萃香とて無事じゃすみませんでしたよ」

でも、どうしてそんなことをしたのですか、と訊ねる宗太。すると、セラフは声が聞こえた、と呟く。

宗太「声？」

セラフ「……ワタシの心に。確かに聞こえた。『幻想郷は殺し合う場所ではない』と」

宗太「……ふむ……。彼女の力ですか。神という生き物は本当に何でもありですね」

セラフ「だから、ワタシも答えた。『戦うために生まれたワタシが、戦場を離れてもいいのか』と……」

宗太「その答えは、返って来ましたか？」

セラフ「・・・」

にとり「ちょ、ちょっと待ってよ！ セラフ！ まだまだ試してみたい武器があるんだから、もうちょっとだけ戦ってみようよ！？」

セラフ「・・・」『答えは、あなたの中にある』と、そう言った

だから、ワタシはワタシの答えを信じよう。セラフはレールキヤノンをとりに向ける。

にとり「な、なんだよ！ 私に齒向かうの！？」

セラフ「今回のミッションのリーダーは射命丸文。あなたに従うことは出来ない。ワタシは彼女の命令に従い、一人の犠牲者も出すことなく、商店広場と古い建物のみ破壊しました。寺子屋のみ破壊に失敗しましたが、このミッションは完了したといっていいでしょう」

にとり「わ、分かった！ 分かったってば！
帰るよ！ 腕を修理してあげるから！」

セラフ「了解。帰還します」

にとりとセラフがいなくなった寺子屋前で、宗太は一人、空を見る。そして、これでよし、と爽やかに言い放った。

萃香「な、納得いかない……」

そして、時を同じくして霊夢は水鬼たちが戦っている場所までたどり着いた。激しい弾幕と刃、拳のぶつかり合いに、やるわね、と霊夢は不敵に微笑んだ。

霊夢「椎名は水鬼。咲夜は妖夢をお願いね。残りの二人は私が抑えるから」

静「地味に厄介なのを押し付けたな」

霊夢「同じ鬼なんだから、何とかして見せなさい」

そして、三人が同時にぶつかり合うタイミングを見計らって、一気に割り込もうとする霊夢。だが、霊夢よりも早く膨大な霊力の塊が全員の動きを強引に止めたのだ。

水鬼「なっ……これ、は……?」

洸司「……畏か?」

突然の金縛りに驚く一同。だが、霊夢は冷静だった。こんなことを出来るのは、世界でたった一人だけなのだから。

霊夢「なんなのよ……。こんな妖怪がいるわけないじゃない!？」

世界は無という何もない場所だった。

そこから何かが生まれるなんてことはあるはずなかった。

だが、彼女はそこから生まれたのだ。

その者の名は、妖忌妃。

かつて、人間からも妖怪からも恐れられた原初の大妖怪。

そんな彼女が、世界の始まりが、今、ここにいるのだ。

黒一色の妙にラフな衣服を纏った女性と、色鮮やかな十二単を纏う女性。二人は、そこにいる者たちを見下ろしていた。

黒一色の女性は、思った以上に人がいたわね、と残念そうに言う。

彼女こそ、この膨大な霊力の正体、原初の妖怪、妖術王 妖忌

妃『智魅』である。

妖忌妃「……あーあ。こんな人のいる場所に出てくるって分かってたら、ユニクロの服なんて着てこなかったのに」

それを聞いて、だから正装してきなさいって言ったんじゃない、と笑うのは、外の世界の冥界を治める冥王にして、現代最強の妖怪である五大妖の一人、霊冥姫『サクラ』。

霊冥姫「ふふっ。では、始めましょうか」

妖忌妃が手をかざした刹那、咲夜と妖夢の姿が一瞬にして消えてしまう。驚く一同に、妖忌妃はすごいでしょう、と笑う。

妖忌妃「あなたたちも同じように消してあげる」

霊夢「……妖夢と咲夜を何処へやったのよ!？」

妖忌妃「どこか楽しい世界に行ったんじゃないかしら?」

水鬼「……」

彰人「……水鬼、とかいったか、あんた」

水鬼「……ああ」

彰人「　　考えは同じってところか？」

水鬼「そうだろうな。　　あんたも」

洸司「……妖夢を、返せ！！」

彰人「何がなんだかよく分からんが、あんたを倒さなきゃダメな気がする。　　以前の恩は仇で返させてもらう！！」

水鬼「突然やってきて、そんな力を振りかざす……お前たちがいたら、いつまでも終わらないだろうがっ！！！！」

洸司「　　裏切りの代償は、受けてもらうぞっ！！！！」

彰人と水鬼、洸司の三人が一斉に妖忌妃に向かう。洸司が放つ影の弾幕と彰人のレーヴァテイン、そして水鬼の鬼道拳による波状攻撃。だが、それらは全て妖忌妃に届く前に相殺される。隣にいた霊冥姫が放った蝶の弾幕だ。ひらひらと飛び回り、ゆっくりと三人を包囲する。そして、逃げ道がなくなった頃、それらは一斉に爆発した。

洸司「影符『シャドウシールド』！」

影で球体状のバリアを形成し、どうにか凌ぎきる。だが、蝶は再び彼らを取り囲もうとしていた。

水鬼「これじゃきりがないな」

彰人「さて、どうしたものか・・・」

洸司「諦めてないで、お前たちも何とかしろよ!!」

再び影のシールドを形成する洸司。しかし、それは蝶が爆発する前に妖忌妃が消し去った。

洸司「しまった!?!」

妖忌妃「甘いわよ、坊や」

とつさに水鬼が三枚目のスペルカードを取り出す。黄色く縁取りされたそのカードは発動すると同時に巨大な衝撃波を起こして蝶を吹き飛ばす。　　霊撃だ。身体能力を強化するスペルカードだと言ったにもかかわらず、最後は霊撃専用のスペルカードであった。

水鬼「・・・慧音のヤツ・・・カードを間違えたな」

彰人「・・・っ！ 今だ！！」

彰人は一気に妖忌妃に迫る。だが、再び霊冥姫がそれを阻む。

霊冥姫「ダメよ、智魅は彼女と戦うんだから」

三人は私が相手してあげる、と再び蝶を展開する。また同じ結果か、と落胆する水鬼。だが、今度は同じではない。見るに見かねた静が槍を投げたのである。

静「血槍『レッド・グングニル』！！」

突然の奇襲に対処が遅れる霊冥姫。一気に跳躍し霊冥姫を圧倒する。

洸司「やるな、あいつ」

彰人「・・・だが、まだ甘い。あれなら俺のほうが強い」

水鬼「バカ言っていないであいつを助けるぞ！ 四人がかりなら何とかなるはずだ！！」

妖忌妃「あらあら、男の子ってやつは・・・」

くすくすと笑う妖忌妃。そして、彼女は地上にて待つ少女を見る。

妖忌妃「私はあなたと戦ってみたかった」

霊夢「原初の大妖怪・・・相手にとって不足はないわね」

妖忌妃が幻想入り（後書き）

ついにセラフさん撤退！

決着をつけたのは宗太さんだけど、結局のところ、セラフさんを止めたのは蒼奈さんとセラフさん自身の心でした。そして、セラフさんがついに戦闘関係以外の話をするようになったところにも注目！

蒼奈さんがセラフさんの中に目覚めていた自我に揺さぶりをかけたことで、機械的だった自我が人間らしさに目覚めたということになります。

そして、三人はまさかの共同戦線。

強い敵を倒すために、かつての敵と協力するなんてなんてドラゴンボール。

まさに悟空とベジータとピッコロのような関係性ですねえ……。

終結

霊夢「・・・と、まあ色々あったけど、皆さんお疲れ様でした」

納得いかない、といった表情で霊夢は杯を掲げる。

全員「かんぱーい!!」

洸司「やれやれ・・・。まさか、最後の最後まで決着がつかないとは」

彰人「ここまでくると不完全燃焼だな。　　洸司とかいったか、

後でもう一戦やってみないか？」

水鬼「いい加減にしておけ。　　怪我しても治してやらないぞ」

「ここは地霊温泉郷。戦いも終わり、人間と妖怪は仲直りにと大宴会を開いていた。」

セラフ「・・・」

佳奈「いやあ、まさか戦争になってるとは思わなかったねー」

セラフ「・・・」

佳奈「私もさつさと里に行けばよかった」

セラフ「あの、どうしてワタシの膝に座っているのですか？」

佳奈「ああ、気にしないで　　ステイルルメイデンなんて懐かしくてさ、ちよっと久しぶりに触ってみたくなったのよ」

佳奈「しっかし、水ちゃんが五大妖だなんて驚いたよ」

水妖妃「む。　　外の世界の人間は童を知らぬのか。嘆かわしいものじゃ」

佳奈「それに戦争の結末も。　　もうぐだぐだのぐずぐすだったね」

霊夢「あーっ！　　やっぱ納得いかない！！　　戦争やり直しよ！！」

紫「騒々しいわね。妖忌妃様がいらっしやるのよ、静かになさい」

霊夢「あんたが一番納得いかないのよ！！　　結局、なんだったのあの戦争は！？」

その言葉に妖忌妃はそうねえ、と考える。

+
+
+

遡ること数時間前、戦争終結まで後十分。

霊冥姫の放つ弾幕は洸司の影によって相殺する。そして、三人がかりで霊冥姫に攻撃を加える。だが、そのどれもが彼女には当たらない。霊体である彼女には物理的な攻撃は通用しないのだ。

ならば弾幕で攻撃すればいいと、彰人がスペルカードを取り出す。風を展開し、霊冥姫の体を切り裂くが、彼女の姿はぼやけて消える。そして、刹那に彰人の背後に姿を現し、彼を一撃で弾き飛ばした。その手には鉄扇。崩れた建物の瓦礫の中に突っ込み、彰人は動かない。

霊冥姫「さて、次は誰がくるのかしら？」

水鬼「あの影使い……は弾幕を相殺するので手一杯か……そして、俺もいかげん体力の限界……。頼れるのは、あいつだけか」

静「血操『ルースブラッド』……!!」

霊冥姫「残念ね。操る血なんか、とうに枯れ果てたわ」

静「くっ！」

水鬼「鬼道、第四『鬼道砲』！！」

静に迫る霊冥姫をレーザーでけん制する。しかし、彼女はレーザーなどまるでなかったかのようにそれを突き抜けてなおも静に迫った。

水鬼「バカなっ！？」

霊冥姫「甘すぎるわ。これが、本来の霊体の戦い方……よ？」

鉄扇を振りかざす手が止まる。何かによって阻まれたのか？ いや、違う。その腕は、完全にその場所で動きを止められたのだ。

霊冥姫「……これ、は……？」

静「星よ、叫べっ！！」

静「星符『パワーフィールズ』！！」

霊冥姫の体が吹き飛ぶ。そして、それと同時に瓦礫の中に埋もれていた彰人が霊冥姫に迫る。

彰人「擬符『偽・紅槍』！！」

静のレッド・グングニルを模した槍で霊冥姫の体を貫く。だが、それもぼやけて消える。さすがに幽霊ともなれば、倒すのは容易ではないか、と彰人も呆れ果てた。

彰人「どうする？」

水鬼「俺に聞くな」

静「うーん、幽霊に有効な武器って何だ？」

洸司「そりゃあ、お札とか、お払いとかだろうな」

水鬼「お札……か。そんなもの持っているのは……」

彰人「……あそこにいるぞ、盛大にお札を放り投げている奴が」

妖忌妃に向かって大量のお札を投げつけている霊夢。しかし、それは全て妖忌妃に届く前に消えていく。存在を操る彼女にとって、

霊夢の攻撃など全く持って無意味であった。そうしているうちにお札を全て使い切ったのか、体をあちこちまさぐって探している様子。

水鬼「・・・あ、ちょうど品切れのようだな」

静「タイミングの悪い人だ。ちょうど、こっちで必要になった時に・・・」

洸司「どうでもいいけど、俺、疲れてきた」

彰人「よし、じゃあ、俺と交代だ。」

擬符『偽・魂魄蝶』！」

霊冥姫の蝶と全く同じ蝶が周囲に現れる。それを見て驚いたのか、霊冥姫が姿を現した。

霊冥姫「あら、驚いた。あなたも魂を操れるのかしら？」

彰人「　　違う。・・・こいつらは、ただの、捏造品だっ！！」

彰人の出した蝶が一齐に爆発する。それは霊冥姫の蝶を巻き込んで、さらに激しさを増していく。その中を、彰人は突き抜ける。

彰人「・・・くらえっ！！」

レーヴァティンを振りかざす。予想通りすり抜けるが、そこが彰人の狙いだ。爆発の際に巻き起こった土煙に隠れた、残り三人がどう動くか。全てはそこにかかっている。

彰人を無視して、土煙の中に突入する霊冥姫。かかった、と洸司は叫ぶ。

洸司「影縛り。　　これでもう動けないだろ？」

霊冥姫「甘いわね。　　こんなの、霊体化してしまえ、ば・・・？」

洸司「無理だよ。　　霊体化した時に影が消えるのを見ていたからな。影縛りつてのは影が本体に逆らうことが出来ない、だから、その逆もあるって理屈だろ？　　なら、動けない影に逆らうことは出来ない。そして、自分の意思でそれを消すことも出来るはずがない」

水鬼「そして、姿が見えるのなら、俺たちでも倒すことが出来る」

静「これで、決めるっ！！！」

水鬼「鬼道、第三『極大・鬼道玉』！！！」

静「星符『グラビティフィールド』！！！」

はるか上空から落とされた巨大な炎の弾。それが、静の能力によって、地上に引き付けられていく。霊冥姫のいる場所にたどり着く頃には、そのスピードは計り知れないものになっていた。

鬼道玉は地上に直撃し、里の中心部に巨大なクレーターを形成した。その中心で、霊冥姫は倒れている。どうやらまだ生きているようだ。

彰人「止めを刺すか？」

洸司「待て。　　まだだ」

洸司の言葉通り、霊冥姫は今だ致命傷の一つも受けてはいなかった。せつかくの着物が台無しね、と笑いながら立ち上がったのである。

水鬼「・・・あー。もう、無理。　　体力的に限界超えてる」

水鬼は既に一時間もの間、鬼道を使えばなしにしていた。普通の人間ならば、とうに体が鬼道に潰されている。ついに水鬼は鬼化を解き、その場に座り込んだ。

水鬼「霊冥姫、だっけ？　　もう降参だ。　　出せる手は全て出し

尽くした。完敗だ。

殺すなら、さっさと殺してくれよ」

洸司「……もとより最強の妖怪。勝てる道理はない、か」

静「仕方ないな。スペルも使い切ったし、もう後悔もないよ」

彰人「……」

だが、その刹那、霊冥姫は言う。

霊冥姫「私は勝敗とかどうでもいいのよ。私はあなたたちをどうしようってワケじゃないんだから。でも、このままじゃあなたたちは不完全燃焼でしょうし。それじゃあ、決着はこれですけましようか」

水鬼「……は？」

霊冥姫の手には彰人が隠し持っていた宝玉がある。先の攻撃の際に盗み取っていたのだ。いつの間に、と彰人は呟く。

霊冥姫「これを取った人が、今回の勝者ってことで」

そう言った瞬間、霊冥姫は宝玉を空高く放り投げた。

彰人「天狗の宝が！」

洸司「戦争の引き金は、没収する！」

水鬼「・・・なんだかよく分からんが、回収するぞ！！」

静だけは何のことか分からずにその場で見ている。宙に舞った宝玉を追いかけて、三人は空を飛ぶ。やがてゆっくりと減速し、宝玉は落下を始めた。その時点で一番高く飛んでいるのは彰人。そして、宝玉は彰人の手に 渡る前に目の前から消えた。

彰人「・・・はい？」

洸司「消え、た・・・？」

水鬼「・・・」

飛ぶのが一番出遅れた水鬼は、その正体を見ていた。自分と同じタイミングで飛んだ、小さな女の子がいたのだ。その子は宝玉が彰人の手に収まる前に、食べたのである。

水鬼「宝玉を、食べやがった！！」

彰人「なっ、何だお前!？」

まるでピーナッツでも食べるかのように、ぽりぽりと音を立てて
宝玉を噛み砕く少女。何の味もないの、と笑っていた。

佳奈「　　ありゃ、何だこの惨状は・・・？　　おーい、水鬼さー
ん。いったい何があったのさーっ!？」

水鬼「か、佳奈さん・・・？」

佳奈「いや、びつくりしたよ。里がこんなになってるとは。しかも、
水ちゃんがいきなり童を投げるなんて言うから、投げてみたら何か
食べてるし・・・」

彰人「お、お前！　　出せ！　　それは天狗の里の宝だぞ!？」

水妖妃「もともと童が天狗の里に預けていたものじゃ。無駄な争い
の火種になるのならば、返してもらっぞ」

洸司「・・・まあ、それならいいか・・・。それよりも、霊冥姫」

霊冥姫「あははー」

洸司「あははじゃないですよ！ どうして急に裏切ったんですか！
？ 一緒に宝玉を回収するって約束だったのに！！」

霊冥姫「あら、これはあなたの主が書いた結末よ？」

洸司「・・・はい？」

霊冥姫「あなたが退屈しているでしょうから、ちょっと遊んであげてくれてね。 彼らを相手にするより、一緒に戦ったほうが楽しかったでしょう？」

洸司「・・・つ、つまり・・・この戦いって・・・」

妖忌妃と霊夢の戦いにも決着がついた。飛び蹴りを放った霊夢の足を妖忌妃が掴み、それを静に向かって投げつけたのである。静は霊夢を受け止めると、それと同時に妖忌妃が笑う。

妖忌妃「そう、ただのドツキリよ」

静「ドツキリ・・・？」

妖忌妃「まあ、途中まではホントに戦争だったんだけどねえ・・・。妖怪側のリーダーは早々に負けちゃうし、もとより、彼女の目的も人間の討伐とかじゃなくて、私利私欲のためだったし、もともとグダグダになるようなシナリオでしかなかったのよ」

彰人「私利私欲……？　それ、どういう意味だよ？」

霊冥姫「彰人くん、だっけ？　あなた、あの天狗に騙されているのよ。　どうせ、人間が妖怪にとって大切な宝を奪ったから、それを取り返してほしい、なんて言われたのでしょ？」

彰人「……違うのか？」

霊冥姫「まあ、確かにそれもあつたんだけど、実際のところはあれが目的だったのよ」

霊冥姫が指差す先には金色の光が見える。そして、そこに天狗たちが群がっているではないか。

彰人「あれは……まさか」

妖忌妃「　職を失った元商人たちを利用した財宝泥棒の犯人の屋敷よ。あのスクープの証拠を掴むことこそ、今回の戦争の目的」

水鬼「……いいように利用されてただけだったのか？　お前」

彰人「……文、後で殺す」

妖忌妃「それじゃあ、皆仲良くなりましたってことで。さっさと行きますか」

静「行くつて、何処に？」

妖忌妃「あなたの同僚が待っている、楽しい場所よ」

+ + +

妖忌妃「・・・これの何処に納得がいかないのかしら？」

霊夢「全部よ全部！！　なんかマジになってた私一人バカみたいじゃない!？」

水鬼「俺もマジだったから気にするな」

彰人「俺も」

洸司「同じく」

霊夢「あんたたちと一緒にしないでよ！！　私は本当に大変な異変が起こったと思って紅魔館にまで助けを求めに行ったのよ!？」

咲夜「まったく・・・結局、お嬢様の命は無駄に消えましたね」

静「とんだお騒がせ巫女だ」

霊夢「う、うるさい！！ もう怒った！ 今度里で何かあっても絶対に助けないんだから！！」

水鬼「そんなことしたら、博麗の巫女はお役ご免じゃないか？」

霊夢「う……」

宗太「さらに賽銭が入らなくなりますね」

霊夢「……」

佳奈「そのうち神社も無くなってホームレス巫女とかになっちゃうかもねー」

霊夢「う……うっう……」

佳奈「あー。水鬼さん泣かしたー。けーねせんせーにいつてやるー」

水鬼「とどめを刺したのはお前だろうがっ！！」

+++少女入浴中+++

さとり「やれやれ。 とんだ戦争でしたね」

文「あややや・・・結局スクープは逃すし、長老からは怒られるし・
・はたての言うことなんか信用するんじゃないやなかつた・・・」

幽々子「あら、あれってあの天狗の計画だったの？」

文「宝玉のありかを念写したら、妖怪の住処から盗まれた財宝が写
った黄金の部屋の写真が出てきたから、この証拠を掴んでほしいつ
て言われたんです！ 私には無理だから、あんたに手柄をあげるわ、
なんて怪しいとは思ってたんです！ でも、スクープには変えられ
なかつた・・・くやしいっ！！！」

そう。文を動かしていたのは、はたてであつたのだ。そし
て文は見事にその罠に引つかつたのだ。悪事を暴いてスクープ独
占、さらに宝玉奪還という大手柄。そんな餌に釣られて戦争を首謀
した文は、スクープ独占を目前にして魔理沙に敗北。そしてスクー
プは、はたての思惑通り皆のものとなつた。それどころか念写でこ
の場所を特定したのは彼女だと知れると天狗の里の長老からご褒美
まで貰っているではないか。

結局、文には戦争を起こしたという悪名だけが残つたのである。

はたて「ふっふーん、頭のいい奴が勝つ。これが戦争ってモンよね」

文「ああっ！ どの面下げてここに来た！！」

はたて「長老様からご褒美につて、地霊温泉郷の宿泊券貰っちゃったのよーっ」

文「 殺す！ 今ここで殺す！！！」

はたて「きゃーっ！ 文が怒ったーっ！！！」

文の戦争に乗っかって幻想郷の異変を解決しにやってきたのが、妖忌妃を初めとする現代妖。幽々子に協力を要請して、紫の精神的な緩みに喝を入れ、緩んだ結界を修復しようとしたのだ。

そしてさらに、あらかじめ天狗の動きを察知していた幽々子は、ちょうどいいタイミングで幻想郷にやってきた現代妖をも利用して遊んでいたのだ。そして彼女が仕込んだドッキリとは、まさしく戦争の最後に現れた妖忌妃と霊冥姫である。まさに彼女こそ、今回の異変の黒幕というに相応しい。

さとり「そして、結局全てはあなたの手の上つてわけですか」

幽々子「あら、そうでもないわよ。まさか、水妖妃様まで幻想入りするとは思っていなかったもの」

さとり「あれは計画のうちではなかったのですか？」

幽々子「計算違いにも程があるわ。洗ちゃんが勝つと思ってたのに」

さとり「・・・そういう意味ですか」

幽々子「まあ、それだけじゃないけどね」

+ + +

ユーマと鈴仙は部屋でのんびりとしている。

うどんげ「はぁ・・・たまにはのんびりするのもいいわねえ・・・」

ユーマ「あれ、温泉はいいのか？」

うどんげ「後で入るからいいの。今日は疲れたから、寝るわ」

そう言った刹那、すぐに寝入ってしまう鈴仙。よほど疲れていたのだからな、とユーマは思う。

里から避難してきた人間たちを永遠亭まで案内し、そして八雲家

にて戦闘。その後も永遠亭に戻って人間たちの世話をし、戦争が終わった頃に皆を里に送ったのだ、疲れて当然である。

ユーマ「ま、せつかくの長期休暇だし。オレものんびりしようかな」

鈴仙の寝顔を見つめ、ユーマは笑う。そして彼も同じようにその場で眠りにつくのだった……。

+ + +

蒼奈「……ん」

早苗「あ、目が覚めましたか？」

蒼奈「ここは……？」

早苗「地霊温泉郷です。 さとりさんが招待してくれたんですよ」

蒼奈「……神奈子は？」

早苗「私たちはいいから、二人で行ってこいって。それも、眠って

いる蒼奈さんをここまで運んでおいて、ですよ?」

彼女なりの礼のつもりなのだろうか? 蒼奈はふふ、と笑う。

早苗「どうかしました?」

蒼奈「いえ、なんでもないですよ。では、せつかくの好意ですし、ありがたく頂きましょうか」

早苗「はいっ。 皆さん、宴会場にいますから、一緒に行きましょっ」

+ + +

地霊温泉郷の厨房は、まさしく今が戦争であった。

来栖「あーもう、大忙しだなあ。温泉に入る暇も無い・・・」

お燐「来栖さん! お酒が足りないって萃香さんが文句言ってるよ!」

来栖「水でも飲ませておけ。 どうせ気がつかんから」

お空「クーちゃん、お皿割っちゃった」

来栖「だから手伝わって言ったじゃないか！ もうその辺に座ってなさい！」

こいし「あー、いいお湯だったあ」

来栖「姉妹揃って何サボってるんだ！ この忙しいときに！..！」

来栖「・・・ああもう、誰か助けてくれ・・・」

咲夜「助けが必要だと聞いて」

来栖「おおっ！ 手伝ってくれるのかい？」

咲夜「・・・ワインは無いのかしら？」

来栖「手伝わないんかい!？」

咲夜「冗談ですよ。 お手伝いいたしますわ」

妖夢「 大丈夫ですか？ 応援に来ましたよ」

藍「うちの主が迷惑をかけたからな。これくらいはやらせてもらおうか」

来栖「た、助かった・・・」

藍「キミも疲れているだろう？ 温泉にでも入って、ゆっくりする
といい」

来栖「いや、でも。さすがにお客さんに任せるのは・・・」

聖「あら、皆さんお揃いですか。 せっかく手伝いに来たのに・
・・・」

アリス「やれやれ。これじゃここに来た意味はなさそうね」

気がつけば、厨房の中は腕に覚えのある女性たちで一杯になっていた。これでは逆に来栖の出番が無い。

咲夜「そんなわけで、来栖さんは温泉に入っていていいわよ」

来栖「・・・感謝します」

藍「なあに、せめてもの罪滅ぼしさ。ここは私に任せておきなさい」

+
+
+

霊夢「やっぱ腹立つ！ 妖忌妃、もう一回勝負よ!!」

妖忌妃「相手にならないわよ。やめておきなさい」

セラフ「霊力計測……。妖忌妃の霊力は霊夢の百倍」

佳奈「戦う前に決着がついてるようなもんだね」

霊夢「やってみなくちゃ分からないわよ!!」

水妖妃「人間は愚かじゃな」

洸司「それが、人間のいいところじゃないかな？」

水妖妃「うむ。そのとおりじゃ」

紫「……これで異変も解決。万々歳ね」

彰人「ホントに解決したのか……？　なんか怪しいが」

紫「……まあ、これからどうなるか次第ね」

水鬼「……うーん、誰か忘れているような……」

静「ま、忘れてるってことはたいしたことじゃないんじゃないかな？」

水鬼「……それもそうか。今はこの時を楽しむとしよう」

宗太「それが正解ですよ。さ、呑みましょうか」

その後、黄金の宝物庫の持ち主であった人間の里の大商人は、商人から意図的に仕事を奪い、悪事を働かせていたことが明らかになり御用となった。職を失った商人たちは壊れた商店広場を建て直し新たな市場を作り上げた。そして、古かった里の中心部は新しい建物が建設され、すっかり新しい町として生まれ変わった。

文がセラフに与えた指令は「商店広場と古い建物のみの破壊」である。その理由は、もちろんこうなることを予想してのこと。文の考えた計画は、そこだけ上手くいったといえるだろう。

こうして、人間と妖怪の戦争、そして謎の異変は解決した。

びん、びんびん……。

いぬ「あ、けーね先生が行き倒れてる……」

けーね「……ほっといてくれ……」

どろどろはね。

終結（後書き）

ようやく終わった・・・。

うーん、登場人物が多いと使いきれなくなるからダメだね。

ホントは星蓮船チームも出したかったんだけど、結局断念。チヨイ役でひじりんが出てきたぐらいだね。・・・星ちゃん出したかったな。

結局、決着はつかずじまいです。まあ、勝敗をつけるのも気がひけるのでね。

そして、けーね先生放置。そのせいで水鬼さんの最後のスペカの正体は闇に葬られました。実は本編にあったような霊撃専用のスペカじゃないんです。

まあ、その辺も加えて、ブログのほうで今回の総まとめと行きましよう。

では、今回をもって東方幻想夢第一期を終了します。

引き続き、第二期もよろしくおねがいしますっ！！！！

妖精の森の物語・序章（前書き）

さて、ついに第二期スタートです。

リアルなほうが忙しすぎて更新ペースが下がる一方のこの現状・・・。

はたして、第二期は無事に終わるのか・・・？

では、本編をどうぞ。

妖精の森の物語・序章

今日も、彼女はこの森にやってきた。目的はもちろん、森の先で彼女がやってくるのを待っているあの子である。

あの女性がこの森にやってくるようになったのは、つい一ヶ月前のことだった。あの子が嬉しそうに彼女を紹介してくれたのは今でも記憶に新しい。そして、あの時に感じた違和感のようなものは、今でも私の中に残っている。

あの女性の目的はいつたいなんなのだろう。

あの子とあつという間に仲良くなるどころか、他の妖精たちと一緒に遊ぶようにさせてしまった、あの女性　　目的は？　　正体は？　　考えるだけでできりが無い。

彼女が通った道には妖精は誰一人残っていない。皆彼女について行ってしまふのだ。私もそれを追いかけて、森の先にある湖に向かった。

湖には、あの子がいた。いつものように湖の近くに住んでいる蛙を凍らせて遊んでいる。しかし、彼女がやってくると、蛙を投げ捨てて彼女のほうに向かう。

チルノ「さぎり。今日も来たのか？」

醒霧「や、おはよう。　　さて、今日は何をしようか？」

チルノ「かくれんぼがいい！」

醒霧「よし、じゃあ私が鬼だ。

皆！ 隠れて！」

そう言うと、一斉に妖精たちはどこかに飛んで行ってしまつてしまふ。・
・どうして妖精たちがここまで彼女の言葉に従うのだろうか、不思議でならない。いよいよ私はその疑問を抱えてられなくなり、本人に聞くことにしたのだ。

醒霧「さて

それじゃあ、探しますかね」

大妖精「醒霧さん！」

醒霧「うおつ、だ、大ちゃんか・・・どうしたの？ 隠れなくていいの？」

大妖精「そんなことより、聞きたいことがあるんです」

醒霧「なにかな？」

大妖精「私は他の妖精とは違います。 だから、あなたの考えや行動に疑問があるんです。 あなたは何の目的で妖精たちに近づいているのですか？」

醒霧「・・・目的って・・・難しいこと聞くな」

大妖精「チルノちゃんは他の妖精よりもはるかに強い力を持っています。 だからこそ、あの子に近づく人間が何か悪いことをたくらんでいないか、心配なんです」

醒霧「・・・大ちゃんはいいい子だね」

大妖精「はぐらかさないでください！ 正直に話してくれませんか？」

しばらく沈黙する。そして、何処から話せばいいかなと、呟いた。

醒霧「ま、確かにそんな疑問を抱くのは当たり前だよ。分かった。大ちゃんには全部話すよ。どうやって私とチルノが出会ったのか・・・」

妖精の森の物語・第一回（1）（前書き）

久しぶりの幻想夢です。

幻想夢を一発変換すると元素有無になるのはデフォ。

第二期から、完成ししだい投稿していきます。そうじゃないといつになったら投稿できるか分かったもんじゃないのでね。

では、本編をどうぞ。

妖精の森の物語・第一回（1）

醒霧「あれは・・・そう。一ヶ月前。道に迷っていた私をチルノが助けてくれたの。それだけ」

大妖精「・・・は？」

醒霧「いや、だから、妖精の悪戯で森をさまよっていた私を助けてくれたの。それから仲良くなったってだけよ」

大妖精「さんつざん引つ張っておいて回想シーンもなしで終わりですかつ!!」

醒霧「いやあ、だって、地味だよ。ただ道に迷っている人と、おバカな妖精の二人で森をさまよう回想シーンなんて」

大妖精「しかもチルノちゃんまで迷ったんですか!？」

醒霧「ほら、迷ったのって魔法の森だから。湖に住んでるチルノには難しかったんだよ、きつと」

大妖精「それでも迷いますか！ あの子は妖精ですよ!？」

醒霧「うーん・・・確かに謎だね。でも、ま、それはそれとして、かくれんぼの途中だし、探しに行ってください」

そう言って、さっさと森の中に入っていく醒霧さん。私はもうバカらしくて後を追う気にもなれなかった。

大妖精「　　ってわけで、酷いんですよ、霊夢さん」

霊夢「なんで妖精の愚痴を聞かなきゃならないのよ、私が」

昼過ぎの博麗神社。昼食を食べ終えてのんびりしていた霊夢さんのところに行つて、私は今日までのことを愚痴っていた。

大妖精「だって私の話なんて聞いてくれる人がいないんですもの」

霊夢「森の友達とかいるでしょうに」

大妖精「だって、妖精の子は話を聞いても分かってくれませんし。身近な妖怪は何を話しても『そーなのかー』くらいしか言わないんですよ？　霊夢さんくらいしかいませんよ」

頼りにするんなら、賽銭くらい持つてきなさいよ、と言つゝ霊夢さん。しかし、相手が私だと分かっているからこそ、ま、無理だろうけど、と深いため息をついた。

霊夢「それで？　醒霧の正体を掴みたいわけ？」

大妖精「霊夢さんは、怪しいとは思わないんですか？」

霊夢「怪しい……か……。そんなことを思うのは、確かにあなたらしいわよね」

あなたまで話をはぐらかす気ですか、と私は霊夢さんに迫る。ちよつと落ち着きなさい、と霊夢さんは両手を前に出して私を押しえ込んだ。

霊夢「……しょうがないわね。じゃあ、行くわよ」

大妖精「行くって、どこへですか？」

霊夢「醒霧んところよ。あいつ、里のはずれの方に住んでるから」

空を飛んでいく霊夢さんを追って、私も空を飛ぶ。

いったい何のつもりなのだろうか、霊夢さんといい、醒霧さんといい、人間はよく分からない。これが人間と妖精の差、なのだろうか。

大妖精「……それで、どうして変装なんですか？」

私は里のお店で買った子供用の着物を着せられた。髪は借り物のかつらで隠し、羽も折りたたんで服の中にしまふ。これで見たい目は人間とさほど変わらない。

しかし、霊夢さんは一切変装するつもりはないのか、いつもの巫女服の袖だけ外し、髪を下ろしただけ。・・・私が変装した意味はあるのだろうか・・・？

霊夢「あいつのことを知りたいんでしょう？ でも、あいつに聞いてもはぐらかされるだけ。なら、こうして間近で見たほうがいいでしょう」

大妖精「でも、霊夢さん・・・ばれちゃいますよ？」

霊夢「堂々としていればばれないものよ」

それは逆にばれてしまうのではなからうか、と思っていたのも束の間、店を出たその刹那、目の前には醒霧さん。びっくりして身を隠すが、なにしてるのよ、と霊夢さんに引っ張り出された。

醒霧「やあ、見ない顔だね」

霊夢「こんにちは」

大妖精「こ、こんにちは・・・」

醒霧「今日もいい天気だね。

じゃあ、私はこれで」

さっさと行ってしまおう醒霧さん。何故ばれなかったのだろうか・・・？ 私じゃなくて、霊夢さんが。

大妖精「まさか・・・あの袖がないと霊夢さんだと認識されない？」

霊夢「バカなこと言っていないで追っつわよ」

醒霧さんは里の真ん中にある兎鍋のお店に入って行った。霊夢さんも一切遠慮なくお店に入って行く。

店主「やあ、いらっしやい」

霊夢「ああ、気にしないで頂戴」

霊夢さんがそう言うと、お店のおじさんはまるで何事も無かったかのように店の奥に戻ってしまう。いったいなんなのだろうか、そう思っている間に、彼女に手を引かれて醒霧さんの姿が確認できる席まで連れてこられた。

カウンターの席でおでんを食べながら、醒霧さんは今日のことを話している。

醒霧「それでさあ、私がすぐに見つけ出しちゃうもんだから、妖精たちってば三月精を連れてきて・・・。まあ、姿は見えないわ近寄ったら逃げられるわで大変だったわ」

今日のかくれんぼの話である。妖精はかくれんぼと言っても知恵

が無いからワンパターンだ。たいてい、決まった場所に誰かしらが隠れているものであるがゆえ、醒霧さんにとっては慣れたものなのである。まあ、それにも例外があるのだが。

店主「そりゃあ、災難だったな。それで、どうやって見つけたんだい？」

醒霧「奴らつてばご丁寧に音まで消してたからね、天気の良い森の中で音がしないほうがおかしいじゃない。だから、音がしない方向を追いかけてみれば、案外簡単だったわ　　まあ、それでも十分はかかったんだけどね」

今度は十分よ、と自慢げに話している。どうやら、かくれんぼの目的は本当にかくれんぼだったらしい。私が単に疑り深いだけなのか、とも思ったが、その考えが甘いのだ、と心を鬼にする。

醒霧「さて、と・・・時間だ。じゃあ、勘定はいつも通りで」

店主「はいはい。来月まとめて請求するよ」

醒霧さんは毎日、妖精の森にやってくる。働いているようにも見えなかったし、収入はあるのだろうか？　でも、お店のおじさんの様子を見るに、請求に応じないタイプ、と言うわけでもなさそうだ。

大妖精「あの、霊夢さん？」

醒霧「あいつはちゃんと働いてるわよ。・・・暇なときはうちの神社の手伝いもしてくれるし、私は醒霧のこと、悪い人だとは思って

ないわ」

大妖精「それは私も同じです。でも……まだ信用できません」

あんたもなかなかね、霊夢さんが言う。

霊夢「たぶん、仕事に出かけたんでしようね。」

追っわよ。あ

いつが普段何をしているのか、知りたいでしょう？」「

霊夢さんの言葉に、私は黙って頷いた。

妖精の森の物語・第一回（1）（後書き）

霊夢の変装の意味と醒霧さんに認識されなかった理由は、分かる人にはわかるかと。そしてそれが分かるなら、博麗神社に賽銭が入らない理由もわかるはず。

今作は東方キャラ視点で語られるエピソードです。

果たして醒霧さんは悪人なのか、善人なのか・・・？ それは次回のお楽しみ。

では、これからもよろしくです。

妖精の森の物語・第一回（2）

霊夢さんの話だと、醒霧さんは稗田家のお屋敷で働いているらしい。稗田家といえば、あの幻想郷縁起を書いている家系だ。そんな場所で一体何をしているのだろうか。

大妖精「幻想郷縁起の作成を手伝っているんでしょうか？ 妖精の資料を集めるために、チルノちゃんに接近しているとか」

霊夢「ま、行けば分かるでしょ」

また堂々と稗田家の屋敷に入っていく霊夢さん。どこまで図々しい人なのだろうかと思いつつ、私も彼女の後を追う。

しかし、お手伝いさんと廊下ですれ違っても、お手伝いさんは挨拶の一つもせず、まるで私たちなどいないかのように振舞っているではないか。

一番奥の部屋に稗田家当主、稗田阿求がいた。その隣には寺子屋の教師、上白沢慧音。そして、それに紛れて醒霧さんがいる。

大妖精「・・・何をしているんでしょうか？」

霊夢「さあね、とりあえず話を聞いてみましょう」

慧音「それで、状況はどうなんだ？」

醒霧「あー。まあ、悪くは無いかな。妖精は頭が悪いなんていわれてるけど、学習能力が無いってわけじゃないみたい」

醒霧「言えばちゃんと分かってくれるし、根気よく教えていけば、ちゃんと覚えてくれる」

慧音「ふむ・・・どうやら、なんとかあったようだな」

阿求「でも、本当に大丈夫なのでしょうが？」

なにやら真剣に話し合っているようだ。妖精についての話のようだけど、私はそこで学習能力、という言葉が耳についた。

大妖精「まさか・・・妖精にものを覚えさせる気なんですか!？」

霊夢「な、何よ突然。何かまずいの？」

大妖精「当たり前です！妖精は自分の中の時間を経過させない生き物なんです！それどころか、時間を経過させてはならないんです！」

霊夢「・・・どういことよ？」

大妖精「いいですか？」

妖精は、おバカです」

霊夢「よく知ってるわ」

大妖精「それは、妖精が毎日、自分自身をリセットしているからです」

霊夢「・・・なにそれ？」

大妖精「今日の妖精は明日になっても今日の妖精と同じってことです」

大妖精「だからこそ、妖精は不変なんです。でも、その法則が意味を失えば、妖精にも寿命が出来てしまう」

大妖精「妖精は自然の具現。妖精が一匹死ぬだけで、自然界は大きくバランスを乱すんです！」

その言葉に、霊夢さんは目を細めた。

霊夢「それは・・・異変が起こるってこと？」

はい、と私は頷く。それを聞いたとたん、霊夢さんの雰囲気が一変した。興味本位で私に付き合ってくれていた傍観者から、博麗の巫女に変わる。

霊夢「悪人じゃないと思ってたけど・・・どうやらあなたの見立てのほづが正しかったってことね」

その言葉と同時に、突然醒霧さんがこちらを見た。

醒霧「霊夢さん！？ どうしてここに！？」

霊夢「話は聞かせてもらったわ。妖精に寿命をつけようとしているみたいじゃないの」

異変の芽は、先に摘み取ることにしたの。霊夢さんはお札を取り出して、醒霧さんに向けた。

霊夢「弛緩異変が終わったかと思えば、また面倒なものを持ち込もうとしているみたいじゃない！？」

醒霧「ちょ、ちょっと待って！ 話が見えないんだけど！？」

霊夢「問答無用！！」

霊夢さんのお札が室内に飛び交う。醒霧さんはあーもう、と叫び、そのまま部屋を飛び出した。

霊夢「逃げたって無駄よ！ 逃がさないわ！！」

それを追う霊夢さん。そして、その場に残された私……。

慧音「な、なんなんだ……？」

阿求「あら、あなたは……？」

大妖精「……っ！？ し、失礼しましたっ！！」

ダッシュで逃げる。そして、霊夢さんのほうに向かった。

大妖精「いくら醒霧さんでも、相手が霊夢さんじゃ危ない！」

早く助けないと、と思ったのだが。 案外それは杞憂であった。

醒霧「いくら博麗の巫女といえど、体を使う戦いには慣れてはいまい……！」

霊夢「な、なんなのよアンタ！？ 被弾してるのに、落ちないなんてルール違反でしょうが！？」

そう。醒霧さんは霊夢さんの弾幕などまるでないかのように彼女

に近づいて攻撃を仕掛けていた。当然、大量に被弾している。でも、そんなもの、全く効いていないようだった。

醒霧「スペルカード戦の承諾もなしにいきなりぶっ放してきたのはそっちでしょう!？」

その辺にあった石ころを拾い、霊夢さんに投げつける。石はすぐに霊夢さんの弾幕によって相殺される。かと思いきや、石を取り囲んだお札を突き破って霊夢さんの顔面に直撃したではないか。彼女の額からは血が流れ、そしてすっかり怒りに燃えている霊夢さんは、ついに凶器を取り出した。

霊夢「封魔針!!!」

投げつけられた針の弾幕。お札と違い、あれは命中すれば醒霧さんの体に突き刺さる。今度こそ危ないか、と思いきもしたのだが、醒霧さんの様子を見て、私も大丈夫なんだ、と確信する。

そして、案の定。封魔針は醒霧さんの体に一切刺さることなく弾き返された。一体どんな体をしていれば、あんなことが出来るのか。

醒霧「さて……じゃあ、そろそろお終いにしましょうか」

霊夢「……上等よ。食らいなさいっ!! 萃霊符『夢想封印・密』!!!」

虹色に輝く、法則無視の光が霊夢さんの右手に集まる。そして、一気に醒霧さんに接近し、夢想封印を直接叩き込んだのだ。

醒霧「冷符『パーフェクトフリーズ』!!!」

夢想封印を宿す霊夢さんの手を掴み、スペルカードを使用する。その名前は　　チルノちゃんと同じスペル？　と思いきや、そうでもないらしい。急激に夢想封印が収縮し、霊夢さんの霊力が落ちていく。そして、彼女はそのまま地面に倒れたのだ。

大妖精「・・・霊夢さんを、倒した!？」

醒霧「・・・さて、阿求さんのところには後で謝罪に行かせるとして・・・。まずは誤解を解いておこうかな」

　　霊夢さんの前にしゃがみこみ、醒霧さんは言う。

醒霧「別に異変なんか企んでないよ。　　これは、大ちゃんのためをやってるんだから」

大妖精「・・・ええっ!?　私?」

妖精の森の物語・第一回(3)

次の日の妖精の森。私はチルノちゃんをはじめとする森の妖精たちと醒霧さんに囲まれて、幸せだった。

妖精「はっぴーばーすでーとうーゆー」

妖精「はっぴーばーすでーとうーゆー」

ちるの「はっぴーばーすでーでいあ」

醒霧「大ちゃん!」

みんな「はっぴーばーすでーとうーゆーっ!!!」

妖精の森の守り神である神木の下。楽しそうな歌声が響く。そう、今日は私が大妖精になってから五年目の誕生日だったのだ。他の妖精と違い、自分の時を生きる私には誕生日がある。でも、これまでただの一度だって、こうして誕生日を祝ってもらえることなんて無かった。

なにせ寿命の長い生き物は、たいてい自分の誕生日なんて覚えていないのだ。それに、妖精に至っては「誕生日はお祝いするもの」だという概念すらも無いだろう。

それを妖精たちに教え、しかも歌やプレゼントまで用意させたの

は醒霧さん。まさか、妖精に歌を覚えさせる方法を慧音先生たちに相談していたとは思わなかった。しかも、なにもいい答えは得られなかったからと、結局、気合いで教え込んだという。この根気強さをもっと別の方向に活かすべきだとは思うけど、まあ、今回はそういうことをいうのはやめておこう。

ちるの「はい、大ちゃん！ プレゼント！」

大妖精「わあ・・・かわいいリボン」

ちるの「つけてあげるね」

サニー「しっかし、突然何を言い出すかと思えば、妖精に歌を教える、だなんて、無謀にも程があるわよ」

ルナ「桁違いに学習能力が無いんだから、私たちは」

醒霧「でも、そうなるとうしてルナたちが歌を知っていたのかが疑問だなあ・・・」

ルナ「まあ、別に覚えられないってワケでもないのよ。覚えようっていう気と、それに見合う努力があればね。その代償として、体内時計がほんのちょっとだけ動いてしまっただけ」

スター「人間みたいにやたらとたくさんのことを覚えるんじゃない」

て、自分に必要だなんて思うことだけをそうやって記憶するのよ。まあ、その記憶が持続できなかつたら意味ないんだけどね」

醒霧「でも、霊夢さんや大ちゃんの話だと、体内時計が動いたらその時点で寿命が出来るって」

サニー「バツカだなあ。　　そんなの大ちゃんの心配性よ。いつものこと。妖精の寿命は自然の寿命と同じなのよ？　　例えば体内時計を進め続けても、森がなくならない限り死なないの」

妖精が死なないのに、死んで異変なんて起こるわけ無いじゃん、とサニーちゃんが笑っている。そうしているうちに、気づけば私はチルノちゃんとおそろいの髪形になっているではないか。

ちるの「へへー。おそろい」

大妖精「えへへ・・・」

ちるの「大ちゃん、これからもずっと一緒だよ！」

大妖精「うんっ！！」

そして、宴の後、私は醒霧さんに尋ねた。

大妖精「チルノちゃんに近づいていた理由って、私の誕生日を祝うためだったんですか？」

醒霧「あー・・・うん。そんなトコ。森で迷っているときに、いろいろと話をしてね。その時に聞いたんだ」

大妖精「だから、はぐらかしてたんですね？」

醒霧「ホラ、こういうのって本人には秘密にしてやるものじゃない？」

大妖精「・・・ありがとうございます。それと、疑ってしまって、ごめんなさい」

私は深々と頭を下げた。いいのよ、と醒霧さんは笑う。

醒霧「いきなり現れて、やたらと妖精と親しくしたら、そりゃあ怪しいって。疑われてもしょうがない」

醒霧さんは私の頭をなでて、誕生日おめでとう、と言ってくれた。しかし、その裏で、素直に喜べない私がいた。

大妖精「醒霧さん・・・あの」

だが、その話に割って入ってくるのはチルノちゃん。醒霧さんに体当たりして、鼻息荒く、弟子にしてください、と言っ。

チルノ「さぎり、霊夢に勝ったんだって!? じゃあ、あたかも霊夢に勝てるようにしてくれ!!」

醒霧「ちょ、ちょっと待って! チルノ、落ち着いて!」

チルノ「あたいつてばさいきよーなのに、霊夢に勝てないんだ! だから、醒霧を師匠にして、霊夢に勝つ!」

大妖精「勝てない時点で最強じゃないような・・・」

醒霧「分かった! 分かったから! 明日からいくらでも特訓に付き合ってあげるから離れて! 寒い!」

ちるの「よっしゃーっ! 約束だからね!!」

用が済むと、さっさとどこかに飛んで行ってしまっチルノちゃん。ごめんなさい、とチルノちゃんの代わりに頭を下げる。

醒霧「ま、明日からまた暇になるから。 付き合ってあげまっようか」

大妖精「・・・あれ? お仕事は?」

醒霧「ああ、いいのいいの。たまたま妖精と親しくなったって言っ

たら、阿求さんに目をつけられて仕事の手伝いをさせられてるだけだし」

大妖精「ホントに手伝ってたんですね・・・」

醒霧「頼まれたら断れなくってさ。 ホント、おとなしそうに見えて強引なんだよあの人」

大妖精「でも、あなたが悪い人じゃなくてよかったです。 でも、大丈夫なんですか？ あんな安受けあいしちゃって。 チルノちゃん、本気にしてましたけど」

その言葉に、醒霧さんは大丈夫、と答える。

醒霧「 きつとチルノなら霊夢さんにも勝てる」

大妖精「ええっ!?!」

醒霧「名づけて『?でも出来る、博麗の巫女退治』作戦!」

紅の屋敷の対岸にある、小さな森。 本来なら道に迷うことなどありえないくらい、狭い森。

人々は、その森で迷ったとき、妖精の悪戯のせいだと言って、責任転嫁していたという。そして、森はいつしか「妖精の森」と呼ばれるようになり、次第に本当にその場所には妖精が集まるようになったという。

これは、そんな妖精の森に住む妖精の長、大妖精こと「大ちゃん」と、氷の妖精「チルノ」……。そして、最近この森に姿を現すようになった里の女性「醒霧瀬」の物語である。

どんどはれ。

次回予告

その少女、自称最強。

チルノ「あたいったらさいきょーねっ！！」

醒霧の特訓第一弾は『闇の妖怪との戦闘』。しかし、そこで起こったのは、二面ボスが一面ボスに敗北するというまさかの展開。

醒霧「勝てないんじゃない。チルノ、お前は勝とうとしていないんだ」

チルノ「……あたいの本気、見せてやるわよっ!!」

次回、妖精の森の物語・第二回

リクがあれば続きます。

妖精の森の物語・第一回(3) (後書き)

第二期からは次回予告を追加してみる。

なんでつて? . . . 続きエピソードのリクが少なかつたからだよ!
後で第一期の小説にも次回予告をつけようと思う。

あと、単発エピソードとの違いをつけるためでもあります。
単発エピソードは続かないので、その辺はよろしくです。

そして、チルノがメインのはずなのに、大ちゃんメインになるとい
う失態 . . . 。

いや、違うのよ。まずは大ちゃんを攻略しておかないと、チルノの
ルートにはいけないかなあと思つてさ。ホラ、愛佳ルートみたいなの
もんだよ。由真とある程度仲良くなつてないとダメなパターンのやつ。
だから、先に大ちゃんルートを進めてるのよ、うん。

. . . 次回はチルノがメインです。

雷の剣豪が幻想入り・序章（前書き）

さて、今回は再び幻想郷の社会問題について取り上げます。

かねてよりの噂となっていた凶作や弛緩異変のその後・・・。

そして、そんな幻想郷を生きる恭介さんや妖怪たちのお話です。

では、今回もよろしくです。

雷の剣豪が幻想入り・序章

俺が幻想郷に来たとき、初めて出会った妖怪は無法妖怪と呼ばれるものたちだった。外の世界にいた頃から剣術に長けていた俺は、幻想郷に来てからも、妖怪相手に対等以上に渡り合える逸材だった。幻想郷の影響によって覚醒した能力もあって、その実力は幻想入りからわずか一ヶ月で無法妖怪の一派を治めるほどにまで成長していた。

幻想郷はその年、未曾有の危機を迎えようとしていた。

無法妖怪たちも来るべき凶作に備え、集落を襲っては日々、蓄えを増やしていった。そして、俺もその戦列に加わり、人間でありながら人間を襲撃していた。その時の俺は、無法妖怪の世界しか知らなかったのと、恩義に報いたいという気持ちが先走り、無慈悲な行為を繰り返していた。

いつしか俺は人間の間で『雷獣』と呼ばれるようになっていた。

そんな日々が終わりを告げたのは、幻想入りしてから半年近く経った頃……。俺が治めていた無法妖怪の一派が、たった一人の妖怪によって、全滅したのだ。

あらゆる妖怪をなぎ倒し、呼吸一つ乱さず、その女性は俺の元へやってきた。返り血を浴びて紅く染まったその両手を差し伸べて、彼女は言う。

妖怪「お前はそんなことをするためにここに来たんじゃないだろう？」

俺は笑う。

???「応えるのが俺の流儀でね。 助けてもらった恩返しをしているうちに、彼らをまとめる存在になっていた」

こいつらだって、好きでこんな風に生きていたんじゃない。俺は刀を手に取り、女性を見る。金色の髪と九尾の尻尾。彼女の妖怪の名は知っている。 無法妖怪の間でも彼女には手を出すな、とまで言われていた妖怪だ。

???「八雲藍……。 お前に退治された無法妖怪の仇は取らせてもらっぞ」

抜刀し、それを向ける俺に、八雲藍は余裕を含んだ笑みで答えた。

藍「……ああ、できるものならやってみるといい」

???「 『雷光剣』! ! !」

振りかざした刃に雷が落下する。雷を纏うその一撃は、これまであらゆる妖怪を撃ち払ってきた無敵の刃。周囲に電撃が飛び交い衝撃波で周りにあったものも全て粉々になる。だが、女性はその刃を素手で押さえ込んだのだ。

「????」

俺の刀を握り、八雲藍は言う。

藍「『雷獣』よ。お前はこれより、私の元へ来てもらう」

そして、拒否は許さない、と付け加える。

こうして俺　　不破恭介は彼女の元で働くことになったのだ。。。。

雷の剣豪が幻想入り・序章（後書き）

恭介さんの最初の二つ名は『雷獣』です。

タイトルも『雷獣が幻想入り』にしようと思ったんだけど、調べなおしてみたたら、雷獣って一説には、その正体は鵜だと言われているんだよね。ゆえに『雷の剣豪が幻想入り』というタイトルにしてみました。鵜はぬえちゃんがいるのでね。

そして、恭介さんは緑川さんボイスで脳内再生されるのぜ。

・・・ジューダスとかヒロとかゆきとさんの中の人です。知らない人はググれ。

雷の剣豪が幻想入り・第一回（1）

今年の幻想郷の夏は記録的な猛暑と水不足に見舞われた。何の異常気象かは分からないが、梅雨も無ければ、ここ一ヶ月、まともに雨が降った記憶もない。その影響をものろに受け、この秋、幻想郷全土は致命的な凶作に見舞われた。無法妖怪の間で前から噂されていた、あの未曾有の危機とやらが、まさか噂が起こった次の年に現実のものとなってしまふとは・・・根も葉もない噂話が、現実化してしまう何かの異変の予兆かもしれないと、俺は思う。

そんなことを考えながら、俺は里から自らの家に戻る途中だった。目的は買出し　　だったのだが、どうにも手持ちの資金では手が出せるようなものは売っていかなかったため、手ぶらでの帰宅だ。

凶作のあおりを受けて、里の商店では商人が売り惜しみを始めていた。まあ、仕入れるような作物が存在しない状況だ。自分の食べる分を確保するだけで精一杯なのは分かる。分かるのだが　　歴史上、そのような行為を行えば何が起こるかなんてすぐにも分かる。現在でも里の人間たちの間では、町民と商人たちの小競り合いが絶えないのだ、それがいつか大きな騒動となり、里を包めば人間たちなどすぐにでもいなくなることは請け合いだ。

賢人たちは、なにやら人間たちの力で食糧不足を解決する方法を与えていたようだが、結局、それも打開策とはならなかったようだ。

振り返る。後ろには誰もいない。そう、誰もいない。

ため息一つ、再び俺は歩き出した。

+ + +

藍「んー……。本日も絶好の洗濯日和。いい天気だ。いい天気過ぎるほどに、な」

お前もそう思うだろう？ 俺が戻るなり、藍は言う。ちょうど洗濯物を干し終えたらしい。雲ひとつ無い快晴の空に洗い立ての俺のシャツが映える。

恭介「……。紫さんは？」

藍「またどこかに出かけているよ。このところ毎日これだ。一体どこに行っているのやら。それよりも、どうだった？ 里のほうは」

出掛けに貰った資金をそのまま返却する。それが質問への答えだと解釈した藍は、ふむ、と腕組みして唸る。

藍「 里の食糧不足はかなり深刻のようだな」

恭介「ああ。 弛緩異変によって幻想郷の人口は倍以上に膨れ上がった。それによってもたらされた危機はいくつもあったが、数

ヶ月前の山の妖怪による襲撃事件によってスムーズに里の拡張工事も終了し、漁業や観光地の整備による新たな産業を迎えることで不景気も脱した　だが、かねてからの噂通り、今年は猛暑と深刻な水不足によって凶作　ただでさえ不足していた食料が追い討ちを受けるようにこうなっては上手く立ち行かないのは道理。いずれ、何らかの蜂起が起こるかもしれないな」

藍「紫様も外の世界から食料を集め、里の人間たちに与えてはいるらしいが、しかし、それも付け焼刃・・・か」

恭介「　　一時的な状況を脱しても、次の秋まで収穫は無いんだ。まず、これから迎える冬をどう乗り越えるのかが問題だろう」

藍「これだけの異常気象だ。もしかすると冬は無いかも知れんぞ」

恭介「そうならないのが異常気象だ。　　夏は異常に暑く、冬は異常な豪雪に見舞われる　　あまり希望は持つべきじゃない」

藍「・・・それもそうだな。　　いや、すまなかった。余計な時間を取らせてしまって」

恭介「いや、気にするな。　　今日はあいつに呼ばれているだけで特に用事も無い」

あいつ、と聞き、藍は彼女も大変だろうな、と苦笑いする。

藍「河童というものは、頭の皿が乾くと力を失うのではなかったか

「？」

さあな、と俺は縁側に置いてあった自分の刀を持ち、歩き出す。そして、思い出したかのように振り返り、でも、と言葉を付け加える。

恭介「乾くような皿は持ち合わせていないと思うぞ、あいつは」

藍「違うない」

+ + +

そして、来た道を引き返している。今度の目的地は八雲家から里を隔てて反対側にある妖怪の山だ。妖怪の山も例に漏れることなくこの猛暑の影響を受けた。山から流れ出る湧き水のおかげで、水に困ることは無いだけマシだが、それでも影響は大きい。なにせ昨年の夏よりもはるかに平均気温の高かった今年の夏。妖怪たちでも熱中症で永遠亭の世話になるものが続出したという。それによって働き手が半減した妖怪も同じように農業が滞り、結果、食糧不足に陥っているという。

恭介「里は、幻想入りしてきた医者のおかげで熱中症はさほど深刻な影響は無かったが、水不足によって凶作　山は水があっても熱中症のおかげで作業者が半減して不作・・・今後は人間と妖怪が

協力できる準備が必要なのかもしれぬな」

まあ過ぎたことである。今更何を言っても無駄だが、もう少し幻想郷は妖怪と人間の共存を考えるべきではないかと思う。

しかし、藍曰く「妖怪は人間が恐れて始めて存在できる」らしい。同じ世界、同じ場所に住むものたちだというのに、相手に嫌われないなければならない、なんて制約はやはり大きなハンデだ。食糧不足を解消しようと無為に力を浪費する前に、まずこのシステムを改善できる方策を取るべきだったのではないだろうか、と賢人を笑う。そして、振り返る。後ろには誰もいない。

里を通過し、今度は荒れた道を進んでいく。途中にある川は里の方角には通じておらず、この川から水を引けば幾分マシになったのではなからうかと思いつ返す。あれだけ途方も無い力を持った重機があるのだから、水路の一つくらい作れただろうに。

おそらく、あの時は里の拡張工事で手一杯だったのだろう。だが、いくら住むところが確保できても食料が無ければ飢えて死ぬ。目先の産業や利益にとらわれて、人間として最も大切なものがなくなるかを忘れていたなんて、現代からかけ離れたこの幻想郷で唯一、現代らしさを感じる部分といえるだろう。もちろん、いい意味ではないが。

そして、振り返る。後ろにはやっぱり誰もいない。

だが、俺はその視線に気づいている。

恭介「……いいかげんにしてくれ」

その言葉に、道から外れた木陰に隠れていた女性が一人、姿を現す。眼光鋭く、俺を睨み、そして何のことよ、としらを切る。

女性の名は水橋パルスィ。 以前、紫さんからのお使いで地霊温泉郷の温泉卵を買いに行った時、無法妖怪に襲われていたところを助けてからというもの、なぜか付きまとわれている。

パルスィ「偶然よ。たまたま、私が行く道をあなたが先に歩いているだけ」

恭介「人間の里から八雲亭 そしてそこから再び人間の里に戻り、通過して妖怪の山。・・・随分と偶然が一致するものだな」

パルスィ「う、うるさいわね！ 人の散歩コースにケチをつけないで頂戴！」

恭介「ケチをつけた覚えはないが、後ろから気味の悪い視線を送るのはやめてくれ。 無法妖怪と間違えて斬られても文句は言えんぞ」

パルスィ「・・・じゃあ、どうしろつてのよ」

恭介「どうせ行く道は同じだろう？ なら、俺の横を歩いてくれ。背後からの強襲に備える必要があるからな。背後に常時、奇妙な妖気があっては敵かどうか判断できん」

その提案に、しょうがないわねと彼女はさめんどくさそうに言い、俺の横にやってきた。

パルスィ「いい？ 私は恭介がどうしてもって言うから隣を歩くのよ！？」
そこんどこ、分かってるわよね？」

恭介「勝手に言っている」

雷の剣豪が幻想入り・第一回（1）（後書き）

語りの多い今作。

話の時間軸的には「2011」襲撃」のさらに後。

今夏予定しているイベントの内容がほんのちょこっただけ書かれていたりする。

ついでに連絡。

単発エピソードの投稿時期は、第二期のラストにまとめて投稿と言う形になります。これまでにエピソードリクエストしてくれた方に関しては、これから構想を計画し、短編としてまとめられそうなもののみ、リクに答えようと思います。

メッセージの返信はもう少しお待ちください。また、リクは一人一回では無いので、思いついたら何度でも応募してくださいね。

では、今回もよろしくです。

雷の剣豪が幻想入り・第一回(2)

「????」おー、ようやく来たの？ 待ってたよー」

妖怪の山の麓を流れる川で待っていたその少女こそ、今日、俺をここに呼びつけた張本人、河城にとりである。無法妖怪たちの住処が妖怪の山周辺であるため、俺が無法妖怪に組していた頃から彼女とは親しかった。今じゃ、すっかり腐れ縁である。彼女は川に足を入れ、頭にはいつもの帽子じゃなく濡れタオルを乗せていた。

にとり「いやあ、この季節になってもまだ暑いね」

恭介「そんな通気性の悪い服を着ているからだ。一ヶ月前よりも相当涼しくなっているぞ」

にとり「これは河童の水中服なんだ。泳いでいるときに機械が水没しないように着てるの」

恭介「なら、一生を水の中で過ごすか陸にいるときは脱ぐかすればいいだろう」

しばし、沈黙する。そして突如、ああっ、とにとりは叫ぶ。

にとり「今の今までその選択肢は無かった・・・恭ちゃん賢いね」

パルスィ「だ、ダメだこいつ……」

恭介「天然だ……」

上着を脱いで腰に縛る。本当にこれまで上着を脱いだことが無かったのか、首から下は真っ白だった。下には黒いタンクトップを着ていて、珍しくボディラインが露になる。パルスィが爪を噛みながら彼女を睨んでいたが、今は気にすることじゃない。

にとり「少しは涼しくなったよ」

恭介「それで、今日の用件は何だ？」

にとり「ああ、うん。　　妙な機械を拾ってね。知り合いに聞いても分からないっていうから、もしかすると珍しいものかと思って」

恭介「その機械はどこにある？」

にとり「あたしんち。　　さ、行く行く」

すっかり話に置いていかれているパルスィ。不意に、ちよつと待ちなさいよ、と叫ぶ。

恭介「ん？ 散歩の途中なんだろう？」

にとり「どうかした？」

パルスィ「ちよ、ちよっと・・・恭介をどこに連れて行く気よ！」

にとり「あたしんちだけど。それが何？」

パルスィ「何よそれ！ 若い男を連れ込んで発情期かしら！？」

にとり「・・・はあ？」

パルスィ「恭介！ 帰るわよ！ こんな発情妖怪と一緒にいたら一滴残さず吸い尽くされるわよ！」

恭介「何を吸われるんだ、何を！」

強引に手を握って引き返すパルスィを振り払い。全く、とため息をつく。パルスィは涙目でこちらを睨んでいる。

恭介「 あー・・・。にとり、こいつも連れて行っていいか？」

にとり「別にいいよ。あたしの邪魔さえしなければ、ね」

恭介「・・・だ、そうだ。　　気になるんなら、お前が監視していればいいだろ？」

パルスィ「　　ま、全く。しょうがない子ね。いいわよ。恭介のことは私が守ってあげるわ」

にとりを見る俺。彼女はあはは、と苦笑いしていた。

にとりの工房はそこからさらに川の上流に向かった小屋。噂によれば、ここの他にも巨大な研究施設を持っているらしいが、普段、俺が呼ばれるのはこの小屋のほうだ。彼女の数多い趣味の道具で埋め尽くされたこの工房には鍛冶用の工具なども揃っていて、俺も時折、彼女に刀の製作を依頼している。

にとり「その辺に座ってて。　　今、お茶持ってくるから」

恭介「いや、それよりも要件を済ませよう」

にとり「せっかちなねえ」

恭介「この目を見てもまだそれが言えるのか」

恭介にすっかりしがみついてにとりを睨み続けるパルスィ。ジト

目は余計な動き一つせず一点だけを見続けている。にとりは、はいはい、と苦笑いして、棚の奥に隠していた一つの機械を持ってきた。にとり「何かの端末装置だと思うんだけど……」

それはイヤホンのような装置の付いた小さな機械。一昔前にみんなが持っていたという「i pod」とかいうものに酷似しているが、どうにもそれではなさそうだ。スイッチのようなものが大量についていて、とてもじゃないが家庭用の製品には見えなかった。

恭介「……携帯音楽プレイヤー？ いや、似ているが違う……。こういう形状の補聴器があるって話もあるが……それでもないみたいだな。動かないのか？」

にとり「水没してたみたいでさ。完全に動かないよ」

適当にあちこちいじってみたものの、反応は無い。俺は諦めてその機械をとりに返す。

恭介「……産革以降の装置のようだが……なんに使うものかまでは分からないな 香霖堂にでも持っていけば、分かるんじゃないのか？」

にとり「それが分からなかったから、恭ちゃんに聞いたんじゃないか」

恭介「霖之助の能力でも分からないことがあるってことか……」

にとり「でも、用途も無く名前も無いものがあるっておかしいと思わない？」

恭介「それは存在しなくても同じこと、か？」

にとりは頷く。確かに不可解ではある。だが、結局のところ考えたって何も分からないものだ。考えるのを止め、俺は立ち上がる。

恭介「さて・・・用も済んだ。帰るぞ」

にとり「ああ、うん。また来てね」

恭介「すまないな、力になれなくて」

にとり「いいのいいの。今度はゆっくり話でもしようよ」

にとり笑顔で、ばいばいと手を振るにとり。それとは対照的な笑顔で、腕にしがみついたまま俺を見るパルスィ。

用件は無駄足。そして面倒な対立関係を生んだ。どつやら、今日は厄日のようである。

雷の剣豪が幻想入り・第一回(2) (後書き)

謎の機械が登場しました。

その正体は・・・夏まで内緒。

そして、にとりとパルスィの影響が、ついにクールキャラにひびが入った恭介さん。

にとりは夏仕様になりました。女の子のタンクトップは正義なり。・
・ただし巨乳に限る。ウチの小説のにとりは着やせするタイプです。実は結構胸のある子。

なんでそんな設定かって？・・・にとりはウチの嫁だからさ。ゆえににとりはウチの個人的趣味丸出しです。スポーティーでそこそこ胸のある子(B〜Cくらい)が好きなのさ。

雷の剣豪が幻想入り・第一回(3)

再び来た道を戻り、里へ戻ってきた。今はパルスイと一緒に茶店にいる。幸せそうにあんみつを食べている彼女の向かい側で、俺は大きなため息をついた。

恭介「しかし、今じゃ団子の値段も倍か・・・これじゃ客も入らないだろう？」

茶店の女主人はええ、と寂しげに言う。

最近、里の中の治安が乱れている。妖怪の宝や命を奪い、金を得ていたものたちが、襲撃事件以降、同じ人間を相手にして食料を略奪するようになったらしい。襲撃事件によって人間はまた妖怪を恐れるようになったというのもあるが、宝を売って得る金や妖怪退治の賞金よりも、生きるために必要なものを欲するのは、人間がそこまで追い詰められている何よりの証だった。

結局のところ、あの襲撃事件は妖怪の力を人間に知らしめ、人間同士の争いを生む結果となったのかもしれない。リスクを負ってまで妖怪を相手にするより、目先の弱者から奪うほうがはるかに楽だと言うことを人間に教えてしまったのかもしれない。

そして、そこに追い討ちをかけるかのように、無法妖怪が里に現れては人間をさらっていくという。目的はもちろん食料にするためだ。その結果、人間は妖怪を恐れて里の外に出なくなり、そして人食い妖怪は食料を求めて里に出てくるようになる。まさしく悪循環だ。

女主人「先日も、無法妖怪が寺子屋に入りこんでねえ　　慧音先生がいてくれたから助かったようなもんだよ」

恭介「　　来年までは、こんな状況が続くのかと思うと、気が重くなるな。　　現状でこれなんだ。来年の収穫期までどれだけの人間が生きていられるか・・・」

女主人「妖怪は食べなくても死なないけど、人間は食べないと死ぬからねえ・・・全く、無法妖怪には困ったものさ。食べなくなったら死にやしないのに、どうして人間を襲うのやら」

女主人の言葉に、パルスイがバカじゃないの、と言う。

パルスイ「妖怪だって空腹だと辛いよ。　　人間はしばらく食べないでいれば勝手に死ぬけど、妖怪は死なないの。死にたくなるくらいの空腹の中で、ずっと生きなきゃならないの。　　アンタにそれが耐えられるかしら？」

死ぬと分かっていたら諦めもつくけど、死なないって分かっていたら、それは死ぬこと以上の恐怖なのよ。彼女の言葉に女主人は確かにそうかもしれないね、と答える。

パルスイ「私は無法妖怪の気持ちも分かる気がするわ。　　突然こんな世界に引つ張り込まれて、これまで自由に暮らしていたもの

が突如としてルールに縛られて、住むべき居場所も平穏な暮らしも与えられないまま、日々の食にもありつけないなんて、やってられないもの」

恭介「だが、だからといって彼らのやっていることは正当化できない」

パルスィ「・・・『雷獣』の言葉とは思えないわね」

パルスィの言葉が突き刺さる。何も反論できなかった。

????「な、何しやがる！　これは俺のものだ！」

外で大きな声が響いた。何かと外に出ると、槍を持った妖怪が人間を襲っているではないか。どうやら、あの男が持っている宝を狙っているらしい。俺が刀に手をかけると、パルスィはやめておきなさいよ、と忠告した。

パルスィ「面倒ごとに巻き込まれるわよ」

恭介「だが、見殺しには出来ない」

パルスィ「これまで、何人もの同胞を傷つけてきたのに？」

恭介「・・・」

パルスィ「私はね、アンタが憎くて言ってるんじゃないわ。

純粹に心配なのよ。あなたは不器用で、言葉足らずで、デリカシーもなく、誰にでも優しくして・・・。ホント、腕っ節しかないような男だけど・・・そんなアンタだから、心配なの」

パルスィ「恭介がいなくなったら、私・・・また地底で独りきりになっちゃう・・・お願いだから、もっと自分を大切にしよう」

パルスィの言葉を聞いても、それでも俺はその意志を曲げなかった。ここには大切なものがある。豊かな自然、古きよき時代の生活、人間、妖怪・・・そして、俺を助けてくれた恩人。俺の命は、それら全てのために使うと誓ったんだ。

恭介「　　彼女が愛した幻想郷を、傷つけさせはしない」

刀を抜き、ゆっくりと妖怪に歩み寄る。気配に気づいたのか、その妖怪もこちらに槍を向けた。

????「なるほど、あなたも仲間ですか？」

恭介「・・・立ち去れ。」

命の保障は出来んぞ」

????「そういうわけにも行きません。私にも目的があるもので」

槍が鋭く俺の中心を狙う。右に飛んで回避する。そのまま連続して振るわれる槍の斬撃を刀で受け止め、反撃の機会を窺うが、彼女の攻撃は人間の速度とはまるで違う。

リズムカルかつ寸分の狂いも無く繰り出される槍の攻撃に、こちらもどんどん押されていく。本来ならば長柄物は刀の間合いでは不利になるものだ。しかし、彼女の槍は違う。攻撃の寸前で彼女が手元を持ち替えて、的確な長さで振るわれるのだ。故に、どんなに近づこうとも、距離を置こうとも彼女の槍から逃れられる術は無い。次第に彼女の攻撃はより激しさを増して行く。回転しながら刃と石突を交互に繰り出すようになり、その攻撃のペースは見る見る速くなっていく。その踊るような足取りと攻撃の速さは、とてもじゃないが付いていけないような代物ではない。

少しずつ、攻撃が俺に当たるようになってきた。服をかすめ、血が槍に払われて辺りに落ちる。ここまでか、と俺は呟き。そして、しかたない、と続ける。

恭介「引かないのならば、これ以上容赦はしない!!」

解き放たれた俺の力に、妖怪は飛び退いた。光の速さで放たれたそれは、雷。軽く服の裾にかすつたらしく、妖怪の服は少し焦げていた。

????「な、なんですか!? 今のは!?!」

その時、パルスィの後ろにもう一人妖怪が現れる。彼女が振り返ると、やれやれ、とその妖怪は呆れ笑っていた。

????「ご主人には困ったものだ。珍しく私よりも早く宝塔を見つけ出せたと思ったら、とんだお宝も見つけ出してしまおうとは」

恭介「少し痛い、我慢しろよ!」

????「い、いやあああつ!」

恭介「真・雷光剣つ!」

晴天の空に光が降り注ぐ。強烈な轟音と衝撃を撒き散らし、その中心で、刃を振るう。あの時、藍に放った一撃よりも遙かにその威力が高まった一撃はあらゆる妖怪をも一撃で砕く、究極の刃。だが、その一撃は妖怪の足元で止まっていた。地面は大きく削れ、直撃すれば跡形も無かったことを証明している。

結局のところ俺も幻想郷の空気にあてられて、すっかり丸くなっただということだ。

「???」はいはい。そこまで。 ご主人も雷獣も、お互いに勘違いしてるよ」

俺と彼女の間に割って入ってきたのは小さな妖怪。こいつは里で何度か見かけたことがある。確かナズー・・・なんとかという妖怪だ。

ナズー「その男は物盗りだよ。うちの寺に忍び込んでご主人の宝塔を盗んだんだ」

恭介「・・・なに？」

ナズー「そして、ご主人。 こいつは噂の雷の剣豪『雷獣』こと、不破恭介だ こんなチンケな盗人の仲間なものか」

「???」「・・・」

ご主人、と呼ばれた妖怪はさっきから全く動かない。目を見開いたまま、完全に沈黙している。パルスィがこっそりと背後から忍び寄り、おい、と彼女の頭を蹴った。それでようやく我に返ったのか、ご主人とやらは、ゆっくりと辺りを見回した。その間に俺は盗人から宝塔を取り返し、彼女に差し出した。

恭介「すまなかつた。」

事情も知らず、勝手に手出しをして「

?????」

あ……。い、いいえっ！ いいんですよ！ そり

ゃあ、勘違いもするでしょう！ お気になしやらず！」

何を焦っているのか、盛大にかんでいるのも訂正せずにナズーを押しさつさと逃げようとする。

?????「さー帰りましょう！ 今すぐに！ ダツシユで!!」

ナズー「ちょ、ちょっと！ ご主人！ 帰るんなら宝塔を受け取ってからにしるーっ!!」

宝塔を残し、去っていく二人。なんなんだ、と俺が呟くと、パルスィはなにやら地面を蹴って、砂を撒き散らしていた。

恭介「何やってる?」

パルスィ「躡のなっていない猫の後始末」

+ + +

藍「なるほど。それで宝塔を持ち帰ってきてしまったと」

恭介「返しに行こうにも、奴の住処を知らなかったからな」

藍「明日、橙に届けさせよう。それまでは私が預かっておくよ」

藍は笑っていた。まあ、確かに笑い話だから俺も笑うなどとは言えない。藍曰く、あの妖怪は命蓮寺に住んでいるという毘沙門天の代理なのだそうだ。そうなれば、あれだけの槍捌きが出来たことも頷ける。

藍「さて、と……そろそろ紫様が帰ってくる頃だ。夕食の支度をしようか」

恭介「……ああ、そうだな」

台所に向かう藍。俺もそれに続く。そして、俺は隠していた本日の収穫を彼女に見せた。

藍「こ、これは……油揚げ!？」

恭介「パルスイがくれたんだ。

今日一日、付き合ってくれた

礼らしい。・・・将を射んとすれば　　って奴だな」

藍「・・・なんのことだ？」

恭介「さて、何でしょうかね」

時は弛緩異変後、初めての凶作を迎えた幻想郷。

人がお互いを傷つけあう悲しい時代。

そんな中でも、俺の生活は変わらない。

俺を救い、大切なものを与えてくれた藍のため、彼女の愛した幻想郷を守るため、ここに居るのだから。

その者の名は『雷獣』不破恭介。

幻想郷最強の雷使いにして、並み居る妖怪と互角に渡り合う剣豪。

これは、彼と、そんな彼に恋をした妖怪たちの物語である・・・。

どんどんはね。

おまけ

星「あうう……なんで私がこんな目に……」

星「し、しかし……雷に驚いて粗相とは……まだまだ修行が足りませんねえ、私も……はあ」

聖「あら、着替え中だったかしら？」

しょう「にゃ！　　ひ、聖ですか……驚かさないでください」

なむさん「……？　何か臭うわねえ」

しょう「な、なんのことでしょうか……あはは……」

次回予告

その者、雷を纏う剣豪。

早苗「お願いが、あるんです……」

今回のミッションは 電力の安定供給。

恭介「無理だ」

にとり「そんなこと言わないでさあ。あたしの技術革新の証明のために一肌脱いでおくれよー」

果たして雷獣は、少女の願いを叶えられるのか？

次回、雷の剣豪が幻想入り・第二回

リクがあれば続く。

雷の剣豪が幻想入り・第一回(3) (後書き)

なんか「とある科学の〜」にはまった直後だからか、雷使いとなる
とちよつとカツコよく書きたくなってしまふ私・・・。

にとり・星・らんしゃま・・・ウチの好きな子が勢ぞろいした今作。
これでフランも出てきていたら完璧だった・・・。

では、次回もよろしくです。

向日葵の丘・序章（前書き）

ありがちかつシンプルなタイトルをつけてみたくてやった。後悔はしていない。

今作は第二期の中でも一番構想に悩まされたお話。

バトルと純愛が交差するとき、物語は始まるのか!?

・・・では、今回もよろしくです。

向日葵の丘・序章

空はどこまでも青く晴れ渡り、雲は一つもなく、ただ太陽の光が一直線に丘に降り注ぐ。目の前の黄色い花たちは皆一様に光の指す方へ向き、穏やかな風に揺れている。

幻想郷の夏。幻想郷は変わっても、変わらない風景がそこにある。私は一人、彼らを見つめ、その場所にたたずんでいる。心地よい風の中で、ただ一人、ここにやってくるあの男を待っていた。

昨日も、一昨日も、彼は来なかったのに。

どうして私は彼を待っているのだろうか？

ここに来るのは日課だ。そこに、偶然彼が居合わせただけ。そしてそれが、たった一週間だけ続いただけなのに、どうして、こんな淡い期待をよせているのか。こんな何もかもを失った隠居の身で、何を今更こんな感情が芽生えてしまったのか。私にも分からない。

ただ一つ言えるのは、この身が、彼に会いたがっているということ。

なんて、陳腐な恋物語だろうか。自分で自分を笑い、そして、その場に倒れこむ。長く雨が降らなかつたからか、すっかり地面は乾ききつている。この丘に咲く向日葵も、後数週間と言ったところか。

いずれ枯れ果て、この丘の花も消える。幻想郷の異常気象は、まるで今の私をあざ笑うかのよう。

そして、目を閉じる。

幽香「・・・バカみたい」

いい歳して、こんな感情に捕らわれるなんて。

????「誰がバカだつて？」

その声に、目を開ける。一番に視界に入ったのは、あの男。

幽香「……何の用かしら？」

????「この間のお礼に来たんだよ」

幽香「この間……？ 何のこと？」

????「おいおい。覚えてないのか？」

しょうがない人だ、と彼　　龍宮知也は呆れ顔で言う。そして、
彼は話し始めた。私が彼と出会ったあの日のことを。

向日葵の丘・序章（後書き）

テラ純愛ペースで展開する序章。

ここだけならテーマは『熟女の恋模様』だね。あ、別にゆうかりんがBBAだという意味ではないです。そんなこと言ったら命がいくつあっても足りないぜ。

でも、本編はそんなペースで展開しないのが幻想夢。

ゆうかりんらしくないゆうかりんを書いた後は、しっかりいつものゆうかりんが登場する予定です。

では、本編もよろしくです。

向日葵の丘・第一回（1）（前書き）

お久しぶりの幻想夢更新。

仕事が忙しいと話の短い小説に走る傾向があるので、今は幻想夢よりも夢一夜のほうが更新頻度が多くなるかと思えます。

ブログのほうで『東方幻想局81・?』という企画も始まったので、幻想夢の更新ペースはさらに下がる一方……。仕事の関係もあるし、GWまではあまり更新できないかもしれないなあ。

では、本編をどうぞ。

向日葵の丘・第一回（1）

遠くに、泣きながら街道を走る少年を一人見つけた。そして、その少年を追う男が一人いることにも気づいた。どうやら男は少年が手に持っている人形を狙っているらしい。私はすぐさま事情を察したのだが、どうにも少年を助ける気は起きなかった。

私にはどうだっていいことだ。それに、今はそれどころじゃない。

今、私がいるこの場所は、幻想郷では太陽の畑と呼ばれている。ここら一带に広がる巨大な向日葵畑は、この時期になると鮮やかな黄色い花を咲かせ、妖怪や妖精たちの遊び場として重用される。最近では幻想入りしてきた人間たちの間で噂になり、観光スポットとしても扱われるようになっていた。妖怪も、人間も、ここでは争うことなく、向日葵の花に見惚れていた。

だが、今年はそんなもの見る影も無く。太陽の畑には殺風景な茶色の世界が広がっていた。覚悟はしていた。だが、ここまで酷いものかと思うと私は胸が痛くなる。

異常気象の影響は、幻想郷のあらゆる植物を瞬く間に食い尽くした。今では、その乾ききつた土には雑草の一つも残っていない。太陽の丘の周囲にある水源は一つ残らず枯れ果ててしまったのか、水路を流れる水は、その一滴すら見当たらなかった。

さて、どうしたものか、と考える。能力を使えば花を咲かすことなどたやすいが、それでは再び枯れてしまっておしまいだ。水路を復活させないことには、土に水が供給されることは無い。この近くにある湖から水を引いていたこの水路に水が入ってこない、という

ことはその湖とその水源地は既に干上がっているのだろう。なら、新しい水源を探すしかない。

太陽の畑をさらに南に進んだところに川があったはずだ、と私は思い出す。しかし、そこから水を引くには、かなりの労力が必要だ。一人でやるにはあまりにも膨大な時間を要するだろう。・・・それでは、間に合わない。

万策尽き、私はその場に倒れこむ。服が汚れることなんてお構いなしだ。そして、ため息をつく。

幽香「お終い、かしらね・・・この場所も・・・私も」

そう、ここ太陽の畑は私の命。どんなに強い植物も水の無いところでは生きられないように、太陽の畑から植物が消えうせれば、私は生きていくことが出来ない。日々、ぼんやりと自分の存在が消えていくことを感じていた私は、ここでようやく、自分の死を実感した。

まあいいだろう、と思い、目を閉じる。十分すぎる生に、もううんざりしていたくらいだ。自分の大切なものも培ってきた全ても、とうの昔に失って、それでもまだ、この世界に縛られ続けてきた私に、ようやく最後が来るのだ。むしろ、喜ばしいことではないか。

幽香「かつては最強の妖怪なんていわれてた私が、まさか、花を失って死ぬことになるうとは・・・」

どんなに殺されても死ななかつたこの身。博麗の巫女との激闘の末にも、傷一つ無く生き残つたこの体が、いとも簡単に崩れていくことに可笑しくなる。

そして、私は静かに、その時を待っていた。

だが、その刹那、私の顔面に何かが直撃する。驚いて目を開けると、先ほど見た、少年を追う男の足が目の前にある。踏まれたのだ。

???'「あ、ごめんなさい・・・でも、俺・・・急いでるんで、これ・・・」

そつと足を顔から離し、そしてそそくさと少年を追う男。・・・私は傘を手に取り、一気に太陽の焔を駆け抜ける。

幽香「人の顔を踏んでおいて・・・その態度は何かしらっ!?!」

男どころか少年すらも抜き去つて、二人のほうに向き直る。足を止める少年と男。私は拳を握り、力を放つ。

幽香「くだらない争い事を、私の焔に持ち込むんじゃないっ!?!」

拳が振るった刹那に光の矢が放たれる。それらは一斉に男のほうに向かい、彼を貫いた。

幽香「ふん……」

少年を睨み、一体何があったのかしら、と問う。すると、少年は突然、ごめんなさい、と謝って持っていた人形を私に預けたのだ。

幽香「ちょ、ちょっと、これ何かしら!？」

少年「ごめんなさい！ もうしません！」

走り去る少年。呆気にとられて動けない私。そして、目の前には先の男。どうやら私の弾幕の直撃を受けてもまだ立っていられるらしい。

幽香「堅いのね。あなた」

????「その人形……取り返してくれたのか？」

幽香「これ、アンタの人形？ にしては随分と少女趣味なようだけど」

????「違う、俺のじゃない。

実は「

そう言って、男は事情を話し始める。街道を歩いていたら、少女の人形を奪って逃げていく少年を目撃し、それを取り返すためにここまで来たのだと言う。

「でも、よかった。人形が戻ってきて・・・」

そう言いながら、人形を手に取りうつとする男。私はすぐさま人形を彼から遠ざける。

「・・・えーつと・・・俺、何かしました？」

幽香「人形を取り返してあげた恩人の顔を踏みつけておいて、何もないワケないでしょう？」

「・・・それは、すみませんでした」

幽香「そんな言葉で済ませるつもり？」

風が吹く。私の髪が風になびくと、男はその気配に気づいたのか、息を呑む。

幽香「こんな場所でひとり寝ている女が、人間なはずないでしょう？」

「・・・つまり。あれだね」

幽香「人形を返して欲しかったら、奪えばいい。
なら、ね」

出来るもの

向日葵の丘・第一回（1）（後書き）

ゆうかりんを踏んだ男なんて、史上初ではなかるうか・・・。

幽香の設定は非公式ですが、最強クラスの生き物には弱点がつき物ですので、追加しました。正確に言えば『太陽の畑に植物がなくなると死ぬ』のではなく『幽香は自ら霊力を供給できないので、太陽の畑の植物が幽香に霊力を供給する』という設定です。霊力が尽きると妖怪は力を失いますので、死ぬ、ということになります。

どうして自ら霊力を供給できないのかは、いずれまた明らかにしていきます。

では、次回もよろしくです。

向日葵の丘・第一回(2) (前書き)

さて、ついに決戦。

ですが、若干リク主さんの期待に添えない部分があるかも……。その辺についてはあとがきで。

では、お楽しみください。

向日葵の丘・第一回(2)

幽香「碎け散れっ！」

間合いを詰め、傘を振りかざす。男の体はそれだけで宙に舞う。無様なものだ、と私は一回転しながら傘の先端から弾幕を放ち追撃する。しかし、男もただでは終わらない。弾幕を素手で掴んだのだ。

幽香「なにっ!?!」

????「やれって言うんなら、やらせてもらっさ!」

弾幕を手にとって、そのまま投げ返す。傘を開き、それを受け止めると、その刹那、男の体から何かが飛び出してこちらに向かってくる。

幽香「弾幕・・・っ?」

????「行けっ!」

小さな鋼の人形のようなものだ。人形が弾幕を放ち、こちらの接近をけん制する。

幽香「人形遣いかっ！」

しかし、所詮は使い魔。焼き払ってしまえばそれで済ませよう。

弾幕を放ち使い魔の動きを封じ込めると、再び男に迫る。だが、あの鋼鉄の人形は簡単に焼き尽くせるような代物ではなかったらしい。男の眼前まで拳を突きつけた刹那、背中を直撃するレーザー。気配も魔力もない、その使い魔は一斉にこちらに向かってくる。男への攻撃を中断し、一時回避に徹する。レーザーが網の目のようにこちらの動きを封じ込めてくる。人間のくせに、とんでもない空間把握能力だ。的確にこちらの動きたい場所を封じ、先んじて弾幕を用意しているではないか。そして、ついにこちらの動きは完全に封じられ、私は足を止めた。

幽香「小賢しいっ！」

とどめをさすつもりか迫ってきた緑の一つ目を素手で砕き、私は反撃に出る。所詮は子供の遊び。幾度となくあらゆる妖怪を打ち倒してきた私の敵ではない。傘の先端を男に向け、狙いを定める。

幽香「消し飛べっ！」

彼の使い魔が放ったレーザーとはまるで違う巨大なレーザー。土しか残されていない向日葵畑の大地を削り取るその火力を目の当たりにした男は、さすがにまずいか、と呟く。

「????」なら、本気でいくぞっ！」

私のレーザーをかわすこともせず、男はそのレーザーを受けとめた。驚く私をさらに驚かせたのは変貌した彼の姿だった。黒い鎧を身に纏い、周囲には不思議な防御壁が展開されている。そして、呆気にとられている私に、容赦なく鎧の背中にある巨大な大砲から、私のレーザーとも相違ない一撃を放ったのだ。

幽香「くっ……おのれっ!!」

苦し紛れのレーザーで相殺する。だが、彼の攻撃はまだ終わらない。ミサイルの雨、実弾の嵐。そして飛び交うレーザー。幻想郷に機械の人形兵器がやってきたことは聞いていたが、機械を纏う男など聞いたこともない。回避する先を予測して放たれる攻撃に足を止められ、刹那に向かってくる本命の一撃。傘でどうにか弾き飛ばし、反撃の機会をうかがうが、どうにも攻撃はやみそうにない。

ならば、こちらで攻撃を止めるしかない。私は賭けに出る。急降下し、地面すれすれを飛んで彼に迫る。地面ギリギリで水平飛行に移った恩恵で追尾してきたミサイルは地面に叩きつけられる。そして先ほどまでの巧みな三次元攻撃も同じ高さにいる相手には通用しない。彼は私を再び空に上げるつもりなのか、レーザーを横向きに放ち、けん制を試みている。だが、そんなことはお見通しだ。

幽香「……霊撃っ!!」

全身全霊の一撃で、横薙ぎのレーザーに風穴を開けた。そして一気に迫る。彼の鎧の胸にも大砲があるらしい。そこから再度、レーザーが放たれた。

幽香「甘いっ！ 特符『二段霊撃』っ！！」

切り札は最後まで取っておく。それが戦いのやり方だ。ゆえに、先に切り札を出した彼に勝機などない。

既に私の体も空を飛ぶことすら出来ないまでに消耗している。レーザーを相殺した後は地面を走り、彼との距離を詰めていく。実弾による攻撃はもはや回避不可能だ。かわすことを放棄し、そのまま突き進む。

そして、決着の時。

鋼鉄の鎧は容易く碎け落ちた。妖怪の力を前にそんな防具など意味は無かったのだ。拳は彼の腹部に直撃し、彼は完全に気を失っている。

だが、こちらとて無事ではない。体中に実弾が入り込み、全身は赤く染まっていた。頭が重く、視界はかすんで見える。彼の腹に打ち込んだ拳を引くことも無いまま、私はその場に崩れ落ちる。

二回にわたる霊撃の使用でもはや力の全てを出し尽くしていた。

博麗の巫女ですら成しえなかった、「私に傷をつける」という行為を彼が成しえたのも、その傷がふさがらないのも、私の霊力が底をついた何よりの証拠だ。

茶色い土だけが見える。重い頭をゆっくりと動かす、手に力をこめる。ようやく動いたその手は乾いた土を掴むだけ。動かした頭も私の顔に余計に土をつけただけ。次第に、息をするのが辛くなってくる。

最後の最後まで馬鹿な生き様だった、と思い返す。せめて、最後の時くらいは、穏やかでありたかったものだ。

???「無様ね」

不意に、声がする。それは、聞き覚えのある声だ。

幽香「・・・か」

???「喋らなくていいわ。私の声を聞いているだけでいい」

???「あなたと出会ったのは、そう。確か幻想郷を作った間もない頃だったかしら」

あらゆる妖怪を従えたかつてのあなたは、人間から奪った土地に妖怪の王国を築きあげ、五大妖の次点と言われるほどの力を持った大妖怪だった。

「でも、あなたは負けた。この私に、ね」

築き上げた王国も、絶対的な力による恐怖も、大切な仲間も、全て私に奪われたあなたは私に従わざるを得なくなった。

「……そして言ったじゃない。『いずれ、お前を殺す』って」

嘘だったのかしら？ 声の主は赤く染まった私の髪を掴み、顔を持ち上げる。ぼんやりと、声の主の姿が目に映る。

「……あなたを縛っているのは何かしら？ あなたは生きられないんじゃない。私から逃れようと生きるのを放棄しているだけ。たまたま死ぬる可能性が巡ってきたから、死のうとしていただけ」

お前はまだ、死ぬべきときじゃない。

声の主は立ち上がる。私の体が、だらんと宙に浮く。それとも、あなたを縛るこの土地すらも、私が奪っていいのかしら？ その言葉に、私は声の主の腕を掴み返した。自分の足で立ち、目を見開く。そして、声の主　　八雲紫をにらみつけた。

幽香「お前はいつも・・・私から何もかもを奪っていく・・・っ！」

紫「ええ。だって、面白いじゃない。おもちゃを取られて泣いているあなたを見るのが、たまらなく面白いのよ、私は」

紫「ホラ、自分の足でもう立てる」

紫「まだ、あなたは、生きられるわ」

幽香「・・・」

紫「わずかだけど、あなたに霊力を与えたわ。　　普通に暮らして一週間分。・・・それまでに、この向日葵畑を蘇らせることができるかしら？」

楽しみね、と言い残して紫は姿を消した。私はそのまま倒れこみ、すぐそばに同じように倒れている男を見る。

幽香「・・・死ぬことすら、奪われたか。
まで続くのかしらね」

この地獄は、いつ

向日葵の丘・第一回(2) (後書き)

紫と幽香の設定はオリジナル設定です。幽香が幻想入りしている理由を考えた末に、彼女は紫に従っているという推測に至ったので、それを採用。

そして、リク主さんには申し訳ないけど、能力によって出現する「機械の人形」の正式な名称は伏せさせていただきました。東方幻想夢はあくまで「東方の二次創作+私の過去作品」で描かれる話なので、他の原作タイトルを含めたくない、と言うのが一番の理由です。

この話の続きはブログで。
では、次回もよろしくです。

向日葵の丘・第一回(3)

幽香「はい、コレ。返してあげるわ」

男が目覚めて間もなく、私は彼に人形を渡した。いいのか、と問う彼に、私も大人気なかったわ、と謝罪する。

???「あ、ありがとう・・・ええっと」

幽香「風見幽香。幽香でいいわよ」

???「じゃあ、ありがとう、幽香さん」

幽香「ええ。どういたしまして」

知也「あ、俺、龍宮知也です」

幽香「知也、ね。さて、じゃあ、行きましようか?」

知也「行くって・・・どこに?」

幽香「人形の帰りを待っている女の子のところへ、よ」

最近は何事だから、送っていくわ、と私はさっさと歩き出す。

知也「幽香さんは、妖怪なんですよね」

その道中、彼は不意にそんなことを言う。あれだけの戦いを体験していて、そんなことがよく言えるわね、と私は返す。

幽香「私は妖怪よ。それも、幻想郷最強クラスの大妖怪」

知也「でも、こんな」

幽香「あら、こんなおばさんは妖怪やってちゃいけないのかしら？」

知也「おばさん、だなんて・・・幽香さん、若いじゃないですか」

幽香「十分おばさんよ。むしろ、人間の年齢でいえばもうおばあさんの十回分くらい年取ってるもの」

妖怪はね、長く生きればその分、霊力が増していくのよ。私はそういって、にやりと笑う。

幽香「その分、生きていくために必要なエネルギーも膨大になっていくわ。若い子は燃費がいいけど容量が少なく、年寄りには燃費が悪いけど、その分霊力は膨大に蓄えられる」

幽香「故に大妖怪は無駄に動かず、燃料を浪費しないものよ」

知也「じゃあ、どうしてあんな戦いを？」

幽香「私は大妖怪、なんて器じゃないもの。年寄りのくせに、いつまでも若いと思ひ込んで、バカなおばさんなのよ」

幽香「さて・・・里まで来たけど、女の子の家はどこかしら？」

知也「もう少し先です。魔法の森のほう」

幽香「魔法の森・・・？」

魔法の森と人形・・・この少女趣味な人形は、あの魔法使いの人形か。恐らくは気まぐれに魔法使いがプレゼントしたのだろう。

里を過ぎ、魔法の森のほうに向かう。すると、道の先で待っている少女が一人いた。こちらを見るや否や、駆け出してくる。

????「お兄ちゃん！ 人形は？」

知也「ああ、この通り無事だよ。この人が取り返してくれたんだ」

知也はそう言って私の方を見る。少女は嬉しそうに微笑んで、私にありがとう、と言った。

幽香「どういたしまして。お嬢さん、お名前は？」

アリス「私、アリス。お姉ちゃんは？」

幽香「アリス・・・？ そう、いい名前ね。私は、風見幽香」

アリス「幽香お姉ちゃん、ありがとう！」

アリスと名乗った少女は、そう言って森の奥に帰っていった・・・
私は、彼女の背中を見つめ、何かの異変の始まりだろうか、と思う。

しかし、そんなことを考えてもいられない。私にはやらなければならぬことがあるのだ。じゃあ、私は帰るわね、と知也に言い、さっさと歩き出す。

知也「待ってよ。 お礼に団子屋にでも行かないか？」

幽香「食物には興味ないわ」

知也「何でそんなに急ぐのさ。 何か用事？」

幽香「太陽の畑を蘇らせないといけないの」

私の言葉に、彼はさっきの荒地のことか？ と問う。言葉に気を
つけなさい、と私は鋭く返した。

幽香「あそこは私の向日葵畑なの。早く、あの場所に花を咲かせないといけないの」

知也「向日葵畑・・・？ そついや、命蓮寺のネズミがそんなこと言ってたか・・・」

じゃあ俺も手伝うよと彼は言う。気づけば、私は傘を彼に向けていた。彼の足が止まる。

幽香「人間のくせに、調子に乗るんじゃない。私はお前に構っている時間はない」

知也「・・・ごめん」

幽香「・・・以後、気をつけることね」

私が歩き出しても、彼は追ってこなかった。これでいい。私に構ってもらくなことにはならないのだ。私は一人で太陽の畑に戻り、そして、水路を作るため、水源を求めて歩き始めた。

夏の日差しは容赦なく私を照らしつける。帽子でも持って来ればよかったな、と思い返すが、今更引き返す時間が惜しい。自分の知

らない水源を求め、周辺をさ迷い歩く。だが、結局、自分の知っている川以外、近い水源は存在しなかった。

幽香「結局、ここから水を引くしかないわね・・・一週間で出来るかしら？」

靈力に余裕があるのならばレーザーで地面を削ってしまってもいいが、今の状態ではそういうわけにも行かない。地道に開拓していくしかないか、と私はすっかり暑くなってしまうた体を冷まそうと、靴を脱いで川の水に足を入れながら考えていた。ばしゃばしゃと水面を蹴り、効率のいい方法はないか、と模索する。でも、結局いい考えは浮かばない。

無駄に考える暇があるなら手を動かそう、という考えに行き着いた私は水路の作成に取り掛かることにした。

太陽の畑までの最短ルートで一直線に水路を作る。太陽の畑は周囲に張り巡らされた水路のどれか一つに水が入れば、そこから支流の水路に水が流れ込んで、自動的に一帯の土壌に対して均等に水が供給される構造になっている。紅魔館の魔女が考案した、水の流れる方向や法則を無視する魔法水路のシステムが今更になって役に立つとは思わなかった。おかげで既存の水路の中で最もこの川に近いものに対して水を引く道を確認すれば、それだけで太陽の畑は蘇る。それさえ出来れば、後は私の能力で花を咲かせればいい。

幽香「口で言うのは簡単だけど、この距離を一人で作るのは、無理があるわね」

距離にして一キロ半。この一つの水源地で太陽の畑全体の水分を補

うには、それなりの水量も必要だ。そうなれば水路に必要な幅もそれなりに大きくなければならない。幸い、川は非常に大きく、流れも強い。ある程度巨大な水路を作っても問題はなさそうだが、問題はそこではなく、作成にかかる労力だ。いくら力があっても、一人で出来る分には限界がある。それに、霊力はどんどん減っていくのだ、むやみに力を浪費してしまえば、それだけ自分の寿命を縮めることになる。

きつと紫は、再び来る私の死を奪うことはないだろう。奪うとすれば、今度は私の命のほうだ。

醜く足掻いても、結局何も出来ないまま死んでいく私の命を奪い去る。それは、何物にも変えがたい屈辱だ。

死んでもあいつの思惑通りになんかさせるか。私は道具を手に取り、早速水路作りに取り掛かった。

すっかり日が暮れた。水路はまだ見る影もなく、ただの穴でしかない。こんなペースではダメだ、と自分を急かすが、そんなことをしたって何か変わるわけでもない。人間の里に行つて、重機の一つでも借りてこようか、と思ったものの、さすがに気が引けた。ここは幻想郷の果て・・・力の強い妖怪も数多く生息するこの地で人間の力を借りるのは、あまりにもリスクが大きい。あまり事を大きくして無法妖怪が目をつけたら、今の私ひとりで守りきれるとは到底思えないからだ。

幽香「・・・はあ」

結局、全て紫によって仕組まれた罫なのだろう。今もあいつは、私を監視して笑っているに違いない。だが、それでも私は諦めることなんてできなかった。

幽香「足掻くわよ。この命は、私だけのものじゃないのだから」

????「何やってるんですか？ 幽香さん」

夕焼け空の中に、一人の男の姿を見た。翼を背負った白い鎧を身に纏う知也は、手伝うことはないですか、と私に問う。

幽香「・・・ないわ」

知也「明らかに一人でこなせるような仕事じゃないと思いますけど？ 俺、結構こういうのは得意ですから、手伝います」

幽香「・・・やめて頂戴」

知也「穴を掘るんですね？ 道具、借りますよ？」

幽香「やめろって言うてるでしょうー！」

知也は私を見て、はっとする。当然だ。私は泣いているのだから。

幽香「私はひとりでいいのよ。ひとりがいいの。だから、放つておいてよ……」

知也「……幽香さん」

失うくらいなら、初めからないほうがいい。奪われる悲しみがいずれやってくるなら、初めからひとりでいい。幾度となく築き上げても、あの幻想郷の賢者は私の全てを奪いつくす。今度こそ大丈夫なんて思っても、結局彼女の意思には逆らえない、逆らえなかったのだ。私につき従ってくれた妖怪は皆、私のせいで不幸な運命を辿った。大切な親友も、相棒も、愛した家族ですらも、何もかも、あの賢者は奪い、そして笑っていた。

涙を拭い、私は知也に背を向ける。

幽香「こんなおばさんと一緒にいても、楽しくないでしょう？ だから、早く帰りなさい。そして、もう二度と、ここには来ないこと」

知也「お断りします」

知也は言う。恩返しが済んでいないと。そして、その恩は今ここで返さなきゃいけないと。

知也「向日葵畑を蘇らせるんでしょう？ 一人でやるより、二人でやったほうが早いはず。それに、俺、見たいんだ。幽香さんの育てる向日葵」

幽香「……バカな子。それとも、ただの変わり者かしら？」

知也「なっ……」

幽香「冗談よ。でも、今日はもう遅いわ。明日から、お願いするわね」

今思えば何の気まぐれだったのだろうか。それとも、追い詰められてとうとうおかしくなったのか。あの時の私は、とにかく異常だったのだ。二度と誰かの力は借りないと、二度と誰も信用しないと心に誓ったはずだったのに……。彼ならば信用してもいいのかもしれない、なんて夢物語を描いていたのだ。

向日葵の丘・第一回(3) (後書き)

東方好きなら見覚えのあるキャラが登場しました。
これも異変の予兆なのか・・・？

まあ、いずれ分かることなのかもしれない・・・。
では、次回もよろしくです。

向日葵の丘・第一回(4)

そして時は今に戻る。知也の話で、全てを思い出した。

幽香「そう・・・思い出したわ。私は、あなたに礼を言われる筋合いなんてないってこと」

風が啼く。向日葵の花が揺れる。それを見つめ、知也は言う。

知也「さすがは幽香さん。こんなに綺麗な向日葵を咲かせるなんて」

ぼんやりと思い返す。どうしても一週間も彼はここに来なかったのか。その答えは、あまりにも簡単だった。全てを思い出し、私ははっとする。

幽香「どうして・・・。私、死んだはずじゃ・・・」

そう、知也の協力をもつてしても、水路は結局間に合わなかった。最後の日、私は知也の前で死んだはずだったのに、どうしても今、こうして生きているのだろうか。

そう、あれは最後の日の夕方。全ての霊力が尽き、私の体は動かなくなった。

+
+
+

水路は結局、間に合わなかった。倒れた私を太陽の畑に運び、知也はごめん、と言っていた。

知也「手伝ったのに、間に合わなかった……」

この一週間の間で、私は彼にいろんなことを話した。自分の過去の話。私のために死んでいった妖怪の話。家族や、共に暮らした仲間の話。そして、この向日葵の丘のこと。

知也「……ごめん」

幽香「いいのよ……それより、こんな私に付き合ってくれて、ありがとう……。何もお礼も出来ないけど……」

知也「そんなのいらない。それに、まだ俺は幽香さんに恩返しできてない」

幽香「それこそ、必要ないわ……。もう十分、もらったから」

わずか一週間という時間。永遠もの時を生きた私からすれば、そんなもの、ほんの刹那に過ぎないが、それはまるで昔の頃のように充実した日々だった。

まだ幼く、この世のすべては自分のためにあると思っていた頃。紫によって全てを奪われる前の時代。そして、全てを失って尚、私につき従い、共に暮らした仲間がいた時代。私の生きた時の中で、最も充実していた二つの時代にも劣らない、幸せな日々だった。

そんな日々は、もう終わる。

幽香「知也……ありがとう」

私に訪れた死は、あまりにも穏やかだった。

+ + +

幽香「そうよ。そう……。私は死んだのよ！ どうして太陽の畑に花が咲いているのよ！？ どうして私は生きているの!?!？」

知也「さあ、俺もよく分かんないけど。ただ、俺はこの一週間をかけて、あの水路を完成させた。そして、今こうして来てみたら、太陽の畑に向日葵が咲いていて、幽香さんがここにいた」

どういうことなのか、と思いながら、辺りを見回す。すると、答えは案外すぐそばにあったのだ。

幽香「・・・全く・・・いつになったら開放してくれるのかしらね」

向日葵畑の前に立つ、一つの立て札。そこに書かれているのは、見覚えのある、賢者の字。そこに書かれている言葉を見て、私は笑う。

『がんばったで賞。勝手に死ぬなんて許さないから』

幽香「また、私の死を奪ったみたいね。 何度泣かされれば許されるのかしら・・・私は」

知也「幽香さん？」

幽香「・・・さあ、まだ土に水分が足りていないわ。水路を拡張するか、新しい水源を見つけましょう。このままじゃ、また一週間も持たずに死んでしまうわ」

知也「ええっ!?!? こんなに咲いてるのにつ!?!?」

幽香「しよせんは人工で咲かせた花よ。一時的には咲いていても、土壌に自生できるほどの環境がまだ整っていないわ。すぐに枯れてしまおう　ホラ、あなた、あの白い鎧で空を飛べるのでしょうか？ さっさと行って、新しい水源を見つけてらっしゃい」

知也「蘇ったとたんに人使いが荒いなあ・・・」

幽香「私にお礼がしたいんでしょう？　なら、馬車馬のように働きなさい」

知也「分かりましたよ・・・。水路作りで疲れてるってのに・・・」

空を飛ぶ知也を見送り、私は向日葵畑を見た。あの時、どうしても何もかもを忘れていたのか。そして、忘れていても尚、知也の事を覚えていたのか・・・私には分からない。

でも、と呟く。そして、地面に落ちていた傘を拾い上げ、開く。

幽香「全てを忘れていても、彼のことだけは覚えていた。　我ながらベタな恋物語になりそうねえ・・・」

さて、やることはたくさんある。　残された時間も少ない。

今は、この太陽の畑の花を守ることを考えよう。私は空を飛び、知也とは反対の方角に飛んでいく。

太陽の畑。それは幻想郷の果てにある向日葵の咲く丘。そして一人の妖怪がその生涯をかけ花を守る場所。

この物語は、そんな向日葵の丘に迷い込んだ青年「龍宮知也」と、向日葵を守る妖怪「風見幽香」の物語である。

どんどはね。

おまけ

紫「・・・あー、疲れたあ・・・藍、何か冷たい飲み物頂戴っ！」

藍「はいはい。ただいまお持ちいたします」

紫「はー・・・。生き返ったわあ」

藍「紫様、どこに行ってたんですか？それに、その格好・・・まるで農家のおばさ　お姉さんみたいじゃないですか」

紫「んー。ちよつと墓参りにね」

藍「お墓、ですか？ 知り合いか何かですか？」

紫「ええ、腐れ縁の、大切な友人よ」

藍「でも、どうしてお墓参りでその格好なんですか？」

紫「あら、墓に花を供えるのは当然のことでしょう？」

藍「はい？」

太陽の焔に訪れる来訪者。

「????」さて……失せ物はどこにあるのやら

幽香「あら？ 何かしら……随分立派なお宝ね……返して欲しいのかしら？」

それは、暇をもてあました幽香の恰好のおもちゃだった。

知也「な、なにやらせてるんだよ……幽香さん」

幽香「ふふ……。私に逆らうと、こごいつ目に遭うってことよ」

「????」うわーんっ！ 助けてくださいーっ！！

そして、宝を巡り、妖怪と魔法使いが激突する。

「????」少し説法が必要かもしれませんね。あなたには「

幽香「へえ……。道に背きし悪徳僧侶が、私に説教するつもり？」

圧倒的な力と力のぶつかり合いに、知也が下した決断とは……？

次回、向日葵の丘・第二回

リクがあれば続く。

向日葵の丘・第一回(4) (後書き)

紫もたまにはいいことをします。まあ、彼女は特に悪さをするような妖怪では無いですし、根っからの悪人ではないってコトネ。

話が長くなったので、中盤をカットしました。中盤はぐだぐだと話が長くなる展開になる予定だったので、むしろカットしたおかげですっきり仕上がった。水路を作る過程でどんな話をしたのかは、各自で想像してください。

では、次回もよろしくです。

旧地獄の古明地さん・序章（前書き）

今作はちよつと個人的な挑戦を試してみる。

どんなチャレンジをしているかは秘密。気づいた人は偉い。
さて、そのチャレンジが吉と出るか凶と出るか・・・それは今後のお楽しみ。

では、序章をお楽しみください。

旧地獄の古明地さん・序章

旧地獄は、今日も生暖かい風が吹いている。

そんな場所を鼻歌交じりで闊歩する妖怪が一匹。地霊殿に住む火焰猫燐だ。今日はいいことでもあったのか、スキップしながら楽しそうに街道を進んでいく。その手には何かの骨のようなものが握られていた。彼女には死体を収集する悪癖があるらしいが、あれもそのひとつなのだろうか？

しかし、随分と楽しそうだ、あんなに楽しそうにしているのを見ると、少し脅かしてやりたくなる。と、いうわけで、先回りして姿を隠す。そして、彼女が近くまでやってきた刹那、一気に姿を現す。

????「わーっ！　　って、あれ？」

しかしお燐の姿は無い。辺りを見回すが、誰もいないではないか。

????「いなくなった……のか？」

お燐「禁断奥義！　骨かんちょーっ！」

刹那、お燐が背後から尻めがけて骨を振るってきた。ギリギリで

回避したのを見て、かつこ悪いのさ、と上機嫌に笑っている。

お燐「自分が誰かも分かんないような奴が、妖怪を脅かそうなんて百年早い」

????「はー……。またダメだったか」

お燐「曲がり角で待ち構えるなんて、ありきたりすぎるのさ」

もつと精進なさいよ、と彼女は言う。

お燐「さ、一緒に帰るのさ。あたいたちの家に」

お燐の言葉に頷き、そして街道を二人で歩く。

お燐「今日はお仕事、無かったのかい？」

????「ああ。一日暇を出されたんだけど、正直何をしていいのか……。桶の妖怪をじっと観察してただけで半日終わったよ」

お燐「半日って……。キスメちゃんもいい迷惑なのさ……」

後はとりとめもない会話をして、ようやく家に到着する。

地霊殿、と呼ばれるその屋敷。大きくて重い扉を開け、中に入ると、入り口にはそわそわと落ち着かない様子の少女がいる。地霊殿の主、古明地さとりだ。

お隣「ただいまなのさっ！」

さとり「え？ あ、お隣か・・・って、あなたも一緒だったの？」

お隣「お届けものの途中で、偶然会ったのさ！ はい、これ。さとり様にお届けもの」

そう言って、お隣はくしゃくしゃになっている紙切れを取り出した。届け物だというのに、随分と乱雑だ。それを見て苦笑いする。届け物とは手紙のようで、彼女は中を開き内容を読み、そして呟く。

さとり「地上では面白いことになってるみたいね」

彼女は手紙を破り捨てる。そして、こちらを見て言ったのだ。その眼差しは、獲物を狩る妖怪の目そのもの。

さとり「一日お休みって言ったけど、取りやめ。今すぐ地上に出て、無法妖怪を退治してきなさい」

だが、その表情にも曇りが見える。心が揺らいているのか、それを封じ込めるように感情を押し殺して、さらに言葉を続ける。

さとり「古明地の名を私によって与えられた以上、あなたは私の手足であり、意志も同位」

私の代わりとして、彼女を救出してきなさい。その言葉で事情を察し、彼女を見、頷く。

古明地「・・・こいし様、だな」

それを聞いたとたん、彼女の表情は妖怪から姉に戻る。手紙の内容は、妹が無法妖怪にさらわれたという、天狗からの報告であったのだ。すっかり動揺しきっている本性が隠しきれなくなったのか、彼女は涙目になりながら懇願する。

さとり「お願い　　こいしを助けてあげて」

古明地「承知しました。　　行ってきます」

お隣「あ、あたいも行くのさ！　こいし様が心配なもの！」

こうして、お隣と共に、地上にて捕らわれたというこいし様を助けるための本日のお使いが始まったのだった……。

旧地獄の古明地さん・序章（後書き）

序章から急展開。でも、本編（1）くらいで決着がつく予定。
真の本編はそこから始まるのさ・・・。

しかしまあ、設定上の書きやすさイメージと、実際書いてみての書きやすさは違うね。今回はサクサク書けると思ったけど、思ったより苦戦しそう。

では、次回もよろしくです。

旧地獄の古明地さん・第一回(1)

さとり「……っていう、話を考えたんだけどお……」

お燐「現実逃避している場合じゃないのさ。捕まってるのはあたいたちのほうなのさっ!!」

幻想郷のある山の中。古びた山小屋の一室に、さとりとお燐は囚われていた。背中合わせに両手両足を縛られて、その上から二人まとめて縄でくくりつけられている。ついさっきまでは脱出を試みていたものの、どうにも二人の息が合わず始めの三角座りの体勢が立ち上がるのに失敗して、完全に横倒し状態になっていた。起き上がるのも億劫になったのか、今はその状態でただ助けが来るのを待っている。そして、あまりにも暇をもてあましたさとりが、新しい話のネタを考えた、とか言い出して、先の話になって今に至る。

お燐「大体、骨かんちよーってなんですか？ あたいはそんな下品なことをする妖怪じゃないのさ」

さとり「ごめんごめん」

お燐「やるなら指を一番奥までねじ込んで、ぐりぐりするのさ」

さとり「……かえって下品よ？ それどころか卑猥よ」

弾幕を操って縄を切ろうとも考えた。しかし、彼女らを捕らえた

無法妖怪曰く、首に取り付けた機械が彼女らの霊力を封じ込め、人間と同じ状態にしてしまうらしい。言葉の通り、霊力は完全に封印され、弾幕は愚か、妖怪としての能力すらも使えない有様だ。お燐に至っては猫に戻ることもすらも出来ない状態になっている。

お燐「あー・・・ りゅうの旦那は助けに来てくれないのかなあ・・・」

さとり「あの人に期待するほうが間違いよ。今日は白玉楼に行くって言うてたし。夕方まで帰らないわよ」

お燐「頼れるのはお空だけかぁ・・・。でも、あの子はきつと気づかないのさ」

さとり「おとなしくあの人が地霊殿に帰ってくるのを待ちましょう。私たちがいないと気づけば、すぐに助けに来てくれるでしょうし」

お燐「そ、そんな悠長に待つてられないのさ」

お燐の背中がじんわりと湿っているのが分かる。さとりは、どうかしたの？ と彼女に尋ねた。冷や汗をかきながら、お燐は呟く。

お燐「おしっこがしたいのさ・・・」

さとり「ええっ!?!? ちょ、漏らさないでよ!?! 私も動けないんだから! 巻き添えは嫌よ!?!」

お憐「だつたらりゅうの旦那が早く来てくれることを祈るのさ・・・」

さとり「だ、誰でもいいから！ 早く助けに来てーっ！！」

お憐決壊まで、あと五時間・・・。

その頃、白玉楼では妖夢が彼 古明地を出迎えていた。彼は普段、能力の練習がてら恐竜と人間の中間のような姿をしているが、ここに来たときはさすがに自らの能力をとき、人間の姿に戻る。こうしないと幽々子が屋敷に上げてくれないのだ。

妖夢「いらっしゃい、りゅうさん。さ、あがってください」

古明地「ああ。お邪魔します」

妖夢「久しぶりの冥界はいかがですか？ 以前来たときより、随分暖かくなつたでしょう。まあ、物騒なのはどこも同じですけどね」

古明地「最近は有力な妖怪をさらう無法妖怪がいるらしいから、白玉楼も気をつけたほうがいいぞ」

誰に向かって物を言っているんですか、と妖夢は笑う。それもそ

うか、と古明地も言う。 応接間は素通りして、直接妖夢の部屋まで通された。白玉楼の間取りには相応しくないような小さな部屋だ。押入れと仏壇と刀を飾る台があるだけの狭い部屋だった。

妖夢「ささ、どうぞ」

古明地「随分扱いが悪いんだな。 たった一人の従者だったのに」

妖夢「いえ、私がこの部屋を選んだのです。幽々子様も、どうせ二人暮らしなんだからと、もっと広い部屋を使ってもいいと言ってくれたのですが、どうにも気が引けてしまって」

妖夢「まあ、狭いほうが何かと手元が近くて便利ですし」

古明地「それが本音か？」

妖夢「・・・朝が寒いと布団から出たくないじゃないですか。冬場はいつつも布団の中で着替えます」

古明地「・・・案外横着なんだな」

妖夢「案外は余計です。私だって半分とはいえ、人間の女の子なのですから」

部屋の真ん中に座布団を出して、妖夢はお茶を持ってきますね、

と言って出て行った。座布団に座り、今日は何をするつもりなのだろうか、と考える。だが、その直後、慌しく戻ってくる妖夢。

妖夢「た、大変ですっ！ りゅうさん！」

古明地「なんだ？ 何かあったのか？」

妖夢「だ、台所に・・・お化けがいます！」

古明地「・・・冥界なんだからそこら中に居るだろう？」

妖夢「それは幽霊です！ お化けとは別物です！」

妖夢「助けてくださいいよーっ・・・私、お化けとか無理ですー」

古明地「半分お化けみたいな奴がという言葉じゃないなあ・・・」

+ + +

妖夢「はー・・・いや、しかし。お化けの正体があんな巨大な物体とは思いませんでしたねえ・・・」

古明地「あれは妖怪なのか？ それとも虫なのか・・・？」

妖夢「さあ・・・よく分かりませんが。とりあえずひと

段落しましたし、今日も手合わせ、お願いできますか？」

古明地「ああ。自分にとってもいい訓練になる。喜んで付き

合おう」

お燐決壊まで、あと四時間半……。

白玉楼に季節はずれの桜の花びらが舞っている。妖夢の話によると、冥界には永遠に咲かない桜と永遠に咲き続ける桜があるらしい。この花びらは、そこから風に乗って飛んできているのだという。そんな優雅で幻想的な白玉楼の庭。西行妖の目の前で古明地と妖夢は対峙する。妖夢は鞘から刀を抜かず、いつでもいいですよ、と自信ありげに言う。

古明地「まさか、居合い抜きでも見せるつもりか？」

妖夢「そのまさかです」

古明地が走った直後、妖夢は重心を低く構え直し、息を吐く。

妖夢「抜刀『刹那』っ!!」

まさに刹那。すれ違う一瞬で抜刀し、一撃で古明地の懐に刃を入れる。驚く彼に、見事、と呟く。妖夢の腕をその一瞬で掴み、斬られる前に押さえ込んだのだ。妖夢はいったん身を引き、そして構え直す。

妖夢「次は外しません」

古明地「ああ。そのつもりで来い。こつちも次は攻めに転じるつもりだ」

拳を握り、古明地が構える。それを確認した妖夢はすぐさま攻撃に入った。下段に構えた刃を真横に振りかざし、風を起こす。そして次の瞬間、これまで縦に放ってきたその一撃を横になぎ払うように打ち込んだのだ。

妖夢「断迷剣『迷津慈航断』っ！！」

波紋の如く広がる魂の刃。その膨大なエネルギーは冥界を振るわせる。まさに全てを断つ、妖夢渾身の一撃だ。古明地は周囲を見渡し、その弾幕の回避できる場所を探す。しかし、放ったエネルギーは一切の密度の漏れもなく、それどころか放った妖夢自身からも未だに離れていない。

そう、この弾幕は妖夢を中心に放たれた大弾がそのまま巨大化しているようなもの。単発、巨大、隙間なし。どこを取ってもスペルカード戦としてはルール違反だが、これは妖夢の純粹な勝利を望む信念だ。これを攻略し、今日も妖夢に勝つ。古明地は跳躍し

て唯一、この一撃の影響がない場所に飛び込んだ。それは妖夢の振るった刀の内。弾幕の中心部にして、妖夢が立っているその場所だ。

妖夢「え・・・？ わっ！！」

中心に立つ妖夢に飛び込み、一気に彼女を地面に叩きつける。刀がからん、と乾いた音を立てて地面に落ちた。そして、それと同時に弾幕も消滅する。古明地の勝利だ。

幽々子「あら、昼間っからお盛んで」

たまたま縁側を通りがかった幽々子が二人を見て言う。確かに幽々子の言うとおり、古明地が妖夢を押し倒しているようにしか見えない場面だった。違います、と妖夢が叫び、刀を拾い上げる。衣服についた土を払い、妖夢はまた負けてしまいましたね、と苦笑いした。

妖夢「最近負け癖がついてるなあ。と、いうよりも噛ませ犬にされているような気が・・・」

幽々子「ヤムチャしゃがって・・・」

妖夢「幽々子様、何か言いましたか？」

幽々子「お茶の時間よ。早く戻ってきなさい」

幽々子は手に持った紙袋をこちらに見せてくる。

幽々子「今日は紫が外の世界のお菓子を差し入れてくれたのよ。

古明地くんも一緒にどうぞ?」

古明地「では、遠慮なく」

妖夢「じゃあ、休憩にしましょうか」

お燐決壊まで、あと四時間……。

旧地獄の古明地さん・第一回(1) (後書き)

シリアス話はさとり様の妄想のお話でしたとさ。
だって今作は恋愛モノだし。

そして、お隣の下半身の危機。果たして、お隣の膀胱が限界を迎える前に古明地は助けに行けるのか・・・？

では、次回もよろしくです。

旧地獄の古明地さん・第一回(2)

お燐「つ、辛いのさ……」

さとり「だ、大丈夫よ、お燐！ 気をしっかり持って！ あなたならきつと出来るわ！」

お燐「む、無理なのさ……我慢は体によくないのさ……」

さとり「我慢して頂戴！ 私の体にもあなたの精神的にもよくないから！ あー、そうだ。こういうときは別の話をして気を紛らわせましょう！」

お燐「じゃあ、あたいが何か話をするのさ」

さとり「あら、何かしら？」

お燐「……こういう状況で出た場合は、お漏らしっというべきなのか、羞恥プレイっというべきなのか、気になるのさ……」

さとり「漏らさない前提の話をしなさいっ!!」

無法妖怪に捕まっているというのに、すっかり二人はそんなことを忘れていたのだ……。

お燐決壊まで、あと二時間……。

妖夢が昼食の支度に追われている頃、古明地は幽々子と話をしていた。大して話題もないのだが、取りとめもない会話が続く。

幽々子「妖夢つてば小さいときに先代の妖忌さんの刀で遊ぼうとして、指を詰めかけたのよ。その後、妖忌さんにこっぴどくしかられて大変だったわあ」

幽々子「子供の頃はお転婆でねえ・・・今じゃすっかり女の子らしくなっちゃって。もう少ししたら、いい婿でも探してあげない」と

古明地「婿、ねえ・・・」

幽々子「古明地くん、立候補しておく？」

古明地「何でそうなるんですか」

幽々子「白玉楼の庭師と地霊殿の従者が結婚とか楽しいと思わない？」

古明地「思いませんよ、別に」

幽々子「むー・・・私は楽しいと思うんだけどなあ」

その時、昼食を作り終えた妖夢が戻ってくる。何の話をしていたんですか、と訊ねる妖夢に、あなたがどんなお婿さんを連れてくる

のかなあって、と幽々子が言う。すると妖夢の顔がみるみる赤くなり、何を言ってるんですか、と怒る。

妖夢「私は生涯、幽々子様にお仕え致します！ 嫁に行くなどありえません！」

幽々子「じゃあ、婿を冥界に連れてこなきゃダメねえ……」

妖夢「そういう問題じゃありません！」

幽々子「あなたは私と違って半分人間なんだから、人並みの幸せを得る権利があるのよ。お嫁さんになって、素敵な旦那様と幸せに暮らすのが幸せだと思うけどなあ」

妖夢「私は幽々子様と一緒に居るほうが幸せです」

幽々子「あ、それは大丈夫よ。もし、あなたが結婚してお嫁に行っても同居するから」

妖夢「主人が従者の家に同居するって……どんな二世帯住宅ですか！」

幽々子「こうしちゃ居られないわね。さっそく河童に頼んで

冥界に二世帯住宅に建てないと」

妖夢「その前に！ 私は嫁に行きませんっ!!！」

お燐決壊まで、あと二時間半……。

地霊殿。今日は主も従者もなく、ペットたちだけが留守番をしている。そんな場所に、一人の妖怪がやってきた。

ヤマメ「こんにちはー。さとりさん居ますかー？」

お空「あ、知った顔だ」

ヤマメ「知った顔か知らない顔かしか判断できないのかしら？」

お空「さとり様なら居ないよ。どっか出掛ける」

ヤマメ「出掛けてるのは知ってるよ。まだ帰ってきてないのかな？」

お空「うにゅ」

お空は頷く。ヤマメはおかしいなあ、と呟く。

今朝、さとりを見かけ、声をかけたときに昼前には帰ってくると言っていたのだ。だからこの時間に来たというのに、随分と帰りが遅い。

ヤマメ「うーん……。困ったなあ。今日は旧地獄商店街の集会有一些の……お昼までに帰ってくるようにあれほと言った・

・・・」

ヤマメははっと何かに気づく。

お空「どつたの？」

ヤマメ「そうだよ。さとりさんが約束を忘れるなんてありえない。・・・何かあったんだよ、きつと」

お空「まさか。さとり様に限ってそんなこ・・・」

ヤマメ「・・・どうかした？」

お空「そうだった。今日はお隣も一緒なんだ！ きつと二人だけで楽しいことをして寄り道しているに違いない！」

お空「こつしちやいられないよ！ 私も混ぜてもらつんだから！」

ヤマメ「ある意味ポジティブで助かるわ・・・あなた」

きつとお空の考えは違う。悪いほうで寄り道をしているのだ。最近、地上の治安は乱れる一方で、むしろ地底のほうが安全だからと鬼が住む地底の町や地霊温泉郷に逃げ込んでくる人間すらいるそうだ。そんな地上に行ったのだ、さとりを知らない愚か者が彼女をさらった可能性は高い。

ヤマメ「しょうがない。助けに行こうか」

お空「あ、あんたはいいよ。病気振りまくし」

ヤマメ「人をウィルスみたいに扱わないでくれる？」

こうして、地底の異色コンビがさとりを助けるために動き出したのである……。

お燐決壊まで、あと二時間……。

そして、舞台は昼食後の白玉楼に戻る。幽々子が不意に思い出したかのように言ったのだ。

幽々子「あなたの主人、無法妖怪に捕まってるんですってね」

古明地「……はい？」

妖夢「幽々子様、不謹慎な冗談はやめてくださいよ」

幽々子「嘘じゃないわよ。紫が言ってたんだもの。妖怪の山の山岳地帯にある『無法の槍』で、無法妖怪に捕まってる古明地さとりを見たって」

そついつと信憑性が一気に高くなる。それどころか、あの人のことだ、真実なのだろう。どうして早く言ってくれなかったんですか、と妖夢が幽々子に怒る。

幽々子「だつてえ、今思い出したんだもの。 歳をとると忘れっぽくなつて嫌ねえ」

妖夢「はあ……もういいです。 古明地さん、助けに行きましょう って、もういないし!」

古明地は白玉楼を飛び出すと、すぐさま姿を変える。 空を飛び、一気に冥界を脱出すると妖怪の山のほうめがけて一直線に飛んでいく。その途中、空を飛んでいた天狗を見かけ、声をかける。

古明地「そこのあんた! 無法の槍つてどこにあるんだ?」

はたて「えっ? あ、あれ……? あんた、さっき……」

古明地「知ってるのか知らないのかどつちだ!」

はたて「し、知ってるわよ! 妖怪の山の周囲にある山の中でも、一番突き出ている禿山が無法の槍じゃないの! あんたも知ってるでしょう!」

古明地「分かった。ありがとう!」

再び空を飛び、一気に無法の槍を指す。なんだったのかしら、と古明地をいつまでも見ているはたて。そこに文がやってきた。

文「何をやってるんですか。あなたが協力取材を持ちかけてきたのでしょうか？ 私だけ先に行かせて、自分はおいしところ取りなんて許しませんよ？」

はたて「うわっ！ また出た！」

文「なんですか？ 人を妖怪みたいに……って、妖怪でしたね」

はたて「アンタ……実は双子だったりとかしないわよね？」

文「……はあ？」

旧地獄の古明地さん・第一回(2) (後書き)

ついに古明地さんの本領発揮。

幻想郷最速は伊達ではないのです。古明地さんもそれは同じってコトネ。

はたして、無事に時間内にたどり着けるのか……。

そして、今更ながら地霊殿を出発したヤマメたちに意味はあるのか・
……？

次回もよろしくです。

旧地獄の古明地さん・第一回(3)

ようやく地上に出てきたお空とヤマメ。しかし、二人のいる場所など知るはずもなく、適当に空をさまよっていた。

お空「うにゅー……どこにいるのか分かんないよ……」

ヤマメ「おかしいなあ……さとりさんなら霊力で分かりそうなもんだけど……」

周囲には一切、さとりとお燐の気配はない。こうなってくると逆に怪しい。どうやって妖怪の霊力を隠しているのか。

ヤマメ「とりあえず、無法妖怪のアジトにでも行ってみる？ どうせ犯人なんてあいつらだろうし」

お空「えー。絶対違うよ。きつとお城みたいな場所でお楽しみなんだよ」

ヤマメ「バカなこと言ってないでさっさと行くわよ。……ここから一番近いのは、無法の槍ね……」

方向を変え、無法の槍方面に飛んでいく二人。だが、そこで待っていたのは見張り役の天狗。

椛「あなたたちっ！　ここは立ち入り禁止です！」

ヤマメ「……だってさ、お空ちゃん？」

お空「どーしても通してくれない？」

椛「ダメです！　この先の空域は無法妖怪が出て危険なんです！」

ヤマメ「ふうん……ケンカ売るんだね？」

刹那、ヤマメは周囲に蜘蛛の糸を展開し、椛の逃げ道をふさぐ。そして、勢いよく放った小さな針で椛の頬に傷を入れた。

椛「な、何をするんですか！　武力行使をしたってダメなものは

」

ヤマメ「かかったよ。あなた」

椛「な、なんですか？」

ヤマメ「私特製の破傷風。　普通なら潜伏期間が七日くらいあるけどね。私の菌は特別さ、体に入れてから一日で死ぬくらいに強化されてる」

椛「……そ、そんな脅しには乗りませんよ!？」

ヤマメ「でもさ、少し口を開けるのが億劫になってこない？」

椀「・・・！？」

ヤマメ「その次はね、表情筋が固まって気味の悪い笑顔になる」

椀「・・・」

ヤマメ「それが終わったら、次は全身。筋肉が硬直して、あちこち痙攣を始める。そうになったらもうお終い。後は死ぬだけ」

椀「・・・そ、そんな、冗談ですよね？」

ヤマメ「冗談なものかい。私はそういう病気をたくさん持つてる妖怪なんだから。はやく永琳先生のところに行かないと、手遅れになるかもね」

椀「こ、今回だけは見逃してあげます！！」

ヤマメ「素直でよろしい」

周囲を囲んでいた蜘蛛の巣を取り払い、ヤマメとお空は先に進む。

お空「ねー。さっきの話ってホント？」

ヤマメ「嘘よ。確かに破傷風には感染させたけど、そんなに危険な奴じゃないよ。竹林の医者なら簡単に治しちゃうレベルの奴さ」

さつさと二人を助け出しに行きましようか。二人は無法の槍を指して飛んで行く。

しかし、彼女らはまだ知らなかった。この時、既にこの話は終わっているということを……。

時は遡り、お隣決壊まで、あと一時間半……。

妖怪の山を取り囲む山岳地帯に一つだけ突き出した岩山がある。

無法の槍、とその場所は呼ばれていた。かつて強大な力を持つて無法妖怪の力を幻想郷に知らしめた雷獣の一派の拠点であったその場所は、今も尚、無法妖怪の一大拠点として幻想郷一危険な場所とされている。この周辺地域の空は天狗たちによって嚴重な警戒がされ、空中からではこの槍に近寄ることすら許されないのだが、今の古明地はそれを容易く突破する。

何せ今の彼の姿は射命丸文なのだ。見張り番の下っ端天狗が彼女に意見できるわけもない。幻想郷最速を自称する彼女の姿と能力の恩恵を受け、わずか三十分という短時間で無法の槍の麓までたどり着くことが出来た。地面に着地し、彼は変身を解く。

古明地「捕まってるのなら……いる場所はどこか監禁できる場所か」

再度、姿を変えて周囲の様子を探る。人を隠すのにちょうどいい場所を探していると、少し山を下った場所に古びた山小屋を発見した。

古明地「あそこだな」

その刹那、真上から何かが降ってくる。とつさに真横に飛び回避する。落ちてきたのは巨大な岩……のような人型の妖怪だ。

無法妖怪「白狼天狗　　この無法の槍に迷い込んだのかい？」

古明地「……」

無法妖怪「協定違反は殺してもいい約束だったよなあ」

巨大な岩の妖怪は大きく跳躍し、再び古明地に向かって落下する。どうやら岩で出来た体は歩くのには向いていないらしい。不意打ちでない以上、古明地にとっては容易いもの。今度は余裕で回避し、すぐさま反撃に移る。

無法妖怪「この俺様と戦おうつてのか！？ 下っ端天狗の分際で！」

古明地「・・・誰が天狗だった？」

無法妖怪が拳を振るう刹那、古明地は変身を解き、瞬時に姿を普段の恐竜人に戻す。そして振るった拳を砕く、鮮やかな一撃。

無法妖怪「貴様っ！？ な、何者だ!？」

古明地「それは自分も知りたいところだ」

続けざまに後ろ回し蹴り。無法妖怪の体を吹き飛ばし、無法の槍に叩きつける。あれでしばらくは動けないだろう、と彼はさっさと山小屋を目指して歩き始めた。

その頃、古明地を追いかけて無法の槍を目指していた妖夢は、突如として何者かに引つ張り上げられて、気づけば無法の槍がすぐそばにある風景にたどり着いていた。驚く妖夢だったが、すぐさまそんなことをしたおせっかいな賢者に感謝する。

妖夢「今日はお菓子もいただきありがとうございましたし、今度何かお礼の品でも持っていかないと・・・」

だが、今は目の前にいる妖怪を何とかしなければいけない。額に第三の瞳を持った妖怪だ。妖夢を見、これはかわいらしいお客様だと笑う。

無法妖怪「あの妖怪が連れてきた『覚』といい、今日は楽しいお客様が多いようだ」

妖夢「やはり、さとりさんはここにいますね？」

無法妖怪「だとしたら？」

妖夢「殺してでも、奪い取るっ！」

妖夢の抜刀術が無法妖怪を一撃で切り払う。しかし、切れたのは彼の残像。本物は刹那に妖夢の背後に迫る。手に持っていた小太刀で、妖夢の腕に傷を入れた。

無法妖怪「なめてもらっては困ります」

妖夢「くっ……」

無法妖怪「次は腕だけではすみませんよ？」

妖夢「それはこっちの台詞です」

まさか、何の反撃も成されていないと思っていませんか？ 妖夢の言葉に、無法妖怪は笑う。

無法妖怪「負け惜しみは、地獄でするんだなっ！！」

残像と二手に別れて跳躍し、同時に妖夢に向かってくる。どちらかが本物でどちらかが偽者だ。偽者を切ったら最後、無法妖怪に殺されるだろう。だが、妖夢は一切恐れることなく叫ぶ。

妖夢「逝く地獄など、私にはないっ！！」

妖夢はそのどちらを斬ることもなく、彼の攻撃をその身で受け止める。だが、妖夢の体は一瞬で消滅し、その刹那、無法妖怪の体を蹴り上げた。

妖夢「断迷剣『迷津慈航斬』っ！！」

空中に打ち上げた相手の体を叩きつけるように放たれる剣の弾幕。体勢が崩れている最中でのこの一撃を回避する術など無く、無法妖怪は地面に叩きつけられた。

妖夢「目が三つもあるくせに半霊と私の区別もつかないようでは、まだまだ未熟ですね」

さて、と妖夢は呟いて刀をしまう。確かその昔、この辺にとある女性が隠れ住んでいたはず。その女性の住んでいた小屋ならば、さとりを隠しておくにはちょうどいいはずだ。彼女はひとまず、その小屋を探して歩くことにした。

お燐決壊まで、あと一時間……。

さとりとお燐は、いっばいっばいだった。

お燐「も、もう無理なのさぁ……。」

さとり「大丈夫！ あなたはまだがんばれるっ！……。」

お燐「さとりさまー……。さとり様はペットのあたいを愛してないんですかい……？」

さとり「何を言ってるの！ 愛しているからこそでしょうっ？」

お燐「愛しているのならペットのおしっこ一つや二つでガタガタ言わないのさっ！ 気にしないから思いっきりやっちゃいなさいて言ってくれるのさ……！」

さとり「何をバカなことを……！ そんなことして、後で後悔するのはあなたのほうなのよ……！」

お燐「さとり様のことなんて知らないのさっ！ あたいはもう限界

を超えてしまっているのさ！」

さとり「ち、血迷ってるんじゃないわよ！ あーもうバカらしくなってきた！ もうお燐のことなんか知らないわよ！ したいなら勝手になさい！ ただし、こんな場所で粗相をするようなペットは家に入れてあげませんからねっ！！！」

お燐「別にいいのさ！ 野良でもあたいはやっていけるのさ！！！」

二人の争う声が聞こえる。山小屋の裏手にたどり着いた古明地は窓から二人の様子をうかがう。二人はどうかやら無事のようにだ。窓を割って中に入ろうと拳を握ったその刹那、後ろから声がする。

無法妖怪「よく来たな。待ってたぞ」

古明地「お前は・・・？」

そこに立っているのは頬に傷のある長髪の男。随分と熟練した格闘家のような。只者ではない雰囲気を漂わせているが、どこことなく妖怪という雰囲気ではない。

無法妖怪「俺はここら一帯の無法妖怪の長さ。お前みたいな強い奴が来るのを待っていた」

古明地「そんなことのために、さとりをさらったのか？」

無法妖怪「その通りだ。さあ、俺と戦えっ！！！」

その瞬間、古明地の拳が無法妖怪の腹に直撃する。その速さはこれまでとは違う。やるな、と無法妖怪も反撃に入る。だが、その攻撃は全てかわされ、そのたびに反撃を食らう。

無法妖怪「な、なんて強さだっ！」

無法妖怪の後ろに少女が一人走ってくるのが見える。古明地はまったく、と呟いて、とどめの一撃を再び彼の腹に見舞う。それと同時に、少女も刀を抜き、無法妖怪の後頭部に打ち込んだ。

妖夢「や　っ！！！」

古明地「無茶しやがって・・・」

二人の同時攻撃に、無法妖怪は完全に気絶していた。古明地は妖夢を見て、どうしてここに来た、と訊ねる。

古明地「ここは無法妖怪の拠点だぞ？　危険なんだ。それなのに、どうして？」

妖夢「りゅうさんが心配だったからです。
メですか？」

そんな理由じゃダ

古明地「いや・・・別にいいけど」

古明地は小屋の正面に回り、中に侵入する。警戒はしたものの、小屋の中には誰もいないようだ。どうやら、今回の事件は外で倒れている妖怪が一人でやったものらしい。なんであんなのに捕まったのか、と古明地はため息をつく。

そして、二人がいる部屋の扉を蹴破り、二人の姿を確認する。

古明地「さとり様、お燐。

迎えに来たよ」

お燐「りゅうの旦那！ 早く縄を解いて欲しいのさ！」

古明地「妖夢、頼めるか？」

妖夢「はい。

縄を切りますよ」

縄を切った刹那、お燐は飛び退く。だが、さとりは一向にその場を動かない。具合でも悪いのか、と古明地はさとりに近づこうとするが、その時、さとの異変に気づく。

お燐「決壊したのは・・・さとり様のほうなのさ」

さとり「・・・・・・・・ばかぁ・・・大きな音なんて立てるからぁ・・・・・・・・」

長い監禁状態に、尿意を我慢していたのはお燐だけではない。結果、扉を蹴破ったその音に驚いたさとりが、お燐よりも早く決壊したようである。泣きながら、さとりはいっそ殺して、と呟く。

お燐「粗相をするような悪いペットは家に入れられないですよね、さとり様？」

妖夢「き、着替え、天狗から借りてきます!」

古明地「あー・・・さとり様？」

さとり「・・・・・・・・帰る。 おうち帰るうっ!」

まるで駄々っ子のように泣きじゃくるさとりを見て、お燐と古明地は顔を見合わせ苦笑い。こうして、今回のお使いも無事完了したのだった。。。

どんどはね。

おまけ

地霊殿に帰宅した古明地たち……。

古明地「ただいまー……って、あれ、お空は？」

お燐「いないのさっ！ きつとさらわれたのさ！」

さとり「大変！ すぐに探しに行きましょう！」

そして、物語はお空搜索編へ……続かない。

次回予告

さとり「ちょっと付き合いなさい」

それは、何てことない主人と従者の散歩になるはずだった。

文「ふふふ……『主と従者、禁断の熱愛!』いいスクープになり
そうですねえ……」

本日のお使いは、幻想郷最速の天狗を捕まえて、カメラを奪い取
れ。

さとり「あんな写真がばら撒かれたら、私死ぬ!」

古明地「さて……天狗に化けてもスピードは同じ。なら、どうす
ればあいつより早くここを抜けられるか……?」

次回、旧地獄の古明地さん・第二回。

リクがあれば続く。

旧地獄の古明地さん・第一回(3) (後書き)

噛ませ犬が大量に出てくるお話でしたとき。

個人的にはヤマメの無意味に終わったカリスマがお気に入り。

犯人の無法妖怪が一体誰だったのかは、まあ、分かる人は分かるかと。

そして、さとりとお燐に取り付けられた機械の正体はいずれ分かるかと。

構想は比較的楽に仕上がって、執筆に苦戦し、結果お気に入り作品に仕上がった。

まあ、小説としての出来はイマイチな気がするけど……。

では、次回もよろしくです。

虚言の王が幻想入り・序章（前書き）

さて、第二期新規枠の最後を飾るのはまたしても難易度の高いリク
エスト。

果たして、上手いこと書けるのだろうか・・・。

では、今回もよろしくです。

虚言の王が幻想入り・序章

フランドール・スカーレットという少女がいた。少女は生まれながらその力を危険視され、物心ついた頃から暗い地下室に閉じ込められていた。暗闇の世界の中で、ずっと彼女は外から運ばれてくる食事を口にし、与えられたおもちゃで遊び、ずっとそうして過ごしてきた。彼女もそれが幸せなのだと思っていた。それ以外の世界を知らなかったから。不幸も、幸せも、そんな言葉があるということすら知らず、彼女はそれで満足だった。

だが、そんな世界を塗り替えた女性がいた。その女性は、フランドールを外の世界へ解放し、彼女に幸せの意味を教えてしまった。そして、それから彼女は変わった。ずっと満足していた暗い地下室も、食事も、おもちゃも、何もかもが気にならなくなった。少女は何もかもを拒絶し、全てを壊しつくした。

その罰として、少女は幾重にも巻かれた鎖に縛られて、地下に封印された。自由に動くことすら奪われた少女は、その瞳から血の涙を流し、呟く。

どうして私に、外の世界を教えたの？

知らなかったら、ずっとそのままでいられたのに。

そして、再びその封印が解かれたのは、数年前のこと。あの時、フランドールを開放した女性に瓜二つな女性だった。少女を鎖の封印から解き放ち、その女性は少女にこう尋ねた。

フラン「　　幸せって、なんだと思う？　　ってね。　　バカバカしい質問だったわ」

真夜中の紅魔館。フランは楽しそうに笑いながらベッドの上のクッションをぎゅっと抱きしめている。しかし、不意に何か気になったのか、窓のほうに向かって外を見た。

????「何か見えるのかい？」

フラン「　　花火」

今日は人間の里で花火大会があると誰かが言っていたか。言っていなかったか。さて、どちらにしても花火を見に行こう、とフランの手握る。

フラン「　　アキラ？」

瑛「　　それで？　　なんて答えたの？」

フランは内緒、と言いながら窓を開け放ち、夜の空を舞う。それを追いかけて、俺も空を飛ぶ。

フラン「さあ、花火を見に行こう」

瑛「まったく・・・花火ごときで騒いで・・・子供だな」

フラン「アキラが見に行こうって言ったんじゃない!!」

瑛「そうだっけ？ 知らないなあ」

フラン「もー・・・面倒な性格してるなあ」

紅魔館を抜け出す二人を別の窓から見ている吸血鬼が一人。紅茶を運んできたメイドが、よろしいのですか、と訊ねる。

レミィ「いいの。年に一度の花火大会だもの。野暮な真似はしないわ」

咲夜「と、言いますと?」

レミィ「・・・この私の口から色の話を聞きたいのかしら、あなたは」

咲夜「ふふつ、聞くだけ野暮のようですわね」

花火の音は騒々しくて不愉快だわ、とティーカップを手にしながら外を見つめる。それを見て、咲夜はもう一度笑う。

レミィ「何がおかしいの?」

咲夜「大丈夫ですわ。お嬢様にもそのうち、いい相手が見つ

かりますよ」

「それじゃ、さしつか

虚言の王が幻想入り・序章（後書き）

しよっぱなからラブいムードで始まる今作。

しかし、本編ではこうはいかない・・・はず。

「何がしたいかわからない」というこれまで以上に難易度の高いリクだったゆえ、構想も漠然としてるので、どう転ぶかはウチにも分からない・・・。はたして、この先どうなっていくのやら。

では、次回もよろしくです。

虚言の王が幻想入り・第一回（1）（前書き）

フリーダムさを前面に押し出そうと模索する今作。

その結果がこうなった。

果たして、二人は無事に花火大会会場までたどり着けるのか・・・？

では、本編をどうぞ。

虚言の王が幻想入り・第一回（1）

STAGE：1 『バカとクシャミと大妖精』

花火大会会場を目指し、瑛とフランは空を飛んでいた。湖の上は異常気象の夏とはいえ、夜である以上、ある程度は冷える。フランはぶつぶつと文句を言いながら瑛の周囲をくるくる旋回するように飛んでいた。

フラン「もー。寒いのは嫌いなのにー」

瑛「なら帰るか」

フラン「それはもつと嫌いー」

周囲になにやら不思議な物体が飛んでいる。なにやら弾幕を放っているようだが、フランには関係ない。自分や瑛に向かってくる弾幕を全て見極め、そして「目」を握り潰す。一気に弾け飛ぶ弾幕たちはさながら花火のよう。

しかし、それを面白くないと睨む、一匹の妖精の姿があった。

チルノ「だーっ！ 何なのあいつ！ あたいたちの弾幕を消すなんてルール違反じゃないー！」

大妖精「ま、まあまあ・・・チルノちゃん。落ち着いて」

チルノ「こうなったらあたいが直接弾幕を叩き込むしかなさそうね」

大妖精「チルノちゃん、それは危ないよ！ あの人、あのお屋敷の吸血鬼なんだよ!？」

さるの「そんなこと関係ないね。なぜならあたいはさいきよーだから」

大妖精「作者さんにまでバカにされてるよ・・・チルノちゃん」

チルノ「いつくぞーっ！ あたい、参上っ!！」

大妖精「わーっ！ だからダメだっばーっ!！」

大妖精の静止などお構いなくチルノはフランたちの前に立ちはだかる。フランはそれをじっと見つめ、瑛に任せたと、言う。

フラン「だつてつまらなさそう。アキラがやって」

瑛「えー。俺だつてやりたくないよー。こんな見た目も雰囲気も寒い奴とー。絶対いゝんな意味でケガするじゃん」

チルノ「ちょ、ちょっと待て！ あたいが分からない話をするな」

フラン「・・・だつてさ」

瑛「自分がバカにされてるのも分かってないのか。果てしなく残念だ」

チルノ「むきーっ！　なんかよく分かんないけど、あたいのことバカにしてるな！」

許さん、とチルノは早速一枚のスペルカードを取り出した。

チルノ「パーフェクトフリーズ！」

色とりどりの弾幕が周囲を埋め尽くす。綺麗だなあ、と周囲に見とれている瑛。その後ろで、瑛に当たりそうな弾幕を片っ端から潰していくフラン。実質的二対一の状態だが、チルノはまるで気づいていない。弾幕が白く変わり再び動き出す頃には、すっかり弾幕の数も半分以下になっていくというのに、である。

チルノ「な、何で当たらない!？」

瑛「安全地帯。

だから『あんち』っていつのか？」

フラン「誰がその安地を作ってあげてると思ってるんだか・・・」

チルノ「くそっ！ だったらこっちも切り札だ！ 最強必殺技を受けるがいい！！」

チルノの周囲に冷気が溜まる。そしてそれは巨大な剣状の氷柱となり、チルノの右手に装備される。それに伴って、彼女の体にも氷が纏わり付き、まるで氷の鎧を身に纏う騎士のような姿に変身した。

チルノ「どおだあ！ 名付けて、氷剣『アイスソード』！」

瑛「殺してでも奪い取られそうな名前だね」

フラン「あなたの言葉の意味が分からないわ」

チルノ「くらえーっ！！」

フラン「要するにあの剣がなければ無力なわけだ じゃあ、さ
くっ壊しちゃ へくちっ！！」

冷気にやられたのか、フランがくしゃみをする。その際、ついつい手を握ってしまう。そして、その刹那、彼女の手の上にあった「目」の持ち主は 。

瑛「ひでぶっ！！」

フラン「アキラーっ！！！」

瑛の体が大爆発し、そのまま湖に落下する。さすがのチルノも呆気にとられてその場を動かない。そして、冷や汗をたらたらと流しながら、フランは言う。

フラン「てへっ、やっちゃったー」

チルノ「仲間殺しておいてその言い草かーっ！！！」

さすがのチルノもツッコミ役になるしかないこの状況。いや、大丈夫だよ、とフランは人差し指を付き合せながら、冷や汗を流して目を泳がせている。

フラン「ほら、あいつ丈夫だしー。粉々になってもきつと帰ってくるっていうかー。まず生きてる。うん」

チルノ「そういうことは人の目を見て言え！」

フラン「ってわけでー。お邪魔しましたー」

チルノを素通りし、さっさと湖を抜けて行くフラン。チルノに駆け寄る大妖精は大丈夫だった、とチルノを心配そうに見つめている。

チルノ「大ちゃん……あいつ……」

大妖精「うん？」

チルノ「……とんでもない、バカだ」

大妖精「……は、はい？」

チルノにまでバカと呼ばれるあの吸血鬼の妹……。そんなのを相手にしてよく生きて帰れたものだ、とチルノを微妙に尊敬する、大妖精だった……。

湖を抜けて、花火大会会場を目指すフランと瑛。フランはすっかり飽きたのか、空中を背泳ぎするようにふわふわと飛んでいる。

フラン「アキラー。遅いー」

瑛「じゃあ先に行けば？」

フラン「それじゃつまんない」

二人が飛んでいるのは妖精の森上空。周囲には弾幕を放って悪戯する妖精たちが飛び交う。それらを一切躊躇することなく倒していくフラン。その前に、一匹の妖怪がやってきた。

ルーミア「食べてもいい人類なのかー？」

フラン「食べてもあくが強くておいしくないと思っわよ」

瑛「それは失礼な。せめて渋くてまずいと思っつとってくれ」

フラン「えー。私、渋いの嫌いー」

ルーミア「・・・食べてのいいのかー？」

フラン「あ、食べるならさっさとしてね。急いであるから」

瑛「またオイラが戦うのかー？」

フラン「口調、うつってる」

ルーミアの弾幕も先と同じようにフランが破壊して道を開ける。しかし、今度は瑛が勝手に動くせいで、破壊する弾幕がなかなか定まらない。

フラン「ちょ、アキラ！ 動かないでよーっ！」

瑛「動かないと当たっちゃうだろ？」

フラン「動いたら当たるんだっての・・・まさかホントに私が弾幕消してるのに気づいてない？」

ルーミア「ナイトバード！」

ルーミアのスペルが放たれる。単純明快なスペルゆえ、さほど苦戦もないだろうと思ったその矢先。瑛が一気にルーミアに接近した。

フラン「ちょ！ 死ぬ気！？」

ルーミア「おー。接近戦なのかー？」

瑛はすつと彼女の背後に回り、そして何を思ったか、頭のお札を外したのだ。

瑛「頭にゴミついてるよ」

ルーミア「おー。ありがとう」

フラン「ば……ばか……」

もう私は知らないわよ、とフランはさっさと先に進んでしまう。なんだ、と瑛が頭に疑問符を浮かべたその刹那、ルーミアの雰囲気が一変した。

EXルーミア「我が封印を解いたのは貴様か……？」

瑛「ふーいん？ あ、もしかしてこのゴミ？」

EXルーミア「……ふ。私を最も恐れていた人間が、この私の封印を解くとはな……長き時の中でこの私の存在を、恐怖を、戦慄を、殺戮を忘れるとは……真に人間は愚かな生き物だ」

瑛「ん？ お嬢ちゃん雰囲気変わったね。髪切った？」

ルーミアの手には漆黒の大剣。そして、刹那、その刃を瑛に向ける。

EXルーミア「そうだな。では、貴様の髪も切ってやるぞ。
その首ごとな」

瑛「ぎゃあああああっ！！！」

フラン「私、知らないっど。・・・逃げるが勝ちよねー」

遠く、瑛の断末魔の叫びが聞こえる。しかし、フランは一切振り返ることなく、花火の見える方角へと飛び去るのだった・・・。

虚言の王が幻想入り・第一回(1) (後書き)

ゲーム風に展開される今作。イメージとしては、ランダムに動く瑛さんに当たりそうな弾幕をフランを操作して消していく変則的な弾幕回避ゲーム。

まだ序盤のステージなので二人も安定したボケを見せてくれます。それにしても、Wボケになってしまつてであろうこの状況は結構書くのが難しい。個人的イメージでは瑛さんよりはフランのほうがまとまなので、二人きりの場面では基本的にフランがツツコミです。

しかし、難易度も少しずつ上がっていくはずなので、こんな適当かましていたらすぐさまゲームオーバーなわけ。

今回はSTAGE3とSTAGE4……。果たして誰が登場するのか……。

では、次回もよろしくです。

虚言の王が幻想入り・第一回(2) (前書き)

フリーダムの難しさを思い知る今作。

自由に書けば書くほど内容がなくなるんだ・・・。

ここからどうやってオチをつけるのか、もはや私にも分からない・・・。

では、お楽しみください。

虚言の王が幻想入り・第一回(2)

STAGE：3 『幻想郷に健康保険はありません』

花火大会会場に向かって飛んでいくフランと瑛。その途中、人間の里へと続く道に、小さな屋台を発見した。

フラン「あー、夜雀屋台だ！ 私、あそこの八目鰻食べてみたかったんだよねー」

瑛「そんな時間はないのさー」

フラン「ぶーぶー」

仕方なく無視して先に進む。すると、人間の里の上空になにやらこちらを待ち構えている姿がある。一体なんなのかと思いつつも、一切警戒することがないのは余裕の表れか、はたまたただの馬鹿なのか。

フラン「邪魔するならばっ壊すよっ」

慧音「邪魔をするのは貴様らのほうではないのか？」

慧音「今日は夏祭りだ。出来れば争いなく、平和的に過ごしたいものだが……」

フラン「私は平和的」

慧音「有りようで平和の逆に行く奴が何を言っても、ただの戯言にしか聴こえないな。さて、その言葉をどこまで信用していいものか」

瑛「信用してくれて大丈夫よ」

慧音「黙れ痴れ者！　そもそもお前が一番信用できんわ！」

瑛「痴れ者って……そりゃご丁寧にどうも」

慧音「褒めとらん！」

慧音がスペルカードを取り出した次の瞬間、周囲に巻物状の書物が現れる。それを手に取り開くと、そこから竜が飛び出した。

慧音「幻暦『夢想伝承』！」

フラン「人間の創造の産物を具現化するスペルかしら？」

慧音「ふむ……どうやら勘はいいらしいな」

瑛「おー。竜だ。すげー」

慧音「あっちはあっちでたいしたタマだな・・・まったく」

慧音の周りを飛んでいた竜は、彼女が正面に手をかざすと同時にフランのほうに向かっていく。竜の周囲には雷が落ち、まるで雷の化身のよう。フランは大きく旋回して回避し、一度地上に降り立った。瑛は雷の直撃を受けたらしく、地面に頭から落下した。

フラン「あー。こりゃ首の骨でも折れたかもね」

瑛「うん。折れたね。こりゃ間違いなく即死した」

瑛はそう言いながら慧音に怒る。

瑛「こらーっ！俺は健康保険入ってないんだから怪我したら大変なんだぞーっ！」

慧音「そういうことはまともにケガを出来る体になってから言え！
なんで十メートル以上落下したのに無傷なんだ貴様は！」

馬鹿らしくなってきたぞ、と慧音はイライラを募らせる。再び空に上がるフランは、気にしないほうがいいよ、と苦笑い。

フラン「あいつ、私のほうがずっとまともなんじゃないかって思う

くらいのおかしな奴だから」

慧音「それもおかしな話だな・・・まったく」

巻物をしまい、慧音はもついいぞ、と言う。どうしてと問うフランに、どうでもよくなったからだ、なんてぶっきらぼうに返して彼女に背を向けた。

フラン「ありがとう」

慧音「礼を言われる筋合いはない。ただし、この先は弾幕禁止だぞ」

フラン「はい」

飛び去る二人を横目で見て、慧音はため息をつく。

慧音「やれやれ、あんな連中よりももっと面倒な奴のお出ましか・・・」

再度、巨大な巻物を手にし、一直線にフランたちを追いかける者にそれを振るう。

慧音「聞いたことがある。かつて、賢者と呼ばれた幻想郷の妖怪たちの中に、暗黒に染まり悪鬼となった妖怪がいたと」

EXルーミア「邪魔をするか。」

命はないぞ?」

慧音「それはこちらの台詞だ。せつかく皆が楽しんでいるのを邪魔立てするのならば、容赦はしない」

花火が夜空を照らす中、二人の戦いが今、幕を開けた・・・。

STAGE：4 『Gは光りません』

フラン「鴨が葱しょって〜、やってくる〜。あ〜やってくる〜」

瑛「前衛的な歌だね」

フラン「どこかで聞いたんだよね、この歌」

人間の里を過ぎ、草原のほうにやってきた。花火が見えるのは、さらにその先の方角だ。真っ暗な夜の草原はそこらじゅうで虫が騒いでいてやかましい。フランはこのやかましい虫の音を歌なんか歌

って紛らわせている。

そこに、うるさいな、と物臭そうにやってくる妖怪。うるさいのはそっちでしょう、とフランが言い返す。

リグル「いいかい？ 虫の音は求愛の音色なんだ。種の繁栄のために必要な、大切なものなんだ。それをキミたちが邪魔をするから、私のところに苦情がきたんだよ」

フラン「それで？ どうするつもり？」

リグル「意味無く騒がしいその歌を黙らせるのが、私の仕事だよ」

真つ暗だった周囲が鈍い光で照らされる。まるで蛍の光のようなその弾幕は気づけばフランと瑛を包囲して逃げ道を奪い去る。

フラン「っ!？」

リグル「じゃあ、しばらく大人しくしててもらおうか!？」

瑛「えー、黙ったら死んじゃう生き物だぜ、オイラ」

フラン「あー。じゃあ私も」

リグル「随分余裕だね。この包囲の中で」

そりゃもちろん、とフランは笑う。そして手をかざし、弾幕の「目」を集める。だが、それを握りつぶす前に瑛が暴拳に出た。

瑛「動いてないと死んじゃう生き物なんだぜーっ!!」

フラン「だーっ！ 動いたら死ぬっての！」

予想通り全身で弾幕を受け止めた瑛は力尽きて草原に落ちる。フランは、何回死ねば気がすむのかしら、と地面に落ちた瑛を拾いに向かった。

瑛「何で蛸すぐ死んでしまうん？」

フラン「今死んだのはあんたでしょ」

瑛「嘘だー。死んだら生きてないじゃん」

フラン「死んだのに生きてるからおかしいんでしょーうが」

どういつ体してるの？ とさすがのフランも呆れている。そんなこと知ってたらもっとキャラが安定してるはずさ、となぜか得意げな瑛。

瑛「さー。気を取り直してゴツキー少女をやっつけようー！」

リグル「だ、誰がゴキブリだ！ 私は」

瑛「虫にはやっぱり定番のバルーンー！」

そう言いながら、どこかで見たことあるような筒を取り出して地面に置いた。リグルもそれが何なのか察したのか、それだけは勘弁して、と瑛のほうに向かってくる。

リグル「それやったらこの辺一体の虫たちが全滅するから！ それだけはやめてーっ！」

瑛「じゃあ、ピンポイントを攻撃できるキン ヨール！ これは一家に一台あると助かりますよー」

リグル「それも一緒！ お願いだから駆除しないでーっ！！」

泣いて頼むリグルを見て、フランももうやめようよ、とか言い出した。しかし、瑛は何故かやめる気配など一切なく、いろいろと害虫駆除の道具を取り出し続ける。

瑛「アース エットもいいですねえ・・・見てくださいこの美しいボディーっ！ 色鮮やかなカラーリングですねー」

リグル「うわーん！ 私が悪かったからもう許してーっ！！」

フラン「ちょ、ちょっとアキラ・・・もう許してあげようよ」

その言葉を聴き、しょうがないなあ、と瑛は言う。そして、不意にそろばんを取り出して何かを数え始めた。

瑛「さすがにもう勘弁して欲しいと言うメーカーさんからのストッブが入りましたので、今回の害虫駆除セットは全部で三十商品！ さらに今日はなんと利益還元祭と言うことで特別サービス！ DV

Dをお付けしてお値段そのまま！ 四百円での提供です！ 送料と分割金利手数料はもちろん紅魔館が負担いたします！ ただし、限定20セットですので、お早めにお申し込みください！ 電話番号は 「

フラン「ちょっと待てーっ！ いつからそんなお話になってたの！？」

瑛「あれ？ STAGE4はじゃぱねつとアキラの時間にしていいって先週の打ち合わせでフランが言ってたじゃん。・・・あれ、だから虫がやってきたんじゃないの？」

フラン「打ち合わせて何！？ そんなのやった覚えなし！ あいつが出てきたのは偶然で、ネタ振りでもなんでもない！」

瑛「おっかしいなー。じゃあ、あの打ち合わせはなんだったんだろっ」

フラン「どこの脳内会議かしらね。 なんか途中から台詞回しが社長っぽいと思ったのよ・・・」

リグル「・・・」

フラン「あー、もう泣かないですよー。ホラ、冗談だってさ」

リグル「・・・」

フラン「あ、あれ・・・？ もしかしてー、怒ってらっしゃるっ？」

リグル「お前らはーっ！！！」

怒ったリグルは一気にフランに飛び掛る。しかし、彼女は軽く回避し、その矛先は瑛に向けられた。

瑛「しょうがないなー、片づけしますか　　って、ぎゃああああん！」

フラン「自業自得ね・・・」

これは助けてあげない、とフランもさっさと先に進む。もうすっかり夜も遅い。花火大会が終わってしまう前に、会場へ行かないとリグルに頭をかじられている瑛を放置して、飛び去るフランなのでした・・・。

虚言の王が幻想入り・第一回(2) (後書き)

フリーダムからの脱却を図ろうとして、ちょっと話をマジメ方向に修正しようだなんて無茶をしたSTAGE3。修正しないほうが面白そうなのでそのまま突っ走ったSTAGE4・・・。
ちよっとずつ暴走レベルが上がっていく瑛さんのせいか、フランがマジメになりつつある。

そして、花火大会の終了時間が迫る・・・。

次回もよろしくです。

虚言の王が幻想入り・第一回(3)

FINAL STAGE 『虚言の王』

花火大会会場 博麗神社はすっかり人気も無くなり、霊夢は地上で片付けにおわれる中、空では花火を打ち上げていた鬼が打ち上げの真っ最中。あくせくと酔っ払いの介抱をしている霊夢を見下ろして、空中に浮遊し、酒を飲んでいる。そこに、フランはやってきた。

フラン「あれ、花火はおしまい？」

もう終わったよ、と宙に浮く鬼 伊吹萃香が答えた。見に来たのか、そりゃあ残念だったな、と悪戯に笑う。

フラン「じゃあ、もっかいやってよ」

萃香「無茶を言うない。 花火つてのは花火職人が時間をかけて作り上げるものなんだ。そう簡単に出来るわけないだろ？」

フラン「・・・そう。じゃあ、しょうがないね」

萃香は来年またおいで、と手をひらひらと振ってフランに背を向けるようにして空に寝転がった。だが、その刹那、フランから放たれる一撃。紙一重で回避し、彼女は笑う。

萃香「なんだ。素面のくせに酒乱かい？」

フラン「花火が無いなら、あんたが花火みたいに吹き飛ばせばいいじゃない」

萃香「　　は。こりゃとんでもないワガママお嬢さんだ」

両手に炎を宿し、笑う。

萃香「ちよつとばかり、世の中の厳しさってものを教えてやるうかい!?」

フラン「禁忌『レーヴァテイン』っ!!」

剣と拳がぶつかり合う。暗い夜空に再び差した光に、霊夢は空を見上げ、面倒なことしちゃって、とため息をつく。

霊夢「こりゃ、またでっかい花火が打ち上がりそうね」

その頃、瑛はリグルに食べられていた。もちろん物理的な意味である。リグルは怒りのおもむくままに瑛に噛み付いてすっかり原形を留めないほどの姿にしまっていた。見た目は可憐な少女のようでも、力は妖怪のそれに等しいということだ。

ようやく落ち着いたのか、我に振り返りの前にある惨状を見て、やつちやった、と後悔した。

リグル「でもまあ、やつちやったものはしょうがない。どこか人気のない場所に埋めてあげようか・・・」

瑛「埋めるなら関東ローム層にして」

リグル「残念だけど、そんなものは幻想郷には　　って、生きてる!？」

瑛「死んでないなら生きてるよ。これ常識」

リグル「死んだでしょ！　なんで生きてるの!？」

瑛「さあて、おじさんにはよく分かんないなあ」

リグル「もしかして、関わっちゃいけない人だった・・・？」

瑛「おお、フランがない？」

リグル「あの子なら一人で博麗神社に向かったよ」

瑛「それは死亡フラグだぜ」

リグル「私にゃあんたの一挙一動が全部死亡フラグに見える」

瑛「そんなことはないぜ。　例えば集団で攻撃して土煙が上がって辺りが見えなくなったときに言う『・・・やったか?』の台詞

ぐらい生存フラグ」

リグル「確かにそれは生きてるね。
で怖い」

でもあんたなら死にそう

瑛「よっしゃ、待ってるフラン！ この世界チャンピオンのオレ様が悪党なんぞ一ひねりだーっ！！」

リグル「それは死亡フラグでも生存フラグでもなくて役立たずフラグだーっ！！」

飛び去る瑛を呆れ顔で見送り、なんだったんだ、とため息つく。
気づけば、地面に落ちていたはずの害虫駆除セットたちは見る影も無く、どこにもなくなっていた。辺りを見回し、もう一度、空を飛ぶ瑛を見た。

リグル「あいつ、一体なんだったんだろう・・・」

+ + +

フラン「・・・」

萃香「なんだ、たいしたことのない奴だな。吸血鬼の妹はとんでもない力を使っつて話はどこにいったんだい？」

力尽きて落下を始めたフランの頭を掴み、萃香は言う。レーヴァテインはおるか、破壊する能力すらも軽々とかわし、萃香はフランを圧倒したのだ。その戦いは一方的かつ鮮やかだった。地上にいる霊夢も呆気にとられるほど、である。

フラン「・・・あ・・・」

萃香「お迎いのメイドが来るまで、少し頭を冷やすかい？」

そう言い、神社の裏にある池にフランを投げ込む。そこに瑛はやってきた。

萃香「客が多いな。花火大会の後だったのに。それとも、お前があいつの迎えかい？」

瑛「・・・フランはどこだい？」

萃香「あいつなら、裏の池にいるよ。さっさと持って帰ってくれ。私は疲れてるんだ」

瑛「違う」

萃香「なに？」

瑛「フランをいじめたのはどこの誰だい？」

萃香「あー、そりゃ私か？ 私に言ってるのか？」

瑛「・・・そうか。なら、お礼を言わなくちゃね」

萃香「いって別に。まあ、こんなことであいつのワガママが治るとは思えないけ
」

萃香は気づく、あの男が持つ違和感に。どうやら、物事の触れてはいけない領域に触れてしまったようだ。そして、その違和感は、一瞬で、その世界を包み込む。

瑛「幻嘘『トリックワールド』」

萃香「・・・こりゃ驚いた。霊力の欠片も感じさせなかつたくせに、幻想郷全てを、お前の世界で塗り替えたって言うのかい？」

瑛「フランが受けた痛みを、全部返すよ」

萃香「面白い。出来るものなら、やってみやがれっ！」

間合いは一瞬で詰められる。さらに萃香は一步踏み込み、瑛の腹に炎を宿した拳を打ち込む。だが、そんな攻撃はまるでなかったかのように、瑛は萃香をすり抜けたのだ。

萃香「・・・幽霊!？」

いや、さっきまで実体があったはず」

瑛「……………」

今度は間合いを開け、遠距離から弾幕を放つ。だが、それらは瑛に近づくとび曖昧になり、そのまま彼をすり抜けた。何が起こっている。萃香は舌打ちし、攻略する手段を探す。だが、彼は一向に動きを見せない。まるでそこに在る置物のように、微動だにしない。彼の姿がうつすらとぼやけている。一体何のつもりなのか、まるで動かない。痺れを切らした萃香は全身に炎を宿し、彼に突進する。

萃香「鬼道第八『鬼道大砲』っ！！」

全身の炎は一瞬で萃香の両手に集約され、瑛の目の前で放つ。巨大な炎の弾は一瞬で彼を包み込んで爆発し炎上する。だが、それでも彼は動かない。

萃香「お前……………なんなんだよ……………」

瑛「……………いち……………に……………さん……………」

不意に、瑛が数字を数えだした。一体何の始まりだろうか、と警戒するが、まるで何かが起こる様子も無い。

そして瑛が十を数えた時。ようやくこの世界が動き始める。

萃香「……………っ!？」

不意に背後から何かに刺され、腹から血が滲む。振り返るが、背後には何もいない。真正面には、未だ動かない瑛がいるだけ。それ

意外は全て、何もかもが変わり果てた世界のままだ。

再び攻撃。今度は物理的な衝撃だ。側頭部に直撃し、角が折れる。続けざまに足を襲う斬撃。足を斜めにそぎ落とすような、鋭い一閃。避け損ね、太ももの肉を剥ぎ取られる。

萃香「くそっ……正体も知れないくせに、なんて攻撃だよ」

萃香「でも……何もせずに死ねるかってんだ」

既に血まみれの体。萃香にとってそれは有利な状況だ。鬼がその身に炎を宿すのは、燃えやすく莫大な力を生み出すその血によるもの。全身に力を込め、そして、一気に炎を宿す。

萃香「十三門『鬼道崩拳』」
っ!!」

瑛「終わりだ」

萃香渾身の一撃は瑛にぶつかる前に捻じ曲がる。大きく進路が逸れた鬼道崩拳はそのまま博麗神社に落ちていく。霊夢も、さすがにこれはまずいと感じたらしく大量のお札を持ち、一斉に空にはら撒いた。

霊夢「神霊符『博麗ノ守』」
っ!!」

霊夢によって密かに仕掛けられていた、神社を守るための結界だ。

これまで幾度と無く神社を破壊されたため、その対策にと用意した、強力な霊撃符である。符に込められた霊力だけでなく、土地にある全ての霊力と魔力を巻き込んで放出する膨大なパワーは、見事に萃香の攻撃を相殺し、その勢いは瑛にも迫る。

霊夢「バカやってないで、さっさと帰りなさいっ!」

瑛は手をかざす。すると、博麗ノ守の勢いが一瞬止まったではないか。驚く霊夢だったが、刹那、一気に飲み込まれ、瑛の力は瞬間に消えて行く。そりゃそうよね、と霊夢は息をつく。

霊夢「こいつは神社の敷地でしか使えない上に、一回使ったら三日は土地を休める必要があるけれど、威力は桁違いなもの。これが効かない妖怪なんているはず無い……?」

瑛「……」

霊夢「嘘、でしょ……?」

確かに力は消えた。だが、刹那に再び世界を丸ごと塗り替えたのだ。そこには、まだ彼の作る異質な空間が残っている。

瑛「……さあ、とどめだ」

霊夢「萃香! 逃げなさい!」

その言葉も虚しく、それと同時に萃香の体は黒い闇の刃に切り裂かれる。

霊夢「萃香　　っ！！」

瑛「・・・」

霊夢「アンタ・・・よくも萃香を・・・って、あんた・・・それ」

戦う相手を失った空間はより異質さを増して行く。振るわれる刃は空を裂き、放たれる衝撃は大地を揺るがす。そのどれもが攻撃する対象を見失い、さまようように意味の無い攻撃を繰り返す。

霊夢「・・・力が暴走している？　まさか、自分で力をコントロールできていないの？」

瑛「・・・」

そして、その攻撃はついに戦うべき相手を見出した。

それは、他ならぬ瑛自身。

漆黒の刃が体を切り裂き、衝撃が彼を砕く。彼を止めようと、霊夢は夢想封印を放つものの、瑛の体はこちらからの干渉を受け付けない。当然、攻撃も押さえ込めるはずもなく、ただ、彼が死ぬのを見ているだけしか出来なかった。

ついに力尽き、彼の体は地に落ちた。なんて、無様な死に様だろうか、と霊夢は思う。そして、呟く。

霊夢「なんてバカな人……」

瑛「バカではない。　　せめてヴァカとお呼びなさい」

霊夢「……生き、てる……？」

瑛「死んでないんだから生きてるのは当たり前」

萃香「あー……あれ？　　何があっただんだけ？　　死んだよ

うな気がしてたんだけど……」

体を真つ二つにされたはずの萃香も何故か無傷で目覚めた。一体
なんなのよ、と霊夢は彼を見、そして身震いする。

霊夢「さっきまでののは全部、嘘だったっていうわけ……？」

瑛「……何の話？」

萃香「本人は忘れちまうみたいだね。都合のいい能力だー」

霊夢「あーっ！　博麗ノ守使っちゃったじゃない！　あれ、一回使
うと三日も使えないのよ!？」

瑛「だから、何の話？」

萃香「もういいから、フラン連れて帰りな」

瑛「はい」

霊夢「いいわけないでしょ！ このお札作るのにどれだけ時間がかかると思ってるのよ！ 後で紅魔館に請求するからね！」

萃香「はいはい。いいからいいから」

ぎゃあぎゃああと霊夢が瑛に叫ぶ中、一切気にも留めずに裏の池に向かう。月明かりに照らされた池の真ん中に浮いているフランは、ようやく来てくれた、と力なく微笑んだ。

フラン「花火大会、終わっちゃったって・・・残念だったね」

瑛「んー？ いや、まだ終わってないと思うぜ」

フラン「嘘ばかり」

フランを池から引っ張り上げる瑛。彼は笑いながら言う。

瑛「たまにはホントのことも言っと思っよ、多分」

EPILOGUE 『妖怪以上、人間未満』

フラン「　　ってわけで、アキラは私を置いてどこかにいったの」

ひとまずの応急処置を終え、救急箱をしまう。すっかりボロボロのフランはこれまでのいきさつを姉、レミリアに報告していた。

あの後すぐ、瑛はフランを置いていなくなった。フランは仕方なく一人でここまで戻ってきたのだという。レミリアは女の子一人ちゃんと送って帰れないなんて、マナーがなってないわ、とすっかりご立腹だ。

レミィ「まったく・・・大怪我して帰ってきたと思えばあいつは一緒にいないし・・・咲夜が夏風邪で倒れてクソ忙しいって時に・・・」

フラン「あれ？　出かける前までは元気そうだったじゃない？」

レミィ「無茶してたのよ、あの子。風邪が吸血鬼にうつらないことをいいことにずっと隠しててこじらせたみたい。アンタが出掛けた後、すぐにぶっ倒れたわよ」

美鈴「と、いうわけでしばらくメイド長を務めることになりました」

レミィ「却下よ。　さっさと門番に戻りなさい」

美鈴「私の出番これだけ!？」

レミィ「あるだけマシと思いなさい」

とぼとぼと去っていく美鈴は放っておいて、レミリアは外を見る。

レミィ「まったく、フランに怪我させておいて、あのバカはどこに行ったのかしら？」

フラン「アキラはそういう人だからしょうがないんだよ。瑛をどこかにつなぎとめておくなんて出来ないもの。気まぐれでどこかに行っただよ、きつと」

レミィ「今度会ったら叩きのめして　　って、あら・・・あれは？」

フラン「どうかしたのお姉さま？」

「こっちにいらっしやい、とレミリアが手招きする。窓に向かい、フランは外を見た。

フラン「わあ・・・花火だーっ！！」

レミィ「姿を消したのはこのためか・・・。やれやれね」

フランはホントだったんだ、と笑う。いつも適当なことや嘘ばかり言っているくせに、今日はちゃんと本当のことを言ってくれた。彼女はご機嫌な笑顔を浮かべ花火を見、呟いた。

フラン「アキラって・・・変な奴」

+ + +

妹紅「・・・花火？ 花火大会の時間は終わったたる？」

人間の里の入り口では、ルーミアを文字通り尻に敷いた妹紅が空を見上げていた。苦戦していた慧音に変わってルーミアを退治した彼女は今、慧音が霊夢を連れてここに来るのを待っている。近くにあった夜雀屋台から夜食にと買ってきた八目鰻を食べながら、妹紅は鼻歌交じりに花火見物だ

妹紅「今夜はいい夜だ。 お前もそう思うたる？」

慧音「妹紅ーっ！」

妹紅「慧音！ こっちはもう片付いてるぞ！ さっさと封印して、花火大会の打ち上げといこうじゃないか」

霊夢「まったく・・・あつちもこっちも大騒動ね、今夜は」

そして、博麗神社の境内では瑛と萃香が花火を打ち上げている。

萃香「あーもう・・・なんで私が・・・」

瑛「ほらほら、まだたくさんあるよー」

萃香「どこから仕入れてきたんだ、こんな数の花火・・・」

瑛「道端に落ちてた」

萃香「嘘付けーっ!!」

その日の花火は、夜明けまで続いたという。

幻想郷に現れた謎の男、瑛。彼の正体は彼自身にも分からない。だがこの事件以降、彼は幻想郷中にその存在を知られることとなる。鬼を殺し、博麗の巫女の力をも超える幻想を作る正体不明の力は、まさしく妖怪を凌駕する幻想の王であると。

この物語は全てが謎に包まれた男、瑛と、吸血鬼の妹、フランドールの少し奇妙な日々のお話である……。

どんどはね。

パチエ「あら、これは・・・」

紅魔館の図書館最奥に眠る、一冊の本。

そこに描かれていたのは、この世界を創世した三人の少女の物語。

だが、こいつらにはそんなこと関係ない。

瑛「いいかつ！ 魚釣りの極意は振り返らないことだ！」

フラン「はいっ！ 師匠！」

次回、虚言の王が幻想入り・第二回。

リクがあれば続く。

虚言の王が幻想入り・第一回(3) (後書き)

ついに瑛さん初勝利。

でも、各ステージで一回は死んでいるという・・・。

瑛さんは書いてて楽しかったけど、なんか魅力的に書けないなあ・・・。
個人的イメージではもうちょっと不思議系な感じだったんだけど・・・。

そして、第二期の新規幻想入り枠は今回で終了。

次回以降はエピソードリクエストで募集した前期の幻想入り住人のお話を書いていきます。

では、また次回。

序章「それは静かにやってきた」（前書き）

ついに第二期も折り返し。

今回からは第一期の登場人物たちの続きエピソードとなります。

本来なら、割り込み投稿を使っていく予定だったんですが、これやると章管理がずれ込んで修正が大変なので、従来どおり投稿していきます。

シリーズ機能のリリースがもうちょっと早ければこんなことにはならなかったのに……。今更だともんどくさすぎて修正する気も起きない……。

では、ちょっと愚痴りましたが、今回もよろしくです。

序章「それは静かにやってきた」

この夏、地底に新しい町が完成する。

地底都市と呼ばれているその場所は、現在正式名称募集中。地底はその工事作業員たちが大勢やってきて賑わっていた。地霊温泉郷ももちろんその影響を受け工事関係者たちの宿泊施設として大忙しだ。

しかし、そうなつてくると問題も発生する。

夕方ごろ、入り口にある受付で頼杖ついて暇そうにあくびするお隣。お風呂場が妙に騒がしくなったので、様子を見に行くことになった。

お隣「どうかしましたかー？」

お客「あ、お隣ちゃん、ちょうどよかった。また、こいしち

やんが……」

お隣「あちゃあ……またですか？」

そう、無意識を使って突如として現れるこいしのせいで、露天風呂は大変なことになっていた。混浴なので別にこいしが勝手に入ってきてても問題あるわけでもないのだが、問題は彼女のほうにある。たいてい姿を現すのは、のぼせきって能力がコントロールできなくなった頃だからである。突如として現れ、突如としてぶっ倒れる少女の登場に、初めて来たお客さんはもちろんのこと、連日のようにやってくる地底の妖怪たちさえも驚かされるのだ。

お隣「ちよつと失礼しますよー。こいしさまっ！ のぼせるまでお

風呂に入ったらダメだって何度言えば分かるのさ!」

こいし「あー・・・お隣だ。服着てどうしたの?」

ぼーっとした表情でお隣を見るこいし、どうしたのじゃないのさ、とこいしの体を湯から引つ張りあげ、こいしさまを回収に来たんです、と言っ。

こいし「それはごくろろつさまー・・・」

周囲がざわざわと騒がしい。混浴の露天風呂とはいえ、たいてい入っているのは男がそんなこと気にしない年齢の人だからである。

こいしのように見た目の若い女性は、それとなく熱い視線が注がれるもの。お隣はそれを悟ったのか、周囲を睨みつけ威嚇すると、こいしを抱きかかえて風呂場を後にする。

脱衣所は男女分かれているので安全地帯。ひとまず体を拭いて、浴衣を着せてからロビーのほうまで行き、椅子に座らせておく。ほつと一息つき、そしてこいしを睨む。

お隣「こいしさま! 入浴時間中は入っちゃいけないとあれほど言っただじゃないですか! それとも、さとりさまとの約束も忘れちゃったんですか!?!」

こいし「覚えてるよー。やだなあ、私をボケ老人みたいに言わないでくれる?」

お隣「覚えてても守れないなら意味無いのさっ!」

「ごめんごめん、と口では言っているものの、まるで反省の色が無いこいし。暑いのか、胸元をはだけさせてだらしく座っていると、お隣が鋭い目でこいしを睨みつける。さすがのこいしも姿勢を正した。

まったく、今度からはお仕置きでもしないとダメかなあ、と腕組みして考えるお隣。そこに、すみませーん、と声がした。

お隣「おっと、受付空にしてたのさ。 こいしさま！ そこに
いてくださいね！ 動いたらお尻で爪とぎするのさ」

こいし「それはめちゃくちゃ痛そうだね」

入り口で待っている少女のほうに向かい、お隣はお待たせしました、と微笑みかける。

お隣「ようこそ地霊温泉郷へ、なのさっ！」

「ご予約の名前を伺うのさ、と営業スマイルで対応するお隣に、少女は同じように笑顔で答える。

にとり「河城にとり。 それと、セラフだよ」

この少女の登場が、我と地霊温泉郷の運命を大きく変えていくことなど、今はまだ誰も知らない……。

序章「それは静かにやってきた」（後書き）

第三期から正式追加予定の地底都市が完成するまでを描く予定。そして、第二回以降からは普通に他の幻想夢住人も登場します。住んでるエリアが近い人とかは出番も多くなりそうな予感……。

そして、こいしちゃんの貴重なセクシーシーン。健全小説なので描写は省いてますが、浴衣の下はもちろん……。いや、あえて語るまい。

……というわけで、次回もよろしくです。

第二回(1) 「温泉革命だっ！」

その頃、我 藤村来栖は、地霊殿の掃除をしていた。温泉のほうで忙しいというのに、何をのんきな事をと思うだろうが、それは違う。皆が温泉郷の方にいるため我はあえて一人残ってこちらで掃除しているだけなのだ。決してさとりに温泉のほうに出てくるなと言われているわけでもないし、あんたの存在自体が営業妨害よ、と罵られたわけでもないの、その辺は勘違いしないよう。

しかし、地霊殿は広い。一人で掃除するのは無茶だったか、と今更に後悔する。手に持った箒を床に置き、ため息一つ、座り込む。

来栖「しかし、今更になって投げ出すのは我のなけなしのプライドに」

「???」来栖さん。どうかされましたか？」

びつくりして顔を上げると目の前に爬虫類めいたものがあるではないか。さらにびつくりして飛び退く。

来栖「な、なんだ・・・古明地くんか・・・どうかした？」

古明地「厨房のほうが落ち着きましたので、少し休憩です」

彼はさとりが拾ってきた人間で、我が来る以前から地霊殿にてさとの従者として働いていた。そして、忙しくなってきたからと言う理由で先日から地霊温泉郷でも働いている。記憶喪失らしく、古明地という名前もさとりが与えたものだ。しかし、いつ見てもこの姿には慣れない。今は明かりのある廊下だったからいいものの、深

夜に暗がりで見かけたときの恐怖といたら・・・。

古明地「それで、来栖さんは掃除ですか？」

来栖「ああ、そうなんだけど・・・あまりの広さにちょっと絶望してたト」

古明地「では、残りは自分が引き受けましょう」

そう言いながら箒を手取る、いや、まさかそんなことは出来ないと、我はすぐに箒を取り返した。なぜかと問う彼に、当たり前だろ、と言い、壁に手をつけて大きなため息。

来栖「我が一番下つ端なのに古明地くん掃除させたって知れたら、さとりがなんて言うか・・・」

古明地「下つ端とか・・・カリスマ神格がびっくりするほど削がれてますね・・・来栖さん」

来栖「もう敬語とか使わなくてもいいさー。だって我、妖怪に使役されてるようなもんだしー。もう神もへちまもねーよー・・・」

古明地「ほら、いじけてないでさっさと終わらせましょう。手伝いますから・・・」

本当に古明地くんはいい人だ。神性を奪われた我を神として扱ってくれるのはここでは彼だけである。普段からあの恐竜と人のかけあわせみたいな格好で歩くのはやめてほしいが・・・それを差し引いても十分いい人である。

さとり「・・・何をしているのかしら？」

彼女さえいなければ、の話であるが。

古明地「さとり様。 来栖さんの掃除の手伝いをしていました」

さとり「そんなこと命じた覚えはないわ。 休憩時間はまだ半分残ってるわ。こんなところに無駄な労力使ってないで、しっかり休みなさい」

古明地「・・・しかし」

さとり「言い訳無用。 部屋に戻りなさい」

古明地「は」

すまない、と我に呟いて古明地くんは部屋に戻ってしまつ。そう、彼の親切心も、彼女の命令には逆らえないのだ。さて、どうしたものかしらね、と腕組みしてじつとこちらを見据えるさとりは足元に転がる雑巾を手にとって、ため息一つ。

さとり「いい？ 掃除するのはね、綺麗にするためにやるのよ？ ただ水で濡らした雑巾を這わせて水を散らせばいいってものじゃない」

来栖「・・・」

さとり「それとも、あなたは雑巾一つまともに絞れないのかしら？」

来栖「……すみません」

さとり「別にいいわよ。最初からやり直せばいいだけなものね」

頼むわよ、と雑巾を手渡しし、さとりはさつさと温泉郷に戻っていく。ドアの裏で待機していたのか、古明地がすぐに戻ってきた。

古明地「相変わらず、来栖さんには手厳しい」

来栖「……最近は特にそうだよ。仕事が多くてイライラしてるんじゃないかな？」

古明地「来栖さんが来てから数日はとても楽しそうにあなたの話をしていたのですが、最近はいつも陰口を言っていますよ」

来栖「……陰口？　どんな？」

古明地「自分の口からはとても言えることはありません」

時間までは手伝いますよ、と再び箒を手取る古明地くん……
一体何を言われてたのか、ものすごく気になるではないか……。

どうにか掃除が一段楽ししたのは、深夜になってからだだった。温泉郷の方に出ると、すっかり人気もなくなっている。ロビーでは、こいしがうたた寝していた。

来栖「何でこんなところで寝てるんだ……？」

部屋まで運んだほうがいいだろうか、と考えていると、お燐がやってくる。やあ、と何故かご機嫌に挨拶してくる。

お燐「おー、来栖さん。お風呂の掃除がまだなのさ」

来栖「これからやるよ。それよりこれ・・・」

お燐「あ・・・忘れてたのさ。じゃあ、これはあたいが運んでおくから、来栖さんはお風呂掃除をお願いなのさ」

お燐はどこからか商売道具を取り出してこいしをそれに乗せると、さつさと地霊殿のほうに向かう。死体を運ぶ台車に主人の妹を乗せるかね、普通・・・。

入浴時間の終了まではまだ時間がある。誰かいるかも知れないし待っていてようと、ロビーの椅子に腰掛けてしばらく待つ。すると、案の定、女性用の脱衣所のほうから妖怪が一人出てきた。何故か裸で。

来栖「なっ、ちょ、ちょっとお客さん！」

????「これは・・・私に対する挑戦だっ！」

青い髪の妖怪は濡れた体のままで廊下を走っていく。あれをあのまま放置したら危険だと本能で悟った我は、ダッシュでそれを追う。何かを探すように受付、売店、大宴会場、厨房へと走り回り、そして、ついに目的のものを見つけたのか、それに飛び掛った。

「???? さとりーっ!」

宴会場の片付けの最中か、積み重ねた皿を持って廊下を歩くさとり、体当たりする勢いで背後から抱きついて、そのまま前に回って仰向けに押し倒した。さとりが持っていた皿が床に落下して砕け散る。な、なんなのよ、と自分の上に馬乗りになっている青い髪の妖怪を睨みつけ、さとりは顔を真っ赤にした。まあ、裸の少女が突然背後から抱きついてきて押し倒したのだ。赤面するのも頷ける。

さとり「あなた・・・河城にとり? な、なによ・・・なんなのよ!」

にとり「このままじゃ、地霊温泉郷はダメだ!」

さとり「・・・はい?」

にとり「これじゃ地上の温泉宿と変わらない! お客は呼べないよ! だから、私の改築案で地霊温泉郷をもっとよくしよう!」

さとり「と、突然何を言ってるの? っっていうか、離れなさい! 私の目をそんな汚いトコに当てるんじゃないーっ!」

にとり「温泉革命だっ! 私とセラフでこの温泉をスーパー温泉に改造してやる!」

さとり「分かったから離れなさい! 目を・・・そんなトコでぐりぐりするなーっ!」

我はにとりと呼ばれた青髪の妖怪の髪を掴んでさとりから引き剥がし、なんなんだ、こいつは、とさとりを問う。

さとり「ああ、来栖。助かったわ……。彼女は河城にとり。地上の河童で、地霊温泉郷の設計担当者」

にとり「はーなーせーっ！ 髪引っ張るなーっ」

来栖「ああ、すまない」

掴んでいた髪の毛を離し、さつさと服を着ろ、と怒る。しかし彼女は動じないのか、ああ、これは失敬、とへらへらしていた。

にとり「でさー、さとり。やっぱこっちのB案にしておいたほうがよかつたんじゃないかなーっと思ってさー。今更建て直すのは無茶だから、改築案を書いてきたんだー」

さとり「却下です、却下。第一、お風呂のバリエーションで勝負しようなんて理屈自体が愚かです。うちは温泉なんですから、正統派にいけば全く問題は無いんです」

にとり「その考えが甘い！ 今時いろんなお風呂を楽しむのは常套手段だよ。むしろ、それが無いようじゃ、お客さんに飽きられちゃう」

さとり「……」

にとり「実際入ってみただけさ、なんか物足りないよねー。混浴って正直、男は嬉しいけど女は敬遠するよー。だったら、ちゃんと男女別にした大浴場を用意したほうがいいって。そっちには普通のお湯張ってさー、温泉に入りたいなら、混浴のほうに行きなさいってするの」

さとり「・・・」

にとり「それと、山の向こうには硫黄泉があるんでしょ？ もったいないし、こっちまで引つ張ってこようよ。二種類の温泉が楽しめるなら、お客さんも倍増だよー」

さとり「ば、倍増・・・？」

にとり「そして極めつけに美人女将の湯女さんサービスも！」

さとり「馬鹿者っ！」

にとりの頭をばしっと叩き、さとりはため息をつく。

さとり「でもまあ・・・最後のは別として、いいかもしれないわね」

来栖「改築か？」

さとり「確かに大浴場が一つだけっていうのは不満だって言う声があったのよ。土地も余ってるし、お金も余裕が出来たから、いっそお風呂を増やしちゃいませうか？」

にとり「よっしゃ！ じゃあ明日から早速始めるよ！ 楽しみにしててね！
よし、さっそくセラフと増築エリアの下見に・・・」

さとり「その前にっ！ 服を着なさいっ！ー！」

こうして、にとりによる温泉革命と称した地霊温泉郷の増築工事が始まったのである・・・。

第二回(1) 「温泉革命だっ！」(後書き)

ある意味で危険なお話。

さとり様のサードアイがにとりのどこに当たっていたのかは内緒です。

そして、次回、さつさと温泉改革終了。

果たして、地霊温泉郷はどうなってしまうのか・・・。

そして、地味にツンなさとり様。これがデレるのはいつになることやら・・・。

では、次回もよろしくです。

第二回(2) 「あそこが痛いのだ」

次の日の朝早くから、地霊温泉郷の増築工事が始まった。早朝からいきなり騒がしい機械音で宿泊客に迷惑ではないかと思うが、実はそうでもない。今、地霊温泉郷に宿泊している客は皆、地底都市の建設工事に来ている人々だ。にとりが作業を始めるもつと前に仕事に向かっている。迷惑しているのは、唯一の休息の時間を奪われている我たちのほうだ。

私の部屋を乱暴にノックして入ってきたのはお燐。うるさくて眠れないのさ、と涙ながらに訴えてくる。

お燐「こんなんじゃストレスがたまっただけじゃえんげが出来るのさ！ 来栖さん、文句言っつけてきてほしいのさ！」

来栖「なんで我が・・・」

お燐「お空もりゅうの旦那も一切気にせず寝てるのさ！ 一体どういふ耳をしてれば寝れるのか教えてほしいのさ！」

まあ古明地くんの場合は格闘家特有の集中力という奴だろう。お空の場合は、ただのバカだろうが・・・。それを考えると、きつとこいしも眠っているに違いない。しかし、もう一人、起きている人がいるかと思われる。我は仲間を増やそうと隣の部屋をノックした。

来栖「さとり、入るよ」

さとり「あら、どうかしたの？」

来栖「工事の音がうるさくて眠れなくてね。これからお燐と一緒に

文句を言いに行こうかと」

へえ、そうなの、とさとりはまるで他人事のように言う。一緒に来てほしいのさ、とお燐は言うが、私はやめておくわ、と返す。

さとり「世の中にはね、便利なものもあるのよ」

そう言いながらさとりはお燐に耳栓を手渡す。工事が長引くと、毎日のように睡眠時間を削られるわよ、と言つと、自分も耳栓をしてさつさとベッドに向かう。

さとり「休憩は正午までよ。ゆっくり休みなさい」

お燐「了解なのさ!」

元気よく部屋を出て行くお燐。しかし、我は耳栓を貰っていない気にも留めていないのか、さとりはさつさと眠ってしまう。仕方なく我も自分の部屋に戻り、枕で耳を塞いで寝たのだった……。

そんな日々が数日続き、ある日、にとりが上機嫌でさとりの部屋にやってきた。

にとり「さとりー、さとりーさとり、さとりーっ」

さとり「名前を連呼しないで頂戴。何か用？」

にとり「ふっふっふ。ついに完成したよ! 地霊温泉郷・改が!」

さとり「妙な名前をつけなくてももらえるかしら?」

にとり「じゃあ、地霊温泉郷V2にしよう」

さとり「そのうちG5にでもなるのかしらね？」

にとり「そんなわけで、明日のお昼に一通り見てもらえるかい？」

もちろんよ、とさとりは快諾する。しかし、刹那に目を細めてにとりをバカにしたように笑う。

さとり「あなたの作ったものは、一回安全を確認しないと危なっかしいものね」

にとり「なんだとーっ！ この天才河城にとりに向かってなんて言い草だ！」

さとり「地下王国を建造していたのはどこの誰かしら？ ……あれは一生恨むわよ」

にとり「な、何のことでしょう……」

さとり「今回も、変なカラクリを作ってないでしょうね？」

にとり「それは大丈夫。ご安心」

さとり「その妙にはつきりした言葉が一番怪しいのよ……」

得意げに笑うにとりを見つめ、ため息をつくさとり。まともな仕事をしてくれているといいのだが……。

そして、次の日の昼。我たちは地霊温泉郷の奥に完成した別館の

ほうにやってきた。これまでの温泉郷と渡り廊下でつながっている別館は完全な温泉施設になっているようで、巨大な一階建ての建物だ。にとりはどうだ、と誇らしげに胸を張っていた。

さとり「うん。正直すごいわね。数日でこんなに作ってしまうとは・・・」

にとり「地霊温泉郷を作ったときと違って今回は強力な助っ人がいたからね」

古明地「助っ人、ですか？」

にとり「まあ、それはさておき。今回の増築で完成した別館と本館のもう一つのお風呂を紹介するよ！」

そう言いながら、館内地図を持ってくる。

にとり「まずは別館ね。大きく分けて大浴場と遊技場の二つになっているよ。こっちは混浴じゃなくて完全に男女別にしてる。ちなみにお湯は地下にある『河童のマークの地熱給湯器』で沸かしてるからとっても経済的だよ」

おりん「怪しい商品を勝手に取り付けないで欲しいのさ・・・」

にとり「怪しいとは何だ！ 私特製のエコ給湯器なんだぞ！」

さとり「はいはい。いいから次は？」

にとり「別館には露天風呂も用意したんだ。例の硫黄泉の温泉を引

っ張ってきたよ。　　そして、本館の地下に必殺のお風呂を用意したんだ」

さとり「地下・・・っ!」

さとりが突如、びくつと体を震わせた。どうかしたのか、と問いかけると、なんでもないわよ、と視線を外す。

来栖「風呂に必殺もなにもない気がするが・・・」

にとり「まあ、それは後で見せるとして。　　じゃあ、さっそく見てきて欲しい」

にとりはそう言った刹那、不敵に笑った。それを見たお燐が、何かを察知し、お空の手を取った。

お燐「じゃあ、あたいとお空は新しい露天風呂に行ってくるのさ! さとり様たちは大浴場と必殺のお風呂とやらをお願いするのさ!」

逃げるようにお空の手を引っ張ってさっさと行ってしまっ。

古明地「では、自分は大浴場の男湯のほうに行ってみましょう。

お二人は女湯のほうをお願いします」

古明地くんもそそくさと逃げるように行ってしまっ。どうやら昏にとりの妙に怪しい顔つきが気になっているようだ。そして、彼女の不敵な笑みの視線の先に、さとりがいることに・・・。

来栖「じゃ、じゃあ我はまず遊技場の確認に行こうかなあ・・・」

さとるといると、確実ににとりの罫にはまるのだろう。我は古明地君の後を追う様に歩き出す　　が、服の裾をさとりに握られて
いるではないか。

さとり「却下よ」

我はゆっくりとさとりのほうを見る。嫌な汗をかき、完全に目が死んでいる。　　こんなさとりを、今まで見たものはいるだろうか。

さとり「一緒に来なさい。命令よ・・・」

地下に一体何があるというのだろうか・・・。それを聞くのはさすがにはばかられた。さとりですらこんな反応を見せるのだ。今、聞いてしまったら地下に行く事ができなくなりそうだ。

にとり「じゃあ、まずは大浴場のほうからね。いろんな種類のお風呂を作ったから、きっと楽しめると思うよ!」

さとり「それは本心で言っているのかしら?」

にとり「もちろん」

さとり「・・・今だけは、信じるわよ」

にとりの案内で大浴場のほうにやってきた。本館の温泉の倍以上の広さに、これはすごいわね、とさとりがちよつとだけ楽しげだ。

さとり「じゃあ、さっそく行ってみましょうか」

にとり「ちよい待ち！ さとりってばなんなのさその格好は」

さとり「な、何って・・・タオルを巻いちゃいけないのかしら？」

にとり「そんなもんいらん！ 隠すような仲でもないでしょうが」

にとりの言葉にさとりは隠すような仲よ、はっきり答える。そしてにとりから離れて辺りを見回していた。

さとり「ふうん・・・七種類もあるのね。じゃあ、来栖は右側から。私は左のほうから行ってみるわ。にとりは来栖と一緒に」

にとり「隙ありっ！」

まるで神速。すばやくさとりのタオルに手をかけて一気に下にずり下ろす。引つかかる部分が無いのか、タオルは容易にさとりの足元に落ちた。

にとり「おー、あいかかわらず綺麗なケツしてんじゃん。尻小玉抜いてみたくなるねえ」

タオルを回収し、脱衣所のほうに投げ捨てるにとり。さとりはこちを一度も見ずに、黙って手でお尻を隠して逃げていった。

来栖「・・・にとり？」

にとり「なんだ。来栖くんに見られるのが恥ずかしいならそう言え
ばいいのに。 じゃあ、私たちはこっちのほうから行くこじや
ないか。案内するよ」

にとりは我のことを特に気にも留めていないのか、一切隠さない
ままでさっさと歩き出す。

大浴場は中心に巨大な風呂があり、その両サイドに小さな別の風
呂があるような形になっている。洗い場は入り口側のほうに、そし
て最奥にはなにやら壁があり、その向こう側にも何かがあるようだ。
さとりが向かった左側の入り口には小部屋がある。どうやらサウナ
もあるようだ。

来栖「随分現代風だな」

にとり「山の神社の巫女が現代の銭湯に詳しくてね、いろいろと聞
いて参考にしたんだ」

右側エリアの風呂はいわゆるジェットバスが一つ。左側エリアは
どうやら二、三個に分かれているようだ。ひとまず入ってみると、
やはり現代にありがちな普通のジェットバス。まあ、幻想郷にして
みれば非常に珍しいものなのだろうが。

来栖「うん、悪くないけど・・・なんか、妙な臭いが・・・」

にとり「あー、それは、泡が出てくるお風呂だって聞いたから、地
下から出てるガスをここに出してみた」

来栖「・・・有毒ガスじゃないだろうな？」

にとり「あー、えっと、なんだっけなー。りゅーかすいそとか言う奴だっつて、セラフが言ってた」

来栖「それ有毒！　すぐに中止！　っていつか、自称天才なら硫化水素ガスくらい知ってるだろ！」

にとり「いやあ、妖怪には無害だから人間も大丈夫なのかと。

その横にあるバルブを回せば止まるから」

来栖「・・・普通の空気を利用するように直しておくこと。いいな？」

にとり「了解」

にとりがそう言った刹那、左側エリアから叫び声。さとりがお風呂から飛び出していた打ち回っているではないか。

来栖「さとりっ！」

一体何があったのか、さとりはこらえる様に蹲っていた。

来栖「何があった！？　何か危険なものがあったのか！？」

すると、さとりは一切こちらを見ずに、痛いのとだけ言う。どこが痛いんだ、と我が問うと、今度は答えない。

にとり「あら。どつたのさとり？ どつか痛いんでしょ？ どこが痛いかわないと再現のために肩まで浸からせるよ？」

さとり「も、もう無理！ あそこが、あそこが痛いのっ！」「

にとり「うーん、さすがは週変わり薬湯最強の『濃厚唐辛子湯』だね」

来栖「濃厚って・・・」

さとり「し、死ぬ・・・全身がびりびりって・・・」

にとり「その適度な刺激が気持ちいいんじゃない。唐辛子湯は冷え性とかにもいいんだよ？ 足が暖まってすつきり快眠」

さとり「逆に股間が痛くて眠れなくなるわよ！ どんだけ濃いのお湯！・・・」

にとり「妖怪は頑丈に出来てるからねえ・・・これくらいしないとダメなこともあるのよ」

さとり「それはそのお客様が特殊なだけ！ 人間も入るんだからもっと薄いのにしなさい！」

にとり「ちえー。つまんないなー」

来栖「待て・・・まさか男湯も同じにしてないだろうな！」

男湯は古明地くんがチェックしている。何も知らずに入ったらあつちも大変なことになるのではないか。だが、にとりは大丈夫、と

笑っている。

にとり「あっちは人間用の薬湯を入れてみたから」

さとり「こっちも同じものを入れなさいっ!! 何なのよこのお風呂は! そっちのは水だし! こっちは痛くて入れないし!」

にとり「いや、サウナの後は水風呂でしょ」

来栖「まずサウナの使い方を教えないとな」

そして、そのまま奥にある壁の裏側へ行くことにした。こっちはなんと打たせ湯になっている。

さとり「あら、これはいいわね」

にとり「でしょ、やってみてよ」

さとり「・・・いや、今はいいわ」

にとり「えー、つまんないな」

さとり「時間もなし、さっさと次に行きましょう。それで、次は?」

にとり「んー? ここにはもうないよ。じゃあ、次は地下のに行ってみる?」

来栖「げ・・・」

さとり「……い、いいわよ。行ってあげようじゃない」

ここで逃げたら女が廃るわ。さとりは言い、そして我を見た。

さとり「そつでしょ？ 来栖」

来栖「我は忙しいのでこれにて……」

さとり「ちょ、ちょーっ！ 絶対逃がさないわよ！ 地下でこいつと二人きりになったら絶対助からないわ！」

来栖「以前ににとりと何があつた!？」

さとり「忘れはしないわ……かつて地霊温泉郷の地下に、こいつによつて建設された地下王国を……」

来栖「地下王国って……にとり、何やってたの？」

にとり「いやあ、地熱発電の装置開発のための研究施設をね」

さとり「嘘よ！ 絶対何か怪しい実験してたんでしょ!？ 私見たわよ！ 一番奥の装置に人が」

にとり「そいや」

刹那、にとりがさとりの首にチョップを入れて気絶させる。

にとり「さー、行ってみますか」

来栖「ちよつと待てーっ！ ホントに何の実験してたんだ!？」

にとり「いやー、人類の生命の神秘についての探求を少々・・・」

にとりはさとりを抱えて早足で脱衣所のほうへ逃げていく。正直、このまま逃げてしまいたいものだが、さとりが心配なので後を追うことにする。

ちなみに、その頃のお燐とお空は、新しい露天風呂を堪能していた。

お燐「うーん。硫黄の臭いに慣れたら、結構くせになるかもなのさ」

お空「さとり様、大丈夫かなあ・・・」

お燐「さとり様は犠牲になったのさ・・・だから、あたいたちはその遺志を継いで今日のお仕事もがんばるのさ」

遠い目をして、お燐はそう言ったという・・・。

第二回(2) 「あそこが痛いのっ」(後書き)

話が長くなったので適当にカットしてみました。

にとりの地下王国については次回明らかになるかもしれないし、ならないかもしれない・・・。

ちなみに実際の唐辛子湯は、血行がよくなるので冷え性や肩こりに効果的です。でも、全身浸かるのは慣れてないと痛い。やるなら足湯辺りをオススメします。

第二回(3) 「それはただのラブホです」(前書き)

半月近く放置したけど、仕事が忙しくなっただけです。書くのに飽きたとかそういうわけではないのでご安心を。

6月末まではこんな感じのペースが続くかも。

と、いうわけで書けるうちにサクサク書いていきますので、後々加筆修正が入るかもしれない・・・。

では、今回もよろしくです。

第二回(3) 「それはただのラブホです」

地下王国、なんて怪しげなものがこの地霊温泉郷にあったとは・
・。にとりが案内するよ、と本館のロビーのほうに我たちを連れてくる。そして、なにやら怪しげなりモコンを取り出してボタンを押す。すると、ロビーにあった壁の一つが動き、入り口が姿を現したのだ。

来栖「こんなところにあつたとは・・・」

さとり「初めて見つけたときはびっくりしたわよ。まさかこんなものがあるなんてね・・・」

にとり「こつちもびっくりだよ。まさか、お空ちゃんが転んで壁に穴を開けるとは思わなかったもの」

来栖「それが無かつたらずっと見つからなかったのか・・・恐ろしい」

さとり「元に戻しなさいって言ったわよね・・・」

さとりが鋭い目にとりを睨むが、彼女は一切そんなことを気にしていない様子。さー、さっさと行こうか、と階段を下りていく。

来栖「・・・嫌な予感しかしないな」

さとり「気をつけなさいよ。この地下であいつが何をしてたのか、結局分からずじまいだったんだから」

地下は案外綺麗に整備されていた。にとりの地下王国なんていう怪しい名前だったから、もっとマッドな研究所のようなものを想像していたのだが、一つの汚れもない白い壁に赤絨毯　　これはどちらかといえば、地下王国というよりはホテルの廊下のようなだ。

来栖「予想より、まともなんだな」

さとり「ここまでではいいのよ、ここまででは」

どうやら、以前もここまでではまともだったらしい。さとりは嫌な予感しかしないわ、と楽しみに先を歩くにとりの背中を睨み続けている。

にとり「さ、ついたよ。ここが噂の必殺風呂！」

そう言って指差したのは、ホテルの一室のようなドア。まさか、と思う。妙に綺麗だが微妙に薄暗い廊下。人を寄せ付けない雰囲気。やけに間隔が広く取られた各部屋の扉。

来栖「一つ聞く・・・これは誰のアイデアだ？」

にとり「外の世界にはトルコ風呂っていうものがあるって本で読んだ」

さとり「とるこ、ふる？　来栖、それって何かしら？」

来栖「あまりいい話じゃない　　と思う」

にとり「ささ、お二人でどうぞ」

さとり「あれ、にとりは？」

にとり「私がいるとお邪魔だろうし。中にマニュアルがあるから、それに沿ってやってくれればいいから」

ここで待ってるよ、とにとりは笑顔で手を振る。さとりはしょうがないわね、とドアを開けて部屋に入っていく。

来栖「一つ聞くんが」

にとり「なにかな？」

来栖「いろいろと問題のあるやつか？」

にとり「それは入ってからのお楽しみ」

何してるのよ、と部屋の奥からさとりの声がする。ため息をつき、我は部屋に入っていく。

部屋の中はごく普通のホテルの一室のようだ。大きめのベッドと浴衣が二つおいてある。随分狭いのね、とさとりは辺りを見回してベッドに腰掛けた。

さとり「これがマニュアル？ えーっと、ふうん・・・垢すりをするのね」

さすがは幻想郷。健全なお話であることを理解していたようだ。どうやら幻想入りしていたのは「最初のトルコ風呂」であったようだ。とりあえずは一安心。

さとり「部屋が狭いのは気になるわね。地下っていう環境のせいか、まるで独房の中みたい」

来栖「確かにそれは言えているかも知れないな」

さとり「お風呂のほうはどうかしら」

というわけで二人、風呂場のほうへ行く。部屋に比べて風呂のほうが広いのは、なんとなく察しがつく理由があるのだろう。さとりはさて、どうしましょうか、と言いながら湯を張った浴槽に手を入れていた。

さとり「マニュアルの通り、とあったものの、実際に垢すりなんかしてもらいたくないわね。第一、そういうサービスをするのは地霊温泉郷に相応しくないような気がするわ」

なんなのかしら、これ、とシャンプー類の横に置いてあった透明な容器の中に入っているものをじっと見つめる。

さとり「なんかぬるぬるしてる……ねえ、来栖。これは何に使う物なのかしら」

来栖「そんなこと覚える必要はないと思う。　　っていうか、これは風呂で使うものじゃない」

さとり「じゃあ、どこで使うものなのかしら」

来栖「いや……まあ、風呂場では使うのかもしれないが　　って、だから、そんなことはどうでもいい」

にとりに文句言ってくる、と我は踵を返す。しかしさとりは我の手を引つ張ってそれを阻んだ。

来栖「さとり？」

さとり「よし、部屋をもう少し広く改装させましょう。ここを家族風呂にするのよ。いいと思わない？」

来栖「あー、いや。それは家族風呂と言つより……」

さとり「なにかしら」

それは外の世界にある休憩用のホテルのレベルではなからうか、なんて口が裂けても言えなかった。言つたら言つたでそれはなにかしら、と聞かれるのが関の山だ。ここは適当に荒を探して地下の使用を取りやめさせるべきだろう。

来栖「あー、いや。やめておいたほうがいいんじゃないか？ ほら、地下ってなんか狭苦しい感じがするし」

さとり「だから、部屋を広くするのよ。それで、他の部屋より値段を安くする。 ああ、日帰り入浴も出来るようにすればもっと

」

来栖「それはダメだっ」

さとり「いいアイデアだと思うんだけどなあ」

このアングラ感に加え、格安料金。そこにさらにご休憩といわんばかりの日帰り入浴をつけてしまえば、それはただのラブホです。この計画だけは阻止しないとイケない。にとりの温泉改革計画にとんでもない罠があつたものだ、我は彼女の恐ろしさを実感する。何を言えば分かつてくれるだろうか。いや、きっと何を言つても分かつてはくれないだろう。オブラートに包んだ言葉ではさとりの経営アイデア力に打ち負ける。いっそのことはつきりと言つてしまおうか。いや、それを言つて害が及ぶのは我だ。にとりの計画の意図を知らないさとりにそれを言つたところで、普段からそんなことを考えているからそういう想像に行き着くのよ、とか言われてしまふに違いない。

さて、この状況・・・どうやって乗り越える？ どうすれば、さとりの地霊温泉郷をラブホ化から守ることが出来る？

さとり「ねえ、来栖」

来栖「・・・」

さとり「来栖！」

来栖「は、はいっ！」

さとり「どうかしたの？ さっきから随分大人しいけど」

来栖「いや・・・ちょっと考え事を　　つて、さとり、それは？」

気がつくときさとりは桜色のお湯に浸かっている。そこにあった入浴剤を入れてみたの、と彼女は楽しげに笑っていた。

さとり「外の世界のものかしら。いい匂いもするし、お湯がピンク色になるのもかわいくていいわね」

来栖「・・・楽しんでいらっしやるようで」

さとり「うん。気に入ったわ」

我はこの部屋がどういう意図を持って存在しているかなんて知りもしない彼女の純粹さにある意味で驚いていた。人の心を読むことが出来る彼女なら、心の奥底にあるそういった知識を吸収することが出来るだろうに、どうしてこんなにも無垢な少女でいられるのか。

さとり「来栖も入る？
二人で入ると狭いから、交代しようか」

来栖「あ、ああ・・・」

もしかすると、と思いながら、まさか、と思う。そしてその結果、なるほど、と笑う。

さとり「ねえ、来栖。何でこの椅子はへこみがあるのかしら」

来栖「不良品なんじゃないかな」

心を読めるさとりが理解できないのも頷ける。恐らくにとりも同じなのだ。ここにあるものの意味なんて分かっていない。ただ、本にあったものを再現しただけの場所。もし、にとりにその意図があったとすれば、さとりならば最初に心を読んで気付いている。

きつと純粹に風呂を楽しんで欲しいと彼女も思っているに違いない。

にとり「楽しんでるかなあ、二人とも。本に書いてあったものね。すっごく楽しい場所だって」

さて、一体どうやって二人に真実を告げようか、鼻歌交じりで「機嫌なさとりを見ながら、我は考えていた……」

+ + +

お燐「おー、来栖さん。お疲れ様なのさ」

必殺風呂から出てきた我たちを迎えたのは浴衣姿のお燐だった。温泉のほうはどうだった、とさとりが訊ねると、最高だったのさ、

と笑顔で答える。

お燐「お空はちょっと合わなかったみたいだけど、あたいは大好きなのさっ」

さとり「お空がどうしたの？」

来栖「まあ、硫黄泉は人によってはダメな場合もあるからなあ」

さとり「そうなの？」

来栖「臭いがきついし、それで体調を崩す人もたまにいるって話を聞いたことがある」

さとり「ふむ・・・脱衣所前に注意書きでも置いておきましょうか」

不意にお燐が手に持っていたビンを我とさとりに渡してくる。「
ーヒー牛乳だ。」

お燐「お風呂あがりはコーヒー牛乳に限るのさ!」

さとり「私はフルーツ牛乳のほうが好きだなあ・・・来栖はどうかな?」

来栖「まあ、どれも好きだけど・・・普通なのがいいかな」

お燐「これだから来栖さんは分かってないのさ。りゅうの目
那は分かってくれたのさ」

さとり「フルーツ牛乳のよさが分からないなんて、来栖もまだまだ甘いわね」

来栖「 精進します」

さ、さっさと戻ってお仕事再開なのさ、と元気よく歩き出すお燐。しかし、我とさとりは動かない。そう、奴がないからである。

さとり「にとり、どこ行った？」

来栖「……探す？」

さとり「……まさか、以前の最奥エリアに!？」

来栖「最奥エリア?」

さとり「例の研究施設があった場所! あれはもつと奥にあるの」

もはや嫌な予感しかない。我たちはゆつくりと歩を進める。

長い廊下の突き当たりに『事務室』と書かれたドアがある。以前はこの先に研究施設があったの、とさとりは恐る恐るドアを開けた。

さとり「にとり、いるんでしょ? 何をして」

来栖「さとり……?」

ない、とさとりが言う。何が無いのかと、我は部屋の中を覗き込んだ。すると、その奥にさらに長い廊下が続いていた。

さとり「あいつ……さらに先を掘ってるーっ！」

来栖「どうする？ この先に進むか？」

さとり「……埋める。この先にあいつがいようと今埋めるー！」

さとりが弾幕を放ち、舗装されている壁を打ち崩す。ここまで一直線に掘られていれば、すでにこの上は地霊温泉郷の外。お構いなしに弾幕で天井を崩してドアの先の道を塞いだ。

さとり「にとりめ……私の地霊温泉郷はおもちゃじゃないのよ……」

にとり「お、二人で何やってんの？」

にとりが後ろから声をかけてくる。そして、目の前の光景を目の当たりにし、顔を真っ青にしているではないか。

にとり「さ、さとりーっ！ アンタなんてことしてくれたのよー！」

さとり「それはこっちの台詞よ！ また地下王国を作ってたんでしょー！？」

にとり「違っつて！ この先に『河童のマークの地熱給湯器』があるんだよ！ さっき話したでしょ！ 地下に作ったってー！」

さとり「・・・あ」

にとり「うん・・・これはまずい。にげよう」

にとりはさつさと踵を返す。何がまずいんだ、と我が問いかけると、彼女はゆっくり振り返って答えた。

にとり「・・・『河童のマークの地熱給湯器』は、地熱を取り込んで使うもんだから、常に一定量の排熱をしないとすぐに冷却が追いつかなくなつて本体温度が上昇して・・・爆発しちゃうの」

来栖「・・・うん。逃げよう」

その後のことはあまり覚えていない。ただ、気付けば地霊温泉郷は跡形も無く消えていて、ただ呆然とそれを見ていた。

にとり「・・・また作ればいいよ。うん。皆で作ろう」

さとり「あんたが仕切るんじゃないわよ・・・」

お隣「大切に取っておいた秘蔵のモンプチが・・・」

お空「・・・けが人がいなかったのは奇跡だね・・・あと、地霊殿だけ無傷つても奇跡かも」

来栖「 さあて、まずは・・・片付けだな」

はあ、と皆が一樣にため息をつく。こうして、にとりの温泉改革は一夜どころか夕方前に終わったのだった・・・。

/ / /

来栖「 と、まあ。そんなことがあって、地霊温泉郷はしばらくお休みなんだ」

???「そうでしたか・・・それは困りましたねえ」

数日後。ひとまず工事関係者の宿泊場所を地霊殿に移すことなど何とか対応している。お隣や古明地くんも温泉郷の修復工事に借り出され、完全な人手不足。本来の宿泊客を泊める余裕など無く、こうして追いつけず日々が続いている。

来栖「そんなわけで悪いね、宗太くん。せっかく予約してくれてたけど、日を改めてくれるかい」

宗太「まあ、これじゃあ仕方ありませんよね。 分かりました。
今日のところは帰ります」

さとり「待ちなさい」

来栖「さとり? どうした?」

さとり「彼は何があっても二泊三日で泊めるようにと白黒から頼ま
れてるの。既にお代もいただいているし、帰すわけには行かないわ
いささか窮屈で古臭い屋敷だけど、しばらくここにいてもら
えるかしら」

宗太「・・・分かりました。では、お世話になります」

では、部屋に案内しますわ、とさとりが宗太くんを連れて行く。

あ、そうだ、と去り際にさとりはこちらを見た。

さとり「温泉の修復が終わったそうだから入ってきなさい。
今夜からお客様に使っていたたくつもりだから、危険なものが無い
かチェックもお願いね」

来栖「了解」

そんなわけで久しぶりの温泉にやってきた。温泉が復活したとは
いえ、まだ建物はほとんど未着手状態。夜に一般客に解放するとい
うのにもかかわらず、未だに脱衣所の屋根もついていなかった。

お隣「来栖さん。温泉に来たのかい?」

屋根の作成に取り掛かるのか、壁の上に立っているお燐が声をかけてくる。お燐の格好は普段とはまるで違い、白いシャツを着て作業用の厚手のズボンをはいていた。

来栖「ああ、チェックも兼ねてね」

お燐「羨ましいのさ。あたかも一緒に入りたいのさ」

もう汗でべとべとなのさ、と言いながらこっちに向かって飛び降りると、いきなり服を脱いだではないか。

お燐「猫は欲望に忠実なのさ！ 一番風呂はいただきなのさ！！」

あつという間に裸になると、体も洗わずに一気に温泉に飛び込んだ。

お燐「あー・・・やっぱり温泉はいいのさー」

来栖「こら。マナー違反だ」

お燐「猫は自由に生きるのさー」

お燐はまるで聞く耳持たずに温泉を泳ぎ回る。まったく、しょうがないな、と苦笑いし、我は手招きする。

来栖「こっち来い。体を洗ってやる」

お燐「ええっ！？ そ、それはちょっと遠慮するのさ・・・」

来栖「嫌なら自分で洗え。一回体を洗ってから入るのがマナーだろ」

お燐「わ、分かったのさ・・・」

そう言いながらお燐はこっちにやってくる。その刹那、何かが我たちの真上を飛んだ。

来栖「何だ？」

お燐「セラフさんのさ。にとりが連れてきたカラクリ人形なのさ」

来栖「ステイルメイドン、か・・・？ なんだって幻想郷に」

我たちの声に気付いたのか、セラフと言うステイルメイドンはこっちにやってきた。こちらにいましたか、とお燐に言い、休憩時間にはまだ早いのでは、と注意する。

お燐「ご、ごめんなのさ・・・お風呂に入りたかったからつい・・・」

セラフ「では、ワタシは先に作業に着手します」

来栖「ステイルメイドンが喋るのか。時代も変わったな」

我の言葉に、ワタシが特別なだけです、とセラフは答える。

セラフ「あなたは随分と妙な力をお持ちのようだ」

来栖「さすがは戦闘機械。人の力も読めるのか？」

セラフ「いえ、少しカマをかけただけです。どうやら本当に妙な力を持っているんですね」

来栖「なるほど・・・あんたが幻想郷にいる理由がよく分かったよ」

カマをかける戦闘兵器なんて聞いたことがない。「感情の無い戦場」を提唱した外の世界の戦争屋にとつて、偶然の産物にしろ、心を持った兵器を生み出したとすれば、それは忘れてしまいたいものに違いない。それがいかにすばらしいことなのかなんて、二の次だ。

セラフ「それにしても、お風呂というものはそんなにいいものなのですか？」

来栖「そうか、風呂に入ったこと無いのか」

お燐「だったら入ればいいのさ」

来栖「いや、機械にはいろいろと面倒なことがあるんだよ。浸水とか」

来栖「いつそのこと人間型の体でもにとりに作ってもらって移植したらどうだ？」

「冗談で言ったつもりだった。しかし、セラフは少し考えて、それもいいかもしれないですね、と答える。

セラフ「ちょうど試作四号機の試験に入ることですし、AIをコピーできないかどうか提案してみましよう。その時には、ぜひこちらのお風呂に入らせてもらいます」

お隣「うん。待ってるのさ」

来栖「……試作四号機……？」

それは、もしかしてさとりの言っていた地下王国の装置の中に入っていたという人のことだろうか……。？ 一体にとりは何をしているのだろうか……。

その頃、さとりは自室で何かを書いていた。

こいし「おねーちゃんをぺっろぺろー……………って、何を書いているの、お姉ちゃん？」

さとり「質問の前の歌の歌詞が気になるんだが……。これは、そうね……。日記のようなものかしら」

こいし「日記ねえ……。私にはただのラブラブポエムに見えるけどさとり「ちょ、見ないでよ！ 姉妹とはいえプライバシーはあるでしょうー!？」

こいし「ねえ、そこに書いてある彼って、やっぱりクーさん？ お姉ちゃんってば普段あんなにクーさんのこと苛めてるくせに好きなんだ」

さとり「な、何言ってるのよ！ あんなやつのことなんか・・・別に・・・」

こいし「子供って、気になる子のこと苛めたりするよねー。お姉ちゃんのも、案外そういうやつなのかなあ」

さとり「ち、違ってる言ってるでしょー!!」

こいし「・・・あれ、どうかしたのお姉ちゃん。顔真っ赤だけど」

さとり「無意識か！ 無意識で喋ってたのか今!!」

こいし「あ、なんか書いてたんだ。見せて見せてー」

さとり「ダメだって言ってるでしょーがっ!!」

そんなこんなで、本日も地霊温泉郷は建設作業中。地底都市の完成に間に合うのかどうかは、まだ先の話になりそうである・・・。

どんどんはね。

次回予告

「ま、またたびはらめえっ！ おかしくなっちゃうのきーっ！」

来栖、はじめてのおつかい。

それは、お隣と行く、初めての人間の里。

「そわそわ・・・」

「そんなにクーちゃんが気になるなら、一緒に行けばよかったのに」

そして来栖は、巫女と出会う。

「私のせいで酷い目にあってるみたいね。」

外してあげよっか

「？」

「・・・」

果たして来栖の決断は・・・？

次回、ドキドキ!? 地霊温泉郷めぐり! 第三回。

リクがあれば続く!

第二回(3) 「それはただのラブホです」(後書き)

第二回は今回のにとりはいいやつでした、というお話。

そして、お燐はコーヒー牛乳派で、さとり様はフルーツ牛乳派でした、というお話。当初構想では、最後に皆で牛乳話をして終わるエピソードを予定してただけど、オチがないとダメだなあ、と思い立った結果がこれだよ！

地霊温泉郷は跡形もなくなってしまうましたが、次回には復活しているはずですよ。

そして、最後にさりげなく登場した宗太さん。

これが一体なにを意味してるのか・・・それは今後の展開で明らかになるかも。

では、次回もよろしくです。

永遠亭訪問録（前編）（前書き）

エピソードリクエスト第二段は「俺と慧音の寺子屋日誌」の主人公、水鬼さんの登場です。

エピソードリクエスト枠には二種類あって「続きエピソード」と「オリジナルエピソード」というものがあります。

「続きエピソード」については、ウチの構想どおりの第二回に加え、リクで提案されたシチュエーションを追加して書いて行きます。この場合、リクに応えられるレベルが下がってしまうのが困りどころ。

「オリジナルエピソード」の場合は提案されたリクエストに沿った内容のお話をメインに取りあげて書いていきます。こっちの場合は、リクの内容をメインに書いていきますが、お話自体が短くなってしまうことが想定されます。

今回のお話は「オリジナルエピソード」ですので、案の定、前編後編で終わってしまいますが、どうぞご了承ください。

では、今回もよろしくです。

永遠亭訪問録（前編）

幻想郷には、不老不死の伝説がある。

外の世界でのいわゆる「竹取物語」という物語で綴られた、不死の伝説が、幻想郷の中で今も生きているのだ。

藤原妹紅。見た目はまだ若い人間の女性のようにだが、実際のところ、下手な妖怪よりもずっと長く生きている。幻想郷のパワーバランスの一角を担う彼女は、人里離れた竹林の中に身を隠すようにして住んでいた。

そんな彼女の家にやってきてから数日が経過した。

なぜ寺子屋の保険医である俺がこんな場所にいるのかって？ それは、ちよっとした意見の食い違いから起きた、とある事件に由来する。

先日のことだった。その日は珍しく朝食に卵焼きを作ってくれた。外の世界じゃ物価の優等生なんて言われている卵も、幻想郷では養鶏を営むものが少なく、結構希少な食物だ。話によると、竹林で妹紅が見つけた夜雀の卵らしい。

だが問題はそこではない。そもそもの騒動の発端は、もっと単純なところにあっただのだ。では、その時のことを回想してみよう。

+ + +

慧音「ふふ。どうだ、卵焼きなんて幻想郷じゃ珍しいんだぞ？」

水鬼「確かに、あまり見たこと無かったな。流通してないのか？」

慧音「基本的に商店に並ぶことはないな。幻想郷で卵を得るには養鶏場に直接買いに行かなくてはならない。しかし、やはり希少なものであるからか、どうも手の出しにくい値段だな。基本的に一般家庭の食卓に並ぶことは無い。卵は外で食べるもの、というのが普通だな」

まあ、自宅で鶏を飼っている者なら話は別だが、と付け足して、慧音は嬉しそうに笑っていた。

慧音「さ、食べてくれ。口に合うといいのだが」

水鬼「いただきます」

しかし俺に電流走る。これは、と呟き、期待の眼差しで俺を見る慧音に、呟く。

水鬼「砂糖・・・？」

慧音「ああ。味付けは砂糖だ。 どう、かな？」

水鬼「卵焼きは、塩だろ」

慧音「なっ・・・お、お前は言うに事欠いて塩だと!？」

水鬼「な、なんだよ・・・何か問題でもあるのか？」

慧音「お前は何も分かってないな。　　いいか？　卵の本来の味を生かすには砂糖が必須なんだ！　それに仕上がりもふっくらしてより美味しくなる！　塩なんか使ったら台無しになるではないかっ！」

水鬼「　　」

全く。これだからお前のような無頓着者は困る。嘆かわしいことこの上ない、と慧音は不機嫌そうに腕組みした。しかし、こっちもそこまで言われては黙ってはいられない。

水鬼「　　黙って聞いてりゃ、偉そうに・・・」

慧音「なんだ？　何か言いたいことでもあるのか？」

水鬼「そうやって調子に乗って偉そうなことを言ってるから、里の人間から敬遠されてるんだよ」

慧音「なっ・・・わ、私は敬遠されてないぞ！」

水鬼「退治屋よりも強い豪腕の女教師って、里の男が口々に噂してる。　　妖怪退治も結構だが、あまりやりすぎると行き遅れるぞ。妖怪よりも強い女を誰が嫁に貰うかっての」

慧音「・・・」

慧音が黙ったまま俯いている。しまった、言い過ぎたか。どうやってフォローしようかと悩んでいると、刹那に慧音が立ち上がり、

俺の胸倉を掴んだ。そして、必殺の頭突きを喰らわせたのだ。

水鬼「 な、何しやがるっ！」

慧音「世の中には言っていないことと悪いことがあると教わらなかつたようだな、お前は……。命の恩人だからと世話してやってきたが、それも今日限りだ。今すぐ出てけ！ もうお前など知らん！」

水鬼「・・・っ！
ああ、分かったよ！ 出て行ってやるさ！」

+ + +

男女の別れのきっかけなんて些細なものである。こうして、俺は里を離れ、どこに住もうかとあちこちさまよっているうちに妹紅に会い、そして、今は彼女の厚意で家に居候しているのだ。

今日も適当に竹林を散策して食料を探していた。数日もの間、迷いの竹林に住んでいると、だんだんとこの特異な地形にも慣れ、迷うことも無くなった。今では竹林に住む妖怪たちともすっかり親しくなり、道で出会うとおすそ分けなんかを貰ったりもする。

妖怪兎「あ、水鬼さん。こんにちは」

水鬼「ああ。こんにちは」

妖怪兔「まだ、慧音先生と仲直りできないんですか？」

水鬼「あー・・・いや、あはは・・・」

妖怪兔「あ、そうだ。さつき道で山菜見つけたんです。よかつたら持っていつてください。妹紅さん、これ好きなんですよ」

妖怪兔と妹紅は案外仲がいい。同じ竹林で暮らす仲間だからか、彼女たちは妹紅の家にやってきて世間話をしていることがある。妹紅は永遠亭に住むという月の姫との仲がめつぼう悪いと聞いていたが、たまに永遠亭で働く兎もやってくる。どうやら、姫とは犬猿の仲だが、他の者とはいい関係であるようだ。

そして、最近分かったこともある。妹紅は案外話好きだ。慧音の家に来たときは、さほど話をせず、慧音の話を聞いてばかりの彼女だが、竹林の仲間とは結構饒舌に話をしている。それも、普段とはまるで違う口調で、だ。猫でも被っているのか、それともこっちが本物の妹紅なのかは分からない。

妖怪兔「じゃあ、私はこれで失礼します。あ、そうだった。

水鬼さん。今夜はお暇ですか？」

水鬼「え？ あー・・・まあ、暇といえばそうなるか」

妖怪兔「でしたら、今晩は永遠亭にいらっしやいませんか？ 妹紅さんも、今夜は満月の夜ですから、姫と殺し合いをするのでしようし、家に一人つきりでも退屈でしょう？」

水鬼「あのさ」

妖怪兔「なんででしょう?」

水鬼「今更だが・・・姫と殺しあう仲の者と親しくしている奴を自分たちの屋敷に招いていいものなのか?」

妖怪兔「まあ、あれはもう慣れっこですし。別に殺し合いといっても、本当にお互いで殺し合えるとは思ってませんでしょうし。」

それに、案外仲がいいんですよ? 姫と妹紅さん。ですから、妹紅さんのご友人は私たちにとっても大切な友人なのです」

水鬼「・・・ホントに妙な関係だよな。妹紅と月の姫って」

ホントですよね、と妖怪兔も苦笑い。

妖怪兔「妹紅さんのほうへは、鈴仙さまが文を届けに行っていると思いますので、話は通じているはずですよ。では今夜の夕暮れに、永遠亭でお待ちしております」

水鬼「了解。じゃあ、また後で」

妖怪兔は案外無害な妖怪だ。里の退治屋の間では人間を襲う危険な妖怪といわれているものの、それはあくまでこちらに敵意があるからそうなるのだ。こちらに敵意さえ無ければ、見た目相応の少女のように接してくれる。妖怪だからといって全てが危険な生き物ではないということだ。

家に戻ると、妹紅が妖怪兔と話をしていた。相変わらずの妙な喋り方が気にはなるが、それももう毎度のことである。

妖怪兎「あははっ、もういつそのこと永遠亭に住んじやったらどうですか？ そしたら、輝夜さまも退屈しませんし」

妹紅「まあ、それもいいかもしれませんが。でも、そんなことになったら毎日傷が絶えなさそうですわ」

妖怪兎「あー、確かに……。あ、水鬼さん。お邪魔してます」

水鬼「ああ、ただいま。鈴仙は来た？」

妖怪兎「鈴仙さまですか？ いえ、まだ来てませんが」

妹紅「うどんげが来るのですか、みずき」

水鬼「ああ、手紙を持ってくるって」

妖怪兎「いつもの殺し合いのお誘いですね。今日はどんな内容でしょうか」

妹紅「いつもことながら、また挑発的な内容なんでしょうね」

そうこう言っているうちに、鈴仙がやってきた。

鈴仙「こんにちはー。姫からの文をお届けに来ました。って、あんた。見かけないと思ったらこんなところでサボってたの？」

妖怪兎「ご、ごめんなさい。じゃあ、私、帰りますね」

鈴仙「全くもう・・・なんだって地上の鬼はこうもすつとぼけてんのかしら・・・。あ、そうだ。妹紅さん。今夜は永遠亭にお越しください。今夜は水鬼さんをこちらに招待します」

妹紅「みずきをですか？

まあ、一人で家に留守番させておくのもかわいそうですしね。分かりました。では、本日は先に永遠亭のほうにみずきを案内してからいつもの場所に行きますので、輝夜にはそう伝えておいてください」

鈴仙「分かりました。では、今夜もよろしくお願いします」

さっさと帰ってしまう鈴仙。それを確認したとたん、妹紅は息を吐き、その場に横になった。先ほどまでのおしとやかな様子はどこへ行ったのか。

水鬼「やっぱりそれが素か。なんで竹林の妖怪には猫を被ってるんだ？」

妹紅「永夜異変の時に女つばい喋り方をしたせいで、竹林ではあのキャラが定着してるんだよ。それに、昔も」

水鬼「昔も、なに？」

妹紅「・・・いや、この話はよそう。それよりも、手に持っているものはなんだ？」

水鬼「ああ、帰る途中で妖怪鬼からもらったんだ」

妹紅「おおっ、これ、私が好きなやつだ！ うーん、お返しに何か持っていないといけないなあ・・・」

水鬼「ちよつといいか？」

妹紅「なんだよ」

水鬼「何で、女の子っぽい喋り方をしたんだ？」

妹紅「……そういう電波を受信したんだ」

水鬼「なんだそりゃ」

永遠亭訪問録（前編）（後書き）

水鬼さんと慧音のケンカからはじまった今回のお話……。ケンカの中にもなんか妙に所帯じみた雰囲気を持たせてみた。

そして、妹紅の意外なキャラが明らかになった。まさかの猫かぶり。同人作品と原作での口調の違いの理由を勝手に解釈してみたらこうなった。

後編はさらに暴走モード……。夢一夜でやれよみたいな展開になっています。次回もよろしくです。

永遠亭訪問録（後編）（前書き）

今回は悪意のある展開に持って行ってみた。

東方の同人誌でも読んでいる気分でお楽しみくださいね。

突貫で書いたため、後々修正が入るかもしれないのでご了承ください。
い。

では、今回もよろしくです。

永遠亭訪問録（後編）

そうして、その日の夕方、俺は妹紅と一緒に永遠亭にやってきた。永遠亭の玄関前には既に妖怪兔が待っていて、こちらに気付くと深々とお辞儀して、ようこそいらっしやいました、と笑顔で対応してくれる。随分な歓迎ムードだ。

妖怪兔「では、ご案内いたしますわ」

妹紅「いえ、私はもう行きますので。輝夜を待たせるといけないので」

水鬼「月の姫はもう出掛けてるのか？」

妹紅「ええ。彼女はいつも私より先に来ていますから。では」

去り際に薬師には気をつけるよ、と耳打ちし、妹紅は今来た道を引き返した。俺は妖怪兔に案内され、永遠亭の中央にある大きな居間に通された。

鈴仙「あら、早かったのね」

部屋には既に鈴仙がいて、宴会の準備が行われていた。妹紅から持っていくようにと言われた筈を彼女に渡し、何か手伝おうか、と言っ。

鈴仙「あなたはお客様なんだから、何もしなくていいですよ。

っと、ユーマ！ 兔の数が減ってる！ どうかでサボってるん

じゃないの!？」

そう言いながら奥にある調理場のほうへ行ってしまう。俺は適当な場所に座り、とりあえずすることも無く黙っていた。すると、奥からため息混じりにユーマが出てきた。

水鬼「やあ、ユーマくん。久しぶり」

ユーマ「水鬼さん。先日の地霊温泉郷での宴会以来ですね。お久しぶりです」

水鬼「なんか、大変そうだね」

ユーマ「まあ、鈴仙がヒステリーなのはいつものことだけどね」

鈴仙「誰のせいでイライラしてると思ってたんのよこのバカ! いいから早くサボってる兔を捕まえてくる!!」

調理場のほうから罵声が飛ぶ。はいはい、とユーマは大きなため息をつき、外に出る。俺もそれについていくことにした。

水鬼「俺も行くよ。暇だし」

ユーマ「助かります。俺、まだ竹林で迷うから」

水鬼「もう数ヶ月も住んでるんだから、そろそろ慣れたほうがいいんじゃないか・・・?」

竹林を二人で歩き回り、兔を探す。しかし一向に見つからない。

一体どこに行つたのやら、と考えていると、ユーマがこんなことに裂く時間のほうが無駄な気がしてきた、とため息をつく。

ユーマ「帰りますか。どうせメシ時になったらひよっこり戻って来るんだし」

水鬼「ちゃっかりしてるんだな、妖怪兎は」

結局、兎は見つからないまま永遠亭に戻る。ユーマは鈴仙にこっぴどく叱られていた。

水鬼「さて・・・また何もすることはなくなつたんだが・・・」

そんなことを呟いていた刹那、目の前の廊下を謎の少女が走つていった。因幡てゐか？ いや、彼女は黒髪だったはず。それに、あんなに髪は長くない。じゃあ、あれは一体誰だ？ 気になつたので調理場にいる鈴仙に訊ねることにした。

水鬼「なあ、鈴仙。永遠亭に白髪の小さな女の子なんていたっけ？」

鈴仙「知りませんよ、そんな子。何かの見間違いじゃないですか？」

水鬼「いや、確かに今その廊下を走つてたんだが・・・でっかい白衣を着たてみくらいの女の子・・・」

ユーマ「・・・白衣？」

鈴仙「・・・まさか・・・」

二人は顔を見合わせて、そしていやいや、とお互いに首を振る。

鈴仙「いくら年増扱いされてるとはいえ、まさかそんなバ力なことするわけが……」

ユーマ「だよねえ、いくら永琳さんでも、そんな見境の無いこと……」

二人「……は、はっきり否定しきれない……」

二人は口をそろえて言う。そして、俺を連れて廊下に出た。

鈴仙「その例の女の子を捕獲するわよ。まさかそんなことするワケないと思うんだけど、万が一ってこともある」

ユーマ「水鬼さんは俺と一緒に来てくれ。多少の強硬手段でもいいから、捕獲するよ」

水鬼「ちょ、ちょっと待て！ 状況がつかめない」

俺がそう言うと、鈴仙はここだけの話にしてくれる、と俺に言う。頷くと、ゆっくり彼女はここまでのいきさつを話し始めた。

鈴仙「最初にそのファイルを見たのは、一ヶ月前のこと。お
師匠様の机の上においてあった機密って書かれたファイルなんだけ
ど。そこにね、書いてあったの」

水鬼「何が？」

鈴仙「幼女化する薬の実験についてのレポート」

水鬼「・・・帰っていいか？」

鈴仙「ちょ、真面目な話なの！ ホントに見たんだから！

私も最初はそんなものあるはず無いつて思った。でも、内容を読むと現実味があつて、ホントにありえるのかなつて思い始めた」

鈴仙「蓬萊の薬の原理を利用して、細胞劣化を永久的に押さえ込む作用を退行作用に作り変えることで、細胞を若返らせて幼い状態に引き戻すっていう薬らしいの。原理とか方法は理解できなかったけど、要するに、使つと若返る薬みたい」

水鬼「嘘みたいな話だな」

鈴仙「それでね。最後のほうに実験の結果が書かれてたの」

水鬼「で、その結果は？」

鈴仙「どうやら失敗だったみたい。使つと細胞が暴走して体が異常発達を起こしてしまったらしいの。それで諦めたと思つていたのに・・・」

ユーマ「それが、実際は諦めてなんかいなくて、しかも今回は上手いこと行ってしまったから、永琳さんは自分で試したみたってことかな・・・」

水鬼「それで、どうして捕獲する必要があるんだ？」

鈴仙「・・・考えてみて。お師匠様が幼女化したらどうなつてしま

うか」

水鬼「・・・永琳先生が・・・？ えーっと、薬師で、知的でクールな美女ってイメージだけど・・・」

ユーマ「何かに似てると思わないか？」

水鬼「・・・似てる？」

ユーマ「ほら、体は子供、頭脳は　　ってマンガの、あのキャラに」

水鬼「今すぐ捕まえるぞ！　完璧なキャラ被りになってしまっ！」

廊下を走り、少女を探す。すると、洗面所のほうに明かりが灯っているのを発見し、ユーマと二人で洗面所を覗き込む。すると、案の定そこには白衣を着た少女がいるではないか。ものすごく楽しみに鏡を見て喜んでいる。

永琳？「うーん、この肌の艶やかさ、そしてハリ・・・すごい効果だわ・・・本当に昔の若さを取り戻せるとは・・・」

ユーマ「え、永琳さん！　何やってるんですか！」

永琳「なっ、ユーマ！？　しまった、気付かれたか・・・」

水鬼「何やってるんだ、永琳先生・・・。そんな妙な薬なんか作っ

て」

俺が呆れながらそう言うと、あなたたちには分からないでしょうね、と妙に涼しげな表情をする。

永琳「BBAとバカにされ、一部のコアなファンにしか好かれないこの不遇の立ち位置にいるこの私の苦しみはっ！」

ユーマ「分かりたくも無い裏事情だなあ・・・」

永琳「あなたたちに分かる!? 薄い本が出ても熟女扱いを受けて紫や神奈子たちと同列に扱われる悔しさが! その上、何故か私は紫たちと違って若く見られるパターンの本が少ない気がするわ!」

水鬼「ユーマくん、永琳先生は何の話をしてるんだ？」

ユーマ「なんとなく察しはつきますけど、話したらそこで試合終了な気がします」

永琳「だからっ・・・私は変わったのよ。もうこれで熟女とバカにされることも無いわ・・・。これからは幼女キャラとして生きていくのっ!」

水鬼「その歴史は慧音にでも食ってもらったほうがよさそうだな」

ユーマ「しかたない。強硬手段で捕獲しますか」

永琳「邪魔はさせないわ。私の野望の邪魔は・・・誰にもっ!」

永琳の放つ靈力で一気に吹き飛ばされる。永遠亭の外に出た俺たちは、同じく飛び出してきた永琳の放つ弾幕の雨に晒される。

ユーマ「水鬼さん！」

水鬼「鬼道・第二『鬼道拳』っ！！」

弾幕を強引に炎で相殺し、受け止めると、開けた道をユーマが一気に駆け抜ける。空も飛べない、弾幕も使えないユーマに一体何が出来るのか、無茶だ、と叫ぶが、無茶かどうかはやってみなくちゃ分からない、と永琳に迫る。

ユーマ「脱兎『フラスターエスケープ』っ！」

てゐのスペルカードだ。そう、幻想郷のスペルカードは昔と違い、ただの技名が書かれたカードではない。すでにスペルを発動するための靈力が込められていて、カードさえあれば誰でも同じスペルを使えるのだ。しかし、永琳を相手にそのスペルカードではあまりにも薄すぎる。永琳も不敵に笑いながらそれを回避し、そして、弓を構えた。幼い体に不相応な巨大な弓から赤と青の光を放つと、それは矢と共に一斉にこちらに向かってくる。

永琳「天呪『アポロ13』っ！！」

地上に降り注ぐ圧倒的な破壊力。若いと靈力まで鋭さを増すのか、被弾しなかったものの、そのダメージは致命的だ。膝をつき、やれやれ、と呆れ笑った。

永琳「さあ、降参しなさい」

ユーマ「すみませんが、そういうわけにも行きません」

水鬼「・・・幼女キャラは既に飽和状態だ。今更参入したところで無意味な気がするぞ」

永琳「　　黙りなさいっ！」

その言葉か癪に障ったのか、弾幕を纏わせないままの矢をそのまま俺に向けて放った。さっきの攻撃のダメージでまともに動けない俺にとつて、それはさすがにピンチだ。しかし、その矢が目前に迫った刹那、一発の銃弾が矢を打ち落としたではないか。

鈴仙「お師匠様！　なんてことをしているんですか!?!」

永琳「あら、うどんげじゃない。どう、あなたも一緒に幼女化してみろ?」

鈴仙「しませんっ！　兎の幼女はてめで間に合ってます!」

永琳「さて・・・これで三対一か・・・でも、邪魔はさせないわよ」

一気に叩き潰してあげる、と永琳がスペルカードを取り出す。だが、そのスペルを発動前に打ち落とす鈴仙。そして永琳の体を掴むと、一気に永遠亭の柱に投げ飛ばしたのだ。その動きには一切の無駄も遠慮も無かった。鈴仙は初めっからスペルカード戦などやる気はなかつたらしく、気絶した永琳の体を抱えると、さっさと永遠亭に戻っていく。

鈴仙「さて・・・そろそろ夕食の時間ね。あー、忙しい」

呆気にとられる俺とユーマ。なんだったんだ、と俺が尋ねると、彼は笑いながらこう答えた。

ユーマ「忙しいときの主婦は無敵ってことでしょう。きっと・・・」

夕食の時間になった頃には、永琳の姿はすっかり元に戻っていた。どうやら制限時間があるようだ。彼女は幼女化していたときの記憶を完全に失っており、一体何があったのかしら、なんて言っていた。こういった話にお決まりのご都合主義のせいなのか、はたまた柱に頭を打ち付けたのが原因なのかは定かではない。

鈴仙「例の薬のファイルは処分しておいたわ。これでもう大丈夫だと思っ・・・」

ユーマ「でも、まだ薬が残ってるのか無いよね？」

鈴仙「うーん・・・それは分からないから怖いわね・・・」

水鬼「全く・・・散々な目にあっつ」

鈴仙「すみませんでした。おもてなしするどころか、面倒ごと巻き込んでしまって・・・」

水鬼「いやいや。退屈しなくてすんだから、お気になさらず」

気がつければ居間には兎たちがたくさんいる。本当に夕食時になれば帰ってくるのだ。既にみんな歌えや騒げやの宴会モード。完全にその勢いに飲まれている俺に、すごいでしょう、と永琳が言う。

永琳「うちは毎日こうなんですよ。ホント、大家族のようでも毎日退屈しませんわ」

水鬼「そ、そうですか・・・」

さっきの暴走幼女キャラが頭に残っているせいか、今更大人っぽくなくても違和感がありすぎる。苦笑いしていると、突然てゐが俺と永琳の間に割って入ってきた。

てゐ「そろそろ寂しくなってきたんじゃないかい？」

水鬼「な、何の話だ？」

てゐ「卵焼きの味付けなんてどうでもいいウサ。問題なのはどこで誰とそれを食べたかなんじゃないのかい？」

そう言いながら卵焼きをこちらによこしてくる。

てゐ「平穏な食卓には、自然と腹と心を満たしてくれるものがある。それさえあれば、砂糖の卵焼きでも我慢できるウサ」

水鬼「・・・そうだな」

てる「でも、私はだし巻きが一番好きウサ」

水鬼「その情報はいらなかったな」

明日、慧音のところに謝りに行く。そう思いながら、永遠亭の卵焼きを口にする。

水鬼「・・・甘い」

どうやら、幻想郷の人達は、甘い卵焼きが好きらしい。

どんどはね。

無事に仲直りした水鬼と慧音。

慧音「いやー、あの時は私も言いすぎた。本当に申し訳ない」

水鬼「まあ、お互い様ってことで」

慧音「ところで、里では見かけなかったが、どこにいたんだ？」

水鬼「妹紅の家にいた。おかげでいろいろと楽しかったよ」

慧音「……」

水鬼「どうした、慧音」

慧音「ほうほう……そりゃあお楽しみだっただろう」

水鬼「……なにか、激しく誤解してないか？」

慧音「そんなに妹紅がいいのなら、妹紅のところに行ってしまえこの痴れ者っ！！ 今度という今度は許さん！ 出て行けーっ！！」

水鬼「な、なんでこうなるっ！？」

てゐ「……今日も平和ウサ……」

永遠亭訪問録（後編）（後書き）

個人的なコメントをするならば、水鬼さんはもう慧音と結婚すべきだと思う。

そして、まさかの永琳の暴走。同人誌とかでありそうなケースをやってみた。

ちなみに、記憶が無いの理由はご都合主義じゃなくて頭部強打が原因です。不死じゃなかったら死んでます。それくらい今回のうどんげは本気だった。

うどんげはいずれガンデレになると思う。

では、次回もよろしくです。

スキヤンダルを回避せよ！ (前編) (前書き)

今回は『神と半人半神。時々、現人神』の主人公、水本蒼奈さんが主人公。

今週は前半部のみを投稿です。

もしかすると後半が長くなるかもしれない……。

では、今回もよろしくです。

スキヤンダルを回避せよ！ （前編）

その日、山の神社に一つの新聞が届けられた。ちようど掃除の最中だった早苗の頭の上に落ちたそれには、とあるスキヤンダルの記事が乗っていた。彼女は拾い上げてそれを見る。そして、刹那に神社の屋根の上にいる蒼奈の元へ走ったのだ。

早苗「蒼奈さん！」

蒼奈「なんですか？ 屋根の上にいるのは遊んでいるわけではなく雨漏りの修理をしているんですよ？」

早苗「そんなこと分かってます！ そうじゃなくて、この新聞はなんですか!？」

蒼奈は屋根から飛び降りると、彼女の持っている新聞を取り、一面の見出しを見て絶句した。『深夜の密会！ 神と巫女のモザイクな夜!？』と書かれたその記事は、深夜に蒼奈が早苗の部屋に入っていく写真と共に、あることない事が書かれている。

蒼奈「・・・なんですか・・・これは・・・」

早苗「いつの間に私の部屋に忍び込んだんですか!？ まさか、寝込みが悪戯とかしてませんよね!？」

蒼奈「そんなことするはずが・・・って、ああ。これって、一週間前の夜の写真ですよ、きっと」

早苗「一週間前って・・・私が霊夢さんのところに行ってた日ですか？」

蒼奈「ほら、早苗に貸していたあれがあったじゃないですか。それが急に必要になりましたって、部屋に入ったんです」

じゃあ、これはその現場を偶然撮った写真と言うことですか、と早苗は呟き、困りましたね、と言葉を続ける。

早苗「神という存在は信仰があって初めて力を得るのです。ですから、信用を失うようなこういうスキャンダルの類は神の最も危険な弱点ともいえるんです。それに、蒼奈さんはあちこちで有名ですから、今後も天狗に付け狙われること間違いありませんし・・・これはもう、手を切るしかないかもしれませんね」

蒼奈「・・・はい？」

早苗「神奈子様と諏訪子様のためにも、この神社の評判を落とすわけには行きません。今後もこういうことが続くようでしたら・・・分かってますね？」

要するに、追い出されるということである。蒼奈は肝に銘じます、と苦笑いし、ひとまず今日のことは不問に終わった。しかし、腹の虫が収まらないのは蒼奈。なんだって早苗の部屋に入っただけで天狗にあらぬ疑いをかけられるのか。まあ、日頃の行いや言動のせいでもあるかもしれないが、清く正しい新聞記者を少し信用しすぎていたのかもしれない、と後悔した。

だが、この程度のこととこれだけのスキャンダル風な記事をでっち上げるのだ、うっかり転んで早苗を押し倒した日には間違いなく

ホームレス半人半神に成り果てる。こうなったら、スキャンダルを回避するための何らかの策を講じるしかない。一つの結論に行き着いた蒼奈は、早速、行動に移すのだった……。

蒼奈「よし、そうと決まれば、早速里に行きましょう」

新聞を賽銭箱の上に置き、蒼奈は山を下りて行く。

早苗「あれ、雨漏りの修理はどうしたんですか？」

蒼奈「明日やります！」

早苗「そ、蒼奈さんっ！今夜から集中豪雨なんですよーっ！」

/ / /

CASE：1 『きよのわんこ』

襲撃事件も終わって、幻想郷もすっかり様変わりした。しかし、そんな中でも山の生活は変わらない。相変わらず、無法妖怪があちこちで悪さをしているため、人間が迂闊に寄り付かないよう哨戒天狗たちがあくせくと見張りをしていた。

椛「あ、蒼奈さん。おはようございます」

白狼天狗の犬走椛。彼女も無法妖怪のせいで、仕事が忙しくなった被害者の一人である。今日も大変そうですね、と蒼奈が言っていると、ええまあ、なんて苦笑い。手には血のついた剣が握られていて、つ

いさつきまでここで無法妖怪との衝突があったことが容易に想像できた。

椛「雷獣がいなくなっただけからは無法の槍も落ち着いてきたと思っただけなのに、ここ最近、この辺の無法妖怪たちが急速に力をつけてきたんです。このままじゃ私たちでは敵わなくなってしまうかもしれません」

蒼奈「それに、嫌な噂も聞きますしね」

椛「霊力を使えなくする程度は能力ですね。 哨戒天狗の間で噂になってますよ。その能力者が妖怪の山にいるんじゃないかって」

ホント、住みにくい世の中になったものですね、と椛は言う。刀についた血をふき取り鞘に収めると、じゃあ私はこれで、と飛び立とうとした。その腕を蒼奈は掴み、彼女を茂みに放り込む。驚く椛の上に馬乗りになり、蒼奈は妖しく、ふふ、と上品に笑う。

椛「な、何の冗談ですか・・・？ あ・・・もしかして、文様の新聞の逆恨みですか!？」

私は無関係です、と暴れる椛にそんなことはどうだっていいんですよ、と彼女の腕を掴んで押さえ込んだ。

椛「さ、早苗さんがいるのに・・・こんなことしていいんですか!？」

蒼奈「その早苗のためなのですよ」

椛「・・・はい？」

そつと唇を重ねる蒼奈。椛も始めは暴れていたが、次第に動きも少なくなり、抵抗も無くなっていく。口が離れる頃には椛はすっかり頬を赤く染めた、とろんとした表情に変わっていた。

椛「あの・・・そうな、さん・・・」

蒼奈「なんですか？」

椛「・・・はじめて、だから・・・優しくお願いします」

蒼奈は優しく微笑み、そして彼女をぎゅっと抱きしめた。

文「おおっ！！ これは大スクープですよ！ まさか椛ともデキていたなんてっ！」

はるか上空から蒼奈の姿を監視していた文は望遠カメラを手に持って、二人の様子を撮影している。あきれた、と文を笑うのは、姫海棠はたて。

はたて「なーにが大スクープよ。いつからアンタの新聞は金曜日の週刊誌に成り下がったのかしら？」

文「何を言いますか。幻想郷きつての美女と名高い蒼奈さんの恋愛事情は幻想郷に暮らす全ての人々の注目の的！ よって、その記事

をとりあげる私の新聞はまさしく、人々の注目の的！」

はたて「新聞記者のプライドはどこに行ったのかしら？ 清く正しいのがモットーのくせに、こんな嘘記事でつち上げて……」

文「ふふ。確かにその記事は嘘です。しかし、今日の前に広がる光景はまさしく真実！ 朝も早くからこんな青空の下であのような行為に及ぶなど、まさしく大スクープではないですか！」

はたて「 特殊な趣味の連中が喜びそうな記事になりそうね。

わんこの空撮写真なんて一体いくらで売れるかしら」

文「言つてなさい。今度の大会で勝つのは私です！」

はたて「はいはい。好きにきなさいな。私はこういういやらしいスクープの取り方は嫌いな。あんたがストーリーカーめいた悪徳取材をするんなら、私は直接スクープを聞き出してくるまでよ」

結局はお互いに蒼奈のことを記事にする流れになっているらしい。はたてもはたてで蒼奈の恋愛事情には興味があるということだ。文は素直じゃないですね、と呟いて、再びシャッターを切るのであった。

椀「……わんっ！」

蒼奈「はい、よく出来ました。じゃあ、次は ぶせっ」

椛「わんっ！」

蒼奈「上手よ。じゃあ、最後に、ちんちん」

椛「わんっ！」

蒼奈「やれば出来るじゃないですか。 じゃあ、ご褒美です」

そう言っつて、蒼奈は銀色の袋に入った何かを彼女に渡す。椛は、わあ、と涎を垂らして喜んでいる。

椛「夢にまで見た最高級ウルトラプレミアムドッグフードのレトルトタイプ……。あのっ、これ本当に貰っちゃってもいいんですか!？」

蒼奈「上手に出来たご褒美ですよ」

椛「えへ……えへへ……」

椛の頭を撫でる蒼奈。どうやら初めてのしつけは上手くいったようである。さすがは最高級ドッグフードの力。さすがに前もってドッグフードを口に含むのは少々抵抗があったが、口移しで彼女に与えたその効果は絶大だった。あっという間に彼女を手懐けることに成功し、ついでに芸まで仕込んでしまった。

蒼奈「じゃあ、私はこれで失礼します」

椀「あ、はい。道中、くれぐれもお気をつけて」

嬉しそうに手を振る椀と別れ、蒼奈は再び山を下る。その途中、彼女は見知らぬ天狗に進路をふさがれた。茶髪の長い髪の女の子だ。見たわよ、と妖しく笑って蒼奈に写真を見せてくる。

蒼奈「あなたは？」

はたて「花果子念報の姫海棠はたて。文のスキャンダル記事があまりにも嘘丸出しだったからね。アンタの味方をしようと思って」

蒼奈「真実を伝えてくれるということですか？」

はたて「そ。あんなゴシップ記事に負けたら腹立つじゃない。だから、私はアンタに密着して文の記事は嘘だったって新聞を書きたいの。協力してくれる？」

蒼奈「もちろんですよ。ただし、条件があります」

はたて「なにかしら？」

蒼奈「これから起こることも、全部包み隠さず記事にしてくださいね」

はたて「……さっきの、椀のことか？」

蒼奈「ええ、もちろん」

真実を伝えるのが、新聞記者のお仕事でしょうか？ 蒼奈はそう言
って再び歩き出した。スキャンダルにスキャンダルを上塗りしろと
いうのか、とはたては呆れ笑う。一体彼女は何を考えているのか、
今のはたてには到底理解できなかった。

/ / /

CASE：2 『ソーナのおもちや』

渓流地帯を歩いていく蒼奈。はたては気配を殺してゆっくりと彼
女の後を追う。誰かに会ったときにあなたがいると警戒するでしょ
うから、という蒼奈の言葉を受けてのことだ。尾行でもしているよ
うで、いささか気は進まないが、これも文の鼻をへし折るためだと
我慢する。

川沿いの道を進んでいくと、河童の住むエリアに到着し、適当に
挨拶を交わしながら歩いていくと、その途中で河城にとりに遭遇し
た。にとりは蒼奈と親しいらしく、普段なら近寄っても来ない愛想
の悪い彼女が自分から声をかけているではないか。

にとり「おっはよー。今日は里に行くの？」

蒼奈「ええ。ちょっと用事がありました。でもその前に、あなたに
も用があるのですよ、にとり」

にとり「へえ、何かな？」

蒼奈「ここでは人目がありますので、川のほうに行きましょか」

にとりを誘い出し、ちょうど他の河童から死角になる岩陰に隠れた二人。はたては空を飛んで対岸に渡ると、こっそりと二人の様子を観察した。

にとり「で、何の用事なの？」

蒼奈「・・・こういふことですよ」

蒼奈はそう言いながら、にとりの口に棒状の何かを突っ込む。にとりは驚いていたが、それが何なのか分かると、照れくさそうにそれをゆっくりと口の深い場所まで飲み込んで行く。

はたて「うわ・・・」

蒼奈はそつとそれを引き抜くと、にとりは物欲しそうな目でそれを見つめている。欲しいですか、と呟く蒼奈に、にとりは甘い声で答える。

にとり「欲しい・・・です・・・」

蒼奈「何が欲しいのかちゃんと言ってくれないと分かりませんよ？」

にとり「い、イジワルしないでよ・・・蒼奈の、それが欲しいんだ」

蒼奈「それって？」

にとり「その、細長くて・・・おいしいやつ」

蒼奈「・・・ああ、指を舐めたいのですか？」

にとり「うう・・・そ、そうじゃなくて・・・その、手の・・・」

蒼奈は何のことだか分かりませんね、にとりを焦らす。彼女は涙目になりながら、お願いだから意地悪しないで、と蒼奈に寄り寄ってきた。

にとり「久しぶりなんだから・・・これ以上焦らされたら、おかしくなる・・・」

蒼奈「・・・もう、しょうがない子ですね」

じゃあ、自分で口に入れなさい。蒼奈はにとりにそれを手渡す。彼女は嬉しそうに、その細長いものを口に含み　　噛み砕く。

にとり「　　うまつ！　　やっぱり蒼奈の作ったきゅうりは最高！　　やっぱり土がいいのかなあ、山頂で育てたきゅうりのほうが味に深みがあるんだよねえ・・・」

蒼奈「全くもう・・・丸呑みにしようとするとは思いませんでしたよ。こんなの丸ごと飲み込んだら窒息しますよ？」

にとり「ゴメンゴメン。久しぶりだったから、つい・・・」

用ってこれだけ？にとりは言う。まあ、そうですね、と蒼奈。

にとり「今度はいきなり口に突っ込まないで欲しい」

蒼奈「以後、気をつけます。 それでは」

残りのきゆうりもとりに渡し、蒼奈はさっさと歩き出す。はたては、こりゃ上空の文は大興奮だろう、とか考えながら、にとりに見つからないようにこっそりと蒼奈の後を追う。

しかし、ここに来ても未だに彼女の腹の中は探れない。スキャンダルをどうにかしたいという目的ならば、むしろ私に清く正しい生活を見せつけ、文のでっ上げ記事に反撃を仕掛けるだけでいいはずだ。なのに、どうして私にこんな怪しげな現場を目撃させるのか。現在の彼女を見れば、むしろ文の嘘記事すらも真実ではないかと錯覚してしまう。これでは逆効果だ、とはたては思う。

もちろん、彼女にしてみれば別にそれでもいいし、どうでもいい。文が嘘記事を書いたということは真実であり、それを証明するだけの物証が揃えば、はたてにとって今の蒼奈の行動なんて限りなくキヤラメルについてくるおもちゃと同じ。キヤラメルが欲しいはたてにとってはおまけなんてものはあってないようなもの。そして、文にとってはそれこそが価値。

文が監視していることなんてとっくに気付いているはずだ。それなのにどうして彼女は文におもちゃを与え続けるのか。そして、どうしてはたてにはキヤラメルを与えないのか。ワケが分からない、とはたては呟く。

はたて」「まるで、蒼奈に弄ばれているかのよう」「

あいつも。そして、私自身も。

スキヤンダルを回避せよ！ (前編) (後書き)

蒼奈さんの目的はいったい何なのか・・・。

まあ、幻想局で一回ネタバレしてるので、分かる人は先の展開が読めるかもしれないです。

では、次回もよろしくです。

スキヤンダルを回避せよ！ (後編) (前書き)

長期間放置してしまいました。私は元気です。

さて、後半は非常に長くなりそうだったので、二人分のエピソードをカットしてお送りします。まあ、前編と同じような展開があったということだけ分かれば問題ないのでね。

では、今回もよろしくです。

スキャンダルを回避せよ！ (後編)

CASE：3 『万年置き傘はご注意を』

その後も蒼奈は街道で遭遇した魔理沙のドロワーズを無理矢理脱がせた後に彼女好みの下着をプレゼントしたり、咲夜の胸を触りながらバストアップ体操のやり方を伝授したりと怪しげな行動を繰り返し、ようやく人間の里までたどり着いた。

ここまで、ただの一度も身の潔白を証明するような行動を取っていない蒼奈への不信心は募るばかり。これじゃあ、文の記事を裏づけするようなものだわ、とはたてはイライラを募らせていた。

はたて「ああもう・・・なんなのよあいつ。見られてると興奮でもするのかしら・・・？」

蒼奈の後ろを歩きながら、はたては取材用の手帳を閉じる。これはもう彼女から手を引いたほうがよさそうだ。そう思ったその時だ。蒼奈はいきなり目の前に立っていた妖怪を押し倒したのである。

はたて「ちよっ、こんな往来で・・・何てことしてるのよあいつ！？」

押し倒された妖怪は命蓮寺周辺をうろついている唐傘お化けの多々良小傘。両手を蒼奈に掴まれて身動き取れないでいる。

小傘「そ、蒼奈ちゃん!? ど、どうしたのいきなり!」

蒼奈「小傘・・・少し、いいことをしましょうか」

彼女の顔にゆっくりと自分の顔を近づける蒼奈。真っ赤になった顔を背ける小傘だが、そつと耳元で何かをささやかれ、耳を舐められていたかと思うと、急に抵抗するのをやめてしまった。

小傘「いいこと・・・したいです・・・」

いつの間にやら里の人間たちが集まってきている。昼間から里の中心部でこんなことをやっていれば注目を集めるのは当然だ。空で監視している文も、きつと喜んでることだろう。二人は楽しげに体をすり寄せ合っている。はたても目を背けたくなるような熱い絡み合い。いいかげんにしないと公然わいせつでしよっ引かれそうだし、さすがのはたても二人を止めようと歩み寄る。しかし、その刹那、彼女はその光景の異常に気がついた。

小傘「んっ・・・あ、あー・・・やっ、そこ弱いから・・・」

蒼奈「では、ここを重点的に攻めてみましょうか・・・?」

小傘「あっ、だめっ・・・もうダメ・・・ギブギブっ! あ

っはははははっは! もう無理、くすぐったいっ!」

はたて「・・・な、何してんのよ、あんたたち」

何って、健全な遊びですよ、と蒼奈は答えながら立ち上がる。小傘は目に涙を浮かべてその場で悶えていた。

蒼奈「手を使わずに相手をくすぐって、笑わせた方が勝ちなんです」

小傘「　　はー、負けちゃったあ・・・蒼奈ちゃん、ずるいよ。

今日に限ってそんな羽飾りのついた服なんか着ちゃって。暑いから薄着だし、そんなのでくすぐられたらすぐ笑っちゃうよ」

蒼奈「これは戦略ですよ。最近負け越してたので攻撃力強化を図ってみました」

小傘「よし、じゃあ今度は私も狐のお姉さんから尻尾借りてこよう」

里の人間たちは皆そろそろと退散していく。その中に気になる集団を見つけ、はたては何してんのよ、と声をかけた。

人間A「ああ、これ？　蒼奈さんと小傘ちゃんのくすぐり勝負で賭けしてるんだよ」

人間B「あーっ、今週も小傘ちゃんが勝つと思ってただけだなー」

人間C「なに言ってんだよ。蒼奈さんは負けたふりしながら小傘ちゃんの弱点探ってたんだ。来週から蒼奈さんの連勝だぜ」

はたて「なに、これ毎週やってんの？」

人間A「大体週一ぐらいでやってるねえ。普段は命蓮寺とか、里の外れのほうでやってるけど、今日は随分と目立つ場所ですらやったもんだ」

はたて「普段は人目につかない場所で

ねえ・・・」

やっぱり彼女は普段から素行が悪いようである。そして、今更改める気もないらしい。結局、文の記事はまんざら嘘でもないということが分かっただけ。はたては失敗したなあ、と手帳を開きながら頭をかく。

蒼奈「はたてさん。いい記事は書けそうですか？」

はたて「こんなもの記事にならないわよっ！ ああもう、大会が近いってのに・・・他のネタ探さないと・・・」

蒼奈「没にするんですか？ 約束が違うじゃないですか」

はたて「あんたが普段からそういう奴だって知ってたら、そもそも取材なんてしなかったわよっ！ 約束なんて知らん！ 帰る！」

もう二度と取材なんかしないわよ、とはたては蒼奈を睨みつけて飛び去っていく。天狗さん怒ってたね、と小傘が言くと、蒼奈はそうですね、と不敵に笑っていた。

CASE：4 『スキャンダルを回避せよ!』

蒼奈「うーん・・・雨漏りのせいで酷い目に遭いましたねえ」

昨日の夜。集中豪雨の予報は的中し雨漏りの被害を受けた神社。
蒼奈は真夜中に屋根の修理をする羽目になったのである。寝不足で
すねえ、と欠伸を一つ。石段に腰掛けて、箒を抱えるような格好で
居眠りをしていると、早苗が彼女の名前を呼んだ。

蒼奈「な、なんですか？ 掃除はしてましたよ？」

早苗「誰が涎で境内を掃除して欲しいって言いました？ そ
れより、今朝の文々。新聞なんですけど・・・」

蒼奈「何か書かれてました？」

早苗「蒼奈さんのスキャンダル記事ばかりでした。 文さん
ってそんなに書くことないんですかねえ・・・」

昨日のスキャンダル記事を見たときとはまるで違う態度。そう、

これこそが蒼奈の狙い。

早苗「あ、今日は愁さんと一緒に人間の里まで買出しに行ってきた。蒼奈さん、何か欲しいものありますか？」

蒼奈「そうですね・・・強いて言えば、文々。新聞を買ってきてください。返品を抱えて大変なことになってると思うので」

早苗「はい？」

+ + +

その頃、天狗の里では文が昼間っから見張りやぐらの下で酔っ払っていた。一体なんなんですか、と彼女は呟く。

文「せつかくのスクープ記事だったのに、だーれも見向きもしないどころか、こんな記事ばっかじゃ、定期購読解約するって言い出す客まで・・・。なんで？ 蒼奈さんのネタは幻想郷で一番熱い話題じゃなかったの・・・？」

その様子を遠目で見ていたはたては、やっぱりそうか、と一安心した。

あの後、家に帰って冷静になって考えてみると、ごく自然に彼女の行動の真意がつかめたはたては、蒼奈の約束どおり、彼女についての記事を書いた。本当にそれでいいのだろうかと半信半疑ではあったものの、恐らく彼女が書いて欲しかった記事はこれであろうという確信はあった。だからこそその記事を書き、そして今まさしく

はたての想像が現実となったのである。

はたて「蒼奈の狙いはスクープ潰し。椀、にとり、魔理沙、咲夜、そして人間の里・・・文の新聞を購読している連中が多いるエリアに住んでいる連中ばかり声をかけていた理由はここにあったのね」

幻想郷は狭い。噂話はあつという間に伝播して全土に広まるのだ。ただでさえ先日の新聞で注目度が上がっていた蒼奈。そんな彼女の噂話は幻想郷最速を自称する文の新聞よりも早く広まり、彼女のスクープは蒼奈の行動を体験した者や目撃した者によって伝えられた噂話となって、すでに既知のものとして化していたのである。

いくら文があることないことを書き加えて面白おかしく書いたとしても、その情報の信憑性は本人の体験談には劣るどころか嘘記事を書いていたことの証明にもなりえる。結果、文の新聞は完全に新聞としての意味を剥奪され、解約者が続出するという結果につながったのだ。

蒼奈の行動はまさしく彼女の思惑通りの結果をもたらしたといえる。

はたて「怖い怖い。　　ああいう手合いを本気にさせたら、どうなるか分かったもんじゃないわ。　　さて、と。じゃあ、私はさつそく文々。新聞を解約した連中に花果子念報を売り込みに行きますか」

今日の記事は傑作だもの、きつと購読者倍増よ、と嬉しそうに笑うはたて。彼女が抱えている大きなカバンには『新聞記者失格！清く正しくない嘘つき新聞の真実』と書かれた、今朝の花果子念報

が大量に入っていた……。

+ + +

蒼奈「うーん……愁さんも早苗もいないとなると、ちょっと暇ですねえ……」

私も里に出掛けましょうか、と手に持った箒を適当に放り出し、彼女は山を降りていく。そんな彼女を諏訪子はニヤニヤ笑って見ていた。

諏訪子「……ある種、大物の類だね、蒼奈って」

神奈子「一部から極端に強い信仰を集めるタイプ、ということか？」

諏訪子「そう。そしてその結果、行き着くだろうね。あの子は」

諏訪子「人と異種族の究極の絆、人と妖の境界を越えた、その先に」

神奈子「それが、早苗とだったら。どうする？」

諏訪子「そんなときや殺すよ。私はそんなに寛大な神じゃないからね」

蒼奈「さあて、今日は誰と噂を作りましょうか……？ ぬえ、ア

リス、霊夢・・・ああ、慧音先生とかもいいかもしれませんね・・・
」

神奈子と諏訪子が怪しげな会話をしている中、そんなことには気付かない蒼奈は、今日も文のためにとスキャンダル回避のネタ作り計画を立てているのだった・・・。

どんどはね。

スキャンダルを回避せよ！ (後編) (後書き)

相手のいいように動いている振りをして、機が熟したら一気に全てを奪い去る。

これぞ間接的に相手を潰すテクニクの基本。さすがは蒼奈さん、直接的な戦闘だけでなく、こういう戦闘スキルも高い。大人の女性
は怖い怖い……。

そして、地味に第二期最後のエピソードリクエストに続いているという。

……と、言うわけで次回のエピソードリクエストは「ほんわかほのぼの日和〜早苗さんと一緒」の大和愁さんの登場です。

では、次回もよろしくです。

一緒に買出し（前編）（前書き）

久々の活動報告にも書いたけど、明るい話が書けない症候群の真っ最中の犬兔です。

それでもお盆休み中に一回くらいは更新しようと思って書いた。後半はスランプを抜け出してからかな・・・。

では、今回もよろしくです。

一緒に買出し（前編）

人間の里に向かう街道の途中、無法妖怪に襲われている少年を一人助け、早苗はため息をついた。

早苗「しっかし、まあ・・・倒せども倒せどもどこからかやってきますよね・・・彼らって」

愁さんも不思議に思ったりしませんか？ 早苗は少年を保護している愁に訊ねる。彼は、そうだねえ、と愛想笑いしていた。

早苗「真面目な話です。愁さん」

愁「これは失礼。確かに、これだけいろんな退治屋が無法妖怪を討伐しているっていうのに、未だに力で幻想郷を支配しようっていう連中が減らないのはおかしい話だね」

スペルカードのルールに従うのがそんなに嫌なのか。それとも何か別の理由でもあるのか。愁はまあ、いずれ分かることなんじゃないかな、なんてグレーな結論を出し、さっさと街道を歩いていく。

愁「さて・・・今日の買出しはなんだっけ？」

早苗「神奈子様から頼まれたのは、商店街裏の露天商が売っているっていう『白い小箱』です。そう言えば分かるって言っていました」

愁「白い小箱・・・ねえ・・・。怪しい雰囲気満載なんだけど、どう思うっ？」

早苗「また何か悪いことでもたくらんでなければいいですけど・・・」

そんな会話をしながら、助けた少年を連れて里までたどり着いた。少年を家まで送ると、二人はさっそく頼まれた買い物をするために里の商店街まで足を運ぶ。まではよかった。

早苗「た・・・高い・・・」

愁「ま、まさかこんなにも高騰しているとは・・・」

びっくりするほどの値段設定に度肝を抜かれ、二人は逃げるように商店街を離れていた。よもや、異常気象の影響がここまでのレベルになるとは思っていなかったのだ。先週の買出しで購入したものと同じものが、今では十倍以上の値がついている。手持ちの資金では米どころか、にんじん一本でおしまいだ。

早苗「里の人たちはどうやって暮らしているんでしょうか？」

愁「恐らく、山や森に行つて食べられるものを得ているか、商人を通じないで直接農家に買い付けに行くのか・・・。なんにせよ無法妖怪に襲われる機会も多くなっているんだろうね」

早苗「さっきの子供みたいに、ですな」

なんにせよ、しばらくは野草を摘んで何とかしようか。愁は苦笑
いして早苗に言う。

早苗「私、あれ苦いから嫌いです」

愁「好き嫌いするなんて子供みたいだね」

早苗「年齢で言えば、まだまだ子供ですよ、私」

愁「幻想郷で見ればとくに結婚適齢期だけだね」

早苗「古びたものさしで計らないでください・・・」

はぁ、とため息一つ、いつからうちの神社は博麗神社のようにな
ってしまったのでしょうか、と嘆く早苗。その後ろから陰陽玉が飛ん
できた。彼女の後頭部に直撃し、陰陽玉は大きくバウンドし、それ
を投げた少女の手元に戻っていく。

霊夢「誰が毎日着る服にも難儀する貧乏巫女ですって？」

愁「そんなこと言ってないってば。 早苗、大丈夫？」

早苗「頭が割れるように痛いです・・・」

そう言いながら重そうに頭を上げる早苗。その刹那、ぽとぽと
赤いものが髪を伝って地面に落ちる。気付けば頭は真っ赤になっ
て
いるではないか。

早苗「・・・ホントに、割れてません・・・？ これ・・・」

霊夢「やばっ・・・やりすぎた」

愁「ひ、ひとまず水鬼さんのところにつー!!」

そう言いながら早苗の腕を掴む愁。しかし早苗はそれを軽く振りほどいて、ゆらゆらと霊夢のほうに向かっていく。

霊夢「ちょ、早苗！ 早く手当てしないと・・・」

早苗「今ケンカ売りましたか？ 売りましたよね？ こつちが必死こいて山を降りてきて買出しに来たってのに高くて何も買えなくて今晚の食事をどう乗り切ろうか考えてるときにあなたって忙しい私にケンカ売りましたよね？ こつちは生活がかかっているんですよ。家族がいるんですよ。あなたのようにちゃらんぽらんに毎日ぐーたら過ごしてるわけじゃないんです。あなたの暇つぶしとうさ晴らしに付き合っている暇はないんです。それともあなたは影口を言っている人間全員に陰陽玉を投げつけるんですか。妖怪退治の神具をそんなことに使うんですか。博麗の巫女はそんな横暴も許されるんですか。もしかしてあれですか。あなたは他人の家に押し入ってタンズとか本棚を勝手に漁ったり壺や樽を壊して、使えそうなものを勝手に持っていったって許されるタイプの人間なんですか。だとしたら少しでも人類のためになるように異変の解決にでも出掛けて魔王でも悪魔でも魔王でも何でもやっつけてくればいいじゃないですか」

霊夢「あ、あー・・・えつと・・・しゅ、しゅう。たすけて」

愁「ロゲンカじゃ、早苗さんには勝てそうもないなあ・・・」

早苗「大体あなたは巫女として自覚がなさ過ぎます。そんなのだから神様にも愛想をつかされて逃げられてしまうんです」

その一言に霊夢が眉間にしわを寄せた。どうやら彼女にも触れてはいけない一線があるようだ。霊夢は再び陰陽玉を持ち、いい度胸ね、と怪しく笑った。そして刹那に霊夢の周囲に異質な霊力があふれ出る。

妖怪の持つ邪悪な霊力や早苗や神奈子さんのような神性に満ちた霊力ではない。霊夢の戦闘態勢は初めて見るが、明らかに巫女や妖怪、魔法使いとも違った異質さを霊力に忍ばせている。これが博麗の巫女の力なのか。

愁は息を呑む。そして、未だに説教を続けている早苗が霊夢の変化に気付いていないことに気づく。

愁「危ないっ！」

霊夢「世の中には、言っていないことと悪いことがあるって
外
の世界じゃ教わらないのかしらっ!」

近距離から投げつけられる陰陽玉。愁は早苗を庇おうと走る。しかし、陰陽玉はそれよりも早く早苗の腹部に直撃した。

愁「早苗っ!」
霊夢「これはやりすぎじゃないのか!」

霊夢ははつと我に帰る。そして、倒れている早苗を見て、目を丸くするが、すぐさま表情を変えてそっぽを向いた。

霊夢「知らないわよ。悪いのはそっちでしょう？」

愁「陰陽玉をぶつけるのはやりすぎなんじゃないか？ それ

とも、何かわけでもあるのかい？」

神社に神様がいない理由が。愁の言葉に霊夢は表情を曇らせた。

霊夢「うるさい。 あんたたちに何が分かるってのよ」

勝手に人の神社のことを悪く言わないでもらえるかしら。霊夢はそう言っただけで逃げるようにその場を立ち去った。

愁「……霊夢……？」

早苗「……う……」

早苗のうめくような声。愁はすぐさま早苗を抱えて水鬼の診療所へと向かった。

診療所は予想通り混雑している。人間たちにまぎれて妖怪や妖精たちも混じっていた。その混沌とした光景の中、妙に目立つ耳をした少女がこちらに気付き、あわてて走ってくる。

うどんげ「早苗さんっ!?! どうしたのその傷!?!」

愁「水鬼さんは?」

うどんげ「奥に。すぐに呼んでくるからっ! 水鬼さん!

水鬼さんっ!?!」

それからすぐに水鬼はやってきて早苗の傷は回復した。大事に至らなくてよかった、とほっと一息つく愁に、一体何があったの、と鈴仙がやってくる。

鈴仙「あなた、山の神社に住んでる子でしょう? もしかして、無法妖怪にでも襲われたの?」

愁「まあ、そんなところ。そういえば、キミは? こちら辺じゃ見かけない顔だけど」

鈴仙「一応、弛緩異変の時に会ってるはずなんだけどな……。まあ、いいや。私は鈴仙。普段は竹林に住んでるから、あまり里には来ないんだ」

今日は薬の行商に来たついでに診療所の手伝いしてるの。まさかこんなに忙しいとは思ってなかったから、と鈴仙は笑う。パタパタと手で自分の顔を扇ぎながら、鈴仙は周りを見渡している。

鈴仙「暑い暑いとは思ってたけど、これじゃ妖精もへたるわ」

愁「妖精が体調を崩すなんて知らなかったよ」

鈴仙「妖精は自然の象徴であり、写し鏡と同じ。要は、自然がおかしくなれば妖精もおかしくなるものよ」

つまりこの連日の暑さは自然じゃないってこと。背後の気配に気付いた鈴仙は振り返り、後ろにいる早苗にもう大丈夫なの、と訊ねる。頭に包帯を巻いた早苗はゆっくりと頷いた。頭を動かす元気があれば大丈夫ね、と鈴仙。

鈴仙「すっかり羨ましいなあ。私、デートなんてしたことないから」

不意に、彼女はいやらしい笑みをしてさすが若いだけあるわ、と言葉を付け足す。でーと、という単語を聞き、早苗と愁は互いに顔を見合わせる。そして次の瞬間、早苗が顔を真っ赤にして否定した。

早苗「ち、違いますっ！今日はただの買出しです！」

鈴仙「またまた、照れちゃって。別に隠さなくてもいいじゃないの。今時の外の世界じゃ、結婚してない男女同士でも床を一つにするって話聞いたし、別に恥ずかしがることじゃーないと思うよ、私は」

早苗「と、とこ・・・っ？ って、何を言ってるんですか！」

妖怪とはいえ女性が口にするようなことではありません、と早苗は怒るが、堅いこと言わずに、と鈴仙は笑う。

鈴仙「私は薬屋だもの。そういう関連の商売も扱う妖怪ですから。よかつたら避妊具の一つでも買っていく？ 今ならサービスで人目につきにくい竹林のお盛んスポットとか教えてあげるよ？ まあ、妖怪兎が遠くで見てるかもしれないけど」

早苗「結構です！ 愁さん、行きますよ！ 買出しはまだ終わってませんか」

愁の腕を掴み、さっさと診療所を後にする早苗。いつてらっしやい、とニヤニヤ笑いながら二人を見送る鈴仙に、いやらしい妖怪ですこと、と背後から声。振り返ると、薬の入った袋を持った咲夜がいる。

鈴仙「咲夜さんこそ。影でこっそり見てるなんていやらしい」

咲夜「聞こえていただけですわ。それより、通行の邪魔だからどいてくれませんか？」

鈴仙はこれは申し訳ない、と道を開ける。そして咲夜に何の薬を買ったのかしら、と訊ねた。メイド服は真夏だというのに季節感のかけらもない長袖のまま。さらにはいつものような瀟洒な雰囲気を感じさせない余裕のない雰囲気。さすがの鈴仙も違和感を覚えたのだ。

鈴仙「夏風邪はこじらせたら大変よ。さっさと帰っておとなしくしていることね」

そういうわけにも行かないわ、と咲夜は笑う。

咲夜「今晚は花火大会だもの。　　花火鑑賞にぴったりのお酒を
用意しなくてはね」

鈴仙「呆れた忠誠心だこと」

そこまで来ると誰かに似てるわよね、と鈴仙は呟く。

鈴仙「楽しいデートになるといいわね」

一緒に買出し（前編）（後書き）

早苗さんの長ゼリフは「今ケン くらいまで読んでくれればOKです。」

早苗さんは愁さんと二人で里を歩いていたらデートに見えるということに気付いたようです。さて、これが後半にどう影響していくか・
・これは私にも分からない。

では、次回はいつになるか分かりませんがよろしくです。

一緒に買出し（後編）（前書き）

復活したけど復活しきれてない感じですよ。

仕事忙しいのは相変わらずですが、長期間放置しすぎるのは問題なので適度に更新していきます。

さて、早苗と愁さんのデータはどうなってしまうのか・・・？

さらりと数時間で書いたものなので、後で読み返しながら加筆修正予定。

では、今回もよろしくです。

一緒に買出し（後編）

診療所を離れてすぐ、早苗は愁と少し距離を開けて歩き始めた。始終うつむいたままで、すっかりデートという言葉を意識してしまっているようだ。愁は苦笑いしつつも、気付かないふりして買出しを続行することにした。

愁「さて・・・ひとまずしばらくの食事は野草で凌ぐとして。次の買い物は 『白い小箱』か」

それなら私が受け取ってきます。早苗はここぞとばかりに愁に詰め寄った。しかし、その様子もまた周囲から見ればどんな風に見えるのかを想像したらしく、すぐに距離を開けてその辺をぶらぶらしててくださいね、とよそよそしく言い残して去っていった。なんだかなあ、と愁は思う。

妙にそういったことを意識してしまうのは思春期に患う一種の病気のようなもの。かといって水鬼でも竹林の薬師でも治せない時間が解決する病。下手に触ると余計にこじらせる面倒なものだ。

自分にもそれなりに覚えがあるな、と愁は思い返した。そしてぶんぶんと首を振ってなかったことにする。若気の至りほど後々に恥ずかしいものはない。

さて、と再びどうしたものかと思案する。うろつろして道に迷ったら大惨事だ。かといって、折角来たつてのに、ただここに立っているだけつても面白くない。考えていると、ふいに背後から声がした。

咲夜「いとしの彼女はどこに行ったのかしら？」

愁「・・・えつと」

咲夜「十六夜咲夜。」

あなたとはあまり話す機会もなかったし、

覚えてなくてもしょうがないわね。紅魔館のメイド長よ」

紅魔館・・・。愁にとっては面倒な連中がいるから近付くなど蒼奈に念を押されている場所だった。そもそも一人ではあまり山を降りない愁からすれば目的でもない限りは行こうとも思わない場所の一つである。あなたは僕を知っているのかな、と訊ねてみた。すると咲夜はそうねえ、と悪戯な笑みを浮かべながら愁を見つめてくる。

咲夜「診療所であんなすさまじいものを見せられたら、知っていてもおかしくないわよね」

愁「診療所って・・・さっきのですか？」

咲夜「合意の上でならとやかく言わないけど、ああいうのは画面の中だけで楽しんだほうがいいんじゃないかしら」

愁「あなたは何か激しく勘違いをしているようだ」

あら、特殊性癖ではないのね。わざとらしく口元に手を当てて驚いたようにリアクションする咲夜。どんな性癖ですか、と愁もさすがに言葉を返す。

愁「あれは、霊夢にやられたんですよ」

咲夜「霊夢か・・・どうせ腹でも空かせてたんでしょう」

違う。あれは明らかに何か触れてはいけない領域に踏み込んだのが問題だった。全ての非がこちらにあるとは言いたくないが、少なくともきっかけは早苗の説教が作ったのだろう。何か知っていることはないかと咲夜に聞いてみる。しかし咲夜も首を横に振った。

咲夜「私はあの子と付き合い長くないから。昔からの友人だ

った魔理沙とか阿求とか・・・後は八雲紫とかなら、何か知ってるかもしれないわね」

愁「でもまあ、霊夢が怖いから追及はしないでおこつ」

それに越したことはないわね、と咲夜も笑う。

咲夜「あなたには守るべきものもいるみたいだし。深入りして霊夢に現代送りにされたら元も子もないわよ」

愁「それは怖い」

そんなことを話しているうちに早苗は戻ってきた。手には『白い小箱』を持っている。どうやら無事に手に入れられたようだ。

早苗「咲夜さん。こんにちは」

咲夜「ちょうどいいタイミングで彼女も戻ってきたわね」

早苗「か、かの・・・っ!？」

咲夜「あら。彼女じゃないのかしら？」

早苗「ち、違いますっ！ 私と愁さんはそんな関係じゃ・・・っ!？」

咲夜「じゃあ、彼・・・かしら。早苗ったらいつの間に性転換したの？」

早苗「は？ あの・・・何の話でしょう?？」

愁「早苗。遊ばれてる」

彼女、なんていうとどうにも付き合っている女性、という意味に捉えがちでいけない。咲夜が今言っている彼女はあくまで純粋な三人称の意味だ。そして早苗はそれに気付いていない様子。

咲夜「しかしまあ、なんともお似合いなこと」

早苗「ええっ!？」

咲夜「いいわよねえ。私も欲しいわ」

早苗「で、ですからっ！ そういうのじゃないんです!？」

咲夜「ふふっ、一体さっきから何を勘違いしているのかしら」

愁「咲夜さん。いいかげんにしてください」

咲夜「あら。からかったつもりはないのよ。素直に憧れてるだけ」

長くてさらさらのロングヘアは、いつだって女の子の憧れだものね。その言葉に早苗が凍りつく。そして一気に顔が赤くなる。

早苗「さ、咲夜さんっ!」

咲夜「あらまあ、怒らせちゃったみたいね。お二人のデートの邪魔をするつもりはないから、これで失礼するわ」

早苗「ですからっ! デートじゃありませんっ!」

咲夜「そうやって照れてたら、後で後悔するわよ」

咲夜は捨て台詞の如く言い残して去っていった。なんなんですかあの方は、と早苗は不機嫌そうに頬を膨らませていた。

愁「・・・やれやれ」

すっかりデートという雰囲気ではなくなった。買出しも小箱をもつて終了したし、早めに神社へ帰ろうかと早苗に提案する。しかし、早苗は不機嫌そうな表情のまま、愁の腕にしがみついたではないか。驚く愁。彼女は彼を一切見ることなく、行きましよう、と言った。

早苗「なんか皆にデートデートってからかわれてたら逆に見せ付けてやりたくありませんっ! こうなったらデートしてるところを幻

想郷中に見せびらかしてやります！」

愁「ええっ！？　ちょ、それはまずい気が・・・」

下手に天狗に目をつけられた日には蒼奈に文字通り消されかねない。上辺では仲良くやっているように見えるけど、早苗のことに關してはかなりぴりぴりとした関係なのだ。下手に状況を変えようと一転してこちらに牙を剥きかねない。それに、神奈子や諏訪子だって今は何かとよくしてくれているが、いつ敵になるか分かったもんじやない。愁の立ち位置は地味に毎日綱渡り状態なのである。

早苗「行きましょう！　今日を私の人生最良の日にするまで帰りませんからね！」

愁「僕にとっては最悪の日の引き金になるのかもしれないなあ・・・」

その様子を隠れて見ていた咲夜は、本当に扱いやすい子ね、とほほえましく二人を見ていた。

咲夜「楽しいデートになるといいわね」

+ + +

次の日の朝は、診療所の一室で目覚めた。

結局、昨日は早苗に振り回されて朝まで遊び歩いたのだ。そしてそのままの勢いで深夜、慧音の家に酔っ払い二人で乱入してさんざん水鬼に迷惑をかけたことは覚えている。その先は覚えていない。

えっと、と呟きながらゆっくり起き上がる。その刹那に、ようやく起きたか、と聞きなれた声があった。

水鬼「もう正午過ぎだ。 邪魔だから早く帰ってくれないか？」

愁「水鬼さん・・・？ すみません。とんだご迷惑を」

水鬼「まあ、それなりに俺も楽しめたから構わないさ」

だが今度は他所でやってくれ。愁は再度謝って早苗の居場所を尋ねる。水鬼は外を指差して、元気なもんだよ、と愛想笑いをする。

早苗は外で洗濯物を干している。どうやら慧音の手伝いをしているようだ。

水鬼「昨日、頭割って死に掛けて、しかもあんなに酒飲んでたつのに、俺や慧音よりも早く起きて診療所の掃除までしてくれた」

ああいう子は一家に一台だな。早苗は物ですか、と愁も笑う。

水鬼「さて、午後の診療の時間だ。 お前たちもさっさと帰れ

よ。帰る家があればの話だが」

愁「どういう意味ですか、それは」

水鬼「噂が広まるスピードは天狗の足より早いつてことさ」

水鬼の言葉に血の気が引く思いがする。どうやら、本当に人生最

悪の日の引き金になったようだ。ふらふらと重い足取りで部屋を出て、愁は早苗のところまで行く。

早苗「あ、ようやく起きましたか。 じゃあ、そろそろ帰り

」

笑顔で言う早苗の肩をがっしりと掴む愁。驚く早苗に、顔面蒼白の愁は言う。

愁「・・・でーと、延長しない?」

縁側でのんびりしていた慧音がその言葉の意味を知ってか笑いをこらえている。早苗は最初、何を言っているのかわかっていない様子だったが、デートと言う言葉を認識すると、途端に表情を変える。

早苗「・・・愁さんが、そついうなら」

嬉しそうな恥ずかしそうな顔で、早苗は愁の手を握る。

早苗「じゃあ、今日はどこに行きましょつか」

愁「遠く。 一歩でも遠くに行こう」

早苗「はいっ! どこまでもお付き合います!」

そつ言っつてふたり歩き出す。一人は楽しげに、一人はふらふらと。

その一部始終を見ていた慧音はふむ、と唸り、呟いた。

慧音「楽しいデートになるといいな」

同じような言葉でも、含む意味はみんながみんな違うのでした・
。。

どんどはね。

おまけ。その頃の山の神社……。

魔理沙「おーす。　　って、なんだ、蒼奈？　準備運動なんかして」

蒼奈「いえ。ちょっとそこまでデートに行くんですよ」

魔理沙「……そりゃ、楽しいデートになるといいな」

一緒に買出し（後編）（後書き）

これまでのお話ではあまり触れてこなかった蒼奈さんと愁さんの関係について明らかにしました。まあ、要するに『早苗のことに關しては冷戦状態』ということですよ。普段は同じ家に住んでいることもあって仲はいいですよ。

ちなみに、所々意味もなく戦闘シーンがあったのは、今後の愁さんエピソードのためだったりします。まあ、分かっている人は分かっているかもしれない。

では、次回は単発エピソードです。夢一夜にて投稿する予定でしたが、いろいろあって幻想夢にて公開することにしました。その辺の言い訳は今後の幻想夢にてやります。よろしくです。

では、次回はいつになるか分かりませんが今後ともよろしくどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7992o/>

読者参加型小説『東方幻想夢』

2011年10月10日11時06分発行